

俺の妹がこんなに優等  
生なはずがない

電猫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺、新垣京介には妹がいる。

新垣あやせ。俺の理想の容姿をもつた少女だ。

ちよつと待て、妹が理想のタイプなんて認められねえ！

もし新垣あやせが妹だつたらという原作再構成ものです。  
楽しんでもらえたら幸いです。

目

次

第1話  
第2話  
第3話  
第4話  
第5話  
第6話  
第7話  
第8話  
第9話  
第10話  
第11話  
第12話

121 106 96 79 73 64 53 43 30 21 11 1

第1話  
第2話  
第3話  
第4話  
第5話  
第6話  
第7話  
第8話  
第9話  
第10話  
第11話  
第12話  
第13話  
第14話  
第15話  
第16話  
第17話  
第18話  
第19話  
第20話  
第21話  
第22話  
第23話  
第24話  
第?話

300 278 260 249 235 222 206 193 175 162 149 140 129

第25話

第26話

第27話

第28話

第29話

第30話

第31話

第32話

第33話

448 423 414 398 379 367 345 331 316

# 第1話

世間には妹萌えという概念が存在するようだ。きっとその概念の創設者には、実際の妹がいなかつたに違いない。

実の妹がいる俺から言わせれば、妹なんてものは口うるさい恐ろしい生き物だ。確かに幼稚園や小学生の一時期は『お兄ちゃん、お兄ちゃん』と俺の後ろを追いかけて来る姿がとても愛らしいものだつた。

しかし月日は流れ、現在中学二年生の妹とくれば『兄さん、制服をソファーに投げっぱなしにしないで下さい。シワができるでしょ』や『お風呂から出たら、きちんと蓋をして下さい。お湯が冷めてしまます』または『麦茶を飲んだのなら、冷蔵庫にちゃんとしまつて下さい』など『お前は俺のお袋か!』とツッコミをいれたくなるくらいに口喧しい。

妹の言い分もわかる。たしかに高校二年にもなつて、制服と麦茶を放置して風呂の蓋閉め忘れる俺が悪い。しかし、待つてほしい俺も毎度毎度それらの事をやつているわけではない。普段はきちんと制服はハンガーに麦茶は冷蔵庫に風呂の蓋もちゃんと閉めている。たまたま忘れてしまうときがあるだけだ。そしてそれは人間誰しもある事だ

と思う。

それを口喧しく注意されれば、ついつい『うつせーなー』くらい言つてしまふものだろう。しかしそれを言つてしまつたが最後、まるで豚を見るような目で『兄さん、そこに座つて下さい』と身体の芯から凍りつくような声で言われるのだ。

もちろん俺も高二の男だ。中二の小娘に凄まれたくらいでは白旗はあげない。

……正座させられての説教一、二時間くらいどうつて事ないのだ。

妹相手に情けないつて、うるさい！ 何故かは知らないが、新垣京介は新垣あやせに絶対勝てない運命にある気がするんだよ。

とにかく妹つて奴は、とても口うるさくて本当におつかない生き物なんだ。妹萌えくなんて言う人間の気がしれないね。

一限前の数学で脳を使い過ぎたため、机に突つ伏して英気を養つていたところに『今期アニメは妹物が、良作だよなー』『そようやつぱり妹は萌えるよな』などと言う会話が耳に入ってきたため、ついつい益体も無い思考をしてしまつた。

やれやれ脳を休めるためにダラけていたのに余計に疲れた気がする。

「そうだ。妹こそ至高、まさに究極、瀬名ちゃんは俺の天使。お前もそう思うだろ？ 新

垣』

馬鹿が話しかけて来た。

「突然話しかけてくるな。疲れているんだ、放つて置いてくれ。それに妹なんざあ、小うるさいだけだ」

「何を言つているんだ新垣、お前にも可愛い妹がいるだろう。それをうるさいだなんて嘆かわしい」

赤城浩平、中学からの友人で実の妹がいながらその実妹に萌える。まさにシスコンの中のシスコンである。俺はなんでこんな奴の友人をやつているのだろう。

「うるせえ、妹が可愛い訳あるか！……外見は可愛いかもしないが、あんな暴力的な妹は論外だ」

思わず、妹あやせの姿を思い浮かべてしまつた。

新垣あやせ、現在中学二年生。その外見と落ち着きのある行動から大人っぽく、可愛いというより綺麗と表現が当てはまるタイプの女の子。例とするなら漫画なんかのクラスの美人委員長を思い浮かべてもらえばよいと思う。

実のところ容姿は自分のタイプにドストライクなのだ。しかし『自分の妹が理想のタイプです！』こんなこと言えるわけがない。それこそまさにとんだシスコン野郎である。妹がタイプだということは精神の安定上認めることはできない。けれど美形とうことは認めざるをえない。

妹に美人だの理想の容姿など、それこそシスコンの身内蟲貝な意見に思えるが、これ

は客観的な事実なのだ。妹は読モ、いわゆる読者モデルに選ばれるくらいには美人なんだ。

だから俺が妹の容姿が可愛いと言つても、それは世間一般的な事実に基づいた意見で、赤城のように妹を天使に例えるようなシスコンとは違うわけだ。

まあそれはさておき、あやせの姿を思い浮かべたときに天啓がひらめいた。

委員長といえば、三つ編み。そして眼鏡、そう眼鏡だ！

妹に眼鏡をかけたらとても似合うだろうということに気が付いた。

今度、何とかしてかけてもらおう。たとえ土下座をしてでも……

「たしかに、あやせちゃん綺麗だもんね。ねえ京ちゃん」

もう一人会話に参加して来た。俺の貴重な休息時間がどんどん減っていく。

俺を京ちゃんと呼ぶこの女は田村麻奈実、10年以上の付き合いを持つ友人、いわゆる幼馴染である。のんびりとした独特の天然テンポをしており、こいつどると非常に落ち着き心地良く感じる奴だ。

だが、今回は妹の話題を供給しそうな麻奈実の参加は勘弁してほしいところだつた。

案の定、赤城の野郎が乗つかてきやがつた。

「ああたしかに新垣妹は可愛いよな。本当に新垣と血が繋がっているのか疑っちゃうよな」

「うるさい、ブ男で悪かつたな」

イケメンに言われると腹がたつ。赤城は容姿だけなら美形なのだ。認めたくはないが。まあせつかくの容姿も赤城のシスコンぶりを知ると、女子達は皆潮が引くよう失去していく。残念イケメンという言葉がこれ程似合う奴もない。

「そんなに卑下になるなよ。お前はブ男じゃないよ。何というか、平凡？」

「きよ、京ちゃんは力、カツコイイよ」

友人のフォローになつていないフォロー。幼馴染の同情。涙がでそうだ。  
まあ同情でも褒めてくれた麻奈実の頭を撫でてやる。

「お前はいい奴だなあー」

「えへへ～」

頭を撫でられて気持ちよかつたのか麻奈実が相好を崩す。

「はいはい、今日も夫婦は仲良いね～」

「ふ、夫婦っ！」

「いつも言つているだろ。俺と麻奈実とはそんな関係じゃない。そくだなあ例えるならおばあちゃんと孫？」

「ひーどーいー！ 私達同じ年！」

「はは、悪い悪い」

笑顔から膨れつ面に変化した麻奈実の頭をポンポンと叩く。

「それはそうとさつきあやせちゃんが暴力的って言っていたけど、何かあやせちゃんに怒られるようなことをしたの？」京ちゃん

「なにい？ 妹をいじめるなんて、最低だぞ新疆」

「なんもしてねえよ」

けど

麻奈実がジト目で見つめてくる。

「本当だつづーの。むしろあの時俺は良い事をしてたんだぞ」

「良い事つて？」

俺はあのときの事を思い返す。

休みだつたが両親は仕事があり、あやせも友人と遊びに行つていた。特に出かける予定もなかつた俺は休日を名前の通り休息をとる日と決め、家でダラダラと過ごしていた。

午前中は太陽がしつかり仕事していたが、太陽も休みが欲しくなつたのか雲の中に休息を取りに行き、午後からポツリポツリと雨が降り始めた。

『今日は一日晴れでしょう』という天気予報のお姉さんを信じたため、洗濯物を干した

まま家族は出かけてしまつていた。

家にいるのは俺ひとり、しかたない面倒臭いと思いながらも洗濯物を取り込んだ。

ここで辞めておけば、この後の悲劇は避けられたのだが、暇をしていたこともあつて

珍しく取り込んだ洗濯物を畳んでやろうと思つてしまつた。

そして洗濯物を畳んでいる途中で、あやせが帰つて來た。

悲劇の幕は上がる。

「ただいま。雨なんて降らないつてテレビで言つてたのに」

「おかえり。大丈夫か？風呂入るか？」

「大丈夫。そんなに濡れなかつたから。あつ、洗濯物取り込んでくれたんだ、兄さんありが……」

居間に入ってきたあやせが洗濯物を畳んでいる俺を見て、感謝の言葉を途中でピタリと停止させる。

「兄さん……何をしているの？」

「何つて、見てわかるだろ？ 洗濯物を畳んでいるんだよ」

あやせが感情が籠らない淡々とした口調で問い合わせてくる。  
何故だろう部屋が突然凍えるように寒く感じられる。

「そう、それで兄さんが手にいま持つているものは何？」

「ああ、これは……」

そう言われて右手に握っていた物を見下ろす。ピンク色の下着だ。俗にいうパンツ、パンティ、ショーツと呼ばれる物である。

妹の下着を握っている姿を妹に問い合わせられている俺。冷や汗がたらりとこめかみを流れる。

「兄さん、何か言いたいことはありますか？」

につっこりと笑いながら近づいてくる妹。

ああ、笑顔つて本来動物の威嚇行動つていう話を何処かで聞いたことがあつたな。その話はきっと本当だ。俺はいま身震いが止まらない。

何か言わなければと混乱した脳が言葉を紡いだ。

「あやせ、お兄ちゃんはピンクもいいけど、中学生の下着の色はやっぱ白が一番だと思うな」

「死ね、変態」

あやせのミドルキックが座つていた俺の側頭部に直撃した。

そこからの先の記憶は途切れ。次に見た光景は夜仕事から戻ってきた親の『あんたなんでこんなところで寝てるのよ』という言葉と呆れた顔だった。

といった話を搔い摘んで麻奈実達に説明した。

「京ちゃん、それはどう考へても京ちゃんが悪いよ」

麻奈実が嘆息をつく。

「新垣、お前なんて羨ましい事をしてゐるんだ。俺なんて瀬名ちゃんに『絶対に洗濯物にはさわらないで』って言われてゐるのに」

変態が絶叫を上げた。

「いや、いくらなんでも洗濯物を畳んでいた兄に對して蹴りは無いだろ。氣絶したんだよ俺！」

「はあー、京ちゃんデリカシーが足りないよ」

「甘んじて受け止めるべきだな」

くそお、此処でも味方はいないか。

あのときも両親に何でこんなところで寝ていたか説明を求められ答えた後、母親からは呆れられ。親父には笑われたからな。

麻奈実達と馬鹿な話をしていたら、休憩時間終了のチャイムが鳴つた。しまつた俺の貴重な休み時間が終わってしまった。

これもきっとあやせのせいに違ひない。

そんな八つ当たり的なことを考へた為だろうか。

「兄さん、そこに座つて下さい」

そんな幻聴が聞こえた気がした。  
俺の妹がこんなに恐ろしいはずがない。

## 第2話

「ただいま」

玄関のドアを開けながら声を上げるも返事は無い。

たぶんあやせはリビングにおらず、二階の自分の部屋にいて声が届かなかつたのだろう。例の洗濯物事件の所為で無視されている可能性も否定できないが……

帰つて来ていないという可能性は靴があるのであり得ない。よく見ると、いやよく見なくても玄関に妹以外の靴が二足置いてある。友人でも招いたのだろう。靴から判断するに男では無いようなので、ホツとする。

いや、中学二年の妹が男を家に招くのを心配するのは兄貴として普通だから。シンクンとかそういうのじやないから。ついつい誰に対する言い訳なのかわからない事を考えつつリビングに向かう。

冷蔵庫から麦茶を取り出していると、上から笑い声が聞こえてきた。

何を話しているのかは、ここからでは聞き取れないが楽しんでいるようだ。盛り上がりしているところに他者が割り込むと盛り下がること間違いねえし、部屋に行くときには見つからないようにしねえとな。

飲み終えたコップを洗い場に放り込み、音を立てない様に二階へ向かう。

俺の部屋は妹の部屋を通り過ぎた先にあるのだ。まあ、ドアが閉まつていれば足音を消せば見つかることも無いだろう！　さっきの玄関の挨拶も聞こえなかつたみたいだし。

いろいろなフラグを立て過ぎた為だろうか？

妹の部屋を通り過ぎようとした、まさにその瞬間狙つたかの様にガチャという音とともにあやせが顔を覗かせた。

「えつ兄さん？」

「おつとう！」

ミツシヨン失敗？

なまじバレないように気配を消して行動していたから、あやせもビックリしているし。

蛇の異名を持つ傭兵さんのダンボールがあれば良かつたのに……

「おかえりなさい。帰つて來ていたんですね？　全然気がつきませんでした」「ああ、ただいま。そういえば友達が來ているのか？」

「ええ、学校帰りにちょっと寄つてもらいました」

微笑むあやせ。

どうやら機嫌は回復しているみたいだ。笑顔もダークオーラを背負っているときのものと違い、天使の様な微笑といえよう。

「お邪魔します」

「チイヽス!!」

俺の姿に気がついたのか、中から挨拶が聞こえた。部屋を覗くと二人の少女がリラックスした様子で座っていた。

挨拶された以上、こちらも返事しないとな。

「いらっしゃい。どうぞ、ゆっくりとして行つてくれ」

何とか無難な返事が出来たと思う。それじゃあさっさと退散しますか。しかし踵を返そうかというところで、また声を掛けられてしまう。

「お兄さんですか？　いつもあやせさんにお世話になつてます」

明るい茶色に染めた髪、両耳にピアス、しつかりとメイクされた顔。クラスの中でもきつと中心人物だろう華やかな少女がしつかりとした挨拶をして頭を下げていた。

これで中二かよ！　あやせも大人びているけど、類は友を呼ぶつて奴か？　それにしてもなんだ？　ずいぶん興味津々って感じで見てくるな。

「こ、こちらこそ妹がいつもお世話になつてます。これからもよろしくお願ひします」

しまつた！　焦つて深々と頭を下げてしまつた。どう考へても年下に返すべき態度

じやあないよなあこれ？

案の定ツツコミが入った。

「普ツ兄ちゃん、テンパつてない？ダサつ」

ツインテールをした小柄な少女がケラケラ笑っている。

こちらも整った顔立ちをしているが、美人というより可愛いといった感じだ。笑つて  
いる姿にさつきの口調もあり、子供っぽい印象を受ける。  
このクソガキ！ 失敗したと自分で思つたが、ここまで笑われるとは思わなかつた  
ぞ。

さつきの類は友を呼ぶつていうのは撤回しておこう。

「加奈子！」

「だつて。桐乃がまるで先生みたいな立場っぽくねー。いまのだと？」

妹が怒鳴りつけるも加奈子の笑いが止まることはない。

「加～～奈～～子～～」

反省の感じられない加奈子にあやせから恐ろしいプレッシャーが発せられる。  
流石にこれは不味いと思ったのか加奈子が表情を引きつらせた。  
条件反射で俺の表情も引きつる。

「ごめんなさい」

「謝るなら、兄さんにです」

「ごめん、ごめん。笑つて悪かつたよ兄ちゃん」

「はあー、構わねーよ。別に気にしちゃあいない」

「おつ、懐広いね？」

片手を顔の前に突き出し謝る加奈子だが、反省の色は見えなかつた。  
というかこいつあやせと俺に対する態度ちがいすぎねーか？

まあでも気にしてもしょがねーか。自分のミスだし、今更女子中学生に笑われた位  
で傷つくような柔なハートはしてねーしな。なにせ普段から妹に頭が上がらないのだから。

妹がはーとため息を吐く

「兄さんもしつかりして下さい」

「ああ、悪かつた。それにしてもいい友達だな」

これは嫌味とかでなく、本当にそう思つたのだ。正直驚いている。妹は親が堅物の所  
為か、良く言えば品行方正、真面目で清廉潔白。しかし逆に言えばふざけあつたりしづ  
らい取つつきにくい性格ともいえる。

人から頼られたり、人に注意をする姿は昔から良く見ていたが、友人と羽目を外して  
いる姿は見たことがなかつた。

しかし今回発したプレッシャー。あれは俺が調子に乗りすぎたときに起るダークモードで、ほとんど俺専用であつた。あの姿で友人相手に怒るあやせを見て驚くと同時に嬉しくなつたのだ。それほど気を許せる友人が出来たのだと。

「〜〜〜〜〜。もー兄さんはあつち行つていて下さい」

馴れ馴れしかつた為か、あやせが顔を真っ赤にして怒り、俺の背中を押しだす。

「悪い。長居しちまつたな。これからもあやせのことよろしくな」

「ええ、もちろん親友ですから」

「頼まれてyanよ」

「いいから、早く行つて！」

自分の部屋に入る前、最後に後ろを振り返りながら挨拶をすると、ニマニマした表情を浮かべる少女達の姿が見えた。



あの人には本当にもう。

兄を部屋に追い出し、自分の部屋のドアを閉めると、そこにはニヤニヤ顔の友人二人。

「いいお兄さんじやん。優しそうで」

高坂桐乃。私の一番の親友です。勉強ができ、陸上部エース、オシャレにも余念無い尊敬すべき友人。ニマニマ顔を見るとその尊敬も揺らいでしまうかもですけど。

「いい兄貴じゃねー、顔がショボイけど」

来栖加奈子。親友？ 友人というより手のかかる妹のような存在です。  
にんまりとしている、その頬を引っ張つてあげようかしら。

「たしかにあやせとは顔立ち似ていなかつたね」

「なんてーか、地味？ 将来サラリーマンで係長やつてそうな？ みたいな？」

「アツハツハ、何かそれわかるかも！」

「ここまで似てねえと、あやせと実は血が繋がつてなかつたりーとか？」

「それって、アニメとかによくあるパターン、ゆくゆくは禁断の関係に……キヤー!!」

「人に悪気が無いのは分かります。他愛ない、いつものようなきつと何日かすれば、そんな話をしたことすら忘れる程度の笑い話です。けれどそのとき私は笑つて話を流すことが出来ず、声を荒らげてしまいました。

「やめて下さい！」

昔から似ていない兄妹とよく言わっていました。たしかに兄と自分とは、私も似ていると思つていません。

小さい頃は余りに似ていないと言わせて、兄と本当に兄弟でないのではと不安から泣いてしまったことがありました。まあそれは母さんから笑いながら昔のアルバムを見せられて無事解決したわけですが、私の忘れない黒歴史になってしまった。

その為なのか、兄妹間を疑われる発言には過敏に反応してしまいます。それに兄さんの悪口は余り聞きたくありません。

たしかに地味で不真面目で昔と違い覇気がなくなってしまった兄ですけど、いいところがまつたく無いわけじやないんです。

たとえば私が嫌なことはしないですし、基本的に優しいですし、モデルやるときも両親を説得するときに私の味方になってくれましたし、家の手伝いも面倒臭そうですがちゃんとやってくれます。

この間も洗濯物を……あれは、セクハラです！　たとえ兄だとしても下着を握りしめるなんてセクハラです!!

兄さんの良いところを思い浮かべようとしたのに、何故か情けない姿が出てきてしまう。まあそこが兄さんらしいのですが……

「ごめんなさい。兄さんはダメな人ですが。身内を悪く言われるとちよつと。すみません、感情的になつてしましました」

「えっとゴメンあやせ。馬鹿にしているつもりは全然なかつたんだ。ただあやせとお兄さんのやりとりがちょっと羨ましくて調子乗っちゃつた。本当にゴメン」「悪かつたよ。そんなに怒ると思わなくて。あたしも良い兄貴と思つたんだ。本当だぞ」

二人とも真剣な顔をして謝つてくれました。うう、失敗。反省しないと。ふざけているときにも、ついついムキになつて眞面目になつてしまふのは私の悪い癖です。盛り上がつていた場の雰囲気は一気に盛り下がつてしまひました。

しかしこういうときに空気を読んでくれるのが桐乃です。

「それはそつと、加奈子。中間そろそろ近くなつて來たけど今回は大丈夫なの？」

「なつ、勉強の話振つてくんなよ。せつかく遊びに來てゐるんだから、もつと他にいい話題あんだけ」

「そうよ。加奈子、一年のときのようなことは許しませんよ」

「あやせまで！ 大丈夫、この加奈子様にかかれればテストなんて、ちよちよいのちよいだぜ」

「その台詞、一年のときにもまつたく同じことを聞いたし。はあー仕方ない。今度みんなで勉強会しようか」

「ちよつ待てつての！ 勉強会なんて必要ねえーて」

「そういう台詞は、赤点を取らないようになつてから言つて下さい」

「痛てて、頬引つ張んなよ！ わかつたつて今度ちゃんと勉強するつて」「あははっ、加奈子今回は赤点取らないよう頑張りなよ」

強引な話題変更だつたかも知れないけど、無事楽しい雰囲気が戻つてきました。ぎやあぎやあと騒ぐ加奈子。それを叱る私。その姿を見て笑つている桐乃。

こんな他愛もないやり取りをずっと続いていきたいなと頭の片隅で考えながら、私は微笑を浮かべました。

## 第3話

「はあー、噂では聞いていたけど凄えな」

駅構内には、アニメやゲームの告知ポスター。ビルには巨大美少女の垂れ幕が掛かり、道を歩けばメイドさんがチラシを配つてている。

俺はいま秋葉原、通称アキバに来ている。この街に来たのは初めてだ。テレビや友人の話では聞いていたが、百聞は一見にしかずという言葉がよく分かつた。アキバまさにオタクの街である。

俺はオタクではない。親や妹がオタク文化を嫌つてるので接点が少ないので。ただ親や妹がオタク嫌いであつても、俺はオタクに偏見はない。方向性はどうあれ情熱を持つている熱い人間が俺は好きだ。ゲームやアニメに熱中している真剣な人を否定しようとは思わない。まあ自分がオタクになろうとは思わないが。

そんなわけでオタクに偏見が無いだけの一般人の俺がこの街に来たのは理由がある。もちろん観光に来たわけでもない。この街に用事を求めて來たのだ。

その理由は数日前にさかのぼる。

「あやせ、ちょっと頼みたいことがあるんだけど、いま大丈夫か?」

「何ですか、兄さん？」

洗濯物事件から悪かつた妹の機嫌も回復したので、前に思いついたことを実行しようと思つたのだ。

「ちよつとこれかけてもらえるか？」

「これつて、メガネですか？」

「そうそう伊達メガネ」

「伊達つて、何でそんなもの持つているんです？　まあいいんですけど」

特に気にした風もなく、言われた通りに眼鏡をかけてくれる妹。

女神が降臨した！　素晴らしい！　ハラショー！　コングラツチレーシヨン！　頭の中ではラッパの音が高らかに響きわたつた気がした。

たしかに似合うと想像していたけれど、実際に目の前でしてもらうと、それは想像を遥かに超えた美の化身为現れた。

こんなものを見せられたなら、もう辛抱たまらない。

「に、兄さん！？　どうしたんですか！？　鼻息を荒らげて近づかないで下さい」

「あやせ、た、頼む！」

「ひつ！？」

「お前の」

「嫌あ――――――――――――――!!」

涙目で後ずさる妹の右脚がブレた。

次の瞬間、左側頭部に衝撃が走つた。

「ぶつぐはあつ」

「ひどい兄さん、実の妹に何をしようとしたんですか!?　いえ、言わなくていいです。きつとイヤラシイ事に違いないですから。セクハラ魔人！　変態！」

罵倒を浴びせ、あやせは立ち去つてしまう。

ただ俺はその姿を写真に撮らせて貰いたかつただけなのに……

その出来事の後から妹は口をきいてくれない。というか避けられ続けている。こうなつてしまふと、今迄の経験からしばらく放置して嵐が過ぎ去るのを待つしかない。

それでも一度あやせのメガネ姿を見てしまうと、何としてでも写真に収めたいと思う願望が抑えきれない。しかしいまの状況では勿論、たとえ機嫌が良くなつても二度とメガネをかけて貰えると思えなかつた。

そんな落胆していた俺に救いの神が舞い降りた。

メガネ姿に写真加工出来るパソコンソフトがあるというのだ。しかも眼鏡の種類も豊富に選べるらしい。

そのことを知つた俺の脳裏にフチなしフレームや銀ブチ、丸メガネなど多彩な眼鏡を

かけるあやせの姿がうかんだ。

その素晴らしい発明をした開発者には個人的にはノーベル賞を授与して上げたい。

ただしそれは近くの電気屋なんかには売つておらず、秋葉原にしかなかつた。そのことを知つた俺が取る選択肢はただ一つだつた。

そんなわけで俺は一部の人間達の聖地までおもむき、無事目的の商品をゲットしたわけだ。

商品を手に入れたらこの街に用はもうないのだが、せつかく来たのだから少しぶらついてみようと思う。もう来ないかも知れないし。

キヨロキヨロと辺りを見渡しながら歩いているとちょっと浮いている美少女がいた。肩を露出させ、ミニスカートの垢抜けたファッショニ姿をしている。ここが渋谷や原宿なら違和感なかつたのだろうが、アキバでその姿は俺の注目を集めのには十分だつた。

普通ならそれでも『この街にもオシャレな格好で来る奴もいるんだな』くらいの感想を持つ程度だつたのだが、その相手が知り合いだつた。

いや正確に言うと知り合いと呼べるレベルではないだろうけど。なにせこの間家で少しだけ挨拶した妹の友人なのだから。

挨拶交わしただけの妹の友人を街で見かけました貴方ならどうしますか？ 俺の答

えは見つからないよう、そつとその場を離れるだ。だつてそれが正解だろ兄妹の友人なんかに急に話しかけられてみ、困惑するに決まつて。だからこのまま立ち去れば良い訳だ。

実際に俺はそうしようとした、少女の表情を見るまでは……

少女は暗い顔でうつむいて歩いていた。俺の目には泣くのを我慢して強がつているように見えてしまつた。

「あー、もう、仕方ねえな」

俺は頭をがりがりと搔きながら少女に声をかけた。

「えーと、すみません。覚えてますか?」

「は? 何ですか? ナンパなら消えてくれますか。いま凄く気分悪いから」

うお、凄え冷たい視線が返つてくる。ゴミを見るような眼だ。

思わず『すいません』つて立ち去りそうになつちまつた。

まあ覚えてるわけないよな。しかもこんな街で急に話しかけられたらナンパつて勘違いされるよな。はあー心が折れそうだ。

「いや、君、妹のあやせの友人だろ? 俺はあいつの兄貴なんだけど。この間家で会つたの覚えてないかな?」

「……あ、お兄さん!」

少女の訝しげな顔がキヨトンとした表情に変わった。良かつた。どうやら覚えてもらつていたようだ。

一段階目はクリア、これからが大変なんだけどな！

「それでどうしたんですか？」

「いや、たまたま見かけてね」

「そうですか……」

彼女は相手をするのが嫌そうな気配を発する。

やつぱりそうなるよな。一度会つただけの男それも年上に街中で急に話しかけられたら警戒するよな。しかしここで後に引いても仕方ない、怖氣付くな俺！

「愚痴っていうのは、結構口にするだけでストレスの発散になるらしい」

「はい？」

彼女は意味がわからないといった表情を浮かべる。突然こんなこと言われたら誰だつてそうなる。だが、気にせずに俺は言葉を続ける。

「でも、愚痴を言う相手は誰でもいいってわけじゃがない。近い人だと、下手をすれば自分の評価を下げてしまうかも知れない。とはいえた多くの他人に急に愚痴を言えるわけもない」

「……それで？」

「たとえば、友人の一度だけ会つただけの兄貴なんかは手頃だとは思わないか？」

俺が言いたいことを理解したのだろう。彼女は顎に手を当てて考え込んだ。

「お兄さんからあやせに伝わる可能性があるので？」

『いやいや、妹の友人に愚痴を聞かされたなんて信じないだろう。仮に信じたとしても『ちょっと会つただけのお前の友人に愚痴を聴けるくらい仲良くなつたぜ』なんてあやせに言つてみろ。俺は殺されるぞ』

「お兄さんにあたしの弱みが握られてしまうのでは？」

「たとえお前の弱みを握つて脅したとしても、あやせに脅した事がバレたら、やつぱり俺は殺される」

「ふふっ、あやせ怒ると怖いですもんね」

「おう、そうだ。そんな命知らずのことは怖くて俺には出来ん」

話しているうちに緊張がほぐれたのだろう、少女が微笑する。

彼女の笑顔を見て、俺もホッと一息ついた。

「でも、お兄さんなんであたしに愚痴を言わせようなんて思つたんですか？ それこそ

妹の友人なんて他人みたいなものですよね？」

「あー、えっと、それ言わないとダメか？」

「ダメです！ あたしの愚痴を聞かせろつて言うなら隠し事は無しです」

はあーこれは将来俺の黒歴史になること間違ひ無いと思う。だけどこいつは黙秘を許してくれそうにない。

仕方ねえ！ 目線を逸らしつつ頬を搔きながら彼女に応えた。

「あー、何つうか。お前の顔が強がつていても今にも泣きそうな様に見えたつていうか。ほつとけなかつたつていうか……」

は、恥ずっ!? なにこれ言葉にするとこんなにも恥ずかしいの。いま絶対に俺の顔赤面でとんでもないことになつていいだろこれ！

「……お兄さん、あたしのこと口説いてますか？」

「口説いてねえー!! だから言いたく無かつたんだよ！ 俺も言つてて口説いている様にしか思えなかつたよ！ こんちくしょう！」

「普ツ、アツハツハツ、お兄さん人良すぎでしょ」

そこには腹を抱えて大笑いをしている少女がいる。笑いすぎのせいか耳まで真っ赤になつてている。

しかしこれは俺が弱みを握られてしまつたのではないだろうか……

「うつせー、これが性分だ。で、どうすんだ？ 笑い続けるならこのまま帰るぞ」

「ヒイヒイ、ごめん。はあ一笑つた。正直スッキリしたけど、せつかくだから愚痴らせてもらうわ」

「へいへい、了解ですよ」

言葉通りにスッキリしたのだろう。彼女から俺に對しての敬語が無くなり、立場すらもいつの間にか逆転している気がする。

きつとこちらが彼女の素なのだろう。まあ下手に氣を使われるよりも、こつちのほうが付き合いやすい。それに立場が下なのは妹で慣れてるしな。

「お兄さん、そういえば名前聞いてなかつたよね。名前は?」

「気が付いたなら自分が先に名乗らないか普通?まあいいけど、新垣京介だよ」

「京介ね。おぼえた! あたしは高坂、高坂桐乃。よろしく!」

「いきなり呼び捨てかよ! 高坂ね。よろしく!」

「桐乃でいいわよ。あたしも京介って呼ぶし! ニッヒッヒ、それじやあしつかり愚痴らせてもらうから」

「……お手柔らかに頼む」

高坂、いや桐乃是無邪気な笑みを浮かべる。

やれやれ、どんだけの愚痴を聞かされる羽目になるのやら。まあ仕方ない先にこんな笑顔つていう報酬貰つちまつた以上は、その分しつかりと働かないとな。

桐野の微笑を見つめながら俺は肩をすくめた。

## 第4話

「おおーい、きりりん氏！ 良かつた。まだいてくださいって！」

「へつ？ あんた……さ、沙織さん？」

桐乃の愚痴をいざ聞こうとした瞬間に彼女に話しかける人物が現れた。  
なんともタイミングが悪いものだ。肩透かしをくらつた気分でその相手を見据え  
……る。

とんでもないのがいた。まずデカイ！ 180くらいあるんじやねーか？ そして  
格好もハンパない！ 頭にバンダナ、グルグル眼鏡、チエックの長袖シャツで裾をズボ  
ンインしている。リュックサックを背負つており、そこからは丸めたポスターがはみ出  
していた。

全身から『私はオタクです！』と叫んでいるような女性だ。そう、しかもこんな格好  
をしているのは女なのだ。

テレビやマンガなんかに出てくる典型的なオタク姿をした、スーパー・モデル体型の沙  
織と呼ばれた女性。【事実は小説より奇なり】そんなことわざが頭の中をよぎった。  
ぽかーんと桐乃と話している沙織を見詰めていたところ、そのグルグル眼鏡が振り向

き俺の姿を捉えた。

「きりりん氏、ところでこちらの男性は？ 先ほど話されていたようですが？」

「え、ああ。この人は……」

とつさに応えることが出来ず、口もる桐乃。

それを見て沙織は早合点した。

「ふむ、ああなるほど彼氏でござるな！」

「違——う！？」

桐乃と綺麗に声がハモる。

なんて勘違いをしやがるこの女！？

桐乃が彼女なんて話が万が一にもあやせの耳に入つたら『うふふつ、兄さん！ どん

な死に方がいいですか？ 選ばせてあげますよ！』ほれみろ幻聴が聴こえてきた！？

「はて、違うのでござるか？ しかし不機嫌に去つていかれたきりりん氏が、先ほどこの方と楽しそうに話されている姿を拙者拝見したので、てつきりオフ会に参加した彼女を迎えてきたのであろうと得心しておつたのですが」

「勝手に得心するな！」

「ち、違つ、えつとこの人は……」

つっこむ俺。沙織の問い合わせに対して、あたふたしている桐乃。

まあたしかに俺たちの関係は説明しずらいな。

『友人の兄です』と真実を説明したとしても、なんでこんなところで談笑していたんだつて話になるしなあ。

まあでもそのまま事実を話すしかないよな。

「それは俺が説明しよう。信じて貰えないかも知れないが、俺からすると桐乃是妹の友達！ 桐乃からは友人の兄貴！ それだけの関係だ！ たまたまこんな場所で姿を見かけて話していたのを、えー君が見かけたんだ」

「……そうです（たしかにその通りの関係なんだけど。なんかそう断言されると凄いムカつく！）」

桐乃が不機嫌そうに同意する。なにかその後にブツブツと呟いているが聞き取れない。

「えー、そうなんでござるか？ そうは見えんでござるが」

「それでも、そうなんだよ！」

沙織は納得していない顔で、俺と桐乃交互にキヨロキヨロと視線を泳がせる。

「ふむ、ではそういう事にしておくでござる。拙者は沙織・バジーナと申します。以後お見知り置きを」

「ぶつ？ オ、おま、バジーナって」

「なんで『ござるうか?』」

「もういいよ。俺は新垣京介だ」

その姿でバジーナつて、どれだけ要素を詰め込んでいるんだこいつは!

俺ははあーとため息を吐く、挨拶を交わしただけなのに何かを『ごつそりと持つていかれた気がする。

「京介氏で『ござるか』よろしく申し上げる。それで京介氏もよろしければ二次会に参加致しませぬか?」

「二次会?」

「ああ、説明を忘れておりましたな。先ほど拙者ときりりん氏は『オタクつ娘集まれ!』というコミュ二ティのオフ会に出ておりましてな! その二次会を開くので拙者、きりりん氏を呼びに来たので『ござるよ』

「いやいや行けないだろ、それは?」

「コミュ二ティーに所属していない部外者が参加するつて無理だろ普通。慌てて断る。

「まあまあそう言わず、実は拙者ときりりん氏をあわせてもまだ3人なので、いささか侘しいので『ござるよ!』あまり気になさらず、是非とも参加して頂きたい!」

「いや、それでもなあ!」

沙織が粘り強く誘つてくる。

なんとか断ろうと考えていると、今まで黙っていた桐乃が俺の服の袖を掴んだ。

「京介も来て！」

「お前もか!? 行けねえーって！ だいたい部外者の俺が参加したら気不味いだろ？」

「管理人のこいつが大丈夫って言つてんだからいいのよ！ それに愚痴を聞いてくれるつて約束でしょ？」

沙織を指差しながら桐乃が言い募る。

たしかに愚痴を聞くつて言つちまつたし。何より桐乃の表情を見ると絶対に引きそ  
うになさそうだ。

はあー仕方ねえ諦めるか。

「わかった。案内してくれ」

「ニンニン、了解！ こちらでござるよ！」

両手を広げ降参の仕草をする俺の姿を見て、嬉しそうに沙織が先導し始める。  
どうやら向かう先はマックのようだ。あそこに残りの一人が待つているらしい。

しかしなんでこんな事になつたんだ？ 予想もしなかつた出来事に巻き込まれた俺  
は思わず嘆息をついた。

想像通り？ なのだろうか。マックに居た人物もまた個性的な人物だつた。

こちらもまた美少女。最近会うやつ美人が多いよな？ まあ男としては嬉しいんだ

が。

ただこいつにもやつぱり癖がある。格好が気合いの入ったコスプレ姿。なんのコスプレかは分からぬけど、たしかゴシックロリータって言うんだつたけこういう格好は？ 黒いヒラヒラのドレス姿をしている。黒髪ロングのこいつが着ていると人形みたいな非人間的な美しさがある。

呆然と少女を見詰めていると、沙織が俺たちを紹介してくれた。

「お待たせ致した！ こちら、きりりん氏と特別ゲストの京介氏でござる」

「き、きりりんです。よ、よろしく」

「新垣京介だ。飛び入りですまない」

桐乃はずいぶんと緊張しているな？ ちょっと意外だ。

俺は急な参加になつたので、軽く詫びを入れる。

そんな俺らをチラリと一瞥し、コスプレ少女は無表情にボソッと自己紹介をした。

「ハンドルネーム黒猫よ」

「さて、全員挨拶が済んだところで乾杯致すでござるよ！ 本日は無礼講で楽しみましょうぞ！」

先ほど買ったコーラの紙コップを持ち上げ沙織が宣言する。

遅れまじと俺も紙コップを持ち上げたが、黒猫から乾杯にストップがかかつた。

「ちよつと待つて！ 先に聞いておきたいのだけれど。女子専用コミュニティの特別ゲストがなんで男なの？」

警戒したような黒猫の眼差しが俺に突き刺さる。

ちよつとまで？ コミュニティの二次会とは聞いていたが、女子専用コミュニティについてるのは聞いていないぞ！ 聞いていたら絶対に来ていない！

唚然として桐乃と沙織に視線を送る。

視線の先では、『任せるでござる』とでもいうように胸をはつた沙織の姿があった。  
こいつに任せて本当に大丈夫だろうか？ 不安があつたがここは沙織に任せる選択肢しかなかつた。

沙織は落ち着き払つた口調で黒猫に応えた。

「京介氏はきりりん氏を追いかけていたときに一緒にいるところを見つけまして、きりりん氏が楽しそうにお話しされている姿を拝見し、悪いお人ではなさそうだったので無理を言つて誘わせてもらつたのでござるよ」

「べ、別に楽しそうになんてしてないし！」

「そう、理解したわ！ オフ会に参加した後に彼氏に迎えに来てもらつたという訳ね。リア充なんか爆発すればいいのに！」

「おお、まともな説明だつた！ 疑つてすまん沙織！」

しかし沙織の説明を自分なりに解釈したのか、黒猫が桐乃に向かい過激な発言をする。

それに対して、また彼氏と勘違いされて桐乃が怒ったのか顔を赤く染め、テーブルに両手を突き身を乗り出して反論した。

「か、彼氏じゃないし！　親友のお兄さんにたまたま会つて話していたところ沙織に捕まつただけだし！」

「へえーたまたま？　こんなところで親友のお兄さんに会つて？　へー」

いかにも私は信じていませんといった冷笑を浮かべる黒猫。

カチンときたのだろう桐乃が声を震わせた。

俺にはカーンと何処かでゴングが鳴り響いたような気がした。

「あ、あんた何が言いたい訳!?」

「別に、アキバのオフ会で、渋谷の合コンに参加しますみたいなファッショントしてきたあなたが、嘘をついているなんてちつとも思つていらないわ！『実際は男連れのリア充め！』なんて全然考えてもいないわよ」

「おもいつきり疑つてはいるじゃない！　ファッショントについては、これがあたしらしい格好なのよ！　そもそも服装ならあんたも気合い入りすぎたコスプレしてきて、さつきのオフ会で周りから浮いていたじやない！　なにそのコスプレ？　水銀燈？　ちょつ

と違うみたいだけれど？」

目の前にダイナマイトがあり、導火線がだんだん短くなつていく心境に俺は襲われた。

そんな心境の俺に構うことなく一人の会話はどんどんヒートアップしていく。

「水銀燈、いえ違うわよ。これはマスケラに出てくる夜魔の女王よ！ あなたといつたい何処に目を付けているの？」

「マスケラ？ なんか聞いたことはあつたような……アニメだつけ？」

「知らないの？ 今期最高のアニメよ！ 毎週木曜日の夕方にやつているから是非見てちょうだい！」

「あ、思い出した。それってメルルの裏番組でやつている奴でしょ？ たしかオサレ系邪氣眼厨二病アニメつて評価されている」

導火線が燃え尽き、遂に本体に辿り着いた幻影が俺には見えた。

「な、何を言つているのかしら、あなた！ マスケラが裏番組ですって！？ メルルつてあれよね！ バトル系魔法少女アニメで幼女のパンチラ目当て萌え豚御用達の駄作よね。そもそも視聴率からして裏番組はそつちでしょ！」

「はああ、視聴率？ なにそれ？ あたしが見ているのが表でそれ以外は裏に決まつているじゃない！ それに何が萌え豚専用よ！ あんたメルル見たことあんの？ 可愛

い少女達の苦悩あり、友情ありの熱い戦いが神作画でメツチャ動くつーの！ 萌えアニメ舐めんな！」

「あなたこそ、何が厨二病アニメよ！ 少しでもそういう要素があれば厨二病作品と勝手に決めつけて作品を理解しようともしない愚者達とあなたは同じよ！ 重厚なストーリーに個性的キャラクターが織りなす最高の物語。それがマスケラよ！ あなたこそ舐めないで！」

「ハンツ、厨二病を厨二病と言つて何が悪いの？ あんた自分の格好と言動振り返つてから言いなさいよ！ どう見ても厨二病でしそうが！」

「なんですつて……」

す、凄え戦いが始まつちまつた。

どうすんだこれ？ 救いを求めて沙織を見ると、なんとこのグルグルメガネ氣にせずにポテトぱくついていやがる信じられねえ？  
しかも挙句言つた言葉がこれだ。

「いやー微笑ましいですなあ。お二人の相性はバツチリでござるな！」  
「お前の目は節穴か!?」

とりあえず沙織に助力を求めるのは不可能だとわかつた。

……ということは俺がこれ止めるのか？ それ無理じやね？

二人に視線を戻すも、鎮火の気配は一切見られず、むしろ過熱していつている。やるしかねえ!!

俺は大きく息を吸い込み、そして吐き出した。そして覚悟を決め立ち上がり、二人の間に割り込んだ。

「まあまあ二人とも、たかがアニメでそこまで熱くななくともいいじゃないか」ピタリと二人の争いが止まる。

そして二人揃ってゆっくりとこちらに振り向く。

そのとたん恐ろしいプレッシャーが俺を襲う!?

何これ？ ダークモード中のあやせ並みだ！

お、俺は何を間違えた？

膝が俺の意思と関係なくカクカクと震える。

「たかがアニメですって!!」

二人の声がハモる。

「そつかあ。京介もアニメなんかでムキになつて気持ち悪い。このキモオタ共とか思つたんだよね。所詮あんたもそんな人間か」

「いや、俺はそんな……」

「自分のことを一般人と思つているこの男は私達のことを下に見て、せせら笑つてゐる

に違いないわ』

『そ、そんなことは……』

それから30分俺は碌に反論すらさせてもらはず責められ続けた。

なんとかアニメは嫌いでないと納得してもらつたが、その後は延々とメルルとマスケラの素晴らしさを聞かされ続ける。

沙織は沙織で俺のことを助けてくれず、時々合いの手をいれながら終始楽し気に俺らのやり取りを見守つていた。

そして長々と行われたアニメ談義の結論は視聴することが一番だと二人の意見が一致して、俺はメルルとマスケラを見るなどを約束させられた。

今度それぞれDVDを貸してくれるとのこと、嬉しくて涙がでそうだ。とほほ……  
沙織の言つた『二人の相性はバツチリでござるな』この意味をこの上もなく理解出来てしまつた。

もし時間を戻せるなら、きっと俺は俺をぶん殴つても二人の仲裁をしないように引き止めるだろう。

最終的に俺は三件の新しいアドレスをゲットして帰宅した。

「に、兄さん、どうしたんですか!? 憂いゲツソリしますよ!」

「ああ、あやせ。情熱を持つた人間は素晴らしいよな。ただし決してその情熱の元を馬

鹿にしたらいけないよ。兄と約束してくれ、そうでないととても恐ろしい目に……」「ちよつ、何言つてるんですか?! 兄さん大丈夫ですか？ 虚ろな目でガタガタ震え出して!? お、お母さん、ちよつと来て兄さんが……」

帰宅した俺を妹が心配してくれる。

ああ、あやせと久しぶりに話せたな。

気を抜いた瞬間どつと疲労が押し寄せ、俺はそこで力尽きた。

## 第5話

俺はいまとんでもない物を持っている。鞄にしまつてあるが、万が一にもこれが見つかってしまつたらと考えると背中に冷たい汗が流れる。

何を持つているかというと美少女恋愛シユミレーション、いわゆるギャルゲーだ。

その程度のことの大袈裟だ。たとえ家族に見つかつたとしても凄く気不味いだけのことだろ、と思うだろう？ 俺もそう思う。このソフトでさえ無ければ……

結論を言おうソフト名が「妹と恋しよっ♪」なのだ。

実際に妹がいる人間になら、この恐ろしさは理解して貰えると思う。

これが見つかつたと仮定してみよう。まずは家族会議になるだろう。これはこれで当然恐ろしい。

しかし本当に怖いのは妹の反応だ。あやせがいつもの様に怒つてくれるなら構わない。だけど俺の想像の中では、あやせは俺を怖がつて避ける様になるんだ！ この想像が頭をよぎつたときは想像なのに本気でへこんでしまつた。

しかし桐乃の野郎、今回ばかりは本気で恨むぞ！ なにが『これは全年齢版だから大丈夫！』だつてだ！

お前は18禁バージョンも持つていやがるのかつてんだ！　いや……あいつなら持つていそうだな。

考えると怖いので思考をストップした。

桐乃、黒猫、沙織、あの三人とは連絡先を交換したが、てつきりあの場限りの付き合いだろうと俺は思っていた。

しかしそれはあいつらを甘く見ていたのだろう。

後日しつかりと桐乃がメルル、黒猫がマスケラのDVDを持ってきた。

これを家族に見つからないように観るのは本当に大変だつた。あいつら感想を聞いてくるから観ないという選択肢も封じられたし。

あいつらに『俺なんかに貸すのは面倒じゃないか？』と尋ねたら『馬鹿にされたまじやいられない、それと布教活動は重要』とのことだ。

いつからオタクは宗教になつたんだ？

まあそんなわけであいつらと何度か会つたり、物を借りたりと友人関係を築きあげていつたわけだ。

それで今回桐乃が持つて来たのが例の品だつたわけだ。

「これ、凄く面白いんだ！　感動して泣けるし！　キャラも超お可愛いくて、しおりちゃんもう最高♪」

「あ、貴女メルルだけじゃなく、そんなものにまで……なんて業の深い女なの!?」

「ほう、きりりん氏は幅広く手を伸ばしておられるのですな？ 拙者も見習わなければ！」

「お前ら止めろよ!! 桐乃お前俺に妹がいるの知つてて、それを貸すつもりか!? 俺を社会的に殺す気なのか?」

「はっ、あんた何言つてんの？ 二次元と三次元ごっちゃにしてない？」

「お前が言うな!! 心の中で俺は絶叫したね！ いや本当、怒鳴りつけなかつた俺を褒めてやりたいよ。」

「とにかくしつかりとクリアして感想を報告すること！」

「京介氏、諦めるでござるよ。こうなるときりりん氏は止まらないでござる」

「今回はさすがに貴方に同情するわ。家族に見つかって地獄の煉獄に焼かれないよう特別に祈つてあげる」

「黒猫……一応感謝しとく、はあー」

結局俺は「妹と恋しよつ♪」を受け取り鞄の奥底に沈め、その鞄をしつかり胸に抱いて帰宅することになった。

神様まだあやせが帰つていませんように！ 心の中で祈りながら、玄関をいつもよりも慎重にそつと開ける。

普段から祈つていない俺に神が力を貸すはずもなかつた。むしろ天罰じや！　とでもいうかのよう、玄関を開けてすぐの廊下に妹がいた。

そんなに普段の行いが悪いのだろうか俺は？

「た、ただいま」

「あつ、おかえり。兄さん」

いつもなら嬉しい妹のお出迎えだが、今日は本当に勘弁して貰いたい。  
緊張の為か？　俺は聞かなくてもいい質問をしてしまう。

「廊下なんかでどうしたんだ？」

「えつ？　ただリビングに行く途中だつたんですけど？　兄さんは今日遅かつたんですね」

「ああ、ちょっと友人とな」

幸いなことに、あやせには不審がられずにすんだ。

友人……お前の親友のお陰でいま凄え苦労しているんだがな！　心の中で呟く。  
あやせには桐乃とのことは伝えていない。

桐乃も『学校の友人にオタク趣味は絶対にバレたくない！』との事だ。

俺もあやせのオタク嫌いを知つてるので、その方が良いと思う。たとえ親友でも全てを知る必要は無いと俺は考へてゐる。

だから兄のことも全て知る必要は無いのだ。借りているオタクグッズがバレるわけにはいかない。特に今回のは一級危険指定物なので絶対にだ！

危険物を意識してしまった為、無意識に鞄を後ろ手に隠してしまう。しかし逆にそれがやせに不信感を抱かせてしまった。

「兄さん？ なにか隠していませんか？」

「な、なにも、か、隠してなんていないぞ」

「……ばればれですよ兄さん。またいやらしい本を買ってきましたんでしょ。この変態！」

「ち、違うぞ！ いやらしい本じやない。本當だ！（お前の想像を遥かに超えた、もつとずっと恐ろしい物だ！）」

あやせが俺の目をジッと見つめてくる。

何秒たつたのだろうか？ 俺には永遠に感じるくらい長く覗きこんだあと、妹が謝罪した。

「……嘘じやないようですね。疑つてごめんなさい兄さん」

「ああ、いやこちらこそ拳動不審だつたな」

「そうですよ兄さんがよく変な物買つてくるから疑つちやうんですよ」

「変な物つて、別にそんなもの買つてないだろ？」

「この間メガネ写真加工ソフトでしたつけ？ いやらしい物じやなかつたんですけど、あ

れなんだつたんですか？」

「ごめんなさい。私は変な物を買つておりました」

「に、兄さん!? 土下座なんかしないで下さい！ 別に私は怒つていないですよ？」

顔を上げると、呆れ顔の妹。

アキバ帰りで力尽きたときに、俺の野望を叶える例のソフトが見つかってしまったのだ。

正直あのときは、終わつたと顔を青ざめさせたものだが『変な物の買つて、無駄遣いをしないで下さい』と言われるだけですんだのだ。

まさか自分の写真を加工するためだとは思わなかつたのだろう、九死に一生を得た出来事だ。

そのことはバレないよう、そして極力触れられないよう注意しないとな、その為なら土下座なんて何回でもしてやるさ！

後ろ向きに決意を決めたところで、ボロが出ないうちにさつさと部屋に退散しようと思う。

「じゃあ、あやせ。俺は部屋にいるから飯が出来たら呼んでくれ！」

「あ、ちよつ、兄さん」

左手に鞄をしつかり抱え、右手を軽く上げながら階段をタツタツと駆け上がる。

後ろからの妹の呼びかけから逃げるようすに部屋に向かう。

木工のドアの取っ手を捻り押し開けた。シングルベッドがまず目に入る、そして中学のときに買い換えてもらったシンプルな木製デスクがあり、その上に高校の合格祝いノートパソコンが鎮座している。他に目につくのは、19インチのテレビにDVDレコーダー、漫画で占拠されているプラスチック製の本棚。洋服なんかはクローゼットにしまつてある。

男子高校生にしてはシンプルにきちんと整理されていると自負する俺の城だ！無事部屋に帰還を果たすことが出来た俺は、気疲れでベッドに突っ伏した。

10分位たつただろうか？ いつ迄もこうしていたいという誘惑を振り切ることにして、鞄から例のブツを取り出す。

とても気が進まないが、諦めてパソコンで起動を始めた。

『おかえりなさい、おにーちゃんっ。妹とお……恋しよっ♪』甘ったるいボイスと共にスク水姿の口リっぽい二人の少女がパソコン画面を占拠した。

ぐふおつ！？

ゲームスタート画面にて早くも俺はキーボードの上に突っ伏した。

おいおい、本当に俺はこれをクリアしなければいけないのか？ まじで勘弁して欲しい。

最近ため息を吐く回数が激増している。近ごろ運が悪いのはこのせいだろうか？

しかしゲームを起動してみて、俺は悟ったね！

これがバレたら妹に避けられるという心配はもうしなくても構わない！  
何故なら、これがあやせにバレたら、クビくくなっちゃうだらうな、俺！

【妹と恋しよつ♪】このゲームは、俺に本気でこんなことを考えさせてしまうほど深刻なダメージを与えた。

……シャットダウン

バタンと無言で俺はノートパソコンを閉じた。



最近、兄の様子がおかしい！

いまも私から逃げるように部屋に行ってしまいました。

ここ最近の様子ですが、自分の部屋にこもることが多くなってきたと思います。いままでは帰宅後や夕食後はリビングでソファーアに座り、テレビを見たり私と話をしていたのですが、最近はすぐに自分の部屋に行ってしまいます。

べ、別に兄さんとの会話が少なくなつて寂しいなんて思つていませんよ！　ええいま

せんとも！

あとは帰宅が遅くなる日が増えたと思います。私はモデルの仕事をしているので帰宅が遅くなる日があり、だいたい家に帰ると兄が出迎えてくれるのが日常でした。けれど近頃は私の方が兄を出迎える回数が増えた気がするのです。

兄が先に帰っていても部屋に居て、私の帰宅に気が付かないことが多いです。兄からの『おかえり』をずっと聞いていません。

これはちょっと寂しいです。あくまでちょっとですよ、ちょっと！

こういうことが始まつたのは、この間兄がゲツソリと疲れて帰ってきた日の後からだつた気がします。

あのメガネ写真加工ソフトという怪しげな物が原因なのでしょうか？ でもあんな物で帰りが遅くなる筈はないですし……

原因解明の為でも、さすがに兄の部屋に忍び込むのは、はしたないです。  
どうしましよう？ 桐乃や加奈子に相談してみるべきでしようか？

それとも麻奈実お姉さんに相談しましようか？

……も、もしかして兄さんにか、彼女が出来てしまつたんでしようか？！

も、もしそうなら兄さんをぶつ殺さ……いえ、いえ、違います。焦つてはいけません。

まだそうと決まつた訳ではないのですから！

落ち着きましょう。深呼吸をして『すうーはあああ』  
そうです、まずは確認することが一番大事です。  
でもどうしよう？もし本当に兄さんが彼女を作つていたら……  
私の胸がチクンと痛みました。

## 第6話

桐乃から借りた例のソフトを昨日ついにコンプリートした！

長く険しい道のりだった！ 少しでも早く返すために、ここ一週間学校が終わつたら家に速攻で帰り、やり続けたのだ！

本当に何度も精神を破壊されかけたことやら、眼鏡姿あやせの写真という回復アイテムがなければ、俺はいま廢人になつていたかも知れない。

これほどの達成感を味わつたのは久しぶりだ！

昨日エンディング曲が終わりENDの文字が出たときには、思わず両手を高々と掲げてガツツポーズしちまつた。

辛く苦しい日々が終わつた開放感から今日は、あてなくぶらぶら散歩することにした。

駅前商店街を本屋で立ち読みしたり、CDショップを冷やかしたりとしているうちに、鳥類と一緒に家に帰ろうと曲が流れてきた。

その曲につられた訳ではないが、そろそろ帰るか？ と思つたところで、ここ一週間俺を苦行に追い込んだ張本人を見つけた。

桐乃はゲーセンで太鼓マスターをプレイしている。

ようやくクリアした旨を伝えてやろうと近づいて行くと様子がおかしい。

リズムなんか御構い無しに、力任せに太鼓にバチを叩きつけていた。ガンツ！ ガ

ンツ！ ガンツ！

なんだあいつぶつ壊すつもりか！？

このままだと店員呼ばれるだろ？ 止めるつもりで急いで桐乃に近寄った。

「死ね！ 死ね！ 死ねつ！ みんな死ねえつ！」

なんておつかねえこと言つてやがるこの女！ 思わず肩にかけようとした手をビビつて引っ込めちまつた！

……まあこのまま放置する訳にはいかんよな。改めて引っめた手を肩に伸ばした。

「おい、桐乃！」

「誰つ！？」

振り向きざまに桐乃が振るつたバチが俺の脇腹にクリーンヒット！

「ゴハッ！」

「なんだ、京介か！」

い、息ができねー！ なんて暴力的なヤローだ！ 会うたびに俺に対して遠慮がなくなっていく！ せめて謝れ！

いろいろと言つてやろうと桐乃の顔を睨みつける。そこには涙目姿の少女がおり、その姿に文句を言いかけていた俺の口がピタリと動きを止める。

「お、お前泣いてん……」

「泣いてない！」

桐乃が俺の言葉を遮る。

桐乃が太鼓マスターに八つ当たりしていたときから注目を集めていたのだろう、遠巻きにこちらをチラチラと見つめるギャラリー達が増えてきた。

「……はあ、場所かえるか？」

「……うん」

桐乃も気が付いたのだろう。反論することなく同意した。

ゲーセンを抜け出し、とりあえず近くの公園に行きベンチに腰掛ける。

途中の自販機で買ったミルクティーを桐乃に向かい放り投げる。

「ほれっ！ それでなにがあつた？」

「わっ！ ……あんがと」

「…………」

「…………」

缶を受け取り礼は言つたものの、それから口を閉ざす桐乃。

しかたない別の話題で切り込むか。

「昨日ようやく『妹と恋しよつ♪』クリアしたぞ！　凄げえ大変だつた！　今度返す。いつ持つていけばいい？」

「……いい。それあんたに上げる」

「はあつ！？」

耳を疑つたね！　あの『詩織ちゃん、超おサイコー！　詩織ちゃん、マジ神！　詩織ちゃん、ウツヘツヘ！』なんてマジでこいつ大丈夫か？　つてくらい『妹と恋しよつ♪』を好きだつたこいつがソフト手放すだと!?

「聞き間違つたかも、すまん。もう一度言つてくれ」

「だからー！　あんたにやるつて言つたの！」

桐乃が絶叫する。

まじ、これは本格的に何があつたんだ？

「あと、これからは京介と会わない！　黒猫や沙織とも会わない！」

「お前、急に何を！？」

「あいつらにはあんたから言つておいて！」

そう言つて立ち去ろうとする桐乃。

逃げようとする桐乃の腕を慌てて俺は掴み上げた。

「ふざけんなよ！ なに一方的に決めてんだよ！」

「離してつ！」

「離さねえ！ 少なくとも理由言うまでは絶対に離さねえ！」

「……わかった。理由言うから離して」

俺の覚悟が伝わったのか、桐乃は諦めてベンチに戻った。

「それで？」

「……あたしオタクを卒業することにしたの。だつてオタクつてキモいじやん！ だからあたしにはそんな友達は必要ないの！ だつてあたしは……」

「お、お前ふざけん……嘘つくなよ」

「嘘なんてついてない……」

「じゃあなんで泣いているんだ？」

桐乃の瞳から涙が一秉溢れ落ちた。その零はだんだん数を増し、やがて線となり頬を伝い落ちる。

「ち、違つ、あ、あたしはな、泣いてなんて、  
なああああああああああ——」

強がりも限界に達したのだろう、桐乃が泣き崩れた。

こういうときはどうしたらいいのだろう？ 彼氏なら胸を貸してやればいい！ 親

親

友なら背中を撫でるだろうか？

桐乃のことは仲間とは思っている。しかし妹の友人で、付き合いもここ一ヶ月程度でしかない俺にはどちらもしてやれず、桐乃が泣き止むまで見守つてやることしか出来なかつた。

「……ごめん」

「気にすんな、謝ることじやない。ほれ！」

「あんがと。京介がハンカチちゃんと持つてるなんて意外」

「……あやせがうるせえーんだよ」

「ふふつ、想像できるかも」

俺があやせに叱られているところでも考えたのか桐乃が微笑む。

「どうやら落ち着いたようだ。

「なにがあつたんだよ？」

「あのね、お父さんに趣味がバレちゃつた……」

「親父さんにか……」

「うん、くだらないって言われちやつた。あたしが好きなアニメもゲームも、そして京介や黒猫、沙織のオタク友達も……」

「桐乃……」

「全部、全部、くだらんって。違うのに、そうじやないのに、あ、あたしな、何も、言い返せなかつた……」

言われたときのことを思い出したのだろう桐乃の顔が悔しさで歪む。

せつかく止まつていた涙もポツリポツリとまた桐乃の膝に落ちていく。

俺の左手が自然に動いていた。先ほどは何も出来なかつたが、いま左手は桐乃の頭をゆっくりゆっくり撫でている。

これが役に立つのかは分からぬ。でも少しでも桐乃の悲しみがやわらげばいいと思う。

子供の頃、あやせがよく泣いていたときによく同じことをしていたのを思い出す。

「はあ——」

「落ち着いたか?」

「うん、ありがと、少しスッキリした」

「約束果たせたな」

「約束?」

「そ、約束! 愚痴を聞いてやるつて言つただろ!」

「……まだ覚えてたんだ。うん、あたしもう一度お父さんと話してみる。たぶんアニメやゲームは諦めなきやダメかもだけど、京介や黒猫や沙織にはこれからも会えるようお

願いする」

桐乃が覚悟を決める、その瞳には決意が宿つて見えた。

しかし俺は知っている。こいつがどんなにアニメとゲームを好きか。いやこいつの場合もはやそれを愛していると言つていいだろう。

誰がほとんど初対面の相手に延々とメルルの素晴らしさについて喋り続けられるだろうか？ 誰が実の妹がいる兄貴に妹物のギャルゲーを勧めてくるだろうか？

こいつがやることは正直非常識だ。それは断言できる！

しかしこいつがアニメやギャルゲーの話をしているときは、とても嬉しそうに、そして幸せそうに喋るのだ。

そしてそれは黒猫、沙織も同じだ。

きっと彼等は真のオタクなのだろう。

そんな真のオタクの桐乃がアニメ、ゲームを諦める。

何故だろう？ とても認めたくない！

これから俺がやろうとすることは、お節介だ！

家族の間にわってはいる、きっととても迷惑なことだろう。

なにせ桐乃の父が言うことはとても正論だからだ！

アニメはともかくとして、何処の世界に女子中学生がギャルゲーをやることを喜ぶ父

親がいるのだろうか？

たぶん、いや間違いなく俺が父親の立場でもギャルゲーは勢いで取り上げてしまふと思う。

だからこれから俺がやることは完全に俺の我儘だ！

俺が今まで通り幸せそうに笑いながらアニメやゲームで、俺たちと盛り上がりたいる桐乃の姿を見ていたいという俺の個人的欲求だ！

「一度、お前の親父さんに会わせて貰えねえか？」

「えつお父さんに？」

「ああ、非常識だつてことは、百も承知だ！　本来なら赤の他人の俺が出しゃばつていいわけがねえ！　だけどさつきお前『アニメやゲームを諦めても』って言つてたろ？　黒猫や沙織に今後会えたとしてもアニメやゲーム出来ないお前は楽しめるのか？　羨んだりせずに友人関係を続けていいけるか？」

「そ、それは……もちろん」

桐乃が口ごもりながら、力なく肯定する。

桐乃と黒猫、沙織を結びつけたのは、オタク趣味だ。

たぶん桐乃のオタク趣味が禁止されても、こいつらはいい友人関係を続けられるだろう、でもそれはいつか破綻しちまうんじゃないかと思う。

桐乃が『オタクつ娘集まれ!』のコミュニティを参加したのは、あやせ達学校の友人に求められないものを求めたからだと思う。

酷い言い方になつちまうかも知れないが、黒猫や沙織に桐乃が求めるのは、普通の友人じやなくて、オタク友達としての友情だろう。

そのオタク趣味を封印して関係を続けるのは、きつと酷く困難だろう。  
「桐乃、俺はたぶんお前の親父さんを説得するなんて無理だと思う。所詮他人だからな」「なら、なんで?」

「だからお前を手伝わせてくれないか?」

「えつ?」

「お前親父さんともう一度話すんだろう? そのときに、お前がオタク趣味を辞めないですむようフオローラしたいんだ」

「あたしのフオローラ……」

「ああ、まだわからねえが。黒猫と沙織にも力を借りて、親父さんを攻略しよう!」

「あいつら力貸してくれるかな?」

「一緒に親父さんと会うってのはわからねえが? 相談に乗つたり、攻略方法は間違いなく考えててくれると思うぞ! むしろ何も話さないでみろ、絶対にそつちの方がキレるぞ、あいつら!」

「そうね『水臭いですぞきりりん氏！』『私に秘密を作るなんて、偉くなつたものねスイー  
ツが！』くらい言つてきそうね」

「だろ、だから間違いなくあいつらは力を貸してくれるつて！ ただし親父さんを説得  
するのは、あくまで桐乃お前自身だぞ」

「わかってる！ お父さんを必ず説得してみせる」

力強く桐乃が宣言する。

それはさつきまで泣きじやくつていた奴とは、とても思えなかつた。

嬉しくなり、ついついポンポンと桐乃の頭を軽く叩いた。

「ははっ、その意氣だ！」

「うつさい、触んな！ ……あんがと」

桐乃が俺の手を払いのけた後、そっぽをむきながらボソリとお礼を呟いた。

## 第7話

いま俺たちは駅前のカラオケボックスに集まっている。

今回の桐乃のことで黒猫と沙織に緊急招集をかけたのだ。

本当ならここに桐乃がいるはずだったが、外出を許して貰えなかつた。

桐乃と打ち合わせが出来ないのは痛いが、本格的な説得前に親父さんを刺激するのはマズイので、桐乃には後で電話でこの内容を伝える予定だ。

桐乃がいないので、俺が代わりにあの日起こつた事を、ゲーセンからその後の公園までなるべく克明に説明を始める。

話の途中で桐乃が俺らとはもう会わないと口走ったところでは、こいつらがぶち切れ大変だつた。

「あのクサレビッチ!? いまからあいつの家乗り込むわよ!」

「うふふっ! 桐乃さんあなたも私の前から何も言わずに消えるんですね。ええええ黒猫さん乗り込みましょう! 桐乃さんにしつかりと教育して差し上げませんと!」「待て待てっ!? お前らストップ! 特に沙織、口調がおかしいから!? とにかく落ち着けえーーー!!」

席を立ち上がり憤怒の形相で退出しようと二人の腕を掴み、必死の思いで引き止めた。

こいつらを引き止めるのに俺が使つた労力を、もし目の前のカラオケマシーンが調べてくれていたら、きっと100キロカロリーを余裕でオーバーした数字を叩き出したに違いない！

その後キレた二人を落ち着かせ、最後の『父さんを必ず説得してみせる！』まで、なんとか話しきることができた。

説明を聞き終わった後、黒猫が俺を睨みつけ問い合わせた。

「貴方、私達の力を当てにし過ぎじゃないかしら？ 私達が力を貸さないって言つたら、どうするつもりだつたの？」

「はっ？ どうするも何もお前らが桐乃の危機に力を貸さないはずないだろ？ だからお前らが力を貸さない状況なんか、何も考えてないぞ？」

「なつ！」

「フツ、く、黒猫氏の負けでござるな。拙者達をそ、そこまで信頼して頂き、と、とても嬉しいでござるよ」

「うーーーーー、見透かされてるみたいで癪に触るわ！」

俺の何当たり前のことを聞いているんだ？ という態度に黒猫は啞然とした顔をし

て、その後俺に対して唸りだす。

黒猫お前名前の通り、獣にでもジョブエンジするつもりか？

俺らのやり取りを見ていた沙織は口元を押さえて笑っている。

沙織、喋るか笑うかどちらかにしろ！

『ふうー』とひと息呼吸をもらし、笑いの発作を治めて沙織が問いかけた。

「それでどうするでござるか？」

「ああ、とりあえず今度の日曜に桐乃の親父さんに会えるよう、桐乃にセッティングを頼んだ。たぶん大丈夫だと思う」

「自信なさげね。本当に大丈夫かしら？ それにしても次の日曜だと、ほとんど時間無いじゃない！」

「なんでそんなに早く会談を申し込んだのでござる？」

「ああ、それは時間が経てば経つほど、桐乃が追い詰められちまう気がするんだ！ たしかに昨日あいつは立ち直ったよ。でもその後家で親に責められ続けたら、さすがのあいつもまいっちまうだろ？ それに強硬手段で、アニメやゲームを捨てられちまう可能性もあるしな」

「たしかにそれはござろうな！」

俺の解答に得心したのか、二人がコクリと頷く。

さて次の質問は重要だ。まあ答えは見えているけどな。

「それでお前ら日曜どうする？ 一緒に行くか？」

「もちろんでござるよ！」

きりりん氏、盟友の危機に参上するのは忍者の基本でござる

即答である。

しかし沙織お前はいつから忍者になつた？

そして忍者はどちらかというと、冷酷に見捨てる側だと思うぞ？ 偏見かもしけんが

！

黒猫の方はといえば。

「ふ、ふん、行つてあげるわよ。スイーツ女に貸しを作る大チャンスですもの」

胸の前で腕を組み、そっぽを向きながら黒猫は応えた。

そんな黒猫を俺たちは微笑ましく見守つた。

「ふふっ、黒猫氏は本当に素直じやないでござるなあ」

「ああ、まつたくだ」

「貴方たち、何が可笑しいの!!」

顔を赤くして照れ隠しで怒る黒猫。

あーーなんだ。これお持ち帰りしちゃつてもいいかな？

赤い顔して下から俺を見上げる格好で睨みつけてくる黒猫。その姿は破壊力抜群で

ある！

俺はいま、少し萌えというものを理解したのかもしれない。

俺が新しい世界に一步足を踏み入れてはいる中、横で沙織が黒猫を宥めていた。

「まあまあ、黒猫氏。拙者達も悪ノリが過ぎたでござるよ。すまんでござる」

「ふん、いいわよ。それよりもいまは私を気色の悪い目で見てくる、そこの男の方が気になるのだけれど……」

身の危険を本能で察したのか？ 黒猫が両腕を胸の前に交差させて、俺から身を遠ざける。

ばれてるうう！？ 黒猫の勘の良さに驚いた俺は弁明を始める。

慌てていたためか、何も考えずに思つたことをそのまま口にしてしまう。

「い、いや、お前の姿があまりに可愛く見えたから」

「なあつ、か、可愛つ」

俺の言葉を聞いて、黒猫が俯いてしまう。

し、しまつた！ 何を言つてんだ俺！？

フリーズした黒猫とあたふたしてはる俺を見かねて沙織が声をかけた。

しかし何か声に怒りを感じる。

「イチャイチャは別のところで、やつてくだされ」

「イ、イチヤイチヤなんかしてないわよ！ そもそもこんないかにも平凡地味な男に惹かれる訳が無いでしよう！」

グサアツ！ 言葉の刃が俺に突き刺さる。

たしかに自分でも地味で平凡なのは理解しているが、人にしかも女の子に目の前で言わると堪えるな。

はあーマジへこむ。

俺の落ち込んだ姿を見て、自分が口走った言葉に気がついたのか？ 黒猫が仕方ないという顔をして言葉を発した。

「別に、貴方を悪く言うつもりは無かつたのよ。地味って思っちゃつたのは本当だけれど……」

とどめを刺すつもりかこいつは！

しかしどうやら続きがあつたようだ。

「貴方を信頼しているわ。いつも私達のオタク談話に仕方なさそうな顔で付き合つてくれる、お人好しなところ。私達が貸す物に対し、面倒臭そうな表情で……これはちよつと許せないわね。でも全て見て感想を言ってくれる律儀なところ。そして今回の友人の為に、友人と一緒に親を説得しようなんて非常識な、とてもお節介なところ。正直桐乃が少し羨ましいわ」

こんなに黒猫が俺を評価してくれているとは思わなかつた。

黒猫の信頼の眼差しに、俺の心臓は急ピッチで作業を始め、首筋を通して血液を顔に送り続ける。

沙織が微笑みながら黒猫に追従した。

「ええ、それが京介さんの良いところですわ。おつと、本当にきりりん氏が羨ましいでござるよ！」

二人の信頼の言葉を聞き、穏やかな気持ちになつた俺は思わず微笑んだ。

「こいつらの信頼に応えたい、俺の口から言葉がこぼれ落ちた。

「あのときは桐乃の泣き顔を見たら、何とかしてやらなきやつて思つて、必死だつただけだよ。そしてそれはもし黒猫、沙織が同じ状況だつたとしても俺は同じことするぞ！」

俺にとつてお前らは大切な存在だからな！」

「（～～～～）（こ、この男は？！）」

「（～～～～）（その表情で反則ですかよ！？）

部屋の中がシーンと静まり返る。

あれ？ 俺は何かしちまつたか？ 信頼に応えたくて、こいつらに大切な仲間つてことを伝えただけなんだが？

黒猫を見る。口をパクパクさせて固まつている。俺と視線が重なると顔を真っ赤に

させて、慌てて顔を逸らした。

沙織を見る。今度はこいつが顔を伏せて俯いている。よく見ると沙織は耳まで赤くなっている。

お、俺はそ、そんなに恥ずかしいと思つちやうクサイ台詞を口にしてしまったのだろうか!?

そう思つてしまつたら、頭にカーツと血が上り、俺も何も言えなくなつてしまつた。

部屋の中に氣不味い沈黙が訪れる。

このまま永遠に沈黙が続くのか? と思われたところ、『コホンツ』咳払い一つして、一番最初に回復した沙織が氣不味さを打ち破つた。

「そ、それで桐乃氏の父君への対策なのでござるが、どの様にフォロー致しましようか?」

「あ、そうだな、説得は桐乃がするとして。俺らはどうやって援護するかが問題だよな」

なんとか落ち着いた俺も、沙織に答える。

ただし具体的なアイデイアが全然浮かんでこない。

そんな中で、こちらも落ち着いたのか黒猫が、冷静に意見を述べた。

「ふうー、ええそうね? なら私達がやる事は相手の世間的正論をいかに論破するか、徹底的にシミュレートすることね」

「世間的正論をシミュレート?」

「ええ、世間の大人にとつてオタク趣味は気持ち悪い趣味という意見が一般的だわ！本当に腹立たしいけれどもそれが世間の評価なの！だから私達は相手が言つてくるオタク趣味の問題点を論破して、オタク趣味も普通の趣味と変わらないと納得させなければならないの！」

「つまり親父殿が言つてきそうなことを予想して、解答を考えておくのでござるな？」  
「ええ、その通りよ！」

黒猫が対策を考え、沙織がまとめる。

すぐにこんな意見が出てくるとは、頼もしい連中だ！

俺は笑みをこぼした。

「さすがだよ、お前ら！」

「感心ばかりしてないで、貴方もしつかり考えるのよ！」

「ああ、勿論だ！ よつしやあ、希望の光が見えて来たぜ！」

それから俺たちは時間の限り、桐乃の親父さんが言つてきそうな事を必死で頭を捻らせ、その対策に没頭した。

そして日曜日、いよいよ対決する運命の日を迎える。

## 第8話

ここ連日、また兄さんの帰宅が遅いです。

やはり彼女が出来てしまつたのでしょうか？

ここ最近の兄さんは酷く疲れているようですが、目に活力があり昔のように生き生きしているように見えます。

本当は兄さんの異変を確かめる為に行動しようと考えていたのですが、いまはさらに別の気になることが出来てしまい断念しました。

私の親友の桐乃の様子がおかしいのです。

まずモデルのバイトをお休みしました。今まで桐乃が理由なくバイトを休むことはありませんでした。

次によくため息をつき、授業中も何か別の事を考えているのか、空を眺めているんです。

モデルに部活もしている桐乃が成績優秀なのは授業中の集中力が凄いからだと思します。その桐乃が授業中に気を抜いている姿は初めて見ます。

友人の話では部活中もタイムが伸びず、心ここに在らずの様子らしいです。

なので思い切つて桐乃に直接尋ねました。

「桐乃、最近何か悩んでないですか？ 私でよければ相談にのりますよ？」

「あやせ……ううん、全然悩みなんてないよ！ どうして急に？」

「いえ、モデルもお休みして、授業中も気が抜けている様子だつたので」「アハハ、最近ちよつと疲れてて。モデルの方は家庭の事情でちよつとお休みもらつたんだ！ それだけだから大丈夫だよ」

笑いながら桐乃が応えてくれました。

でも桐乃の笑いにはぎこちなさを感じます。

でも桐乃が大丈夫と言う以上は、私にこの先を問いただすことは出来ませんでした。家庭の事情という事であれば、桐乃が理由を話してくれない以上、私に出来ることはありません。

あきらかに桐乃が何かに悩んでいるのがわかるのに親友の私は力になれないのです。

自分の無力さが嫌になります。

「そうですか、もし私の力になれる事があつたら言つて下さいね」

「うん、ありがと。あやせ」

せめてもと桐乃に伝えると、キヨトンとしたあと嬉しそうに微笑んでくれました。

その夜、話しても仕方ないとわかつていながら、兄さんに頼ってしましました。

桐乃のことを兄さんに相談したのです。

「兄さん、いま大丈夫ですか？」

「あやせか？ ちょっと待つて」

部屋の中からガサゴソと何かを整理する音が聞こえた後、ガチャつとドアが開きました。

兄さんの部屋に入るのは、久しぶりです。

ちゃんと整理整頓されていて、とても良いことだと思います。

前に片付けが酷かつたときに、お願いをしてからはきちんと整えてくれてます。

そういえば、あのときは普通に微笑んでお願いしただけでしたけど、何故かガタガタと震え出して、凄い速さで片付け始めましたつけ？

それからは兄の部屋に訪れたときはいつも綺麗です。

でも、それならさつきは何を片付けていたんでしょうか？

もしかしてエツチな……ふつ、ふふふ

はつ、いえ、違います。いまは兄さんを問い合わせにきたのではなく、兄さんに相談に来

たのだから。

部屋に入り無言の私に対し、兄が不審に思い問い合わせました。

何故か後ずさりしながらでしたが？

「あ、あやせ？」

「あ、すみません兄さん」

「い、いや、構わないけど。どうした？」

「兄さん、ちょっと聞いて頂けますか？」

私は親友の最近の様子を伝え、私が彼女の力になれないことを訴えました。  
不思議なことに、兄さんは家に遊びに来たとき一度だけ会った桐乃のことを覚えていました。

「よく覚えていましたね。兄さん凄いです！」

「い、いや印象的な娘だつたから。あれだろ？ モデル仲間なんだろ？」

その事を褒めると、何か焦つた様子です。

きつと桐乃が可愛いから覚えていたんだと思います。

桐乃はたしかに美少女なんでわかりますが、ちょっとムツとします。

「兄さん、桐乃に手を出さないで下さいよ」

「出さねえーよ！ あんな奴！」

「あんな奴？ 桐乃とは一回会つただけですよね？」

先程からなにやら兄の様子がおかしい？

疑念の目を兄さんに向けます。

「いや、違つ、あ、あんなモデルをやつているような華やかな娘は、地味な俺とはレベルが違うから釣り合わねえってことだ」

「……ですか」

私は一応納得したものの、兄の自己評価の低さに顔を歪めました。

桐乃はたしかに美少女で文武両道、私の憧れる存在です。

それに比べ兄さんの容姿はどうちらかというと普通です。しかし勉強、運動そつなくこなし、なにより兄の優しさを私は良く知っています。

はたから見れば釣り合わないかもしれません、兄をよく知っている人なら決して桐乃に釣り合わないとは思わないのですが。

それに真剣に何かに打ち込んでいるときの兄さんはカツコイ……

違います違います、兄に話に来たのは桐乃と釣り合うとか、兄さんの容姿についてではないんです。

私はブンブンと頭を振り、それまで考えたことを否定します。

恥ずかしい、なんでそんなことを考えてしまったのでしょうか？

そんな不審な行動を見た兄が、心配そうに問い合わせました。

「お、おい、あやせ大丈夫か？」

「ええ、ごめんなさい兄さん。ちょっと取り乱しました」

「ちよつと？」

「ちよつとです。ちよつと！ それで話を戻しますが、私はどうしたらいいでしようか？」

まくし立てた私に兄がビクツとします。

しかしその後兄は優しい表情をして、私の頭を昔のように撫でながら言いました。  
「大丈夫だ。あやせはちゃんとそいつの力になつていてる！ たぶんそいつはいま親友のお前にも話せないような状況なのかも知れない、けどそれは絶対に無事解決する！ だからお前は今まで通りに、そいつのそばにいてやれば大丈夫だ」

兄の言葉にはなんの根拠もありません、はたから聞いたらその場凌ぎの慰めのように思えます。

でも何故だか私にとつてその言葉はとても力強く胸に響き、安心感を与えてくれるものでした。

私の胸を覆っていた不安が嘘のように消えていきました。

そんな不安感を解消してくれた兄さんに返す言葉は一つです。

とつておきの笑顔で私は兄に応えました！

「はい、ありがとう兄さん！！」

## 第9話

ゴクッ、俺の喉を、飲み込んだ唾が胃に向かい流れしていく。

前に突き出した右手の人差し指がプルプルと震え、インターほんとお見合いをしている。

すうーーはああー

「早く押しなさいよ！」

「うわっ!?」

ピンポーン♪

お見合いしていたはずの人差し指とインターほんが接吻していた。

一度の出会いで、なんて不純な奴らだ！

緊張感から意味不明のことを考えてしまう。

「貴方、本当に大丈夫？」

「お、おう、もち、ろんだ」

「京介氏、力チコチ過ぎでござるよ」

俺の背後にいる黒猫と沙織の一人が心配そうに声をかけてくる。

パンツ!! 僕は両頬に手の平を叩きつけた。

痛え、気合い入れ過ぎた。しかしこれで目が覚めた。僕がこんななんじや、こいつらはもつと不安になつちまうよな、しつかりしねえと!

僕が気合いを入れた直後、カチヤツという音と共に玄関の内側からドアが開いた。「待つてた。……お父さんが待つていてるから入つて」

「ああ、お邪魔します」

「お邪魔するわ」

「お邪魔するでござる」

桐乃が出てきて片手でドアを抑え、俺たちを中心に招き入れる。

桐乃の強張った表情が、俺たちの姿を見てホッと緩んだ。

正直ちよつとだけ、俺たちが来る前に高坂家の問題が解決しており、桐乃が明るく出迎えてくれる姿を期待したのだが、現実はやつぱり甘く無いようだ。

玄関を潜り、すぐ左手にある部屋へ桐乃が先導する。

部屋は畳の敷き詰められた和室だった。おそらくは客室なのだろう。部屋の中心には冬場はコタツになるだろう木のテーブルが置かれている。

そしてそこに桐乃の親父さんが、和装姿で両腕を組みムツツリとした顔で鎮座していた。

怖えーなんだよ、この親父!? 絶対職業サラリーマンじゃねえ!? 眼光鋭すぎるから!

「桐乃、帰つてもらいなさい。今日はお前がどうしてもと言うから話し合いの席をもうけたが、その席にそんなふざけた格好で来る輩と話し合うつもりはない」

今回俺たちが親父さんに挑むにあたつて、選んだ格好は普段通りのものにした。

黒猫はゴスロリ姿のコスプレ、沙織はリュックサックこそしてないものの、グルグルメガネは健在だ。俺はジーンズにカットシャツでまあ無難なものだが。

ちゃんとした格好で、好印象を与えるのがきつと正しい選択なんだろう。けど桐乃とはただの友人でなく、オタク友達として付き合っているというのを隠して相対したら駄目だと桐乃とも相談して、俺達はいつもの格好でのぞむことにした。

俺たちの選択は間違っていたのか? いやその常識を破るために来たんだ。最初から挫けてどうする。

俺は気合いを込めて、声を張り上げる。

「待つて下さ……」

「待つてお父さん! この人達はあたしと会うときにはいつもこの格好であつてるの! それをお父さんに知つて貰うために、同じ姿で来てもらつたの!」

俺が張り上げた声を遮るように、桐乃が力のこもった声で父親へ説明する。

桐乃の気合いの入った声に驚いたのか、しかめつ面をした親父さんの眉がピクリと動く。

しかし冷厳な調子で反論してくる。

「むつ、しかしそれは、そいつらが普段からふざけた格好をしているということだろう？」

「そいつらなんて言わないで、この人達はあたしの大事な友達なの姿形だけで判断しないで！」

桐乃が叫んだ。

桐乃がここまで怒ると思わなかつたのだろう、親父さんは態度を改めこちらに向かい頭を下げた。

「ふうー、客人に失礼な態度だつた。申し訳ない。そこに掛けたまえ。桐乃の父の高坂大介だ。いつも桐乃がお世話をなつている」

「お邪魔します。高坂さんの友人で、新垣京介です。高坂さんにはいつもお世話をなつてます」

「五更瑠璃です」

「榎島沙織と申します」

挨拶をして、俺たちは親父さんの対面に座つた。

挨拶だけで一苦労だ。

それにしてもこのオツサン声にも迫力ありすぎる！ 本当にカタギの人間か？

今回黒猫と沙織には厨二言語と云ふは封印してもらつた。オタク部分は格好で十分伝えられるだろうし、姿が奇抜でも中身はきちんとできるというのは、桐乃の説得に役立つと思う。

しかし黒猫と沙織の本名を今頃になつて知ることになるとはな、まさかこんなことで知ることになるとは思わなかつた。

内心でボヤいたとき、向こうから今回の本題に触れて來た。

「今回君たちは桐乃の趣味について話にくると聞いたが、それでいいかね？」

「はい、ただ今回僕たちは高坂さんとお父さんが話されるのを見届け、お二人の橋渡しが出来ればと思いお伺い致しました」

「むつ？」

それは聞いていなかつたのか、親父さんは桐乃の顔に視線を移し確認をとる。

桐乃がコクリと頷いて応えた。

「お父さん、あたしともう一度話ををしてちようだい。そしてあたしの趣味を許してお願ひします」

「「お願いします」」

深々頭を下げて、お願いする桐乃。

俺達三人も頭を下げてお願いする。

親父さんもいきなりこのような形を取られるとは思わなかつたのだろう、言葉に詰まつたような気配が感じられた。

部屋の中が、しんと静まり返る。

数秒たつたろうか？ 静寂を親父さんが破つた。

「頭を上げなさい桐乃、君たちもだ」

「それじやあ」

「勘違いはするな。君たちに頭を下げられても困るというだけだ。それに桐乃、お前には一度言つただろう。趣味は認められない」

返ってきた返答は完全な拒絶だつた。

まあこれは想定内だ。そもそも俺達が頭を下げたくらいで意見を翻す相手なら、最初から苦労はしないのだ。

なので予定通りに桐乃が食い下がる。

「あたしは納得していない。だからなんでダメなのか納得するまでお父さんと話したい！」

「親が禁止すると決めたことだ。納得などしなくていい、ただ従いなさい」

「ただ従えなんて……それこそ納得できない！ なんで禁止するのか理由を教えて！」

桐乃の眼光が一步も引かないとでもいうように強い光を放つ。

根負けしたのか親父さんが答えた。

「ふうー、わかつた。お前がいましている趣味はお前に悪影響しか及ぼさないくだらぬ趣味だ。そんな趣味は親として認められない。趣味はたくさんあるだろう？ 何も将来不利益になる趣味をすることはない」

完全な拒絶だつた。

その言葉にそれまで力強く言葉を発していた桐乃が言葉を失くし、顔色を青ざめさせた。しかし桐乃は青ざめまま硬直してしまっている。

本来はここから皆で話し合つた内容で、桐乃が普通の趣味もオタク趣味も大きな違いは無いという反論していく筈だつた。

しかし桐乃は青ざめまま硬直してしまっている。

たぶん桐乃の親父さんは尊敬できる人なんだと思う。少し話を聞いただけだが、堅物であるが真面目に桐乃のことを考えている父親の印象を受けた。

そんな父親からの完全な拒絶、父親とすれば一つ趣味を減らせ位の気持ちの発言だったのかも知れない。しかし俺達は桐乃はオタク趣味が好きなことを知つてゐる。いや

あのアニメやゲームに対する情熱は、愛していると言つてもいいだろう、それを尊敬する父親から否定されたのだ。

桐乃にとつて親父さんの言葉は、例えれば、愛する恋人と別れると言われる。信仰する宗教に対してその教えはくだらないものだから止めるように言われる。桐乃が感じた衝撃はそういうものではないだろうか？

動けなくなってしまった桐乃に代わり、俺が反論しようとするが、その前に茫然と青ざめ佇む桐乃の姿を見てしまった黒猫がキレた。

「何も知らないくせに、勝手に決めつけないで！ 貴方が言う悪影響は世間一般の愚者達が流布した根拠のないものでしようが！ 貴方は父親でしよう何故娘が選んだ物を信じられないの？ 関係ない他人の価値観といままで一緒に暮らしてきた娘のどちらを貴方は信じるの？ 何故娘をわかつてあげられないの！ いまの桐乃の姿を見て、いま貴方の言葉は千の刃になつて桐乃を斬りつけたのよ！」

「むっ」

黒猫の剣幕に親父さんは口籠る。

親父さんは桐乃の姿を確認し、ばつの悪い表情を浮かべる。

「すまない、悪影響しか及ぼさないといった言葉は訂正しよう。たしかに私はそれらのことは世間一般的にしか知らないのだから。知らないものをくだらないと決めつけて

しまつたようだ。そして桐乃、悪かつた。知らずにお前を傷つけていた」

「お父さん……」

「ただしだ。それでも認められんものは、認められん」

「何でだよ!? 世間一般の価値観より娘が選んだ物を信じるんじゃ無いのかよ!」

思わず俺は立ち上がってしまった。

これで認めないんじゃ、本当に桐乃を信用しないことになつちまうじゃねえか!

「娘はまだ中学二年生だ! 選ぶ物を間違つてしまふこともある。それを正しく選んでやるもの親の勤めであり、それが駄だ」

「アニメやゲームの何処が間違いなんだよ! たくさんの人間が見てるしやつてているだろ? その人達全員間違つてるなら正しいってなんだよ? 勉強だけ出来れば構わないのかよ!」

事前にいろいろと考えていたことは全て頭からすつ飛んでしまつた。

説得は桐乃に任せたつもりだつたが止まれない。

ただどうしても家族なのに桐乃の価値観を拒絶するのが悔しいのだ。

「若造がしつたような口をきくな! 勉強だけなんてことはもちろん言わん。勉強しか出来ない奴が社会で通じないこともあると知っている。趣味の大しさも、もちろんわかつている」

「ならなんで!?」

親父さんは苦悶の表情を浮かべ、仕方ないと言うように喋り始めた。

「アニメやゲームはともかく……R—18というのか？ あれは18歳以上でなくてはならない筈なのだろう？ 先ほど言つたように私はアニメやゲームのことはわからな  
い。しかしこれは法律で18歳以上じやなければならないと決められている物だろう」  
「……えつ？」

俺の脳裏に【妹と恋しよつ♪】を借りたときのこと�이よぎる。

やつぱり18禁持つていやがつたこの女！？

なんとかなりそうつていう場面で、最悪のカード持つていやがつた！

俺ら三人は思わず桐乃に視線を送る。視線の先で桐乃が必死に首を捻つて目を合わ  
さないようにしている。

さつきまでの緊張感が一気に吹き飛んだ。

「娘を信じてやりたいが、そんな物を持っている娘を盲目的に信じる訳にはいかん」

「……それはそうですよね」

思わず親父さんに同意してしまった。

とたんに今までそっぽ向いていた桐乃が俺に囁み付いた。

「京介あ、あんた、あたしを裏切るの!?」

「う、裏切る訳ないだろ!? ただし自分の娘がエロゲーやつてたらって思つたら、つい  
つい頷いちゃつたんだよ」

「それが裏切りなのよ! ギャルゲーがいいなら、エロゲーも同じじやない!」

「そんな訳あるかあ!?!」

「そもそも桐乃お前なんで、皆で相談中にエロゲーの相談しねーんだよ! 前提条件変  
わつちまうじやねえか!」

「そ、それはなんてーの、乙女の恥じらいみたいな?」

「エロゲーやる乙女が何処にいる!?

「ここに居るわよ!!」

シリアルな雰囲気は完全に吹っ飛んでしまつた。

親父さんの前なのに、いつものように桐乃と罵り合つてしまつた。

しかし幸いなことに親父さんは、目をパチクリさせてフリーズしている。

しかしそれにしても桐乃の猛攻が酷い、きつとここ数日溜め込んだものが一気に爆発  
したのだろう。

「京介いまいくつ?」

「16だよ、それがどうした?」

「エツチな本とか持つてる?」

「ぶつ、も、持つてねえよ」

この女なんてこと聞きやがる!?

ふざけているのか? と思ったが、桐乃の表情は眞面目だった。

「嘘つかないで、大事な事なの!」

「……持つてるよ」

はあーー中学生にエロ本持つてていると告白することになるとは、俺の人生わからないものだ。

ようやく硬直が解除したのか親父さんが桐乃に問いかける。

「桐乃お前、さつきからいつたいなにを……」

「お父さん、これから私が聞くことに嘘をつかないでお願い!」

「……わかつた約束しよう」

桐乃が親父さんの言葉を遮つて、約束を取り付ける。

桐乃の真剣な表情に親父さんも頷く。

こいついったい何を聞く気だ?

「お父さん、いま京介はエツチな本を持っているって言つた。京介がお父さんの息子

だつたら、それを取り上げるの?」

「こいつが息子?! 今までのやりとり!! 桐乃まさかお前?! 許さんぞ!!」

突然起こつた予想もしない事態に混乱していたのだろう、とんでもない勘違いを親父さんはした。

俺の胸ぐらを掴みあげる親父。

「また仮定の話だ！ 取り乱すなおっさん!? い、息が出来ない。」

黒猫と沙織が慌てて、おっさんから俺を引き剥がす。

「ふう、死ぬかと思った！ こんなアホな勘違いで死んだら死んでも死に切れねえ！ こんな奴はおっさんで充分だ。」

黒猫と沙織がおっさんに説明している。口調がいつものあいつらに戻っていた。

「親父殿、仮定の話でござる」

「そうよ、あくまでの話よ。勘違いしないで」

「む、そうか？」

「そ、そ、うよお父さんどうするの？ 工口本取り上げるの？ 嘘はつかないでね！」

「む、むむうー、……いや、きつと見て見ぬ振りをするだろう」

嘘をつかないと約束したおっさんは数秒ほど悩み正直に答えた。

「ああ、たぶん俺でも同じように答えただろう。」

誰だつて思春期はあるのだ、おっさんにだつて中学や高校の頃はあつたのだ。

それを考えれば息子に対して、18になるまで一切の工口を禁止し、取り上げて手に

入らないよう監視することを選ぶ親は少ないのでないだろうか。

桐乃がおつさんをさらに問い合わせる。

「お父さん、息子なら良くてなんで娘は駄目なの？」

「お前それは……18歳以上じゃないと悪影響が」

「息子ならその18歳も免除されるの？」

「いや、しかし女の子がそんな……」

おつさんの言葉がどんどん小さくなる。

それに反比例するかのように桐乃の主張は力を増していった。

「女の子は、エッチな物を持つていたらいけないの？ エッチな事に興味を持つたらダメなの？」 お父さん

「……いや、……いや、……それは違う」

「お父さんあたしは今まで自分で言うのもなんだけど、良い子だつたと思う。勉強もしつかりやつているし、部活も熱心に参加してる。モデルのバイトだつてちゃんとしたりで、真面目に働いている。でもエロゲーをするだけで、お父さんから否定されるとこ

人間になっちゃうの？」

桐乃の声に不安感が混じる。

しかしその不安感はすぐに解消された。

「いや、お前は自慢の娘だ。私はお前の父親で良かつたと思つてゐる。むうう……だが桐乃お前はそんなにもあれが必要なのかな？」

おつさんが疲れたように桐乃に問いかける。

それに桐乃は満面の笑みで応えた。

「お父さんあたしはエッチなことが目的で、エロゲーをやるわけじやないの。その中の女の子達の可愛さとストーリーが好きなの、いえ愛してゐるの！ エロゲーが無いとあたしがあたしじやなくなつちやうの。エロゲーが無いと生きていけないので。お願ひお父さん、許して下さい」

「……………そ、うか」

おつさんは頭を下げる桐乃の姿を見つめ、長い沈黙の後、ポツリとこぼした。

おつさんは最初にあつたときから10は老けて見えた。

おつさんにしてみれば、まさか娘にエロゲーが無いと生きていけないと聞かされることになるとは夢にも思わなかつただろう。

おつさんは気力を振り絞り、俺達に向きなおり頭を下げた。

「桐乃をよろしく頼む！ いざという時、間違つた道に進まないよう止めて欲しい」「わかりました。任せて下さい」

親父さんの真剣な声に応えるべく、俺たち三人も力を込めて唱和した。

心中で桐乃を止めるのは凄え大変だろうなと思つてしまつたのはナイショだ。

無事？ 説得も成功？ して桐乃の家から出て、今は駅に向かいながら喋つてゐる。桐乃も助けに来てくれたお礼にということで、見送りについて来た。

「まさかあそこで京介が裏切るとか、酷くない!?」

「うるせーあそこでエロゲーが出てくるとは思わねーよ普通」

「ええ、本当に！ 貴女の業の深さを見誤つていたわ！」

「本当にもう駄目かと思つたでござるよ、拙者」

まつたく本当に大した奴だよ！ こいつは結局自分の力で全てひっくり返しちまうんだから！

結局あまり力になれなかつた俺は、力不足を桐乃に詫びる。

「すまねえーな、結局あまり力になれなかつたな」

「そんなことない、……凄く嬉しかつた」

桐乃がボソッと何かを言つた。

声が小さく聞き取れない。

「なんだ？ もう一回言つてくれ」

「な、なんでもない。あつウヒヒ、そんなことより京介つて、どんなエロ本持つてんの？」

「なあつ、お、お前!」

「それは拙者も気になるでござるなあ」

「べ、別にどうでもいいけど、参考までに聞いてあげるわ」

「い、言えるかああああ!?」

「あ、こら逃げんな！」

「待つでござるよ」

「待ちなさい」

駅までダッシュする事になった。

後ろから迫る連中に捕まると男の尊厳が踏みにじられるだろう。

なんて恐ろしい連中だ！

早く帰つてあやせの顔見て癒されたい！

前に妹に萌えるなんてあり得ないと考えた。その考えは今も変わっていない。

ただし最近の俺はこう思う。

妹つて奴は癒しだねと!!

# 第10話

最近妹の様子が少しおかしい気がする。まあ俺の気にしてすぎな可能性も高いのだが。ようやくいろいろな事件も片付き俺の平穀無事な生活が戻ってきたので、近頃はリビングのソファーアに寝つころがりながらバラエティー番組なんかを見ている。そんなとき一緒にいるあやせの視線を感じるのだ。

目があうと『どうしたんですか兄さん?』と首を傾げながら問いかけられる。『いや、お前いま俺のこと見てなかつた?』と聞こうかとも考えたが、なにかそれは自意識過剰な台詞のような気がして、ついつい『いや、別に何でもない。それよか……』と他愛ない雑談に移行してしまう。

まあ妹との談笑は、最近いろいろあつた俺の気疲れ回復におおいに役立つたから、気にはなるがまあこれは問題ない。

問題はあやせが俺の部屋に来る頻度が増えたことだ。

あいつらから借りた物を消化していると、時々『兄さん、いま大丈夫ですか?』と訪ねて来るようになり、これには焦る。いままでも俺の部屋に来ることはあつたが回数が増えた気がする。

ちなみにいまあいつらから借りているのはメルル、マスケラの続きと、沙織も参戦してきてガソダムのおすすめを借りている。

最悪これなら妹に見つかってもなんとかなりそうな気がするが、まあオタク趣味が嫌いなあやせに見つからないならそれが一番である。……メルルはダメだろうか？ 最近どれが大丈夫でどれがダメなのか、判断に自信が持てなくなつてきている。

そういうわけで妹が訪ねてきたときは、必死で物を隠している。部屋に入つてきた妹がなにかを探している気がするが、これこそ俺の被害妄想だろう。隠しているものがあるから、あやせがキヨロキヨロしているのをそう感じてしまつてているのだろう。

「兄さん、いま大丈夫ですか？」

噂をすれば影、あれ？ なんか違うな？ 瓢箪から駒だつけ？ 考えていたことが実際に起ころのつてなんだつけな？

部屋であやせのことを考えていたら、その本人が訪ねて來た。

今はアニメを見ていたわけじゃないので、すぐに応える。

「ああ、大丈夫！ そのまま入つていいぞ！」

「お邪魔しますね。兄さん」

ドアを開けてあやせが入つてくる。風呂上がりなのか？ 青色のパジャマ姿である。

淡い青色のパジャマはこいつによく似合っている。思わずぱーっと見惚れちまう。

風呂上がりのパジャマ姿で、自分の理想の容姿の少女が自分の部屋にいるんだぜ！

……まあ理想の容姿の事は認めるわけにはいかないんだけどな！ とにかくんでこのシユチユエーシヨンが実の妹なんだ？ もしあやせが妹じやなければ、この場面俺こいつに結婚申し込んでたんじやないか？ シュチユエーシヨン→シチュエーシヨン

部屋に入つてからずつと無言で見つめられることを不思議に思つたのかあやせが問いかける。

「兄さん？」

「あっ、すまん、見惚れてた。けつこ……」

思つたことが言葉としてこぼれ落ちた。

危ねえ！ ギリギリセーフ？

うーん、近頃自分はこういうことが良くある。直さないといつかとんでもない目にあつてしまいそうだ。

「な、あ、み、見惚れてって、兄さんからかわないで下さい。冗談ばかりですと怒りますよ！」

顔を赤く染めて、頬を膨らませて抗議するあやせ。

幸いなことに、前の言葉の衝撃で『けつこ……』の方に気がつかなかつたようだ。

怒らせると心底おつかないが、拗ねるくらいだととても可愛い、この姿が見たくて俺

はいつも軽口を叩いてしまうのかもな？　まあ大概失敗して怒らせてしまうんだが……

俺が言つた言葉は冗談じやなかつたが、そう思わせていた方が都合良さうなので、笑つてごまかす。

「ははっ、悪い悪い！」

「まつたくもう！」

「それで、どうしたんだ？」

「えつと、勉強を教えて貰いたくて」

「へ？　珍しいなお前が」

珍しいというより初めてでは無いだろうか？

これは決して俺が馬鹿だから相談されないという事ではない。俺の成績はそんなに悪くないのである、学年で中の上くらいはキープしている。まあそれは優秀な幼馴染の家庭教師の力が大きいが……

ただし俺の成績云々というよりは、妹の成績が素晴らしいだけの話なのだ。あやせは学年で20位以内の常連の優等生であり、それに加えて基本自分の事は自分でやるスタイルなので、小さい頃から俺があやせに勉強を教えた記憶はほとんどない。

そんなあやせが自分で解けない問題だと!?　中二の問題とはいえ、俺に解けるだろう

か？ 兄の威厳が試される時か！？

プレッシャーに押されてる俺に気が付くこともなく、数学の問題集の1ページを指差しながらあやせが尋ねる。

「ちよつと、この問題が解けなくて。兄さん、教えてくれますか？」  
「ああ、俺に任せろ！」

内心の不安を押し隠し、精一杯虚勢を張りながら、あやせから問題集を受け取り机に向かう。

しかしこれで問題解けなかつたら、かつこ悪いだろうな。問題を読みながら、余計なことを考えてしまつた。

いかん集中集中えつとxがこれで、yがこうなつて？ 難しつ？ 最近の中学生これ解いてるの？ マジでこれ解けるかな？

必死で頭を働かせていると、背後からあやせが覗きこんで来た。

「兄さん、どうですか？」

「すまん、もうちよい待つて」

「私ももう一度考えてみますね」

そう言うと、あやせが俺の両肩を押さえ肩口から問題を覗き込む。  
~~~~~!?

顔が近いですよあやせさん!? しかも風呂上がりゆえのシャンプーの良い香りがあーー!? 極め付けに、何やら背中に柔らかい感触が……ダメだダメだ!? これ以上は考えたらイカーーン!!

「わあっ！ 兄さん、凄いです！」

何分たつたのだろうか？ 耳元からあやせの歎声が聞こえる。

視線を下に降ろしてみると、計算式を書き込まれ答えの記入された問題があつた。どうやら俺はやり遂げたようだ。途中問題とは別の恐ろしい？ いや素晴らしい？ なにかと闘っていた為、正直どのように問題を解いたのか記憶に残っていない。

幸いなことにあやせは俺が解いた問題を見て、解き方の道筋を理解したようで、俺に解き方を聞いてくることはなかつた。

優秀な妹で助かつた！ 問題を解いたにも関わらず、解き方を説明出来ないのではあまりに情けない。

「へえー、こうなつて解けるのか！ 兄さん、ありがとう！」

「ああ、しかしその問題集難しいな。中学の授業はそんなに大変なのか？」

「ええと、授業はそれでも無いですよ。これは桐乃からオススメされたんですよ」

「桐乃からオススメ？」

「ええ！ 私も彼女も塾に行つていないので、成績上げるのにつて」

「あいつも成績良いのか？」

「凄いんですよ桐乃！ 私よりも成績良くて、部活動でもエースなんです！ 本当に尊敬します！」

そいつは凄え！ あやせと同じモデルの仕事しながら、妹以上の成績を取り、部活動のエース、しかもあんだけオタク趣味に時間を使いながらである。

桐乃あの野郎、どんなチート使つてやがる？ まつたく天は二物を与えずつていうのが世界のことわりじやないのかよ神様！

世の中の不条理に文句を言つていると、突然あやせがお礼を言つてきた。  
何かしたつけ俺？

「あ、そうでした。ありがとうございました兄さん」

「へつ？ 何がだ？ いまの問題ならさつき感謝してもらつたぞ」

「いえ違いますよ。この間相談に乗つて貰つた桐乃の件です。兄さんの言つた通り無事問題が解決したみたいで、なんか前よりずっと元気なんです最近の桐乃」

「なんだそのことか？ 別に問題解決したのはそいつの力だから俺に感謝しなくてもいいぞ」

「もう、素直に感謝させて下さいよ。あの時は本当に不安だつたんですから！ 兄さんの言葉は凄く力になつたんですよ！」

「あらたまつてお礼言わると照れるつつうか？ 気恥ずかしいっていうか……とにかく無事解決して良かつたな」

「ふふつ、ええ」

あやせの顔を見ないようにぼりぼりと頬を搔く。そんな俺の姿を見てあやせが微笑んだ。

やつぱり気恥ずかしいので、無理矢理でもいいから話題転換に乗り出す。

「あーーと、勉強つていえば期末近いよな」

「ふふつ、そうですよね兄さん。今度は桐乃に負けないよう頑張りますよ」

なにやら見透かされているような気がしたが、妹は話題転換に乗つてくれた。

「ああ、負けんなよ！ 僕はどうすつかな？ また麻奈実に頼つかな？」

「お姉さんにですか？」

困った時の幼馴染頼りだ！ だいたいテスト前は毎回麻奈実に勉強を教えて貰つている。あいつは教えるのが上手いのだ。

あいつはほんわかした性格もあるし、将来教師なんか向いてるのかもな？

そうだ！ 桐乃に勝とうと頑張るつていうなら、あやせも誘つてみるか？ こいつら

昔仲良かつたし、あいつも久々にあやせに会つてみたいだろ！

「あやせ、お前も来るか？」

「来るつて？ 何処にです？」

「麻奈実の家で勉強会やろうかと思つて、あいつは教えるのが上手いし、あやせも久々にあいつに会つて見たいかなつて？」

「……麻奈実お姉さんですか」

「無理なら別にいいぞ？ そもそも麻奈実に確認すらしてない段階だし！ まああいつは断らないと思うけどな」

「そうですね。是非参加させて下さい。麻奈実お姉さんに久々に会いたいですから」

「おう、了解！ じゃあ麻奈実に予定聞いてみる」

善は急げ、早速携帯を取り出し麻奈実に掛ける。時間も9時前だし問題無し、あいつはあまり遅いとすぐ寝ちまうからな！

着信音がコール中、何かあやせが呟いている。

「もしかしたらついに麻奈実お姉さんと付き合つてしまつたんでしょうか？ ちょうどいい機会です。確かめるの怖いですけど……」

「どした？ なんか麻奈実に言いたいことでもあるか？」

「い、いえ、な、なんでも無いですよ！」

「どうか？ お、繫がつた！ お、麻奈実突然すまん！ 起きてたか？ 実は……」

「どうやらあやせのは独り言だつたようだ。

近頃あやせの不審な行動は、たぶん俺の帰りが遅かつたりとかで不真面目に見えたせいだろう？

そんな妹に対して面白を保つためにも点数取らないとな！  
さて幼馴染の力を借りて、勉強頑張りますか！

# 第11話

「おっ、あんちゃん！ 久しぶりじゃん！」

「おう、ロックこれからじやまするぞ！」

田村家の近くに来たとき、五厘刈りの頭の少年が話しかけてきた。

麻奈実の弟のいわお、通称ロックである。

お調子者な奴で、近所の床屋でスキンヘッドにしてくれと頼むも、床屋の機転に騙され五厘刈りにされてしまい、しかも騙されたことに気がつかず『このカツチヨいい髪型にいままでの名前は相応しくないぜ！ これからはロックつて呼んでくれ！』と宣言してしまった。そのため坊主頭とロックというあだ名、それに黒歴史を同時にゲットした愛すべきおバカである。

こいつがあやせ、桐乃と同じ中学二年というのだから信じられない。あやせ、桐乃が大人っぽいのか？ ロックが子供っぽいのか？ いくら女の子の方が成長が早いといつてもその差は極端だろ！ と思ってしまう。

「あんちゃんは家に来るのか？」

「ああ、期末近いから麻奈実と勉強会をやりにな！ お前はこれから出かけるのか？」

「うげつ、勉強かよ！ せつかくの休みに勉強なんかして、あんちやん青春の無駄遣いだぜ！ 僕はこれから遊びまくるぜ！」

「……ロツク、中間悪くて母ちゃんに凄え怒られたって言つてなかつたかお前？」

「い、嫌だなあんちやん。男は過去を振り返らない生き物だぜ！」

ダメだこいつ！ かつこいい台詞も目を泳がしながらじやあ、ひたすらかつこ悪い。

これじやあ期末も田村母のカミナリが落ちるのは、ほぼ確定的だろう。

俺らのバカ話に一区切りついたタイミングを見計らつて、俺の背後にいたあやせが挨拶をした。

「こんにちは、田村君お久しぶりです」

「あ、新垣さん！？ こ、こ、こ、こ、こんにちは！」

「テンパリ過ぎだろ！！ お前はニワトリか!?」

こいつあやせがいることに全然気付いてなかつたな？ 相変わらず注意力が足りない奴だ。

カチコチに固まつているロツク、余所行きの笑顔を貼り付けている妹。

あれ？ こいつらつて友人じやなかつたつけ？ 一応幼馴染になるんだよな？ 年一緒だし。

昔を思い出してみる。俺、麻奈実、あやせでままでとなんかやつたな。俺、麻奈実、

ロックでぷよぷよとか対戦ゲームやつていたな。四人で何か？……トランプとか？

あやせとロックが同時にいる姿がほとんど浮かばない。

なるほど知り合いではあるが、ほとんど話したことなかつたんだなこいつら。

「あ、新垣さんも一緒に勉強させるんですか？」

「え、ええ、麻奈実お姉さんに教わりにきました」

「……あんちゃん!!」

ロックが敬語使うのは違和感が……というか普通に間違つてんじゃねえーか！

ロックが何かキラキラした目で俺を見つめてきた。

ふむ？ こいつも思春期ということか。美少女と一緒にいる機会を逃したくないと。ロックの言いたいことを察した俺は応えてやる。

「おう、もう行つていいぞお前！」

「いや、ちがつ、あんちゃん……」

「お前が勉強なんて小さなことにこだわらない。刹那に生きる男つてことは、さつきの台詞で十分伝わった」

「い、いや、お、俺も……」

「男に二言はないもんな。ロックの生き様を俺は尊敬するぜ！」

「…………あ、あんちゃんの馬鹿野郎おおおおーーーーー！」

泣きながらロックが走り去っていく。叫び声あげながら走ると近所迷惑だぞロック。  
たとえお前といえど、妹に近づく男の影は許さん！……これは兄として当然の行動  
だよな？ シスコンとかそういうあれとは違うよね？

そんな俺らの姿を見て、おずおずとあやせが問いかけた。

「よ、良かつたんですか兄さん？」

「いい、いい、ロックだし！ 明日には忘れてけろっとしてるよ！」

「はあー、田村君がかわいそうですよ。でも兄さんと田村君の関係が羨ましいです。な  
んでも言い合える仲というか？」

「あいつとの関係？ 気持ち悪いこと言うなよ！ 身震いしちまう！」

「うふふ、本当にそう思つてます？」

両腕を抑えて震えてみせる俺に対し、あやせは口元に手を添え微笑んだ。  
……やれやれ、妹には敵いそうもない。

さつさと麻奈実の家に逃げ込むことにする。

麻奈実の家は和菓子屋なので、裏口に回りこみ玄関横のインターほんを押した。

「はーい！ どちら様ですか～？」

「おーい、俺だ！ 約束通り来たぞ！」

「あつ、京ちゃん！ いま開けるね。うんしょつと！」

氣の抜ける掛け声と共にがらがらと扉が横にスライドして、麻奈実が顔を覗かせた。につこりと幸せそうに微笑み俺たちを出迎える。こいつが犬だつたら、きつといま千切れんばかりに尻尾振っているんだろうなと思わせる幸せな様子だ。

「いらっしゃい京ちゃん！ あつ、あやせちゃん、凄い久しぶり！」

「お久しぶりです、お姉さん。今日はよろしくお願ひします」

「お邪魔しますと、いつもサンキューな！ 今回はあやせも一緒だし！」

「ううん、全然いいよ！ 京ちゃんと勉強は楽しいし、あやせちゃんに久しぶりに会えて嬉しいよ！ さつ上がって」

にこにこと笑顔でこちらを見つめる麻奈実。

あやせは久々に会う為か？ ちょっと緊張した様子だ。

お茶の間を素通りして、二階に案内する麻奈実。

「あれ？ 今日はここじゃないのか？」

「うん、あやせちゃん久しぶりだから、わたしの部屋の方がいいかなって」

いつもはお茶の間で勉強しているのだ。たしかにお茶の間だと、いつも麻奈実の祖父母が一緒になので、久しぶりのあやせは緊張しちまうかもしれない。よく気がつく奴である。

「そいや、爺ちゃんと婆ちゃんは？」

「うん、いま何かの会合に行つてて、居ないんだあ」

「そつか、久々なんで挨拶したかつたんだけどな」

「お爺ちゃんもお婆ちゃんも喜ぶよー！ 帰り際に挨拶してつて！」

「うん、そうだな！ そうさせてもらう」

「それじやあどうぞ」

喋りながら麻奈実の部屋に向かい、麻奈実が部屋のドアを開いた。 麻奈実の部屋に入るのは久しぶりだ。和室ながら女の子らしくオシャレに整えられている。

「それじやあちよつと待つててね。机持つてくる」

「あつ、俺が持つてくるよ」

「大丈夫！ 軽いやつだから！ 京ちゃんはあやせちゃんと待つていて」

「そつかあ？ わかつた」

麻奈実を待つ間、部屋をキヨロキヨロ見渡す。

あれ？ ベッドだつたけ？ 昔は布団だつたような気がしたけど？ ベッドは花柄の布団と枕元に耳に赤いリボンをつけた二頭身の猫のぬいぐるみが座っている。 テレビやパソコンは置かれていない。それがなんだか麻奈実らしい。 窓辺ではピンクのカーテンが風でユラユラ揺れている。

あれ？ こんなに女の子らしい部屋だつたけ？ 久しぶりに入る幼馴染の部屋にちよつとドキドキしてしまう。

辺りを見渡していた俺に対して、妹が注意をした。

「兄さん、女の子の部屋をジロジロ見るのは失礼ですよ！」

「うつ、すまん。そうだよな。つい久しぶりに入つたから色々見ちまつた」

「えつ？ 久しぶりなんですか？ お姉さんのところに結構遊びに行つてますよね？」

「ああ、だいたいいつも一階のお茶の間にいるからな。あいつの部屋に入つたのつていつ振りだつたけな？ 中学は入つたつけ？ 小学校の頃はよく入つてたんだけどな」

「……そうなんですか。久しぶり……」

なにやらあやせがホツとしている。

どうしたんだこいつ？

聞いてみようとしたとき、麻奈実が丸型の机を持つて戻ってきた。

「お待たせ！ それじゃあ始めよっか」

「ありがとな！ 今回もよろしくお願ひします」

「お姉さん、ありがとうございます！ 今日はよろしくお願ひします」

「うんうん。お任せあれ、なんちゃつて」

「ははつ頼むよ！」

「クスッ、お願ひします」

俺たちは笑いながら勉強を開始した。

一、二時間たつたろうか？ わからぬところを麻奈実に聞きながら勉強を進めていつた。

しかしあやせも麻奈実も集中力が凄まじい。勉強会とはいえ休憩がてら他愛無い話をしたりする。ただこいつらはそれ以外の時間は問題に対してもく集中して取り組んでいる。俺が見ていることにも気がついていないようだ。なんというか、オンとオフの使い方がうまい？ そんな感じがする。成績が良い奴は何処かしら似てくるもんなんだなど二人を見て思つた。

一つの問題を解き終わつたのか、俺が手を止めて見ていることに麻奈実が気がついた。

「どうしたの京ちゃん？ またわからないところあつた？」

「いや、違う。すまん、邪魔しちまつたか？ 二人の集中力が凄いんで、感心して見つめちまつた」

「えつ、あ、どうしたんですか？ 何かありました」

俺たちが話し始めたことであやせが気付き顔を上げた。

「クスッ、たしかにあやせちゃん凄いね」

「いや、お前も十分凄いよ」

「そんなに褒めないでよく、照れちゃうよ」

「むつ、さつきから何の話をしているんですか？」

「いや、お前ら二人が凄いってはなし」

「あはは、ちようどいいから休憩にしようか！ わたしお菓子と飲み物取つてくるから

待つてね！」

麻奈実が立ち上がり部屋を出て行く。

うーーー、俺は手を組み腕を天に向けて伸ばす、固まっていた関節が伸びてパキパキ  
と音が鳴つた。

それを見たあやせがつつこんできた。

「兄さん、父さんみたいですよ」

「仕方ないだろ気持ちいいんだから。お前もやつてみろよ。楽になるぞ」

「そうですか？ ジヤア

んくん、あやせは俺と違い前に手を突き出し伸びをする。

「うーん、たしかにいいですね」

「だろ？」

「でも、兄さんは声がおじさんくさかつたですよ」

「げつ、マジか？ 注意しねーとな」

「ええ、注意して下さい。ふふつ」

あやせがクスクス笑っている。

氣をつけなければ、高二でおつさん扱いは避けたい事態である。

「それにしても麻奈実お姉さん、本当に教えるの上手ですね」

「ああ、そなんだよ！ 学校の授業よりわかりやすいかもな」

「先生がいいんですから、兄さんは頑張らないとダメですよ」

「うつ、わかっているよ」

「お待たせ！」

麻奈実がお盆にお茶と和菓子を持って戻ってきた。和菓子はうさぎを形取った可愛らしいデザインで、外見は餅を使っているのだろう白うさぎがよく表現されている。おそらく中身はこしあんだと思う。

「お前これ？ お店の商品じゃないのか？」

「えつへん、せつかくあやせちゃんが来てくれたんで、今日は特別に可愛い物を選んで見ました」

「ありがとうございます！ いいんですか？ これ本当に可愛い！」

「えへへ～うちの人気商品なんだよ～」

あやせの目が輝いている。なんだかんだこいつ可愛い物すきだよな。  
「じゃあ、いただきます」

「どうぞ、召し上がり」

「あつ」

早速一個取つて口に含む。餅の柔らかな弾力とあんの甘さがマッチして口の中に広がる。見かけだけじゃなくて美味いなこれさすが人気商品！

ふと、視線を感じて横を見るとあやせが悲しそうな顔をしている。

どうしたんだこいつ？　あやせの視線を追つて見ると、俺に食べられて体が半分になつたウサギが……

こいつらは食べられる為に生まれてきたんだぞ妹よ！　妹の視線を無視することにして、半分ウサギを口に放り込む、ああ美味い！

「あああ」

妹の嘆きなど聞こえない、聞こえないつたら聞こえない！

それに俺より残酷な奴がいるぞあやせ。

「はい、あやせちゃんもどうぞ」

「あつ、はい、ありがとうございます……」

思わず受け取り手の上のウサギをじっと見つめるあやせ。

ウサギを血祭りに上げた麻奈実が、口をもぐもぐさせてあやせに迫る。

「どうしたのあやせちゃん？ もしかしてあんこダメだつた？」

「いいえ、あんこ大丈夫です。大好きです」

悲しげな表情で、覚悟を決めたあやせがパクッとウサギに食らいつく。  
とたんパーンと表情を明るくさせた。

「麻奈実お姉さん、これ凄く美味しいです！」

「そう、良かつた！」

妹は早くも二個目に手を伸ばしている。

凄まじい変わり身の早さだ。心なしかお菓子のウサギの表情が悲しげに見える。

お菓子を食べお茶を飲み、ゆつたりしていると麻奈実が俺に質問してきた。

「そういえば京ちゃん、問題は解決した？」

「問題？ なんの？」

「うん、少し前京ちゃん学校が終わつたらすぐに帰つてたし、授業中とかも難しい顔して  
たから何か問題抱えてたのかなって？」

麻奈実にはバレていたようだ。

そしてなにやらあやせも真剣な眼差しで、こちらを見つめてくる。

「……」、二ヶ月うちに遊びに来ないし、……京ちゃんもしかして彼女さん出来た?」「(お姉さんナイスです!!)」

「はあ!?

いきなり何を言いだすんだ? この幼馴染は!?

そして何故小さくガツツポーズしている妹よ?

「うんとねえ、京ちゃんがここ最近忙しそうにしていたのは彼女さんに会っていたからで、難しい顔していたのは告白とかの問題をいろいろ考えていたのかなあーって思つたんだ」

「どうなんですか兄さん!!」

「違ええええ――――――――!?

なんて推理をしやがる麻奈実!?

そしてあやせ、お前は少し落ち着け! そんな勢いで身を乗り出してくるな!!

「じゃあ最近の不自然な行動はなんですか兄さん?」

「少し落ち着けお前ら! 説明すっから! 最近忙しくしてたのは、凄つげえ濃い友人達が出来たんだよ。あいつら人の都合御構い無しにぐいぐいくるからいろいろと時間とられちまつたんだ! 最近ようやくそれが落ち着いてきたんだよ」

「難しい顔して悩んでいたのは?」

「ああそれも、そいつら関係で！　そいつらの一人が厄介な問題起こしてよ！　その問題解決の手伝いをする事になつて、たぶん難しい顔してたのはその解決方法考えてたときじやないか？」

「その人の問題は解決したの京ちゃん？」

「ああ無事……といつていいのか？　まあとにかく解決はしたよ！」

桐乃の親父さんの最後の顔を思い出すと無事解決とは言えないよな。  
それにしてもまさか俺に彼女が出来た疑惑があつたとは……どうせならその疑惑の方が俺に起こつてくれよ！

現実は三人もオタク友達が出来ました。いろいろな問題付きで！　だもんな。

まああいつらとの付き合いはメチャクチャでマジ疲れるけど、実際のとこ悪くねーんだよな。ただ本当に大変なんだけどな……

「あいつらに付き合うのマジ疲れるんだぜ！」

「でも、京ちゃん楽しそうだよ？」

「ええ、兄さん生き生きしてますね最近！」

「そうかあ？」

「でもそつかあ、新しい友達だったんだ！　彼女さんじやあなかつたんだね！」

「そうですね。本当に良かつたです！」

こいつら本当に嬉しそうだ。

……これはあれか？俺が恋人を作るなんて抜け駆けは許せんってやつなのか？  
ドラマとかで、OLが結婚報告したときに独身連中が裏切り者つて妬むあれなのか？  
それならおつかない話だ。

まあとにかく彼女が出来る目処が無いから、これ以上考えても仕方ない。

来る可能性がわからない彼女よりも、確実に来る期末に向けて頭を使うか！  
「そろそろ勉強再開するか？」

「そうだね！」

「ええ、問題も解決しましたし！しつかり頑張らないと」

なんか問題抱えてたのかあやせ？

ちよつと気になるが、勉強再開するつて言つたそばから話始めるのはな？ といふか  
こいつらもう集中してやがる。本当に切り替えが早いな！

ふうー、俺も頑張りますか！

## 第12話

「暑い」

寝起きで俺が口にした第一声だ。枕もとに置いてある目覚ましを確認する。午前10時、気温28度、おもわず温度計付きデジタル目覚ましを放り投げたくなる。外では蝉がやかましく騒いでいる。この暑さと音じやあ寝不足でも目がさめちまうか。  
なんで寝不足かというとあいつらに借りたゲームのせいである。

期末も無事に終わり、学生最大の長期休暇夏休みに入った。ちなみに期末は俺が全体的に平均よりちょい上くらいの点数で前回とほとんど変わらなかつた。それに対してもやせは勉強会の成果が出たのか？　桐乃に勝てたと喜んでいた。

桐乃の事件以降大きな事件は無く、あいつらがおれにオタク趣味を勧めてくるのは変わらず継続中である。ちなみに桐乃が勧めてくる18禁ソフトはなんとか阻止している。妹ゲーの18禁ソフトを回避する、それが俺に残された最後の防壁である。正直いつも突破されてしまうか、いつもギリギリの攻防である。勧められるのがメガネツ娘キヤラだつたら危なかつたかも知れない。そういう意味で前にあつた工口本、もとい男の尊厳が掛かつたレースを逃げ切れたのは僥倖だつた！

おつと脱線した話を戻すと、あいつらに今回勧められたのが【真妹大戦シスカリップス】通称シスカリというものだ。妹キャラを育成して3Dバトルしていくゲームで、対戦ゲームといふこともあり、あいつらから借りたものの中で今まで一番抵抗なくやっている。まあ相手を倒したり自分のキャラが負けると服が破れて半裸になるのだが……ちなみにこれもエロゲー版があり、俺がやっているプレスデ版との一番の違いは半裸のところが全裸になることらしい。

桐乃がこれを貸すときの台詞がこれだつた。

「エロ無しのコンシューマの方がいいなんて、京介あんたほんとに男なの？」  
あの出来事のあと、桐乃の俺に対する遠慮は皆無である。

この野郎、この間エロで男女差別するなって言つたのテメエじやねえか！  
カチンときた俺は言い返した。

「うつせえ、エロゲーを貸そうとするお前はほんとに女かよ？」  
「はっ？ 何処に目つけてんのよ！ 超絶な美少女でしょ！」

「はあく、自分の事を美少女呼ぱわりするなんて、これだからスイーツは」「きりりん氏自信満々でござるな」

胸を張る桐乃。やれやれと呆れる黒猫。ほうつと感心する沙織。  
黒猫じやないが、自分で美少女言うかね？ まあ美少女ということを否定できんが。

悔しいので、反撃してやることにする。胸を張る桐乃の胸元を見つめながら俺は応えた。

「微小、女ね。なるほど」

「？」

「~~~~~死ねええええええええ」

桐乃は最初意味がわからないというようにキヨトンとする。  
しかし俺の視線が何処にあるのかを見て理解したとき、怒りの表情を浮かべ、手に持ったシスカリを俺に向けて投げつけた。

俺の反撃は諸刃の剣だつたようだ。

ズヴァン!? それが見事俺の額に命中した。

声にならない叫びをあげ、額を抑えながら俺は涙目で叫ぶ。

「~~~~~な、なにしやがる!!」

「うっさい！ 死ね！ 死ね！ 変態！ シスコン！ ロリコン！ 巨乳マニア！ 脚フェチ！ メガネフェチ！ マザコン！ ほんと死ね!?」

かつてない罵詈雑言が俺を襲う。

さらに黒猫が追い討ちをかけてきた。

南極のブリザードに匹敵するような冷たい眼をして俺を見くだす。

「ええ女性を胸で判断するような愚か者の極みは、この世界から消滅すべきね」

右側に憤怒の炎に包まれる灼熱地獄、桐乃

左側に絶対零度もかくやの氷結地獄、黒猫

俺は救いを求めて、唯一干渉してこなかつた沙織を見つめた。

沙織は菩薩のようにニコリと微笑み、口をパクパクさせる。

なになに？あ・き・ら・め・ろ

菩薩が俺に向けて合掌した。

「うぎやあああああああーーー！」

はつ、恐ろしい記憶を掘り起こしてしまつた。寝汗でじつとりしていた背中がいまは肌寒い。

そんなわけで恐怖の記憶と同時に手に入つたシスカリを昨晩プレイしてたのだが、これが難しくネットで攻略サイトを調べながらやつていると、いつの間にか時間が際限無く流れていたのだ。まあ夏休みというのは学生にとつてついつい夜更かしをしてしまうものである。

しかしこの暑さだと二度寝する気も起きない、それにもういい時間だし起きることにする。腕をぐつと伸ばした後、ベッドから立ち上がり顔を洗うため一階にある洗面所に向かう。

階段をトントンと降りながら欠伸をひとつ、……眠いな。なんで12時に寝て6時に起きるのと、4時に寝て10時に起きるとでは、こんなにダルさが違うんだろうな？同じ6時間なのに……。

気怠さでぼーとしながら洗面所のドアを開いた。

あやせがいた。

うん、それはもちろん構わない、自分の家で妹に会う普通のことだ。場所も構わない。洗面所は家族皆で使う場所だから、かち合う事もあるだろう。時間帯も問題ない深夜でもなければ洗面所はどの時間帯でも使う可能性がある。

勘のよい人だったら何故こんなに回りくどい言い方になつているのかは、すでにさつしがついているのではないだろうか。

では、答え合わせをしよう。

目の前にあやせがいた。下着姿のあやせがいた。ジャージを腕からちようど抜こうとしている姿でフリーズしている。おそらくランニングか何か運動をして来てシャワーを浴びる前だつたのだろう。ズボンは既に洗濯カゴに入つており、すらつと伸びた脚に白いパンツが目の毒だ。

あまりの出来事にあやせも凍り付き、ぴくりともしない。

さてここまで無駄に冷静を装つたがそろそろ俺も限界だ。溢れてくる思いを解放

しよう。

きっとこれ夢なんだろ!?

桐乃からやらされた妹ゲーの所為でこんな夢を見ちまつただけだよな!?

夢であつて下さい!!

だつてあり得ないぜ! なんで現実世界で実の妹相手にラツキースケベなんて現象が起くるんだよ!?

おい、いい加減早く選択肢を寄越せ!!

死亡フラグ回避出来る奴を急げ!!

しかし俺の希望は叶えられなかつた。

間に合わなかつたのだ。

あやせの脳が再起動を開始した。

「兄さん遺言はありますか?」

どうやら俺の人生はここまでのことだ。

あやせの言葉に感情が一切こもっていないのが、逆に恐ろしい。

あやせの表情は完全な無表情だ。

これが目からハイライトが消えるということか。

前に赤城が言つていたな『妹は天使だつて』いまは俺も納得だ。こんな美しい姿で俺

を天に連れていくのだから！  
さて遺言を残すとしよう。

「あやせ、兄さんの忠告を聞いてくれたんだな。その純白の下着似合っているぞ」  
あやせの右脚が顔に迫つてくる。

最後に思つたことは、その格好でハイキックはマズイぞ妹よ！ である。



ドガア!? 私のキックを受けて、兄が廊下に吹き飛びました。どうやら白目を剥いて  
いるようです。私は兄を一瞥して洗面所のドアを閉めました。

そして息を大きく吸つて吐き出し、その場に座りこみます。それまであまりの衝撃で  
吹き飛んでいた羞恥心が、私に戻つてきました。私は顔を手で覆つて悶えます。

うううう恥ずかしい!? 兄さんに見られちゃいました!? どうします？ どうしま  
しそう？

さつきのキックで記憶失くしてないでしょうか？ ダメです。今まで同じような  
ことがあつてもピンピンしてましたから！

お返しに兄さんを剥いて、私も兄の下着姿を見ましようか？ わ、私は何を考えてい

るのですか!? それじゃあ痴女じやないですか!?

カギを閉め忘れるなんて今までしたことなかつたのに、なんでこのタイミングで入つてしまふんですか? うう、信じられません!

兄さんも兄さんです。何が『下着似合っている』ですか!! セクハラです! 変態です!

どうせ褒めてくれるなら下着姿でなく、普段着を褒めて欲し……違います。べ、別に兄さんに褒められたいなんて思つていません。……いません!

しかし本当にどうしましよう? 次にどんな顔して兄さんに会えればいいんでしょうか? 顔をあわせたら恥ずかしさのあまり、また蹴飛ばしてしまいそうです。いくら兄が頑丈でも毎回会うたびに蹴飛ばすわけにもいかないです。

それに今回は事故であるのは間違いないので、それなのに兄さんを責め続けるわけにもいかないですよね。ただ事故であつても下着姿を見られてしまつたのをただ許すのも悔しいですし。

本当にどうしましようか?

ううん……そうです! これはあれです! 兄さんに責任をとつてもらいましょう

!!

# 第13話

「痛っつ、いま何時だ？」

あやせのハイキックから目が覚めた俺は左こめかみを押さえながら立ち上がった。  
今回は何時間気を失っていたのだろうか？ 相変わらずの破壊力だ！ あいつ本氣で世界狙えるんじゃないだろうか？

そういえばまだ顔を洗っていないことに気がつく。さすがにもういないと思うが、念の為に閉まっている洗面所のドアをノックする。返事は返ってこない、やはり中にはいないようだ。それでも扉を開けるときには恐る恐るになつてしまふ。顔を洗いスッキリとした気分になると次の問題に対処しなければという気持ちが湧いてきた。

あやせとどんな顔で向き合えばいいんだろうか？ 小学生時代ならともかく中学生になつてからは、妹の下着姿は見ていない。やっぱり兄妹でもショックだよな？ 他の家はどうなんだろう？ 例えば赤城の家とか……なんだろう？ 何故だかあいつの家は参考にならない気がする。

やつぱり謝るしかないよな、わざとじやないにしても、そしてたとえ妹でも女の子の下着姿を見ちまたんだから。しかし次にあやせに会ったとき、いきなり攻撃されたり

しないよな？ ……まあ氣絶中に追い討ちされた形跡はなかつたから大丈夫だろう……たぶん。

色々と考えながらリビングに向かう。時間は11時を少し回っている。壁時計を見ながら今回はおよそ一時間の氣絶かと思う。前の洗濯物のときはたしか三時間だつたから、今回はまあいい方か？ いや氣絶に慣れてしまうのはどうだろう？ 慣れたい訳ではないが、ついついあやせを怒らせてしまう。

そうだそのあやせは居るだろうか？ リビングに恐る恐る入つた。リビングはシステムキッチンがあり、その正面に食事用の四人がけテーブルが置かれている。キッチンが目の前にあるので、洗い場にすぐ食器を出せたり、作ったものをすぐ手渡せるようになつていて。ちよつとした労力にさえ樂を追求していく人間の姿勢は素直に凄いと思う。

こちらにはあやせはいないようだ。反対側にいるだろうか？ それとも別の部屋か？ キッチンの反対側はリラックスできる空間になつており、中心に小さなテーブルその奥に50インチの大型テレビが置かれて、それをゆつたり見れるようテーブルをはさんだ正面に茶色の革のソファが置かれている。そのソファにあやせが居た。テレビを見るでも無くただ座つていて。いやただというのは間違いだろう部屋に入つてきた俺を無言でジッと見つめている。

どうしよう？ 視線を外したら負けなのだろうか？ 凄く気まずいが、覚悟を決めて話しかける。

「あやせ、あのな、えっと、なんといいますか……」

「…………」

「ごめんなさい。ノックしないで入った俺が悪かったです。マジですみません」

あやせの無言のプレッシャーに負けて土下座を敢行した。後頭部に視線を感じる、1分くらい経つんだろうか？ はあーと妹の嘆息が聞こえた。

「…………もういいですよ兄さん。鍵をかけ忘れてしまった私も悪いですから……」

俺は床に伏せていた頭をあげる。あやせが許してくれるようである。しかし妹の言葉には続きがあった。

「でも本当に恥ずかしかったんですよ！ だから兄さん責任を取つて下さい」

「ああ、もちろんだ……」

妹を恥ずかしい目に合わせたんだ、なんでもあやせの言うことを聞いてやろ……

……ちよつとまで！？ いま妹は何を言つた？！

「あやせ……リピートアフターミー」

「なんで英語なんですか？ しかもたぶん使い方ちよつと違いますよ？」

「すまん、混乱した。たぶん俺の聞き間違いだったと思うから、もう一度言つてくれ」

「だから本当に恥ずかしかつたんですよ」

「そのあと」

「責任を取つて下さい？」

ふむ、聞き間違いではなかつたと言うわけだ。良かつた良かつた、つて全然良くねえーよ!!

どうすんだよ俺!!

いや、どうしたんだあやせ!!

頭打つておかしくなつたのか？

いや、頭を打つたのは俺だよな？

責任つてやつぱり結婚つてことなのか？ いつの間にか世界は下着姿見たら結婚しなくちやいけなくなつたのか？

あれか？ このあとあやせの両親に報告しに行くのか？ あやせの両親……つて俺の親じやねーか!? そうだそもそも兄妹で結婚なんて出来ないんだ！ 落ち着け俺!!

俺は立ち上がりあやせの両肩を掴んだ。

「ど、どうしたんですか兄さん!! 突然!!」

「あやせ、よく聞いて欲しい。俺とお前では結婚は早いんだ！」

「はいい？」

「乙女の柔肌を見ちまつたんだ。責任を取らなくちやいけないのかもしれない」

「に、兄さんさつきからいつたい何を?」

「でも、俺たちは結婚できる年齢じやないんだよ」

「け、結婚!? つて兄さんさつきから何を言つているんですかああああああああ!!」

「うおつ!? あやせがこんな叫び声あげるところなんて初めてみたぞ。」

「な、なにって、お前が責任取れって言うから?」

「なんでそれで結婚なんてことが出てくるんですか!?」

「いやだつて、下着姿や裸を見た後に責任取れって言われたら、結婚してつていうことじゃがないのか普通?」

「ど・う・し・て・そななるんですか!? いつたい何処の常識なんですか!? そ、そもそも

もは、早いつてなんですか!? 兄さんは私とけ、結婚するつもりなんですか!?」

「あれ? 俺は兄妹だから結婚出来ないつて言わなかつたつけ?」

「言つてません!!」

あやせが息を荒げながら訴える。

おかしいぞ思考は確かに兄妹で結婚は出来ないと言うつもりだつたのに、何故だか将来妹と結婚する話になつていた!? どうしてこうなつた? わからん?

それに何処の常識? ふむ、何処のと言わればマンガやアニメとか……どうやら俺は本格的にあいつらに毒されているらしい。

「お、おう、悪い。またとんでもない勘違いをしちまつた」

「まつたく兄妹でどうしたらそんな勘違いできるんですか？ 兄さんときたらまつた  
く」

「……面白無い。それで責任つて何をすればいいんだ？」

「なんだか凄く疲れました。責任は……そうですね、この後買い物に付き合つて下さい。  
俺の勘違いに呆れ、あやせがふうーとため息を吐く。

「あと今日もお母さん達帰りが遅くなるらしいので、夕御飯は外食して帰りましょう」  
「なんだそれくらいなら、別に何もなくても付き合つてたぞ？」

「もちろん罰は別にありますよ！ 責任を取つて今日の夕御飯はご馳走して下さい兄さん！」

「うつ、……了解」

「最近はあいつらに会つて遊んだりするので正直懐事情が寂しいのだが、ここは俺に断  
る権利はもちろんない。しかしない袖は振れないでの、情けなくも妹に頼み込む。

「……高い場所は勘弁してくれよ」

「ふふふ、どうしましよう？ この間テレビで凄く美味しそうなお店の特集やつていた  
んですね～！」

「おう、マジか……」  
「そんな俺の姿を見て、あやせは小悪魔のような微笑みを浮かべた。

断わる権利のない俺はがつくりと肩を落とした。

「ふふつ、冗談ですよ兄さん！ 普通のお店で大丈夫ですよ！」

俺の狼狽した姿に満足したのだろう。小悪魔の微笑みから天使のようなスマイルに変貌させあやせが笑った。

あやせの一喜一憂に振り回されてしまう。俺は妹に絶対に敵わないのだと理解させられる。やれやれだ。

「それで何処に行くんだ？ あと昼飯どうする？ 向こうで食べるか？」

「そうですね。ららぱーとに行きましょうか。お昼はちょっと早いですけど、いま簡単に作っちゃいますね。兄さん大丈夫ですか？」

「ああ、朝飯食べてないから腹空いてるし、むしろ助かる」

「了解です。ちょっと待つていて下さいね」

食事の話をした為か？ 俺のお腹の虫が声をあげる。その音が聞こえてしまったのだろう、あやせがクスクス笑いながらキツチンに向かった。エプロンをつけ冷蔵庫の中身を確認する妹の様子を何とは無しに眺める。

結婚ね、先ほど話に出てきたばかりなので、食事の用意をしているあやせを見ていると、ついつい考えてしまった。あいつもいつか恋人が出来て、結婚して家を出て、旦那さんに同じように食事を用意するんだろうな。なんだろう無性に寂しさと悔しさが浮

かび上がってきた。これが娘はやらん！ という父親の心境というもののなんだろうか？ となると俺も妹が欲しければ俺を倒してみろみたいなことをやつてしまふんだろうか？ ……実際のその場面を想像してみたら、彼氏でなくあやせに叩き伏せられる俺の姿が浮かぶ。はあー思わずため息が溢れる。

「兄さん出来ましたよ！ テーブルの上片して下さい」

「ああ、わかった」

いつの間にか結構な時間考え込んでいたようだ。慌ててテーブルの上を片付ける。あやせがフライパンと皿を持ってきた。フライパンの中には湯気が立ち上る炒飯、それをあやせが手早く皿に移しかえる。

「兄さん、どれくらい食べますか？」

「腹減つてから多めで頼む！ あやせ麦茶でいいか？」

「それで大丈夫ですよ。ありがとうございます」

テーブルに残っていたコップなどを洗い場に持つていき、ついでに新しいコップを用意して冷蔵庫から麦茶を取り出した。その場で注ぎ一口呷る、やつぱり夏場は麦茶だよな！

「兄さんはしたないですよ。どうせ飲むなら、こつちに持ってきて飲んで下さい」

「ははっ、悪い悪い」

「もう……」

あやせが膨れている。機嫌を損ねないうちにさつきとテーブルに向かつた。二つのコップに麦茶を注ぎ込み炒飯の皿にスプーンを用意して準備完了、腹の虫が早く食わせろとさつきからうるさい。

「それじゃあ、いただきます！」

「はい、めしあがれ」

うん、相変わらず美味しいな！　お店ほどパラパラではないが、充分パラつとしている。俺が作るとどうしてもジトツとしてしまうので、今度作るときにコツを聞いてみようか？

「そういえば兄さんさつき何を考えていたんですか？」

「さつきって、お前が料理しているときか？」

「そうです。ため息を吐いていて、あんまりため息を吐いていると幸せが逃げてしまいますよ」

……さすがに『お前が嫁にいくような想像してへこんだんだよ』とは言えるはずがない。なんとか誤魔化さなければ。

「えつとあれだ。夕飯のこと考えて金足りるかなって？」  
とたんあやせは心配そうな顔をする。

「そうですか、やつぱり兄さんにご馳走して貰うのはやめましょーか」  
馬鹿か俺は！ 妹に気を使わせてどうする！ 誤魔化すにしてももつと上手く誤魔化せよ！

「すまん全然大丈夫だ！」

「本当ですか？ 無理しなくていいんですよ」

「一食分くらいなら全然問題ない。それに金ならせつかくの夏休みだし、俺もバイトして稼いでみようかな？」

「兄さんバイトするんですか？」

「してみようかなって、そうだお前のところ男性モデルもやつてないか？」

「えっ、兄さんそれはちよつと……」

「速攻で断るなよ！ さすがに傷つくぞ！」

「ふつ、ふふふ、あははは、ご、ごめんな、さい、に、兄さん」

冗談だつたが、この断る速さは予想外だ。まつたく失礼な奴だ。あやせの反応にいけたくなつてくる。

ツボに入つたのか、妹の笑いがなかなか止まらない。しかしあやせの笑つている姿を見てるとへこんでいたのが、まあいいやと思えるから不思議である。

「ごめんなさい兄さん、失礼でしたね」

「まつたくだ。俺のガラスのハートは粉々だぞ！」

「ふふっ、兄さんモデルやつてみたいんですか？」

「ああ、超やつてみたいね。こうポーズ決めてカメラでパシャパシャ写されてもう気にしていなかつたが、なにかこのまま流すのも癪だつたので強がつてみせる。

「じゃあ社長に頼んでみますね」

「へっ？」

「そうですね、どんなのがいいでしようか？ 思いきつてハード系なんかしちやいますか？」

俺の脳内でロックな格好をした俺がカメラの前でポーズを決めている。……うん、これはない。

「……すみません嘘ついた。モデルやつてみたいなんて思つてない」

「えー私兄さんのモデル姿見てみたいです」

「いや、ほんとに勘弁してくれ」

あやせがクスクス笑つている。やつぱり妹には勝てそうにない。俺はハアーとため息を一つ吐いた。

## 第14話

俺達はいま船橋にあるららぽーとに来ている。さすが日本トップクラスのショッピングモール人が多い。夏休みということもあり、人混みの多さに嫌気がさす。まあ秋葉原よりはマシか……あそこは人の多さプラス別の熱さがあるからな。

「兄さんそんなところでぼーっとしてないで、早く入りましょうよ」

「そうだな悪い、人の多さで思わず立ち止まつちまつた」

「兄さんららぽーとは初めてでしたっけ？」

「いや、来たことはあつたはずだけど、だいぶ昔だつたから覚えてないな。買い物するときはだいたい駅前で済ませちまうしな」

「そうなんですか？　じゃあ今日は私が案内しますね！」

「あっ、おい！」

あやせが俺の手を掴んで店内に向かつて歩き始める。妹の手を握るなんて小学生以来だ。こんなに小さくて柔らかいのか、もちろんあやせも小学生の頃からは成長しているのだから、その頃と比べたら手も大きくなっているのだろう、それでも男の自分とは全然違うサイズと柔らかさに、妹相手なのにドキドキしてしまう。

あやせに手を引かれたまま、自動ドアを抜けると冷んやりした空気が流れてきて気持ちいい。節電の影響でクーラーの温度が高めに設定されているとはいえ、やはり外の灼熱世界と比べると此処は天国だ。それにしても店舗の数の多さに圧倒される。こんなところではぐれたら絶対に迷子だろ！ まあいまは携帯があるから大丈夫だが、昔の人はどうしてたんだろうな？ 周りをキヨロキヨロ見渡しながら他愛も無いことを考えて歩いていると、あやせが案内板の前で立ち止まる。

「兄さん何処に行きたいですか？」

「そうだな正直な話、こんだけ店があると案内板見てもよくわからんな。まあ今日はお前に付き合うんだからお任せするよ！ ちなみにいつもはどんな感じでまわっているんだ？」

「そうですね？ 桐乃達と来るとときは買い物は買ったものが邪魔になりますから後にして、ペツトコーナー見たり、アイスやクレープ、ケーキなんか食べたりを先にしてますね」

「そうか。あやせがいつもと同じでよければ、それでまわってみないか？」

「ええ、もちろん大丈夫ですよ。じゃあペツトコーナーから行きましょーか！」

「了解。……ちなみにこの今まで行くか？」

「えつ？」

俺は繫がつて いる手をぶんぶんと振つた。俺と手を繫いでいることにやつと気が付いたのか、あやせは慌てて手を離す。

「あ、な、こ、これは違います」

あやせの顔は耳まで真つ赤である。……たぶん俺の顔もあやせほどじやないが赤くなつて いるだろう。

「あ、あれだろ？ はぐれたら困るとか？」

「そ、そうです！ 人多いですかね人！」

「そうだよな。人多いもんなほんとに！」

「ええだから仕方ないんですよ。ええ本当に」

さつき考えたように迷子になると困るから、そうこれは仕方ないことだつたのだ。携帯？ あれは電池切れるかも知れないだろ？ いま何パーセントかなんて確認してな いけども……

氣恥ずかしさはあつたが、妹と久しぶりに手を繫いだことは嬉しかつたのだろう。何故ならいま手が離れたことに俺は寂しさを感じてしまつて いるのだから。だからついこんなことを言つてしまつたのだ。

「えつとこの後はどうする？ はぐれないよう、繫いでいくか？」

「……えつとそれは恥ずかしいです」

「そ、そうだよな悪い、変なこと言つた」

まあそうだよな。この歳で兄妹が手を繋いでなんておかしいよな。俺は何を考えているんだ。

「でもはぐれたら困るので、こ、これでいいですか？」

あやせが俺のTシャツをそつと掴む。

「…………」

「…………」

「べ、別に兄さんがはぐれたら困るからしてるんですよ。本当にそれだけなんですからね！」

「お、おう、もちろんだ！ これならはぐれないしな」

思わずフリーーズしちまつた！ ただこれも相当に気恥ずかしい。と、とりあえずこの恥ずかしさを誤魔化す為に話題転換を試みよう。

「あ、あれだなあやせ」

「な、なんですか？」

「その、うん。わざわざ着替えたんだな？」

「もう、あたりまえですよ兄さん!!」

俺の質問はどうやら機嫌を損ねてしまつたようだ。あやせの服装は昼食のときとい

までは違つてゐる。あのときは英語のロゴ入りの白いTシャツの上に黒の半袖のパーカーを羽織り、下はデニムの短パンだつた。俺の目ではその格好でも充分に出かけられると思つていたが、あやせにはそれでは不合格だつたらしく、着替えてきてから出發したのだ。

ちなみにいまの格好は紺と赤の線が入つたチエックのラベンダー色のワンピースで、所々についた白のフリルとレースが可愛らしさを際立たせている。その上に白色に近い桃色のボレロを羽織つてゐる。女性用のジャケットつてボレロであつてたつけな?

まあとにかく、さすが読モをやつてゐるだけあつて、ものすごく似合つてゐる。ここに来るまでと今もだが男達の視線が凄い集まつてゐる。まずはあやせを見て相好を崩し、一緒にいる俺を見て嫉まし気に睨みつけてくる。手を繋いでいる姿やいまのシャツを掴まれてゐる姿を見ている為か、あいつらの怨嗟が凄い。『なんでこんな冴えない奴が、こんな美少女と!?』『チツ、男連れかよ。いちやいちやしやがつて』『憎しみで……人を殺せたら!!』男の嫉妬は醜いというが、醜いというよりもう怖ろしいぞ!?

「女の子は出掛けるのにそれ相応の準備が必要なんですよ兄さん!」

「やれやれ大変なんだな」

「大変なんです。ふふつ、どうです。似合つてますか?」

「うん、とてもよく似合つてるな」

思わず素で答えてしまう。あらためて妹の格好に注目するとそれ以外の感想が浮かばない。本当に俺とこいつは血が繋がっているのかを疑つてしまふレベルである。

（／＼＼＼＼そのまま褒められるとは思いませんでした）

「どうした？」

「な、なんでもありません。何時迄も止まつてゐるのもあれですので、行きましょう！」  
「お、おう」

声を張り上げたあやせに押されながら、ペットショッピへと向かう。ペットショッピに行くすがら犬を散歩しながら歩いている人を見かける。

「うおつ！？ 屋外通路とはいえ店の敷地内に大丈夫なのか？」

「凄いですよね！ いまから行くペットショッピにドッグランもあるんですよ！」

「マジか？ 凄いなららぼーと！」

ららぼーとの凄さに驚きながら進んで行くと、ペットショッピの看板が見える。

「さあ着きましたよ兄さん！ 早く早く！」

「あ、おい、そんな押すなよ」

最初の目的地に無事到着だ。あやせがもう我慢できないといった様子で俺を急かす。目的はやっぱり子犬や子猫のケージコーナーだろう。うちは親父が動物アレルギーだから一軒家でも犬や猫を飼えなかつたので、可愛い物好きのあやせはこういうチャンス

に目が無い。

「きやー、兄さん!! もふもふのふわふわのころころですよー!!」

「お、おう」

「いやー、この仔可愛いーー!! お腹見せてコロンとしますコロン!!」

「そ、そうだな」

「ニヤー、猫ちゃんもいいですよね! この仔なんてつぶらな瞳でこっち見つめてますよ! やーんもう!!」

「ああ……」

ケージコーナーに着いた途端、あやせのテンションがマックスゲージを振り切つている。あつちこつちに移りながらケージに向かつてワンワンニャーニャー話しかけている。『こつちに来てニヤー』『あつ、行かないでほしいワン』……どうしようこれ凄く動画に撮りたいんですけど、でもバレたら間違いなくハイキックコースだよな。それにはせつかく楽しんでいる妹に水を差すのも悪いか。あきらめよう勿体無いが。妹のお宝映像を逃す哀しみに、はあーと俺はため息を吐いた。

しかしこんな状態で周りの目は大丈夫だろうか? 周囲を見回してみると、微笑ましげな目で見つめられている。……奇異の目でないので良しとしておこう。

ひとしきり騒いだ後ようやくあやせが落ち着いた。

「いいですね。ワンちゃん、猫ちゃん」

「うちでも飼えればいいんだけど、親父がな」

「仕方ないですよ。体の事はどうしようもないですから」

言葉ではそう言いながらも、やつぱりあやせの表情は寂しげだ。俺はあやせの頭にポンと手を置いた。

「まあそれは仕方ないけど、その分今は楽しもうぜ！」

「そうですね兄さん！ 次はドッグラン見ませんか？ ワンちゃんが元気にはしゃいでるんですよ！」

「おつ、そうだな行つてみるか！」

隣接しているドッグランコーナーに向かう、そこには何匹もの犬が元気に……

「だれてるな……」

「だれていますね……」

夏の日差しのせいだろう、本来なら多くの犬と飼い主が遊んでいる筈のその場所は、いまは三匹がいるだけだつた。しかも舌を出して座り込んでいる犬もいるし、他の二匹もとても元気といえるような状態でない。

「この暑さじやしようがないか。でも飼い主もなんでこの暑さで来たんだろうな？」

「そうですね？ せつかく来たのだからとか、もともと散歩コースだからとかじゃない

ですか？ ここなら飼い主もペットも飲み食いに困りませんし」

「なるほどな！ でも残念だよな、これじゃあここにいても仕方ないよな？」

「ええ、次のところに行きましょうか」

あやせの顔はちょっと寂しげだ。兄としては妹がそんな表情のままなのは気に入らない。

「そうだな、またここに来るのは、涼しくなつてからにするか！」

「えつ、兄さん？」

「言つただろ？ 別に何もなくとも付き合つて！ まあその時は奢つてやれるかわからぬいけどな？」

「……ありがとうございます！」

「別に礼を言われるようなことじやねーよ！」

「いいんです私がお礼を言いたかつたんですから」

「そういうもんか？」

「そういうものです！」

ふふつとあやせが微笑みを浮かべる。

そうだやつぱり笑っている顔が一番だよな！

# 第15話

「喉乾いてきたし、ちょっと休憩するか？」

「いいですね。ちょうどそこにカフェがありますから、そこに行つてみますか？」

あやせが指をさした先にコーヒーショップがある。どちらかというと落ち着いた感じの店舗で大人向きの店という雰囲気を醸し出している。

「そこでいいのか？ 普段行つてるとこでも大丈夫だぞ」

「せつからずから普段桐乃達と行かないお店も入つてみたいなと思いまして、あそこ女子中学生だけで入るの気後れしちゃいますから」

「ああ、それは何となくわかるかも。それじゃあ行つてみるか」

「ええ！」

店のドアを開けるとカラランカラランとベルの音が鳴る。木造を意識してコーデイネートされた店内にコーヒーの良い香りが漂っている。レトロな雰囲気が感じられる良さげな店だ。店内は結構な客がいるにも関わらず、外の喧騒から隔離された落ち着きを感じる。

「いらっしゃいませ。2名様ですか？」

「はい2名ですけど、大丈夫ですか?」

店の雰囲気にマッチした真面目そうな女性店員が二人掛け用の小さなテーブルに案内してくれる。白のワイシャツに腰から膝下まで伸びる黒のロングエプロンのシンプルでシックな制服だ。こういう店は落ち着くな。なにせ最近入ったカフェはメイドさんばかりだつたからな! ああ、あれは酷かつた。俺は遠い目をしながら、少し前の出来事を思い出す。

「京介氏、今日は拙者のおすすめの店をご紹介致しますぞ」

「お前のおすすめ? 正直嫌な予感しかしないんだが……」

「酷いでござるな。拙者を信じて下され、きっと満足して頂けるでござるよ!」

「そうかあ?」

もはや恒例とも呼べるあいつらの呼び出しに応じて秋葉原を散策していたら、沙織が行きつけの店を紹介してくれることになった。ただこいつらに案内される場所はだいたい恐ろしく濃い場所が多いので油断できねえ! フィギュアやガチャガチャが売られている店に行つたら、いつの間にかおっぱいがはだけているフィギュアコーナーにいるし、漫画やアニメ雑誌が売られている店の場合は随分と薄いエロ漫画コーナーにいた。俺も男だからそういうのはもちろん嫌いじゃない。ついつい目をやってしまうと

あいつらの反応の冷たい事冷たい事。それにだぜ男が俺一人に女の子三人でそういうコーナーにいる気不味さは、ほんとに勘弁して貰いたい。周りの客が俺のこと睨みつけて去っていくんだ。『こんなとこに少女達連れてきてどうするつもりだ？　この変態！』『俺達の買い物の邪魔すんじゃねーよ！』そんな彼等の心の声が聞こえてくる気がするんだよ！　『俺が連れて来たわけじやねえええええ!!』と声高々に抗弁したくなる訳だ。もちろん出来ないけど。とにかくそんな訳で今回の沙織のおすすめも警戒心が先に立つてしまつたのだ。

「どうでもいいけど早く何処かに入りましょう。灼熱のゲヘナにはもう耐えられないわ」

「あんた、いい加減その暑苦しい格好何とかしたら？　見ているこつちまで暑いんですけど」

「ふつ、何を言つているのかしら？　この闇の衣には地獄の業火にさえ耐えられる耐火性能が付与されているのよ。これ以上夏に相応わしい姿があるわけないじゃない」

「あんた……汗だくで、ふらふらしながら言つても説得力ないわよ」  
「……地上の暑さをあなどつていたわ、まさかゲヘナ以上だなんて」

黒猫の格好はいつも通り黒のゴスロリだ。ああ黒は太陽光の熱を吸收するもんな、全身黒じやあ、さぞかし暑いだろうな。通気性も悪そудし。夏にも関わらず自分のボリ

シーやを曲げずにこの格好を維持する黒猫はコスプレイヤーの鏡である。

「沙織ごねて悪かつた。早く行こう黒猫が限界だ」

「そ、そうでござるな。こちらでござる」

「私がこの程度の暑さでやられる筈がないじゃな……あつ、ちょっと!?」

「いいから行くぞ！」

俺は黒猫の腕を引っ張つて、沙織のあとについて行く。それにも弱音を吐いたり、強がつたり忙しい奴である。やはり黒猫を掴んだ手にかなりの熱が伝わってくる。これでは全身の暑さは半端ないだろうな。コスプレするのは構わないが、もう少し体を労れと思う。それにしても腕細いなこいつ！

「着いたでござるよ」

「あれ？ ここつてオフ会のときの……？」

「……着いたなら離しなさいよ。いつまで握っているの？」

「おつ、すまん。もしかして力入れ過ぎたか？ 痛かつたとか？」

「べ、別に痛くはなかつたわ。ただ男の人に……」

「さつ、入るでござるよ」

黒猫が何かを言おうとしていたが、沙織が遮ってしまう。黒猫がムツとした表情を浮かべ、沙織を睨むもグルグルメガネはキヨトンとした顔で首を傾げる。黒猫が『……も

ういいわよ』とため息を吐いた。

沙織のおすすめの店は、ロツジ風の外観で洒落た白い小屋という印象を受ける。意外と良さそうな店じやねーか！ 疑つて悪かつたな。名前はカフエ『プリティーガーデン』ね。沙織が短い階段を登り、木製の扉を開いた。

「お帰りなさいませ！ お嬢様！ ご主人様！」

エプロンドレス姿のメイドさん達が俺達を出迎えてくれる。ああそうだよな沙織を一瞬でも信じた俺が間違っていたんだよな。なにが良さそうな店じやねーかだ、騙されてるぞ少し前の俺！ おいそこのグルグルメガネ『素晴らしいでござろう京介氏！』みたいなドヤ顔でこつちを振り向くんじゃねえ！ 俺にメイド属性はねーよ!! メイドさんは白いふりふりのエプロンにやたらと短いスカート姿で、長いソックスを履いている。……可愛いらしい格好っていうのは認めるけどな。

「4名様でございますか、お嬢様？」

「ええ、そうでござる」

「はあい、それでは、こちらへどうぞ」

メイドさんが俺達を奥にある4人用テーブルへ案内する。メイド喫茶は初めて入ったが、内装は普通の喫茶店と変わらないな？ 最初の挨拶のインパクトがとんでもなかつたから、もつと凄い様式てるのかと思つたけど。

「こちらのお席でよろしいですかあ？」

「大丈夫でござるよ！」

「あつ、どうも」

メイドさんが俺達の席を引いてくれる。おつかなびつくりの俺と違い、当然といつた顔で座る桐乃と黒猫。沙織だけじやなくお前らも通つてているのか？ 怪しい疑惑が浮上する。

「こちらがメニューになります。呼び方のオーダーござりますか？」

「大佐でお願いするでござるよ」

「大佐さんですね。かしこまりましたあ」

「私はお嬢様でいいわ」

「あたしもそれで」

「わかりましたお嬢様。ご主人様はどうされますかあ？」

「あ、えっと、呼び名？」

「はい、わたしどもがあご主人様をどう呼ぶか、決めて下さい。『ご主人様』『旦那様』『く

ゞ君』『くゞちゃん』『おにいちゃん』など各種取り揃えておりますよ」

……メイド喫茶恐るべし！？ なのにお前ら順応し過ぎだから、特に沙織！ 大佐つてなんだ！ 大佐つて！ こんなん決められるかーー！？

「あ、その、お任せで」

「わかりましたあ。じゃあ、『おにいちゃん』って呼ぶね？　おにいちゃん♪」

メイドさんがよりにもよつてな選択を選びやがった。案の定桐乃が反応する。

「うわっ、妹いるのにおにいちゃん選ぶなんて、キモツ」

桐乃のツッコミが心に突き刺さる。しかし一言叫ばせて欲しい。

俺が選んだ訳じやねえええええええええええええ!!

はあああー、嘆息を吐きながら呼び名の変更をお願いする。

「……すみません。ご主人様でお願いします」

「はい、かしこまりましたあご主人様！　ご注文が決まりましたら、またお呼びください

♪

やばい、もうこの段階で俺の精神ポイントはほとんど空だ。しかしその俺に追い打ちをかける奴等がいる。

「につひつひ、あたしも呼んであげようか？　兄貴」

「そうね、ずいぶんと疲れているようだけど大丈夫、兄さん？」

「これは乗らないわけにはいかんでござるな、兄上」

「お前らああーーーマジ勘弁してくれ」

「ええー、いーじやん兄貴」

「そうよ兄さん」

「そうですぞ、兄上殿」

「いや、ほんとに許してください」

ケラケラ笑つている三人組に俺は頭を下げた。妹はあやせ一人で充分である。

その後もメイド喫茶で戸惑う俺をこいつらは揶揄い続けた。そんな訳でメイド喫茶には酷い印象しか残つていないのである。



兄さんがまた呆けています。先ほど女性店員さんを見てからです。ただ店員さんに見惚れているのとはたぶん違います。眉間にシワを寄せながら女性に見惚れる人はそういうはいないと私は思いましたから。いまも私の『何を頼みますか?』と言う質問に『うん』と空返事です。何を考えているのでしょうか? ともかく一緒にいるのにうわの空の態度はムツとします。

「兄さん聞いてますか?」

「あっ、ごめん。聞いてなかつた」

「もう、何にします? つて言つたんですよ」

「悪い、俺はコーヒーでいいや」

「じゃあ私はケーキセットにしますね」

注文が決まりましたので、兄が右手を上げて店員さんを呼びます。

「お待たせ致しました」

「注文いいですか？」

「どうぞお願ひ致します」

「えつと俺はアイスコーヒーで」

「私はケーキセットをお願いします」

「ケーキの種類とお飲み物は何になされますか？」

「チーズケーキとアイスのミルクティーお願ひします」

「かしこまりました。ご注文を繰り返させて頂きます。アイスコーヒーが1、ケーキセットのチーズにアイスミルクティーが1でよろしかったですか？」

「ええ、それでお願ひします」

注文も無事に終わり、私はお冷やを一口飲みました。思わずふうーと吐息がもれます。やはり暑さもあり、気がつかないうちに喉が渴いていたようです。兄も一気にお冷やを喉に流し込んでいます。でもそんなに慌てて飲むと……『ゴフツ』案の定兄が嘆せます。気管に入ったのか、ゴホゴホと咳き込んでいます。

「まつたく兄さん大丈夫ですか?」

「ゴホツ、ああ、お約束やつちまつたな」

「もう、そんなお約束はいらないですよ」

「ははつ、ゴホツ、陸で溺れるつて奴だな!」

「そんな器用なんだか、不器用なんだかわからない表現は初めて聞きますよ?」

「おう、俺のオリジナルだからな! ゴホゴホ」

「そんな自慢げに言われても……」

兄がニッと笑います。咳き込みながら言つてもかつこ悪いだけですよ兄さん。はあーとため息を吐きます。まあ気管に水が入つたときの苦しさは溺れるでわからなくもないですけど。

兄と雑談していると注文が来ました。『お待たせ致しました』と店員さんが言いながら注文品を置いていきます。コーヒーが珍しい金属のコップに入つてきました。ミルクティーや普通のグラスです。ここはコーヒーがおすすめのお店なのでしょうか? 失敗しましたこれは私もコーヒーにした方が良かつたかもしません。チーズケーキはスフレですね、お店でちゃんと作つた物のようです。『いただきます』とフォークをケーキに突き立て一口、口の中に溶けるようなまろやかさが広がり、上品なチーズの甘さが舌を侵食します。予想以上に美味しいです。美味しいものを食べると幸せな気持ち

になります。ここは当たりですね！　こんど桐乃達と一緒に来ましようか？　ただお店の雰囲気から騒いだりは出来なさそうですから、もし来るなら加奈子に釘を刺さないとですね！」

「それ、美味そだよな。俺もケーキセットにすれば良かつたかな？」

兄が私の口元とケーキを交互に見ながら言つてきました。私は満面の笑みで応えます。

「ええ、ここのがケーキとても美味しいです」

「失敗したな。まあいまから頼むのもあれだからな、諦めるか」

はあーとため息を吐きながら兄はコーヒーを啜ります。ふと私にいたずら心が湧き上がつてきました。ケーキを一口サイズにしてフォークに突き刺し、兄の口元に持つていきます。

「はい、兄さん」

「う、えつ、あ？」

兄が口を半開きにして、面白い顔で固まります。私は可笑しくなつてクスクス笑いながら催促します。

「はい、アーン」

「うつ、ああ、じやあ……」

私の催促に覚悟を決めたのか、兄が目線を逸らしながら口を大きく開けます。そこに目掛けてフォークとケーキを投入します。

「ふふつ、どうです美味しいですか？」

口をもぐもぐさせた後、顔を赤らめながら兄さんが答えます。

「……美味しい」

兄の反応に満足した私はケーキの残りを食べようとします。しかしふとそこで我に返りました。……いま私はとんでもなく恥ずかしいことをしてしまったのではないでしようか？ 兄をチラツと見ます、顔を赤らめたまま私と目線があうとふいつと顔を逸らしました。私の頬が急激に熱を帯びていきます。

え、ええと！？ やつてしまつたものはしかたありません。落ちついてケーキを食べましょう。そらです、それが大事です！ あれ？ でも、このままケーキを食べると間接キスに……!? いえ、落ち着くのです、私達は兄妹なんですから、そんなた、たかが間接キ、キスぐらいで取り乱してどうするんですか!! そ、そうです兄妹なら無効です無効！！ きっとそうに違ひありません!!

私は覚悟を決めてケーキの残りにフォークを突き刺します。……あんなに美味しいううう私は何であんな行動を取つてしまつたのでしょうか？

私は顔をうつむかせて、頬の温度が下がるのを待つことにします。

# 第16話

ああ、コーヒーが美味しい。コーヒーを口元に運び、先程の事を極力意識しないように努める。しかし顔の熱さがなかなか引かない。まつたくあやせがあんな事するなんて予想外の不意打ちもいいとこだ。いくら家族とはいえ、あくんは恥ずかしいだろ、あくんは。……まさかあやせのやつ、誰にでもこんなことしているんじゃないだろうな？こんなことされたら男なら誰でも勘違いしちまうぞ！？さつきまで赤かつた顔が一気に青ざめる。

「あ、あやせ！」

「ど、どうしたんですか？！」

いきなり大きな声あげて？」

俺の声に驚いたあやせが俯かせていた顔を慌てて上げる。妹の顔も赤い、やつぱりさつきのは恥ずかしかったようだ。

「お前もしかして……」

……ちよつと待て、いま兄相手で恥ずがつている妹が、他の男相手に同じこと出来るだろうか？ 恋人ならともかくとして、まず出来ないのでないだろうか？ ……危なかつた、思わず『他の男にもあくんなんてしてないだろうな？』なんて問い合わせてしま

うところだった。それは何というか、過保護を通りこしてキモい兄貴になつてしまわないだろうか？『兄さん気持ち悪いです』なんてあやせに言われてみろ、俺は立ち直れないぞ。

「もしかして、何ですか兄さん？」

しまつた、どうする？凄い勢いでしゃべり始めたにも関わらず、もしかしてで止めたからあやせが不審がっている。どう誤魔化すよ俺!?ええいままよ！

「えっと、もしかしてお前少し太つたか？」頬のあたりが少し……」

ビキッ!! 空気が凍つた気がした。俺は最悪の選択をしてしまつたのかもしれない。身体の震えが止まらない。クーラーが効いていて涼しいはずの店内なのに、ぶあつと汗が噴き出る。頭の中でアラートが危険を知らせて鳴り続けている。あやせはニツコリと微笑んでいるのに、どうしてだろうあやせの背後に夜叉が見えるんだが……

「うふふふふ、兄さんとても面白いことを言いますね」

「お、おう」

「そろそろお店を出ましょうか？あまり長居をしてしまうとお店のご迷惑ですからね」

「あ、ああ」

「すみません、お会計お願ひします」

俺は伝票を持つてレジに向かう。店員のお姉さんが伝票を受け取る時にあやせを見て『ヒツ!?』って言つた後、口を押さえて何ともいえない目で俺を見る。俺は財布からお札を取り出し会計を済ます。女性店員の『ありがとうございました』が『ご冥福をお祈りします』に聞こえて、レジから店の出口までが13階段に見えてくるから末期症状である。

「あやせ……」

「…………」

しかし予想に反して、店から出てもあやせが俺に何かをしてくることはなかつた。俺の予想では人気の無い場所に連れていかれ、折檻されるものと思っていたのだが、実際は俺の言葉に反応せずにスタスマと歩いて行つてしまふ。恐る恐るあやせの後について行く。

「あやせ？」

「…………」

5分位黙々と歩いていると流石に不安になり、再度あやせに呼び掛ける。しかし妹は口を聞いてくれない。どうやら無視をされているようだ。困つた、どうしよう？ 正直なところ、反応が無い無視は、激怒されるよりよっぽどやりにくい。今まであやせを怒らせてこのパターンになつたときは、怒りを鎮めてくれるまで側で土下座をしてい

た。しかし流石にショッピングモール内でそれをするのは無理だろう。さて、どうしようか？……怒らせるの覚悟で呼び掛け続けるしかないか。はあーとため息一つ吐き覚悟を決める。

「…………あやせ」

「…………」

「あやせさん」

「…………」

「あやせちゃん」

「…………」

おっ、ピクッと反応した。この方面でいくしかないな！……あとが怖いけど。

「…………あやせたん」

「…………」

「あや…………」

「もううなんなんですか兄さん！　私は怒っているんですよ！　それなのにふざけて

！」

あやせが爆発した。まあ人混み内という事を考慮してか、あやせの声は小声だつたが。しかし声は小さいもののその迫力はいささかも衰えない。キツとこちらを睨み付

ける眼差しに、反射的に土下座をしてしまいそうになつた。危ない危ない店内で土下座が出来ないから、呼び掛けで怒らせるリスクを取つたのに、ここで土下座したら意味がない。

「すまん、俺が悪かつた」

俺は頭を下げる。結局素直に謝るしかないのである。ただ本気で謝つている姿を見せるには、あやせがこちらを見てくれる必要があつたので、あのふざけた呼び掛けも入用になつたのだ。

「……頭を上げて下さい兄さん、人が見ていますよ」

「…………」

俺はまだ頭を上げない。

「……わかりました。許しますから頭を上げて下さい」

「ごめんな」

あやせの許すという言葉を聞き、俺は頭を上げた。許すと言つたが、あやせはまだ膨れている。

「……兄さんズルいです」

「悪い、卑怯だつたかな？」

「卑怯ですよ。人が大勢いるのに頭を下げて、許さない訳にいかないじゃないですか」

「すまない。お前がそこまで怒るとは思わなかつた。ほんとにごめん」

俺はあやせの瞳を見据えて再度謝罪の意思を伝える。数秒間見つめ合つた後、はあーとあやせがため息を吐いた。

「私も大人気なかつたです。でも太つたなんて言われたら女性は傷付くんですよ。これからは女性に対して、太つたなんて絶対言つちゃあダメですかね」

「ああ、もちろんだ」

「仮に相手が怒らなかつたとしても、内心で怒つてしたり、傷ついていたりするんですよ」

「肝に命じておく」

これからは女性の体重に触れないようにしよう。噂では聞いていたが、まさかこれ程怒るとは思わなかつた。

周りで俺たちに注目していたギャラリーが散つていく。これ以上は何も起こらないと判断したのだろう。まったく俺達は見世物じゃねーよ！ 野次馬にはイラッとする。しかし赤の他人に文句を言うわけにもいかないので諦める。気分を鎮めて、あやせに問い合わせた。

「次はどうする？」

「そうですね……服を見に行きたいんですけど、いいですか？」

「了解です。お嬢様」  
「もう、またふざけて」

あやせが俺の脇腹を左肘で小突く、とりあえず機嫌は回復したようである。妹の要望に従いファッショニヨンシヨップに向かう。エスカレーターを使い2Fへ、しかしふァッション関係だけで何店舗あるんだ？　あやせの行きつけの店へ向かうだけで10店舗以上のファッショニヨンシヨップを通り過ぎている。服を買うときはもっぱらユニクロか、お袋にお任せの俺からすれば信じられない光景だ。男子高校生が母親に買つてもらうのは恥ずかしくないかだつて？　ファッショニヨンに興味がなく、バイトして無い金欠高校生だと仕方ないんだよ！　服よりも買い食いや雑誌なんかを買つちまうし、最近は桐乃達と遊ぶから、なおさら小遣いが足りないんだ。服を買うからと親に金をせびる事も、妹が読モノのバイト代で自分で買つているのを知つているから、アニキの見栄で出来ないし。残つた手段が母親に任せるか、ユニクロで格安の服を買うかになるのだ。

「兄さんここですよ」

おつと、キヨロキヨロしながら歩いていたら、行き過ぎてしまふところだつた。力フエから出てからは手を繋いだりとかはしないで、妹の後ろについて行つてたからな。あやせが手招きしている店は、若い女性向けの専門店なのだろう。パツと見たところ中にはいるのは、女子高生か女子中学生がほとんどに見える。男の俺からすれば、その空間

に入つて行くのは出来れば遠慮したい。

「あやせ、俺外で待つていていいか？」

「ダメですよ兄さん、せつかく一緒に来たんですから、選ぶの手伝つて下さい」

俺の希望は叶えられなかつた。あやせに手を引かれ女の花園へ足を踏み入れる。

「いらっしゃいませ」

若い女性店員が明るく呼び掛ける。ブルーのトップスにホワイトのパンツ姿だ。こういう店の店員は私服なんだな？ ファッションに疎い俺から見てもオシャレに見える。じつと見つめていた俺に気が付いたのか？ 店員さんがニコッと微笑んでくれた。

「兄さんこちらですよ」

「痛てて」

店員に見惚れて突つ立つていた俺の耳をあやせが引っ張る。店員さんの笑顔が苦笑に変わる。

「耳が千切れたらどうするんだよ！」

「兄さんが店員さん相手に、鼻の下伸ばしているのがいけないんですよ」

「鼻の下なんて伸ばしてねーよ！ こういう店の店員は流石にオシャレだなつて感心していただけだ」

「嘘です。店員さんに微笑みかけられて、デレデレしてました」

「デ、デレデレなんてしてないぞ!? ちょっとドキッとしたけど……」

「それがダメなんです。まったく兄さんは目を離すとすぐにこれなんですから……」

「すまん降参」

俺は両腕を上げて、白旗を揚げた。店員さんの笑顔に見惚れてしまつたのは本当なので、負けを認める。俺の姿を見たあやせがふうーとため息を吐いた後、服を選び始める。

「兄さんどつちが似合うと思います?」

「お前ならどつちでも似合うと思うぞ」

「もーダメですよ。こういう時に両方似合うは禁止なんですよ。意見を求めているんですけどから」

「そうなのか?」

「そうなんです。で、どつちがいいですか?」

あやせが持つてきたのは黒と桃色のキャミソールだ。うーむどつちがいいか? 黒の妖艶さもいいが、桃色の可愛らしさも捨てがたい。

「マジでどちらも似合いそうだけど、俺はこつちかな?」

桃色のキャミソールを指差した。

「どうしてこつちを選んだんですか?」

「お前がいま着ているジャケットを見たら、まあそれはほとんど白色のピンクだけど、桃

色の方があやせにあつてゐるかなつて、何となくな」

「そうですか♪ 私もこちらが良いかなつて思つてゐたので、じゃあちよつと試着してきますね！」

「あつ、おい」

あやせが踵を返し、試着室に入つてしまふ。あやせがいなくなつてしまふと、途端にこここの空間が居づらくなつてしまふ。女の子の集団にぼつんと男一人だと、自意識過剰かもしれないが、ヒソヒソと噂されてゐる氣分になつてくる。何もせずに待つてゐるはつらいので、近くにある洋服の値段をチェックする。うげえ、高え、こんな薄くてひらひらなのに一万以上しやがる!? やっぱり俺にはファッショーンは分からねえ！ 試着室前でオシャレ人間になるのは不可能だと絶望していると、先程の店員が話しかけてきた。

「可愛らしい彼女さんですね」

「か、彼女!? いえ違います、あいつは妹です」

周りから見るとそう見えるのか? ……あやせに比べて、俺の顔が平凡な所為で兄妹に見えないとかじやないよな?

「あら、そだつたんですか? てつきりカップルかと。仲のよろしいご兄妹なんですね」

「妹に頭が上がらないだけですよ」

「そうなんですか？ 妹さんお兄さんを信頼している様に見えましたよ」

「そうだと嬉しいんですけど」

あやせは俺を信頼してくれているんだろうか？ 情けないところばかりを見せている気がするから自信が無い。俺はあいつの兄貴をちゃんとやれるだろうか？ 悩む俺を見て、店員さんがふふっと微笑む。

「そろそろ妹さんも着替えが終わりそうですね。それじゃあゆつくりお楽しみ下さい」「あ、ありがとうございます」

店員さんが一礼して去つて行く。どうやら試着室前で肩身の狭い思いをしていた俺を気遣つてくれたようだ。こんな細かい配慮もするなんて、流石プロだな！ 思わず感心する。店員さんが言つた通り、シャーと試着室のカーテンが開かれる。

「どうですか兄さん？」

俺が選んだ桃色のキヤミソールの上に、元々着てきたボレロを纏い、下は一つの間にか試着室に持つてきていた水色の三段のフリルスカートを着ている。さつきまでの格好も良かつたが、こつちも凄く可愛い。思わずほうと感嘆の声が漏れる。

「可愛いな！ お前に良く似合つてるとと思う」

「そ、そうですか、あ、ありがとうございます」

あやせは俺にお礼を言うと、すぐに試着室のカーテンを閉めてしまった。あれ、俺何か失敗しちまつたか？ この間麻奈実に『女の子の服装や髪型は、きちんと褒めてあげないとダメなんだよ、京ちゃん』って言われたから実践してみたんだけどな？ あれかもっと大袈裟に褒めないとダメだつたのか？ たとえば『まるで地上に降りて来た天使のようだよ。ラブリー・マイエンジエル！』……うお、気持ち悪い！ なんだよラブリー・マイエンジエルって!? 自分で考えといて何だが、そんなキモい表現使う奴いねーだろ！！しかし今のは論外にしても、人を褒めるボキヤブラリーを増やさないといけないよな。まさか試着室に逃げられるなんてな。あれかな俺の褒め言葉がおざなりに聞こえたから、すぐに着替え直そうと思つたのか？ だとしたらあの服装は買わないよな？勿体無いマジで似合つていたのに！ 失敗した、もう見られないと分かつていたら、写真撮らせて貰つてたのに……

「お待たせしました兄さん」

俺が後悔している間に、あやせが元の服装に戻つて出て來た。ちなみに今回は店員さんは来なかつた。忙しかつたのだろう、俺が頭を抱えて天を仰いだりと不審な行動で近寄らなかつたなんて事はないよな……違うよね？

試着室から出て來たあやせの顔が少し赤くなつてゐるように見える。俺は右手をあやせの額にかざす。ちょっと熱いか？

「なあつ、兄さん、いきなり何するんですか!?」

あやせが俺の行動に驚き、慌てて後ろに飛び退いた。

「いや、お前の顔が赤く見えたから熱無いかなって?」

「だ、大丈夫です。元気いっぱいですよ私!」

「どうか? ちょっと熱かったから熱中症とか大丈夫か? なんかさつきより顔が赤い気がするし?」

「大丈夫って言つたら、大丈夫です! 私これ買つてきますから先にお店出ていて下さい」

あやせが勢い良く捲し立て、レジに向かっていく。本当に大丈夫だろうか? まあ本人がああ言う以上信じるしかないか。さつきカフエで休憩したから水分は摂つたし、店内は結構涼しいから大丈夫だとは思うが……熱中症は怖いからな、注意して見ておくか。

あれ、そういうばあの服買うんだな? てつきり買わないものだとばかり思ったのに。うーんまあ凄く似合つていたから、もう一度あの姿を見られるなら細かい事考えなくていいか。とりあえずあやせの言つた通り外で待つていよう、ここにいるとお嬢様方の目が怖いからな。

# 第17話

女つてのは、凄えな。最初の店から3件目、時間にして二時間以上も服を選び続けている。それでいて、買ったのは最初の店の分とTシャツが一枚だ。ほとんどの時間を洋服選びと試着に使っている。

最初の方は良かったよ、妹の可愛い姿が見れるんだから。でも一時間も経つと、何が良いのか判断出来なくなつてくる。なので色々と問題が出てきた。

たとえば、

「兄さんどつちがいいですか？」

「こつちかな？」

「私はこつちの方がいいと思つたんですが……」

「そうか？ ならそつちでいいんじやないか？」

「…………」

無言でため息吐いて、去つて行くなよ。お前がいいと思つた方にすればいいんじや無いのか？ というか、自分でいい方が決まつているなら、俺に聞く意味は無いんじやないだろうか？

もしくは、

「兄さんどうですか？」

「ああ、似合つてるよ」

「……兄さん、さつきから似合つてるしか言つて無いんじゃないですか？」

「そうだつたか？」

「そうですよ。じゃあさつきの服と、今はどつちが似合つてますか？」

「うーん、さつきも良かつたし、今のもいいしな。お前ならどちらも似合うよ」

「…………」

やつぱり無言でため息吐いて去つて行く。あやせなら本当にどの服を着ても似合つているんだけどな、実際に今まで着た服全て似合つていたし。

しかし困つた。時間が経てば経つほど、あやせの機嫌が悪くなつていくし、俺も疲れから対応がおざなりになつていく。何か新しい変化でも無いものか？

「あれっ？ あやせお前も来てたんだ。偶然じやね！」

神様が俺の願いを叶えてくれたのだろうか？ あやせに話しかける少女が現れた。髪をツインテールにした小さな小学生位の少女だ。あれ？ こいつ何処かで会つたことがあつたような……

「か、加奈子？」

「なんだよ、水臭いな！ ララポ来るなら誘つてくれればいいじゃん！」

あつ、思い出した。前に家に桐乃と遊びに来ていた娘だ！ ということはこいつも中二か、小学生なんて思つて悪かつたな。しかし私服姿だと、この娘には申し訳ないが小学生にしか見えない。加奈子が俺の視線に気付いたのか？ 俺とあやせ交互に視線を走らせ、顔を歪める。

「ちつ、なんだ男連れかよ。……あやせの彼氏ショボくね？ こんなのがいいの？」

「ち、違いますよ加奈子、兄さんですよ!? 前に一度会つたでしょ！」

「会つたつけー？」

首を傾げる加奈子。こいつ完全に忘れていやがる。まあ俺も最初思い出せなかつたから人の事いえないけど、初対面ならなおさらショボイ言うんじやねーよ、このクソガキ！ さつき小学生と勘違いして悪いなと思つた俺の気持ちを返せ！

「あつ、思い出した！ 将来係長やつてそうなショボ兄貴だ！ なんだ久しぶりだな、元氣だつたか？」

「あ、ああ、久しぶりだな……」

思い出せた事が嬉しかつたのか、加奈子が俺の肩をパシパシ叩く。加奈子の余りの評価に俺の頬が引きつる。

「加々奈々子～」

あやせの声に加奈子がビクツとする。よしいいぞあやせ、このクソガキにビシツと  
言つてやれ！

「兄さんは確かに地味ですし、将来係長やつていそうな気がします。でも本当の事でも  
胸に秘めておくのが大人の女性というものですよ、加奈子」

「あ、あの、あやせ？」

「何ですか兄さん？」

あやせがニッコリと微笑む。あれ、す、凄く怒つていらっしゃいませんか、あやせさ  
ん？ あれか体重の件、まだ根に持つていらっしゃる？ それとも洋服選びの時の態度  
が気に入らなかつたのか？

「お、おい兄ちゃん、あやせに何やつた？ 凄く怖いぞ」

「お、おう、心当たりはあるが、たぶん俺の力じや、もうどうしようもねえ」

「なんだよ、使えねーな」

「すまん、何とかあやせの機嫌を回復させてくれ」

「おい、それは無茶振り過ぎだろ、兄ちゃん！」

「何を二人で、こここそ話しているんですか？」

「ビクツ!? 俺と加奈子が同時に硬直する。二人一緒にゆつくりと振り返る。やべえ

何故だかわからないが、さつきより怒つていらっしゃる!? たのも加奈子、何とかして

くれ！

「あ、うん、それはな……兄妹で買い物なんて羨ましいって話を聞いてたんだ」

「そうそう」

「あやせの様な妹と一緒に買い物に来れて、兄貴が嬉しいって話を聞いてたんだ」

「……本当ですか兄さん？」

加奈子の必死のフォロー、これを無駄にする訳にはいかない。俺はぶんぶんと頭を縦に降る。しかしこんな嘘で信じてくれるだろうか？

「私と買い物に来れて嬉しかったんですか兄さん……」

確認というより呟くようなあやせの台詞だが、ここはしつかり肯定しておく。おお、何とかなりそうだ！ というかなつてくれ！

「ああ今日は一緒に来れて、ラッキーだつたよ！」

「…………」

どうだ？ 加奈子と二人でゴクッと唾を飲み込み、あやせの動向を見守る。

「まつたく兄さん、友達にそんな恥ずかしいこと言わないで下さいよ」

あやせが俺を叱る。しかし怒りは感じない、言葉通り恥ずかしいだけの様だ。どうやら無事に乗りきつたようだ。加奈子と顔を見合わせ頷きあう。よし、良くやつた加奈子、凄いぜ！ あやせが見ていなかつたら、きっとハイタッチを交わしていただろう！

機嫌が戻つたあやせに、加奈子が話しかける。

「それにしても兄貴かよ。彼氏だつたら面白かつたのによ！」

「何が面白いんですか、加奈子？」

「そりや、あのお堅いあやせが、彼氏作つたつていつたら、学校の話題独占しょ！」  
「……加奈子はその中で、どんな立ち位置なんですか？」

やめろ加奈子、そこでやめておくんだ。あやせの口調がまた冷たくなつていくが、さつきの恐怖から解放され、気が抜けている加奈子は気が付かない。

「そりやあれでしょ！ 面白可笑しくみんなに話すに決まつてるじやん！」

ああ馬鹿。俺は片手で顔を覆つた。

「加々奈々子～！」

「ひつ？！」

加奈子はようやく自分が口を滑らした事に気付いたが、手遅れである。あやせが加奈子の頬つぺたを両手で引つ張る。

「いひやい、いひやい、あやへごみいんて」

「許しません。いつも人の秘密をばら撒いたらダメですって、言つてるじゃないですか

！」

「ゆるひいて、ごみいんなしやい。にいひやんたしゅへて」

加奈子が俺に助けを求めてくる。加奈子は先程救つて貰った恩人だ。俺も助けてやりたい、だがしかしもう一度あやせの機嫌を損ねたらと思うと、立ち向かう勇気が湧いてこない。すまん、ヘタレン俺を許してくれ。俺はそつと加奈子から目を逸らした。

「ここによ、うりやぎりゆもによーーーーー！」

「加奈子、今日という今日は許しませんよ。だいたい、いつもいつも……」

あやせの説教は5分位懇々と続いた。その間、加奈子の頬つぺたはグニグニ引っ張られ続けた。

「うー、加奈子様の美貌が崩れたらお前のせいだぞ、ショボ兄貴！」

頬を抑えて、涙目で加奈子が睨みつけてくる。怒りの矛先を俺に向けてくる。自業自得な気もするが、助けてもらひながら見捨てた罪悪感から、俺は加奈子の頭を撫でながら謝る。

「悪い悪い、ええっと名字なんだつけ？」

「来栖加奈子様だ！ ショボ兄貴」

頭に置かれた手をパシツと払いのけ、加奈子が宣言する。

「いい加減、ショボ兄貴はやめる。新垣だとあやせと被るし、京介でいいから」

「ふん、ならあやせの兄貴だし、あたしを特別に加奈子様と呼ぶ事を許してやるぞ、京介

！」

「へいへい、わかりましたよ加奈子様」「声に敬いが足りねーぞ、京介！」

年上に対してもこの態度、助けて貰つた恩があるから今まで我慢してきたが、そろそろ我慢しなくていいんじや無いだろうか？

「はつ、がきんちよを敬うはずねーだろ」

「だ、誰ががきんちよだし、お前の目は節穴か？」

「生憎と両眼とも1、0ですけど、なにか？」

「うくくこのヤロ!!」

加奈子が殴り掛かつてくるが、俺は右手で頭を抑える。はつはあ、がきんちよのリーチで届くわけねーだろ、悔やむなら自分の小ささを悔やむといい。

「ふ・た・り・と・も」

ビクツ！ またか？

またなのか？ しかしおかしいぞ？ 今回はこのクソガキを相手にしてただけだぞ、あやせが怒る理由は無いはずだ。恐る恐るあやせの顔を見る。なんだろう？ 怒るというよりムクれているといった感じだ。

「ずいぶんと仲が良くなりましたね。この短時間で？」

「はあ？ どこをどう見たらそうなるんだ？ こんながきんちよと仲良くなる訳ないだろ？」

「そ、うだぞあやせ！　こんなショボ兄貴とあたしが仲良くなるはずがねえ！」

「ショボ兄貴言うんじやねーよ、クソガキ！」

「あたしはクソガキでも、がきんちよでもねーぞ!!」

うー、と二人して睨みあう。ほら、どつからどう見ても仲が悪いだろう。しかしあやせはそんな俺らを見て、呆れてはあーとため息を吐く。

「もういいです。二人が仲良いのはわかりました」

「だから仲良くねー!!」

二人一緒にあやせに抗議する。だがそんな俺らの態度を見て、あやせは額に手を当て、より深いため息を吐いた。

「……それで加奈子、今日はどうしたんですか？　桐乃も一緒にやないみたいですし」「家に居ても暇じゃん！　だからぶらぶらしに来た。桐乃も何か用事あるって、最近あいつ付き合い悪くね？」

「桐乃も部活やっていますから、しようがないんじやないですか？」

「えー、前はそんなでもなかつたじやん、……それこそあれじやね？　おとこー！」

「もう、また憶測で物を言つて、怒りますよ」

あやせの発言に加奈子が、両手をわたわたさせて後ずさる。

「ち、違えーし！　ちゃんと理由あるし、ほら最近付き合い悪くなつたのは、ほんとじや

ね

「……まあそうですね。春になつてから、忙しそうですね桐乃」

「だべ、前より明るくなつたろ、あいつ」

「たしかに最近の桐乃、楽しそうですね」

「付き合いが悪くなつて、明るくなつたつて、ほらこれもう彼氏出来たが正解じゃね！」

「…………」

お、おう、この流れは不味いのでは無いだろうか？ 桐乃が付き合い悪くなつて、明るくなつたのは、おそらくオタク趣味の為だとと思う。……もしかしたら本当に彼氏を作つたのかもしれないけど。

俺の脳裏にオタク趣味に没頭する桐乃の姿が浮かび上がる。……やつぱり無いだろうな、あの猛者に立ち向かえる勇者はそうそう現れないだろう。桐乃の彼氏になるにはメルル、妹と恋しよつ、シスカリなど多くの強敵を乗り越えないといけないのだから。

違う違う、桐乃の彼氏になる為の手順を考えてどうする俺。不味いのは、このままだと桐乃が友人にオタクバレしてしまふんじやないか？ という事だ。桐乃の彼氏を見てみたい、尾行してみる、アキバもしくは黒猫達からオタクバレ。なんだろう一連の流れが予想できてしまう。……はあー、仕方ねえ、出来るかわからないけど、なんとか誤魔化してやるか。

「……そうなんでしようか？　……それならなんで桐乃は親友の私に話してくれないんでしょうか？」桐乃が私に隠し事をしてゐる？」

俺がなんとか桐乃の彼氏疑惑を誤魔化そうと考えていて、あやせがぶつぶつと呟いていた。あ、あやせさん、なにか雰囲気が凄く怖いんですけど。

「あ、あやせ？」

「なんですか兄さん。いま私は親友に隠し事をされてるかもで悩んでるので、話しかけないで下さい」

「そう、それだよ。その親友に彼氏が出来たら不味いのか？」

「……いえ、別に彼氏が出来てもいいんですけど……私に話してくれないのが嫌なんですす」

「友人に隠し事をされるのが、嫌だということか？」

「そうです。親友なら話してくれるのが、当たり前じやないですか！」

「え、別に隠す奴もいんじやね？そういうのを暴くのが面白れーし！」

「加奈子は黙つていて下さい!!」

「は、はい」

にしし、と笑う加奈子に、あやせが怒鳴りつける。あまりの迫力に直接怒鳴られてない俺も背筋がピンとなる。恐ええ、でもここでやめる訳にもいかないよな。まつたくな

んで桐乃の為に苦労しないといけないんだか。

「あやせ、例えば、本当に例えれば、その桐乃だつて？ そいつに彼氏がいて、その彼氏が教師とかだつたらどうする？」

「そ、そんな教師だなんて！？」

「待て、待て、だから例えればだ！ 例えば！ 漫画とかドラマで良くあるだろ！」

「そんなの止めるに決まつてるじやないですか！」

「まあそうだよな、でも桐乃がそいつを好きで好きでどうしようもなくて、止められるのがわかつてゐるから隠すとかは、仕方ないんじやないか？」

「……それはそうかもですけど、教師は止めますよ。不潔ですよ！」

「そうだな、じゃあ他の例えで、桐乃の相手が女だつたらどうだ？」

「か、彼氏の話でなんで女性になるんですか!? 桐乃は変態じや有りませんよ」

いや、二次元に限定すれば、全然有りえそうな過程なんだがな……あいつならたぶん、メルルのキャラに『大好きなの、付き合つてお姉ちゃん』なんて言われたら、二つ返事でOKしそうな気がする。

「……だから例えればだ。相手も桐乃の事が好きで両想いだつたとして、結婚するんじや

なくて、付き合うだけなら、法律上とかは問題無いよな」

「法律上は問題なくとも、女同士なんて……不健全ですよ」

「そうだよな、だから桐乃はお前に隠すかもしれない、いや隠すんじゃないか？」

「何が言いたいんですか、兄さんは」

「うん、親友同士でも、隠し事があつてもいいんじやないかって事」

「でも……」

「納得できないか？まあでも、親友なら相手が隠したいと思つてている事を暴くのは、俺は良くないと思うぞ」

「…………」

「というか、そもそも桐乃に彼氏がいるつて前提で話しているが、見当違いの可能性もある訳だし、あまり深く考えんなよ」

「そうですね。いつの間にか彼氏がいるものつて考えてました。勝手に考えて、桐乃に隠し事をされてると思い込んで……駄目ですね私」

彼氏はいないと思うが、桐乃があやせに隠し事をしてるのは事実だからな。バレた時はどうなつちまうんだろうな？あやせも桐乃も傷つかないといいんだが……考えてもどうしようもないか。とりあえずいまは落ち込んでるあやせを慰めよう。……加奈子には悪いが犠牲になつてもらうか。

「あんま、落ち込むなよ。だいたい桐乃に彼氏がいるつて邪推したのは、そこのがきんちよなんだから」

「がきんちよ言うんじやねー！ つてそこでわたしに振るのかよ!?」

「……そういえば、そうでしたね」

「あ、あやせもちよつと待つた。あれはちゃんとした推理で……」

「加奈子、これは決して八つ当たりとかじゃないですかからね」

「嘘だああああ!!」

にこりと笑顔であやせが加奈子に近寄っていく。すまん成仏してくれ。お前の犠牲は忘れない。

あやせに頬っぺたをつねられている加奈子を見る。……この後の飯、こいつも誘つてやるか。奢つてやるのが、せめてもの詫びだな。財布的に痛いけど仕方ない。俺は自分の財布を取り出し、三人分の飯代が足りるか確認した。



目の前で加奈子が頬を押さえて唸つてます。さすがにやり過ぎてしまつたでしようか？ でも加奈子の所為で、桐乃が私に隠し事をしているつて疑つてしましましたから、自業自得です。兄さんにも説得されてしましましたし、でも何か論点をずらされたというか？ 上手く言えませんが、とりあえず完全に納得は出来ません。親友の事を知

りたいというのは、間違いなんでしょう？

「おーい、もうお仕置きは終わつたか？ 終わつたなら、飯にしないか？」

加奈子とお話ししている間離れていた兄が近づいて来ます。いつの間にか結構な時間が経つていました。ちょっと長く買い物をしそうでしました。まあでも、夕御飯にはちょうど良い時間ですね。

「そうですね。ちょうど良い時間ですし、どこに行きますか？」

「ララポ内ならいろいろあるだろ？ 食べたい物あるか？ 高いところは無理だけどな」

「そうですね？ イタリアン、中華、何がいいですかね、迷ってしまいます！」

「おう、考えておいてくれ。おーい、加奈子、大丈夫か？」

私が何処にしようか悩んでいると、兄さんが加奈子に話しかけます。

「うう、あたしを売りやがって、このクソ兄貴！」

加奈子が兄さんを睨みつけます。それにしてもこの二人、仲良くなり過ぎな気がします。まだ会つたの二回目ですよ！ 兄さんは私の友人に對して、馴れ馴れし過ぎじやないでしようか？ 加奈子はまあ……加奈子ですから、仕方ないですけど。私の心にモヤツとした物が生まれます。

「悪い悪い、加奈子はこの後どうすんだ？」

「なんで京介に教えなきやなんねーんだよ!」

「まあそう言わず、教えてくれよ加奈子様」

「……仕方ねえな、特別だぞ。つつても、あたしも適当にどつか寄つて喰うつてだけだけどな!」

「そうか、なら俺達と一緒に食べないか?」

「えっ!?

兄の発言に慌てます。兄さん、何を勝手に決めてるんですか!? 今日は私にご馳走してくれるって話だつたでしょ! しかもちよつと仲良くなつたからつて、気軽に女の子を食事に誘うなんて、いつから兄さんは、そんなに軟派になつたんですか!? 最近兄が女の子の扱いにこなれてきた様な気がします。

「あたしは構わねーぞ!」

「そうか、あやせもいいか?」

ズルイですよ。これじゃあ断る事なんて出来ないじやないですか。別に加奈子と一緒に食事をしたくない訳じやないんです。加奈子は問題もいろいろと多いですが、一緒にいると楽しい私の大事な友人です。ただ今日は兄と一緒に外食の予定でしたから、それに他の人が入つてくると……何かが微妙に納得出来ないんです。

「……わかりました」

「そつか良かつた。加奈子に詫びをしてやらなきやと思つたんでな」

「詫びですか？」

「おう、ちよつと助けてもらつてな。あとお前も最後のちよつと八つ当たりしたろ？」

「……そうですね」

加奈子に聞こえない様に小声で兄が囁きます。そう言われると、今回は理不尽に怒つてしまつた部分もあつたかもしませんね。仕方ありません、兄さんとの外食はまた次の機会に期待しましょう。

「京介、あたしを誘うんだから、もちろん奢りなんだよな？」

「ああ、奢つてやるよ」

「ちえつ、やつぱりか、ケチ臭いなう。つて、ちよつと待つた、いま何て言つた!？」

「奢つてやるつて言つたんだが、やつぱり辞めるかなう、何せケチ臭いからなう俺」

「だ、誰もそんな事言つてないし、さすが京介、太つ腹、よつ、お大臣！」

「調子がよすぎですよ、加奈子」

加奈子の変わり身の早さに、兄と二人して苦笑します。加奈子は、やつぱり加奈子ですね。

「そうと決まつたら、早く行こうぜ！ タダ飯があたしを待つてるぜ！ ヒヤツホーウ

!!

「あつ、おい、高いところは無理だからな。おい、話を聞けよ！」

加奈子が兄さんの腕を掴んで走り出します。またまには、こういうのもいいかも知  
れないです。私は微笑みを浮かべて、二人の後について行きます。

# 第18話

俺は今じりじりと照りつける日差しの下、有明にある東京ビッグサイトに来ている。何故そんな所にいるのかというと、沙織に夏コミつて物に誘われた為だ。いまの心境は、あの時に断つとくんだけだ！ 沙織から電話がかかってきた、数日前の記憶が蘇る。

「お久しぶりでござる、京介氏！」

「おう、元気してるか？ 今日はどうした、またアキバへの誘いか？」

「拙者は元気いっぱい絶好調でござるよ！ 今回はアキバで無く、オタクの祭典コミックマーケット、通称コミケへお誘いしたいと思いましてな」

「コミケ……聞いたことがあるような？ というかオタクの祭典に、俺みたいな素人が参加しても、大丈夫なのか？」

「コミケは年2回ある、オタク最大のお祭りでござる！ お祭りゆえにオタクで無くとも、参加は全然問題無いでござるよ！ ちなみに夏に開催なので、今回は夏コミつて言うでござるよ！」

「ふーん、お祭りか？ それなら面白そうだな！ いつ行くんだ？」

「来週の金土日でござるよ！」

「金土日ね、ちょっと待つてくれ」

来週来週つと、金土は家族で墓参りか。えつと日曜なら大丈夫だな！

「金土は無理だけど、日曜なら参加できそうだ！」

「おお、ちようどいいでござるよ！　きりりん氏も3日目なら都合が付くとの事ですし、

全員で参加できるでござる！」

「じゃあ　来週日曜にな！」

「楽しみにしているでござる。場所と時間は後でメールを致しますぞ」

それでオタクの祭りという情報のみでこの場所に来た訳だが、俺の眼に映るのは、とてつもない人の列だ。百や千どころじゃない、これ万はあるんじゃないかな？

「なあ、これ全部その夏コミってやつの参加者なのか？」

「そうでござる。圧巻でござろう！」

「あたしも今回初参加なんだけど、噂通りこれは凄いわね」

「あら？　貴女が初参加なのは意外だわ。せいぜい、このワルブルギスの夜に翻弄されないよう注意することね」

「夜？　これ夜まで続くのか？」

「ち、違うわよ。ワルブルギスの夜というのは魔女達の酒宴で、その……このお祭りと掛

けたのよ」

「につひつひ、厨二的説明乙！　京介あんたもやるわね！」

「あ～なんだ、黒猫わるい」

「くくくふん」

黒猫が顔を赤くして、そっぽを向いてしまう。あれだな、たぶんギヤグを滑らして、自分で説明しないといけないみたいな恥ずかしさなんだろうな、きっと。

「それについても人数多いな、何人くらい並んでんだこれ？」

俺は周りを見渡し、並んでいる人達を眺める。とにかく人数が多い、凄いのはそれがきちんと列を成して統率されているところだろう。これを見ていると、日本人というのは、世界で一番秩序ある行動を取るのが上手い民族ではないだろうか？　と思えてくる。

「そうでござるな？　ここにいる人数はわからんでござるが、去年は確か3日目の合計人数は約20万でしたかな？」

「はあつ！　20万！」

「うわっ、聞くんじやなかつた。人数知つたら、余計暑いんですけど」

「あまり暑い暑い言わないで、こちらまで暑くなるわ」

「はあ？　あたしは一回しか言つて無いし、あんた三回言つてるじゃない。それって自

「爆じやない?」

「はあー、貴女は小学生なの? 数の問題じやないでしょ」

いつものジャレ合いが始まった。いや、マジでお前ら凄えよ! この暑さの中で、ほんと元気だよな。

「そもそもあんた、たしか闇の衣で暑さに強いんでしょ! ……あれ? そういえば今日は黒く無いわね、あんた」

「……いまは妖力が不足しているのよ」

「妖力って、はいはい邪氣眼邪氣眼」

「なるほど、この間のアキバで暑さに参つた訳でござるな?」

「勝手に納得しないでちようだい!」

あつ、そうだ何か違和感があると思つたら、今日の黒猫はいつもの黒ゴスロリでないのだ。暑さと人数の多さで、いっぱいいっぱいで見逃していた。白のノースリーブカツツソーに黒いフレアミニスカート、肩からハンドバッグをかけていた。なんというか普通の格好してると、こいつやっぱり美少女だよな! や、もちろんいつものゴスロリ姿も凄く似合っているんだが、なんというかギャップ萌えというのだろうか? ついつい目をやつてしまう。

「貴方まで、何をジロジロ見ていいのかしら? そんなに私の格好がおかしいのかしら

？」

「いや、そんな事ねえよ！　凄え似合つてるつて、まつたくなんでも似合うんだから、美人は得だよな！」

「あ、貴方、き、急に何を言うのかしら？！」

黒猫が顔を赤くさせて慌て出す。どうしたんだこいつ？　普通に褒めただけだろ？

「あーー何か近場が急に熱くなつて、超一不快なんですけど」

「まつたくでござる。時と場所をわきまえて欲しいでござるな」

「…………」

桐乃と沙織が睨んでくる。黒猫は黙り込んじまうし、俺が何をしたというんだ？　桐

乃達の視線から逃れる為に周囲に目を移す。……おかしい、目を移した先の男どもにも睨まれるんだが、俺に味方はいないのかねえ。はあーとため息を吐いた。

針のむしろな時間を過ごし、ようやくビッグサイト内に入ることが出来た。いや出来てしまつた。

「いやー、何これ？　空気がむわつとして、外より暑いんですけど」

「満員電車かよ!?　人詰め込みすぎだろ、これ!?　なんか息苦しいんだが」

「コミケはあまりの人数に、空気が薄くなるという都市伝説があるくらいでござるよ」

「そうね、私の知つてる噂は、オタク達の汗と熱気で会場内に雲ができるつて話ね」

おい、お前らそれは本当に都市伝説なんだろな？なんかこの暑苦しさを体験する  
と、マジでありそうな気がするんだが……

「ぎやく、いまデブとすれ違つたら、汗がヌメツてした、ヌメツて!?」

「桐乃テメエ、俺に張り付くんじやねーよ!?」

「京介、バリアになつて、バリアに!!」

桐乃がピタリと俺の背中に張り付く。人混みに押されるたびに、なんか柔らかい物を  
背中に感じる？ 前に微小女なんて言つちまつたけど、けつこう……いかん、いかん、煩  
惱退散煩惱退散！

「はつはつは、早速お二人とも洗礼を浴びたでござるな！」

「もう少し行けば、少しばマシになるはずよ」

「お前ら、なんでこれで、落ち着いていられるんだよ!?」

「……慣れでござるな」

「……慣れね」

「こんなん、慣れたくね―――！」

……黒猫に沙織よ、慣れという割にやけに遠い目をしているのはなんでだ？

黒猫の言う通り、入り口を抜け少し行くと多少マシになつた。あくまで多少だ、満員  
電車からは解放されたが、人混みの多さは相変わらず半端ないし、その人数による熱気

で空気は変わらずむあつと暑苦しい。

「まずは即売会に行くでござるよ」

「即売会?」

「同人誌が数多く売られているところよ」

「同人誌って、たしかあの薄いエロ本だつけ?」

「エロ本って言うな!!」

痛てつ、桐乃が俺の頭にチョップをかましてくる。だつて仕方ないだろ、俺がアキバで見たのは八割くらいエロ漫画だつた気がするんだから。

「まあまあ、お二人とも、とりあえず行くでござるよ」

沙織の先導に従い、即売会の会場に向かう。

「へー、こんな感じなのか」

即売会場は、壁がコンクリート剥き出しのままで天井が高く、倉庫のような所に机がたくさん置かれている。その机でそれぞれの人達が、自分の同人誌を売っているようである。

「ここで同人誌や各種グッズを販売しているのでござるよ」

「じゃあ、早速行きましょうか」

「ちょっと待つて、休憩ちようだい、休憩」

初参加の桐乃が、暑さと人混みにグロッキーだ。俺も正直かなり疲れたので、その案には賛成だ。売り場を離れ、人の邪魔にならないところで座り込む。

「では、これをどうぞでござる」

沙織が俺達にペットボトルのお茶を手渡してくれる。冷たつ!? これわざわざ凍らしてきてくれたのか? 相変わらず気がきく奴だ。ありがたくお茶を半分ほど飲み干す。ふはあー生き返る! 水がこんなに美味かつたのは久しぶりだ!

「水分補給は、ここでは生死に関わるから注意しなさい」

「生死に関わるって、一体何処の戦場なんだよ!!」

「京介氏、オタク達の戦場でござるよ! あつ、それと水分の取り過ぎも注意するでござるよ。トイレの待ち時間が30分とか、長いと一時間待ちでござるから」

あらためてなんて所に来てしまつたんだか。桐乃も愕然とした目をしている。

「そろそろ行くでござるよ」

「えー、もうちょっと休ませて」

「ふむ、そうでござるか。まずはメルルの同人誌を見に行こうと思つていたのですが、それではもう暫く休むと致そう」

「さつ、あんた達、いつまで休んでいるの、さつさと行くわよ!」

「……貴方には、呆れるしか無いわね」

もの凄い手のひら返しを見たぜ!? さつきまで絶望で曇っていた桐乃の瞳が、いまはキラキラ輝いていやがる。こいつのメルル愛は半端ねーな！ そして沙織、してやつたりのドヤ顔は止めろ！

「あのメルル馬鹿はともかく、貴方も早く立ち上がりなさい。あまり怠惰だと、ベルフェゴールに取り憑かれるわよ」

「へいへい」

黒猫にもせつつかれて、俺は重い腰を上げる。しかし黒猫も何処となく、そわそわと落ち着きが無い。ああなんだ、桐乃に文句言いながらも、結局お前も買いに行きたくて仕方なかつた訳ね。

「遅い、いつまで待たせるの。さつ、行くわよ！」

「ふふつ、今回は特別に、私自ら戦場を案内してあげるわ！」

「おい、両手引つ張んなよ！ 自分で歩くから」

「ふふふ、京介氏モテモテでござるな！」

桐乃が遅いと戻つて来て、俺の右手を引っ張る。左手はこれから買えるものを想像しているのか？ 上機嫌な黒猫が引っ張る。美少女二人に手を引かれ、まさに両手に花だが、向かう先がオタクの戦場では嬉しくない。それを理解しているのだろう、沙織が面白そうに茶化してくる。なので沙織に精一杯の悪態を返す。

「うるせー、これがモテモテに見えるなら、お前の目はとんだ節穴だあ!!」



「あやせー、お願ひ頼んでもいい?」

「何ですか、お母さん?」

「あのね、京介の布団を干して欲しいの」

「兄さんのですか?」

「そうなのよ、あのバカ、今日干して置くつて約束してたのに、干さないで出掛けちゃつたのよ」

「そういえば、今日は珍しく朝から出掛けましたね」

「お願ひ出来る?」

「いいですよ。そのままベランダに干せばいいですか? それともシーツとか外します?

「そのまでいいわよ。日に干して置けば大丈夫だから」「わかりました。やつておきます」

「ありがとね、あやせ」

お母さんに仕事を頼まれてしましました。まったく約束を守らないなんて、兄さん  
帰つたらお仕置きですね！

兄の部屋に入り、布団を持ち上げます。汗の匂いとそれだけじやなくて、何でしよう  
男の人の、これが兄さんの匂い……って私は何をしているんですか？！ これじやあ、ま  
るで変態じやないですか！？ 急いでベランダまで布団を持つていきます。布団を干し  
た後は窓を開けて、布団だけじやなくベッドも叩いて埃をはたきます。何でしようか？  
ベッドを叩いたら違和感が、ベッドの間に何かあるのでしょうか？ 兄さんのベッド  
の間に物が……きつとまたエッチな物を隠しているんですね。没収です没収！！  
私はベッドの間に手を差し込み、隠してある物を取り出します。しかしそれは私の想  
像していた物ではありませんでした。

「なんですか、これ！」

私の手元にあるのはアニメのDVDとゲームソフトです。『星くず☆ういつちメル  
ル』『maschera』『墮天した獣の慟哭』『機動戦士ガソダム』『真妹大戦シスカリ  
プス』

兄さんはオタクになつてしまつたんでしょうか。私の目の前が真つ暗になります。  
悪い事とわかつていますが、兄の部屋を家搜しします。マンガや雑誌、ゲームソフト  
などが出て来ましたが、あきらかなオタクっぽい物は出て来ません。かわりにエッチな

物は出て来ましたが……なんですか、この眼鏡つ娘DXっていうのは!? 表紙の娘が何処となく私に似ているような……兄さんと真剣にお話をしないといけないですね。……違います、いまはエッチな物でなくて、オタクっぽい物が問題なんです。もちろんエッチな物も気になりますが、それは後まわしです。

兄さんがオタクになつてしまつたなら、この部屋にある物じやあ少な過ぎますよね? しかもこのD.V.Dは途中の巻ですし、となると誰かから借りたのでしょうか? 私の脳裏に、麻奈実お姉さんの勉強会での会話が蘇ります。『凄つげえ濃い友人達が出来たんだよ。あいつら人の都合御構い無しにぐいぐいくるからいろいろと時間とられちまつたんだ』

兄さんにオタク友達が出来ました。それは最近で、その人達に兄はいろいろと勧められて兄さんがそれをやつてはいる。それなら最近の兄さんの不審な行動にも説明がつきます。私の想像は、おそらく間違つて無いと思います。

なんなんですか、それは!? 私はその人達に怒りを覚えます。私は兄さんがオタクに変わつてしまつのが許せません。兄の交友関係に、妹の私が口出しするのが間違つています。なんなんですか、それは!? 私はその人達に怒りを覚えます。私は兄さんがオタクに変わつてしまつるのはわかります。でも嫌なんです、兄さんが変わつてしまうのが。

私にとつてオタク趣味というのは、極端な話かもしれません、児童ポルノと同じ扱いです。そういう物は本当に極一部なのかも知れませんが、実際に小さい子供を性的な

目的で楽しむマンガや、パソコンゲームが有るのを知っています。そんな物をやり続けたら、本当に犯罪を起こしてしまうんじや無いでしょうか？　いま兄さんが借りている『真妹大戦シスカリップス』あれはシスカリ殺人未遂事件の元になつたソフトですよね。たぶんオタクになつても、兄さんは優しい兄さんのままだと思います。でも万が一、同じように影響を受けて、兄さんが犯罪者になつてしまつたらと思うと、怖くて仕方ありません。私はどうしたらいいのでしょうか。

……どれくらいぼーっとしていたのでしょうか？　いけません今日は午後から仕事があつたんでした。正直なところ、こんな気分でバイトに行きたくありません。休んでしまいたいと思います。でも家でじつとしていると、悪い方悪い方に物事を考えてします。バイトで外に出て体を動かしていた方が、余計な事を考えないでよい気がします。

私はバイトに行く為に、のろのろと準備を始めました。

## 第19話

「今日は散々な一日です」

私ははあー、と大きくため息を吐きました。兄さんの件がどうしても頭によぎつてしまい、バイトに集中出来ませんでした。カメラマンさんからも『あやせちゃん、今日は表情が固いね。リラックス、リラックス！』と言わってしまいました。結局バイトが終了するまで、調子を取り戻すことができず、スタッフさんに『お疲れ様。まあ偶には調子悪い日もあるよね。次回は頑張つてね！』と気を使って頂く有様でした。

「シャンとしないと！」

頬に両手を叩きつけて気合いを入れます。お金を頂いている以上、プライベートな事で調子を崩してしまうでは駄目です。今回の事は教訓として、次回はしつかり頑張ります。

頬に手を叩きつけた事で、周りから注目を集めてしまいました。う～恥ずかしい、地元の駅だから知り合いに見られていないでしようか？　私は逃げるようく小走りで、改札を抜けだします。

まったく、全て兄さんが悪いんです。私がこんなに悩んでいる事に気付きもせず、

きっと今も遊び回つているに違ひありません。

噂をすれば影と言いますが、兄の事を考えていたからか？ 兄の姿を発見しました。かなり前を歩いているので、向こうは気が付いていません。どうやら一人でなく、友人と一緒のようです。距離もあり後ろ姿なので、誰かまではわかりませんが、女性三人と一緒にみたีです。私は早足で兄の元へ駆け寄ります。私が兄さんの事で悩んでいるのに……女の子と遊んでいるなんて、ムカムカが抑えられません。

「兄さん！」

兄と女の子達が振り返ります。そしてそこにいたのは……



やつと地元に帰つて來た。やつぱりホームは落ち着くな！

夏コミではあの後もいろんな出来事があつた。メイドさんにメイドのエロ同人誌を売りつけられたり。どーやら俺とメイドとは相性が悪いらしい、碌な事が起こらねえ！ 黒猫が体験ベースのシスカリのゲームで、スタッフにパーカクト勝ちをする快挙を成し遂げたり。なんと言うか次元が違うというのを、生で体験した気分だ。

コスプレスペースでは、なんとドラゴンボールのセルがいた。あれはマジヤバかつた

！ 思わずかめはめ波のポーズで写真を撮らせて貰つた。これはほんとに嬉しかつた

なんだかんだいつて、まあ今回も悪くなかった訳だ。最初の方は後悔の嵐だつたけどな！

もちろん桐乃達は俺以上に夏コミを満喫していたよ。こいつら一体何冊もしくは何個くらい同人誌やグッズを買ったんだ？ よく金が足りるよな？ 桐乃はおそらく読モで稼いでいるんだろうな？ でも黒猫と沙織はどうしてんだ？ 実家が金持ちなのか？ そういうえば、こいつらと結構遊んでいるけど、お互いの事あまり知らないな。オタク趣味の好みは知ってるのにな！ ……まあ焦らなくとも少しづつ知つていけばいいか、今回は黒猫がゲームの達人つて分かつたし！

さて、問題はこのメイドのエロ同人誌があやせにバレないようにならないとな。バレたらプレッシャーを発した妹に『兄さん？』と問い合わせられるからな。あれ？ そんな事を考えていたからか？ あやせの声が背後から聞こえた。

「兄さん！」

振り向くとそこには妹の姿が、もちろん幻覚や幻では無い。

「あやせ？」

妹は俺の声に反応を示さない。啞然とした表情を浮かべ、俺の隣の人物を見詰める。

ここでようやく俺は現状の不味さに気が付いた。黒猫や沙織は構わない。でも桐乃は駄目だ。桐乃が俺と一緒にいるところを、あやせに見られちゃいけなかつたのだ。バカか、俺は！ 地元の駅近くで一緒にいたら、こうなる可能性が高いのは当たり前じやないか。

「桐乃……」

「あやせ……」

「……ねえ、兄さん。なんで兄さんと桐乃が一緒にいるんですか？」

「えつと……それは、い、いま偶然会つて……」

「それは嘘ですよね。さつきまで桐乃とそこの人達と楽しそうに話していましたよね。……兄さんは私が嘘が大嫌いって知つてますよね。ならどうしてそんな嘘を吐くんですか？」

「うう……すまない」

「謝らなくていいですよ。私に、どうして、嘘を吐いたのか、教えて下さい」

「あ、ああ……」

あやせの迫力に上手く言葉が出て来ない。

「あやせ、それはね……」

「桐乃は、黙つていて下さい！！ ……いまは兄さんに聞いています」

俺が限界だと思ったのか、桐乃が説明しようとするも、あやせの叫びに遮られてしまふ。こんなに怒ったあやせは初めてだ。

「それで、どうなんですか兄さん？」

「…………つ」

「黙っていたら、わからないですよ」

俺はショックのあまり、思考が停止してしまう。そんな俺の姿を見て、あやせはあー、と大きく息を吐いた。

「わかりました……桐乃に聞きます。なんで桐乃が兄さんと一緒にいるんですか？」

俺が不甲斐ない所為で、桐乃にターゲットが向かってしまう。

「えつとね。それはね……」

桐乃は説明しようとするが、言葉が止まってしまう。俺もそうだつたが、なんと説明すればいいのかわからないのだ。友人になつたと眞実を説明するのが正しいと思う。でもなら、なんで隠していたかが、問題になるのだ。下手をすると、桐乃のオタクバレもしてしまうかもしれない。そこまで考えてしまうと、言葉が出て来ないのだ。

「それはなんですか、桐乃？」

「それは……」

「…………親友と思つていたのは、私だけのようだつたんですね」

「ち、ちが……」

「なにが違うんですか!! 桐乃と兄さん知り合いですよね! あんなに楽しそうに話していたんですから! それなのに、ずっと私に隠してきて、いまも何も話してくれない。それが親友の行動なんですか!!」

「ごめん、ごめんなさいあやせ。あたし京介と友達になつたの。隠していく本当にごめんなさい」

何も話せないおれ達に、あやせがついに爆発してしまった。桐乃が堪えきれず謝罪して、秘め事を認めた。桐乃の謝罪により少し落ち着いたのか、あやせが淡々とした口調に戻り、また俺に向かい質問を続ける。

「兄さん……桐乃とは、いつから友達になつたんですか?」

「……四月の終わり頃に、偶然会つてな」

「そんなに前から……私に隠していたんですね」

「あやせ、すまない……」

俺はあやせに深々と頭を下げた。

「そうですか……四月ですか……」

あやせが言葉を切り考え込む。おれ達はそれを固唾を呑んで見守る。

「……兄さん、桐乃、私にもう嘘は吐きませんか?」

「うん、あやせにもう嘘は吐かない。誓う！」

「ああ、もう嘘は吐かない」

「わかりました。……桐乃と兄さんが友人になつていていた事は、許します」

「ほんと、あやせ！ ありがとう！」

「ありがとう、あやせ。そして本当にすまなかつた」

桐乃がようやく明るい顔をする。俺もほつと胸を撫で下ろした。正直もつと追求されるものと思っていたので、助かつた。

あやせが修羅場に硬直していた黒猫と沙織に向き合う。

「ごめんなさい、恥ずかしいところをお見せしました。あなた達も兄さんの御友人ですか？ はじめまして、京介の妹のあやせと申します。いつも兄がお世話になつております」

「こ、こちらこそいつも京介さんにお世話をなつております。槇島沙織と申します」

「はじめまして、五更瑠璃です。いつもお世話をなつています」

あやせが深々とお辞儀をする。それに慌てたのか、それともさつきの迫力の所為か？ 黒猫と沙織が、桐乃の親父さんのとき以来の生真面目な態度を取る。

……とりあえずなんとかなつたのか？ 桐乃のおたくバレはしなかつたし、最悪の事態は回避出来たか。俺は安堵の息を漏らした。しかしその俺の考えは大甘もいいところ

ろだつた。あやせの追求はここからが本番だつたのだ。

「皆さんに一つ聞きたい事があるんですが、いいですか？」

「ええ、構わないわ」

「うん、なんでも言つて」

「どうぞでござ……いえ、どうぞ」

「ああ、なんだ？」

「ありがとうございます、お言葉に甘えます。実は兄の部屋からアニメのDVDとゲームソフトが出てきたんですが、それはあなた達が貸したものですか？」

「「「…………」「」」

おれ達は一言も喋れなかつた。空気が再び凍つていく。あやせの言葉は質問形式を取つてゐるが、あれはもう確信していて発した言葉だろう。黒猫風に言うならば、言葉が断罪の刃となつておれ達を斬り付けてきた。

「あれ？ 答えてくれないんですか？ ねえ兄さん、あれはこの人達から借りたんですか？」

「そ、それは……」

なんて事だ、よりによつてこいつらに借りていた物がバレたなんて！？ 桐乃と一緒にいるところを見つかる、もしくはそれ、どちらか片方ならまだしも、両方同時なんて最

悪だ。

「兄さん、桐乃、もう嘘は吐かないんですよね？」

「あう……」

「ああ……」

「それは私が全部京介に貸したのよ！」

黒猫がおれ達を見るに見かねて、庇ってくれた。しかしあやせの追求は止まらない。「ねえ、桐乃それは本当？」

あやせが桐乃の瞳を覗き込む。桐乃はさつきあやせに嘘は吐かないと誓つてしまつていて。おそらくここまで流れを読んで、俺と桐乃の嘘を封じたのだろう。おれ達はあやせの手の平で踊らされてしまう。

「…………あたしも京介に貸した」

「やつぱり…………そうなんですね。違つていたらよかつたのに……」

嘘を吐かないと約束した桐乃は、肩を落とし正直に告白した。それを聞いたあやせは寂しそうに俯く。

短い沈黙の後、決意した顔であやせは、桐乃達三人に言葉を告げた。

「勝手なお願いですが、もう二度と兄さんに近づかないで下さい」

「なつ?! い、嫌よ!」

「なんでござるか、それは!?」

「……本当に勝手ね、貴女に何の権利があるのかしら?」

あやせの予想外の発言に三人が反発する。

「私は兄さんの妹です。兄さん、兄さんは私がオタク趣味を嫌っている事を知っていますよね?」

「あ、ああ……だけど、いくら何でもあいつらに近づくな! は無いだろ!?!」

あやせのオタク嫌いは知っていたが、まさかここまで物とは思っていなかつた。

「私は兄さんにオタクになつて欲しくありません。兄さんは彼女たちと一緒にいて、まつたく影響されないって言えますか?」

「そ、それは……」

いまの段階でもオタクの影響は受けている。

「それに兄さんはオタク趣味が好きなんですか? ただ勧められてやつてているだけじゃないですか? 兄さんが本当にそれが好きで、自分で選んだなら、凄く嫌ですけど、ほんとに悔しいんですけど、私には止められないかもしません」

「俺は……」

「でも人から言われてやつてているなら、辞めて下さい。お願いします」

「…………」

あやせが俺に頭を下げる。俺にとつてオタク趣味はまだ大切では無い。最近は結構楽しめるようになつてきたが、無いなら無いで別段困つたりはしない。ただしこいつらとの絆には必要不可欠な大切な物なのだ。

「さつきから聞いてれば、貴女こそ、京介に自分の都合を押し付けているじゃない！」  
 「妹なんだから、押し付けてもいいじゃないですか！ それに貴女たちには、もうオタク仲間がいるじゃないですか！ オタクじやない兄さんを巻き込まないで！ 私から兄さんを奪わないで下さい！！」

「あ、あやせ、あやせの呼吸音が、凍つた空気の中で聞こえる。

「あ、あやせ、そのね？」

桐乃が場を落ち着かせようと、意を決して声をかける。だがそれは最悪の展開を招いてしまう。あやせが哀しげな瞳で桐乃を見詰める。

「桐乃……あなたもオタクだつたんですね」

「えつ、そ、それは……」

「もういいんです。さつき兄さんに物を貸しているつて言つた時にわかりましたから、それに槙島さんと五更さんの格好と、手に持つてゐる物でわかりますから」

黒猫と沙織の格好は、私はオタクですと全身で主張しているような姿である。さらに今は夏コミで買った紙袋のパッケージ萌えキャラが、これでもかという位にオタク色を

強調している。あいつらと一緒にいて、さらに俺にアニメDVDを貸したのを認めてしまった以上、桐乃がオタクなのは隠しきれない。

「桐乃、桐乃もオタク趣味なんて辞めませんか？」私は親友として、誰よりも桐乃の凄さを知っています。桐乃にそれは似合いません！　お願いします桐乃、それを諦めて私と一緒に行きましょう！」

あやせが心の底から懇願して、桐乃に右手を差し伸べる。しかし桐乃がその手を取ることはなかつた。

「…………めん、あやせ、それは絶対無理。あたしはオタク趣味が大好きなんだ」

「どうしても…………ダメなんですか？」

「うん…………どうしても」

「私より、オタク趣味の方が…………大事なんですか？」

「そ、それは違う！　あやせは大好き、ほんとに親友だと思つてる！　でも、あたしはどうちかなんて、選べない！」

「そうですか……」

「さつき言いましたけど、自分で選んだなら、私には止められません。桐乃がそれを選んだ。

あやせの目から光が消えたように見えた。あやせが感情を押し殺した声で喋り始めた。

でしまつたなら……しかたないですよね

「あ、あやせ？」

不穏な気配を感じたのだろう、桐乃があやせに呼び掛ける。しかしあやせは、桐乃の呼び掛けに反応せず、淡々と言葉を紡いでいく。

「私はどうしても……オタク趣味を認められません。桐乃がオタク趣味を捨てられないなら……ごめんなさい桐乃、私も桐乃の事は……大好きでした。……本当に親友と思つていました」

「えつ、え？」

桐乃はあやせの言葉を理解出来ないのか、いや、理解したくないのか、混乱している。だけど俺には理解出来てしまつた。やめろ、やめてくれ、あやせ！ 友人をしかも、親友を、過去形で語らないでくれ！ 切り捨てないでくれ！

しかし俺の希望は叶えられない。あやせは凍つた表情をして、無感情な声で告げていく。

「安心して下さい、きり……高坂さん。このことは……絶対に誰にも言いませんから……それに万が一漏れても大丈夫ですよ……高坂さんが……オタクだなんて誰も信じないですから」

「あや、せ…？」

「あやせ、それ以上言うんじゃない!!」

俺はあやせを止める為に叫びながら、あやせと桐乃に割つて入るべく足を動かす。

だけど俺は間に合わなかつた。あやせは俺の言葉では止まらず、あやせの口から決定的な言葉が溢れ落ちた。

「私は今後あなたとはお付き合いできません。もう学校でも話しかけないでください、高坂さん」

「――――――

桐乃が真っ青な顔で立ち尽くす。

「あやせ!!」

パシッと俺の手の平に衝撃が走る。

俺は愕然と自分の右腕を見る……あやせの頬を張つてしまつた右腕を。

俺の口から思わず否定の言葉が零れ落ちた。

「これは、違つ……」

あやせが呆然と立ち尽くし、ゆっくりと俺に叩かれた頬に左手を添える。

「兄さんは……桐乃を選ぶんですね」

あやせが淡々とした口調で告げる。その言葉は絶望を感じさせる乾いた声だ。

「そんなことは……」

ないと、言つてやれなかつた。その言葉を口にするには俺の右腕が裏切つてしまつたのだから、俺自身がいま自分の行動を一番信じられない思いでいるのだ。

「否定してくれないんですね……兄さん」

あやせが微笑みを浮かべる。ただしその微笑みは、全てを諦めた者が浮かべる様な乾いた笑みだつた。

「あーあ、まさか親友だけでなく、兄さんまで失つてしまふなんて……可笑しいですよね」

あはは、と力無くあやせが笑つている。

「違うんだあやせ!!」

俺はありつたけの力を振り絞り、あやせに呼びかける。俺はただあやせと桐乃二人に親友のままでいて欲しいだけなんだ。しかしもう俺の声はあやせに届かなかつた。

「あれ？ おかしいな……こんなに可笑しいのに、なんで泣いているんでしようか、私は？」

感情の限界を迎えたのだろう。笑いながら、あやせの両眼から涙が零れ落ちる。

「あやせ!?」

「近づかないで!! もう何も信じられない、嘘つき!! もうやだあ!!」

あやせの涙を見て、駆け寄ろうとする俺を、妹の悲痛な叫びが押し留める。そしてあ

やせは叫んだ後、踵を返して走り出した。

ちくしょう俺は何をやつているんだ！ 大事な妹を傷つけて、ふざけんな！ 自分自身への怒りでどうにかなりそうだ。クソがあ、なに呆けてやがる俺、さっさとあやせを追つ掛けるぞ！

あやせの言葉からずつと呆然と立ち尽くしている桐乃、心配そうにこちらを見つめる黒猫と沙織を一瞥する。

「黒猫、沙織、桐乃を頼む!!」

返答を聞く前に、俺はあやせが走り去った方角へ全力で走り始めた。

## 第20話

俺が呆けていた時間は十秒程度だろう、なのにもうあやせの姿が見つからない。ちくしょう運動能力に差があるのか？ もつと身体を鍛えておくんだつた。分かれ道、右か？ 左か？ 早くも肩で息をしながら、買い物帰りだろう通行人のおばさんに尋ねる。

「す、すいませ、ん」

「わっ！？ あんたどうしたんだい？ 大丈夫かい？」

息も絶え絶えの俺を、おばさんが心配してくれる。ありがたいが、いまは用件だけを素早く告げる。

「い、いまここを、女の子が、走っていき、ませんでした？」

「あ、うん、そうね。あつちに走つて行つたわよ」

「ありが、とうございます」

おばさんが右側を指差す。

「何かわからないけど、頑張んなさいよ！」

親切なおばさんの声援を背に受け、もう一度走り出す。しかし走つても、走つても一向にあやせの姿は見えて来ない。どうする？ このまま闇雲に走り続けるか？ いや、

あやせが行きそうな所に的を絞つた方が良くねえか？

……よし、まずは家だ。帰つていってくれよ、あやせ！ 家に向かつて、走り出す。息が苦しい、脇腹が痛い、だけどそんなの関係ねえ！ あんな姿の妹を放つて置く位なら、どんな痛みにだつて耐えてやる！ あやせを見付けられるなら、フルマラソンでもしてやるよ！

「か、母さん、あ、あやせ、帰つ、て来てない？」

俺は玄関をこじ開け、母を呼ぶ。呼吸が乱れているので、大声で呼ぶつもりが大した事がない声量になつてしまふ。ただ幸いな事に母の耳には届き、リビングから出て来てくれた。

「あんたいきなりどうしたの？ つて汗だくじやない。早くお風呂入っちゃいなさい！」

俺の事はどうでもいい。のん気な母の言葉が瘤に障る。いや、母さんは何も知らないんだから当たり前だ。八つ当たりしてどうする。怒鳴りつけたくなる気持ちを抑えて、再度問い合わせた。

「あやせ、帰つて、来た？」

「あやせ、まだよ？ ……何かあつたの？」

母の声が心配そうになる。俺の様子に何かを感じたのだろう。ただ説明している時

間は無いので、俺は踵を返した。

「ごめん、母さん。また出てくる。あやせが帰つて来たら、携帯に連絡いれて」「わかったわ。あつ、ちょっと、京介!」

母の呼び止める声が聞こえたが、構わず進む。

次は何処に行く？ 俺は自転車に跨り走り出した。

「くつ、そ、こ、こにも、いない、か？」

俺ははあ、はあ、と肩で息をしながら、子供の頃よくあやせと一緒に遊んだ公園を見渡す。胸の鼓動がうるさい、足がガクガクする。心の中で『もう、諦めろ』と言う悪魔を握りつぶす。

学校にも、近所の公園にも、商店街にもあやせの姿は見当たらない。そろそろ探し始めて一時間は経つたろうか？ 太陽がオレンジ色の光を帶びて来た。早く見付けねーと、焦りばかりが募つてくる。次はどうする？ 麻奈実の所に行くか？

また走り出そうとした時に、唐突に昔の記憶が蘇る。膝を抱えて泣いている子供の頃のあやせの姿が脳裏に浮かんだ。

「あそこか？」

俺は残った力を振り絞つて、自転車を走らせた。

石垣の階段を駆け上がり、ほどほどに立派な鳥居をくぐり抜ける。ここであつていて

くれ。神社の境内の裏手に回り込む。

いた!? あやせが昔のように膝を抱え俯いている。見つかった!! 僕は安堵と疲れの為、膝から崩れ落ちそうになつた。いや、氣を抜くんじやねえ！ むしろこれからが本番だ！ 僕は力が抜けた膝に手を叩きつけて氣合いを入れた。その音に反応して、あやせがゆっくり顔を上げた。

「……なんで来たんですか？」

あやせは泣き止んでいたが、目は充血して、汗と涙で化粧が崩れて、酷い顔だ。

「なんでもって、当たり前だろ！」

俺はガクガクする足を引きずり、あやせに向かつて歩き出す。

「近づかないで下さい！ 兄さんは桐乃の方が大切なんでしょ!! もう放つといて下さい!!」

「…………」

「こないで下さい!!」

「…………」

「こないでよ!!」

「…………」

「こないで…つたら……」

俺は妹の叫びを無視して歩き続け、あやせの正面で座り込む。あやせに目線を合わして、静かに語り掛けた。

「放つて置けるはずねーだろ。大切な妹が泣いているんだから」  
また感情が高ぶったのか、あやせの瞳から涙が溢れている。

「そんなこと言つても、兄さんは……私をぶつたじやないですか!! 桐乃を…選んだ

じやないですか!!」

「違う、それは違うんだよ……」

「何が、違うんですか!!」

「あのとき、俺はお前に、友達を切り捨てる奴になつて欲しくなかつたんだよ」

「…………なんですか、それ」

あやせが俺から視線を逸らした。

まつたく勝手な話だ。俺は結局、自分の都合をあやせに押し付けることしか出来ない。

「勝手な言い分かも知れないけど、俺にとつてお前は、いつまでも誇れる、自慢の妹でいて欲しいんだ」

「…………ほんとに、勝手……」

あやせが少し顔を俯かせた後、俺に向き合つた。

「……私は、兄さんの……自慢なんですか？」

「ああ、そうだよ、可愛い可愛い、最高の妹だよ!!」

俺は間髪入れずに、あやせに応えた。

あやせが俺の顔をじっと見る。その瞳には、まだまだ涙が滲んでいる。

「するいです……………いまから、兄さんの悪口を言います」

「それでお前の気がすむなら、好きなだけ言つてくれ」

「……兄さんのバカ」

「ああ」

「兄さんのアホ、ドジ」

「ああ」

「兄さんの変態、地味顔、女誑し、天然口説き魔、スケベ、あと……えつと、メガネフエチ」

「……………あ……………ああ」

「……………あやせの気がすむまで罵倒させてやろうとしたが、早くも俺の心が限界を迎えるだ。最後の……もしかしてあれも見つかってしまったのだろうか？」

「あやせは俺を罵倒したおかげか？　涙が止まりだしたが、今度は俺が泣きそうだよ！　あやせがそろそろ泣き止みそうなので、ポケットからハンカチを取り出し……ハンカチが無い。……仕方ねえ！　俺は指であやせの涙をぬぐつた。

「……兄さん……キザです」

「……うつせえ、こういう場面でハンカチを忘れてくるのが、俺らしくていいだろ！」

「ふふつ」

あやせが微笑んでくれる。妹の笑顔はやつぱりこうでないとな、さつきみたいな微笑みは、もう二度と見たくない。

いつもの様な雰囲気が戻つたことに安堵する。ただあやせの説得はこれからなのだ。まだ気を緩める訳にはいかない。

「あやせ、ぶつてしまつてすまない。頬つぺたは大丈夫か？」

「……大丈夫です」

あやせの言葉通り、時間が経つた為か？ あやせの頬には跡は残っていない。

「……兄さんにぶたれたのは、いつ以来でしたつけ？」

「俺が暴力兄貴みたいな言い方するなよ。さあたぶん、小さい頃けんかして以来じやねーか？」

「ふふつ、ええ……子供のときは、けんかしましたね」

「ああ、昔からお前には敵わなかつたよ」

懐かしい、俺が小六の頃までは時々あやせと喧嘩していたのだ。ちなみに小三の女の子が六年の男子を力で倒すのだから、恐ろしい。きっとあの頃からだろう、妹に頭が上

がらなくなつたのは。

「……どうして、ここが分かつたんですか、兄さん？」

「……ああ、泣いているお前の姿が、あの時とダブつたからな……チビ元気してるか？」  
「そうですか……もう、兄さん、チビじやなくて、モモですよ。ええもう、すっかり大きくなつてますよ！」

チビ、いやモモはおれ達が、ここで見付けた捨て猫だ。神社の境内の裏、ダンボールの中での中で、ニヤーニヤー鳴いているのを、子供の頃のおれ達が見付けたのだ。あの時、なんで境内の裏に行つたのかは、もう忘れちまつたけどな。

その捨て猫をどうしたかというと、まあお約束通りというか、規定通りというか、家に連れて帰つて、母親に『もとの場所に返して来なさい』となつた訳だ。ただこのとき、普段あまり我儘を言わないあやせが猛烈に反発し、母さんと喧嘩して家を飛び出してしまつた。

その後、俺が家を飛び出した妹を見つけたのが、この境内の裏だつた。現在と同じ所で、あやせは子猫の入つたダンボールを抱えて、泣きじやくつていたのだ。だから泣いているあやせの姿が浮かんできて、ここに辿り着く事が出来た訳である。

ちなみにその子猫は、あやせの小学生時代の友人が引き取つてくれ、すくすくと成長しているらしい。

「あやせこそ、どうして、この場所に来たんだ?」

「……なんででしょう? ……もしかしたら、ここにいれば…兄さんが来てくれると思つたのかもしませんね」

あやせが優しく微笑む。

「……そつか」

「あの時は……お母さんと初めて大ゲンカして、悲しくて、寂しくて…そんなところに兄さんが来てくれて……凄く、嬉しかったんですよ」

「…………なんか、照れるな…」

俺が頬を指で搔いている姿を見て、あやせがクスクス笑つていて。どうやらもう完全に落ち着いたようだ。

俺は大きく息吸い、ゆっくり吐き出す。

……これから俺がいう事は、せつかく落ち着いたあやせの気持ちを搔き乱してしまうかもしれない。でも黒猫、沙織、そしてなによりあやせと桐乃の事を、俺は何とかしたい。

「あやせ……お前は何で、そんなにオタクの事が嫌いなんだ?」  
「今まで微笑んでいたあやせの顔が、強張つた。



『黒猫、沙織、桐乃を頼む!!』

そう言つて、彼は妹を追いかけて走り去つた。

なんでこんな事になるのかしら、お昼はあんなに楽しかつたというのに、私は運命の女神を呪いたくなる。

目の前には真っ青な顔で茫然と立ち尽くしている桐乃がいる。  
「……貴女……大丈夫…？」

もちろんとも大丈夫なんて言える状態では無い。それが分かつても、他にかける言葉が浮かばない。

「く、黒猫、どうしよう……あ、あたし…あやせに、親友に…………うわあああああああ」

私が話しかける事によつて、張り詰めていた糸が切れたのか、桐乃が泣き崩れた。

……親友にあんな風に言われてしまつたのなら、無理は無いと思う。普段は強気に私をバカにしてくる桐乃が、酷く弱々しく見える。

私と沙織は、そんな桐乃を抱きしめた。

「あ、あた…あたし……」

「大丈夫でござるよ。きりりん氏、大丈夫、大丈夫」

「わたし達はここにいるから、いまは思いつき泣いてもいいわ」

「どれくらい経つたろうか？ 嘸咽をしていた桐乃が、少しずつ落ち着きを取り戻していく。

「……黒猫、沙織、ごめん…ありがと」

「いいでござるよ。拙者ときりりん氏の仲でござろう」

「言いたい事があるなら、全部吐き出しちゃいなさい。……今回は特別に聞いてあげるわ。貴女がそんなど、調子狂うのよ……」

「…………うん、あんがと……」

まつたく、酷い顔ね。桐乃の顔は涙と鼻水で凄いことになつてている。私は桐乃にハンカチを手渡した。

「ほら、使いなさいよ。……貴女酷い顔よ」

「…………ん」

桐乃がハンカチで涙を吹き、チーンと鼻をかんだ。……遠慮という事をしないわね。まあでも、ようやくらしくなつてきたのかしら？

「…………あたし、親友に…あやせに、嫌われちゃつた……」

「…………きりりん氏…………」

「……それに、どうしよう。あ、あたし……京介にも、助けて貰つたのに……京介にも、迷惑かけちゃった……」

せつかく泣き止んだのに、また桐乃の瞳に涙が溜まつていく。

「落ち着きない!! 貴女の親友の件はともかく、京介の件は、わたし達三人全員の責任よ

!!」

「そうでござるよ!」

「でも……」

「でも、じゃないの! それに……きっと、あの男が何とかしてくれるわ!」

「京介……が?」

……全て彼頼りというのは、とても歯痒いわね。でも彼と妹が何処に行つたか分から  
ない私に出来る事は何も無い。……待つてているだけなのは、性に合わないわ。

それにもしても京介も、とんでもない妹を持つたものね。まるでゴルゴーンの魔眼に睨  
みつけられた様な迫力だつたわ、彼女。

「そうよ! 貴女の家族事情に突つ込んでいく様な人なのよ! 自分の妹の為なら、そ  
れこそどんな無茶でもやり遂げるに決まつてるわ!」

「ハハツ、そうでござるぞ! あの京介氏でござるよ、きっと何とかして下さるに違ひな  
いですぞ!」

「……そうかな？ ……そうよね、京介ってシスコンっぽいから…あやせの為なら、きつと凄い頑張るわよね」

ようやく桐乃に少し明るさが戻った。まだ笑いは強張った無理をしたものだけれど、さつきよりは全然桐乃らしい。

……わたし達がこれだけ信頼しているんだから、任せたわよ、京介！

私はきつといま、妹の為に全力で走っているだろうあのお人好しに想いを馳せた。

## 第21話

あやせは淡々と俺に説明してくれた。

あやせの話をまとめると。母さんが勤めているPTAの会合を手伝つた時に、美少女アダルトアニメやゲームの規制を求める講演に参加した。そこで小さい子供を性的な目的で楽しむマンガや、パソコンゲームが有る事を知つてしまつた。なので妹にとつてオタク趣味は児童ポルノと同じ扱いのようだ。

またシスカリ殺人未遂事件という事件があり、その事件の犯人が、俺が桐乃に借りたシスカリの影響で事件を起こしたと自供した事から、オタク趣味をやつていたら、俺や桐乃が犯罪者になつてしまふんじやないかという心配をしているとの事だ。

オタク趣味が児童ポルノと同じ扱いか……俺があやせの立場だつたとすると、桐乃があやせに言つた事はつまり……赤城に『俺は口リコンなんだ』と言われ……いや待て、あやせは女性だから……とすると、赤城が『俺、小さい男の子が、大好きなんだ』と俺に告白する。なんだそんな事か。ああ……これは通報するしかないな。お巡りさん、こつちです。

駄目だ!! これじゃあ桐乃の趣味を認めろなんて言えねえー!!

落ち着け、俺！……まずはシスカリ事件の方を何とかしよう。

「あやせ、おれ達が犯罪者にならないか心配してくれて、ありがとな」「わかつてくれたんですか？なら兄さんもオタク趣味は辞めて下さい。一緒に桐乃を説得……」

あやせの顔が歪み、言葉を途中で切つた。たぶん桐乃に言つてしまつた事を思い出したのだろう。でも俺は安心した。言葉では、ああ言つてしまつたが、あやせはまだ桐乃の事を心配している。決して親友を見限つたりはしていないのだ。

「落ち着け、あやせ。桐乃の事は、もう一度後で、ゆっくり話そう」

「…………」

あやせは答えない。俺ははあー、と溜息を吐いた。

「あやせ、俺はアニメやゲームで犯罪者になるつて事は無いと思うんだ」

「嘘です！ 実際にシスカリ事件で、犯人が自分で言つてるじゃないですか!!」

「すまん、言葉が足りなかつた。オタク趣味が犯罪を助長する可能性はあるかも知れない」

「なら……」

「だけど全く助長しないかも知れない。むしろ逆に犯罪を抑制する可能性もあるかも知れない」

「……抑制ですか？」

「人つて、禁止されるとやりたくなつたり、欲しくなつたりするだろ？ 呪童ポルノは禁止されてるから、オタク趣味を代わりにして実際に犯罪をしない様にするとか……」

「……代償行為ですか？ でもそれは……」

極端な話が、禁酒法じやなかつたかな？ たしか密造酒や裏での取り引きなんかで、犯罪が増加したみたいな……まあうる覚えの知識だが。

あと海外に比べて、日本の児童性犯罪は少ないつて聞いたことがあつたような？ まあこれは日本の治安が良いからなどもあるから、参考になるか分からないけどな。

「そう、それ！ ……まあ本当に抑制に繋がつてるかは分からないけどな。だけど逆に言えば、その犯罪者一人だけの意見で、犯罪の助長になるつて事も言えなくないか？」

「それは……でも、実際に事件は起こつてますし……」

「たしかに事件は起こつたけど、シスカリが本当に人を狂わせるなら、既に禁止されてなきやおかしいんじやないか？」

「ちょっとずつ、影響があるとか……」

「その……オタク趣味は、良い面もあれば、悪い面もあると俺は思うんだ。だから禁止されていらないんじやないかな？」

「…………」

あやせが黙り込む。

こんな説得で大丈夫なのだろうか？ 自信は無いが、いけるところまでいこう。あと、あまりオタク趣味を肯定し過ぎるのも不味いよな。ちょっとフォローしておくか。「まあ俺は、小さい子供のエロい物を肯定したいわけじゃないんだ。俺、口リコンじやないしな」

「……それは知つてます。兄さんが持つっていたエツチな物は、胸が大きな人が多かつたですからね」

「ぶつ、お、お前、そこでそれを、持つて来るなよ!?」

思わず唾を吐き出しちまつた！ まさかのカウンター・パンチだ！？

あやせが冷たい目で俺を見据える。

「なんですか兄さん？ ……今回眼鏡つ娘DXつて物を見つけたんですが？」

「申し訳ありません。ほんとに俺が悪かつたです。勘弁して下さい！」

俺はその場で、勢いよく土下座をした。

おかしい？ きつきまでシリアルな話をしていた筈なのに、何でこうなるんだ！？

あやせが俺のそんな痴態を見て、大きくはあああー、と嘆息を吐いた。

「……もういいです。今回はそれどころじゃありませんし」

「……助かる。それで、何の話だつたけ？」

あまりに予想外な横槍で、俺の思考がフリーズしていた。

「…………オタク趣味の犯罪の話ですよ」

あやせの視線が超痛い。

俺はこほんと咳払いを一つ入れる。

「…………そだつたな。あと人は簡単に犯罪に走らないと思う。アニメやゲーム程度の影響じゃ、特にだ」

「……根拠はあるんですか？」

あやせの目が冷たいままだ。なんとか挽回しないと……

「えつとな、アニメやゲームとか、好きな物は何かしら影響はあると思う。例えばスポーツ漫画を見て、それを始める奴もいると思う……」

「そうですね。でもそれだと、影響を受けるという話になりませんか？」

「まあちよつと待つて、最後まで話を聞いてくれ」

「…………」

「続けるぞ。だけど犯罪となるとモラルやリスクを考えて、ストッパーが掛かると俺は思う。例えば、凄い推理好きな人が推理小説の影響を受けて殺人事件を起こしたとかは、聞いた事がないだろ？」

「それは…………そうですけど…………例が、極端すぎませんか？」

「おう、そうだな。とすると……不良漫画や、カンフー映画の面白いのを見ると、ちょっと暴れたくなるっていうか、体がムズムズするんだけど、それはあくまで思うだけなんだ。そのまま喧嘩しに行つたりはしないだろ?」

「兄さん……その感覚は私に分かりません」

「うーんそうか、世界を狙えるハイキック持つてるあやせなら分かると思つたんだが?」「……兄さん、変な事、考えていませんか?」

「あやせが、ジト目で俺を睨む。か、勘が鋭すぎねえか、あやせ!?  
「い、いや、な、何も考えていないぞ」

「そんなに焦つてますと、白状した様なものですよ、兄さん」

妹の視線が鋭くなる。は、早く話を続けなければ。

「は、話を戻そう……あやせ、恋愛漫画や小説は読むか?」

「……………それは、もちろん見ますよ」

「良い作品見て、私もこういう恋愛したいとか思つた事は無いか?」

「……………それは…ありますけど」

「でも、したいと思うだけで、漫画で感動しても、すぐに告白しに行つたりはしないんじゃないのか?」

「……………好きな人がいませんから、わかりません……でも、恋してる友達を見ている

と、告白は凄い勇気がいりますから……たぶんすぐに行つたりはしないと思います

そつか、あやせにいま好きな奴はいないのか。なんだろう……もの凄くほつとした。

「なんですか、兄さん……にまにまと笑顔になつて」

「い、いや、何でもない。えつと……それでまとめると、犯罪のきつかけにはなるかも知れなわけです、それはオタク趣味に限らず、他の物でも可能性はあるし、きつかけ以上の行動に移る程の影響力は無いと思う」

「…………無理やりな結論の気がするんですが……」

あやせの顔が納得していませんと、俺を見つめる。

俺はオタク趣味が犯罪を増長なんかしないと、本当に思つていて。しかし説明すればするほど、説得力を持たせるのが難しい事に気がつく。せめて真剣な事は伝わるよう

に、あやせの目を真面目に見つめ返した。

「…………オタク趣味が、犯罪に繋がらないというのはわかりました」

「そうか、良かつた」

先にあやせが視線を逸らした。なんか頬が赤い気がする？

まあとりあえず、桐乃達が犯罪者予備軍つていうのは、回避出来たか。俺はふうー、と吐息を漏らした。

「でも私にとつて、オタク趣味が児童ポルノと変わらないおぞましい趣味には変わりま

せん。絶対認められません!!」

うーん、結局問題はこつちだよな。桐乃是オタク趣味が大好き、あやせは大嫌い、これは感情の問題だから簡単に納得して変えられるものじやないよな。

オタク趣味は児童ポルノと同じは、言い過ぎだから、なんとかできそうだけど……桐乃のジャンルが……それにもろに被るんだよな……はあー、どうしたものか？「あやせ、児童ポルノと同じは言い過ぎだと思うけど……お前はオタク趣味は嫌いでいいと思う。でも……」

「兄さんがなんと言つても、認めま…………えつ!? 兄さんいま何て言いました？」  
あやせがきょとんとした表情を浮かべる。

「うん、お前はオタク趣味は嫌いの今まで、いいと思う。だけど……」

「え、ええーー、なんですかそれ？ 兄さんは私を説得するんじやなかつたんですか?!」「ああ、嫌いな物を好きにさせるのは難しいし、無理やり好きにさせるのは、やっぱり違うだろうからな。ただ……」

「……じゃあ兄さんはオタク趣味、辞めてくれるんですね？」

……あやせに続きを言わせて貰えない。

「……いや、続けたいと思つてる」

「な、なんですかああ、それは!!!」

あやせが立ち上がり叫ぶ。あまりの迫力に土下座してしまいそうになつた。

「兄さん、ふざけてるんですか!!」

「ふざけてないよ、あやせ。俺にとつてオタク趣味はあいつらと繋がる大事な物なんだよ。それを捨てるつていうのは、あいつらとの繋がりを捨てると同じ事なんだよ」

「…………なら、兄さんはやつぱり私でなくて、桐乃達を選ぶんですね」

あやせが悲痛な表情になつた。俺は慌ててフォローに走つた。

「それは違う。さつき言つただろ、お前は大切な妹だつて」

「なら、なんで、オタク趣味を捨てないのに、私にオタク嫌いのままでいいなんて言うんですか!! 私に兄さんを嫌いになれつて事なんですか!!」

「いや、お前に嫌われたら、凄いショックだぞ、たぶん泣いちまうぞ、俺!」

家で会つても、挨拶もされずに無視される。話しかけても、そつけない態度で冷たくあしらわれる。何故だろう、妹に嫌われる姿がリアルに想像できてしまい、顔が青くなる。

「……なら、どういう事なんですか?」

「うん、あのな。オタク趣味は嫌いのままでいい。ただそれをやつてゐるだけで、人を否定しないで欲しいんだ。オタクでもいい奴や、立派な奴もいる。オタクという一つの評価で、その人の全てを否定しないで欲しいんだ」

「なんですか、それ……結局認めろつて事じやないですか……」

「あやせは桐乃がオタクだつたから、嫌いになつたのか?」

「ち、違いますよ! 嫌いになれないから……こんなに：悩んでるんじや、ないですか！」

「あやせにとつて、桐乃はどんな奴だ?」

「桐乃は……私にとつて憧れです。スポーツ万能で勉強が出来て、それに凄いオシャレで可愛くて、性格も明るくつて一緒にいると楽しい……私の親友……」

「俺の知つてるあいつは、生意氣で、オタク趣味を無理やり押し付けてくるし、アニメの談話で二、三時間拘束する、ろくでもない奴で。美少女ファイギュアを眺めて気持ち悪い顔で笑つっていて、こいつほんとに大丈夫か?つて……」

「桐乃の悪口はやめて下さい!!」

あやせが俺の言葉を遮つた。やつぱり親友が悪く言われるのは、嫌なんだな。あやせと桐乃の絆に口元が緩む。まあ桐乃のは、悪口のつもりは一切なかつたんだけどな。

俺があやせの言葉をスルーして話を続ける。

「……でも、全てほんとに楽しそうにしてるんだよ。なんだろうあそこまで楽しそうにしていると、こっちも楽しくなるっていうか……あんなに熱中出来るものがあるのは、正

直羨ましいな」

「…………私はそんな桐乃を知りません。やつぱり隠されていたんでしょうか……」

あやせの表情が暗くなり、顔を俯かせる。慌てて俺は否定した。

「こ、これは隠していたのとは違うと思うぞ、逆に俺はそんな完璧超人なあいつは知らない。まあ服装はいつもオシャレだつたけどな、ただ見せていた顔が違つただけだろ?」

「…………見せていた顔ですか?」

「ああ、俺だつて男友達といる時と、お前と話している時は態度は違うし、それはたぶん、誰でも人によって態度が変わるのは、普通の事だと思うぞ」

「…………」

「桐乃がお前に隠していたのは、自分の趣味の事だろ。これがバレたら、あやせに嫌われると思つたんじやねえか。だから桐乃が隠し事をしたのは、大切な親友に嫌われたくないうからじやねえかな?」

「…………」

「桐乃はたぶん、お前を本当に大切に思つてていると思うよ。だからさ、お前は今まで通り、親友として桐乃に接してやれないか?」

あやせが嫌々とでもいう様に頭を振つた。

「ダメなんです。今まで通りなんて、出来ません。……どうしてもあれを認めなくな

いんです」

あやせのオタク趣味嫌いは、相當に根深いようだ。

「…………前に桐乃が親とオタク趣味で揉めて……その時さ、桐乃が言つたんだ『オタク趣味をするだけで、私は否定されちゃうの？』って。…………あやせ、俺はオタクになつたら……お前の兄貴で……いちやいけないのかな？」

これは言いたくなかった。もしこれで肯定されてしまつたらと思うと、怖くて仕方ない。あの時の桐乃の震えが、ようやくわかつた気がした。

「…………するい、するいですよ……卑怯ですよ、兄さん。…………たとえ……オタクになつても、兄さんは……私の大事な、兄さんです」

あやせの言葉に、俺の全身の力が抜ける。俺は安堵感から、感謝の言葉が溢れる。

「そうか……あやせ、ありがとう」

あやせは俺の言葉に反応しないで、深く考え込んだ。

どれくらい経つたろうか？ 静寂をあやせが零した言葉が破つた。

「…………そうですね…………桐乃がオタクでも……私の大事な、親友と

いうのは変わらないですよね。……もう一度桐乃と話し合つてみます」

まだ心情的には納得いっていないのだろう、あやせの顔は複雑そうな表情をしてい

る。

ただ一步、大きく前進出来た気がする。俺は安堵の溜息を吐いた。

「ああ、そうしてくれ。……さつき、もしもお前に肯定されたらと思ったら、怖くて仕方なかつたよ」

「……そんな質問をするなんて……本当に桐乃達が大切なんですね……」

あやせが寂しそうに笑つたが、俺はそれに気がつかなかつた。軽く笑いながら、あやせに答えた。

「ああ、あいつらといると大変なんだけど、悪くねえんだよ」

「……兄さん、一つ質問していいですか？」

「ん、ああ、もちろんいいぞ！」

あやせが一拍呼吸を置いたあと、俺に尋ねる。

「兄さん、私と桐乃達、どつちが大事ですか？」

とんでもない質問がきた。

「うえ！ えつと……比べられないというか、両方大事つていうのはダメか？」

「ダメです」

あやせがにつこり微笑む。

えつと、あいつらの事も友人として大事だけど……あやせと比べると……でも、これを、

口にするのか？

……俺は覚悟を決めた。

「いいか、一度しか言わねえからな！」

まつたく、認めざるを得ない。俺はシスコンだ。

将来恋人でも出来れば違つてくるかも知れないが、いまは可愛い妹以上に大切な人は  
いないのだ。

俺はあやせに思いの丈をぶつけた。

「俺には、お前以上に、大事な奴なんていない！ 誰よりも、お前が大事だ!!」

## 第22話

それはちょっと兄さんを困らせたいと思つた質問でした。

兄さんが余りに、桐乃、五更さん、楓島さんを凄く大事にしているから、ちょっといじわるしたくなつてしまつたんです。

それが、まさか、こんな事になるなんて……

「…………んっ…………なっ……あ…………な、なにおおおおおおおつ、言つて、いるんで  
すかあああああ――、兄さん?!?」

私の魂のこもつた絶叫に、兄がビックリしてます。何を驚いているんですか、ほんと  
に驚いているのは、私ですよ?!?

世界で一番、私が、大事なんですか??

こ、これは……愛の告白なんですか??

だ、ダメですよ、兄さん! わたし達は、兄妹なんですから!!

でも…………ちょっとだけ…………嬉しい…………かも?

はつ、いけません、いけません、わたし達は、兄妹、兄妹なんです!!

「な、なんだよ、突然!? ただ、お前の質問に答えた、だけだろ?」

「そ、そ、そ、その答えが…………な、な、なんで、告白になるんですかあああ!! い、いもうとに、こ、こくはく、するなんて・兄さんは、どういうつもり、なんですか!?」

「告白?」

兄がきよとんとした顔をします。……この人、ほんとに分かつていませんね。

私は恥ずかしさで真つ赤になつた顔が、今度は怒りで真つ赤になりそうです。頭に血が上りすぎたのか? クラクラしそうな気がします。

「兄さん…………じ・ぶ・ん・が・言つた、台詞を、もう一度、思い出して、下さい」

「お、おう、わ、わかつた」

私が出した声に、兄が拳動不審になりながら、ちよつと考え込みました。それから直ぐに顔を赤くさせます。ようやくわかつたようです、この・朴念仁。

兄さんの…………ばか。

「ち、ちが、違うからな、も、もちろん、家族として……だからな!!」

兄さんが両手をわたわたさせながら、弁解します。焦る兄の態度に、また私の頬が熱くなつてきました。

「わ、わかつて、ますよ!! で、でも、あんな熱烈に呼ばれたら…………」、ごかいしちやいますよ……」

「そ、そんなに、熱烈……だつたか?」

「……………ええ」

「そ、そ、うか……………」

兄さんと二人して、おし黙ります。

むうううう、どうしましよう、もの凄く、気恥ずかしいです。

兄さん、責任取つて、この空気をなんとかして下さい。兄さんの所為なんですから！

……私の質問の所為？ そんな事は有りません。ぜえうたい、兄さんの所為です!!

「あ、あやせ、あのな？」

「な、な、なんですか？ 兄さん？」

「えつと…………その、あれだ」

「え、ええ、そ、そ、うですね」

「……………」

ど、どうしましよう!? 話が全然進みません。兄さんと目を合わせると、つい目を逸らしてしまいます。は、はずかしくて……思考が纏まりません。

兄も同じような様子でしたが、突然パンツ、と両手を頬に叩きつけました。

兄さんは、きっとこのままじゃいけないだろうと思つたんじやないでしょうか。

「あやせ！」

「はい！」

「…………桐乃の事は、どうする？」

「あつ!？」

兄の言葉を聞き、顔に集まっていた血液が、一気に引いていきました。

私は何を浮かれていたんでしょうか。桐乃にあんなに酷い事を言つてしまつたのに、いくら兄が衝撃的な言葉を言つたからといって、桐乃の事を失念してしまはうなんて……親友失格です。

「本当なら、この後すぐに話に行つた方がいいんだけど……結構時間経つちまつたからな、どうする？」

兄の言う通り、太陽はまだ沈みきつていませんが、神社内は木に覆われていることもあり、辺りはかなり薄暗くなつてます。

本当なら桐乃の所にすぐ行きたいのですが……

「桐乃には、いえ…………楓島さんと五更さんにも、謝りたいので…………ごめんなさい兄さん、連絡取つて貰つて、大丈夫ですか？…………もし、ご迷惑でなければ、今日中に謝りたいです」

本来なら、私から桐乃に連絡するべきなのでしょうが、あんな事を言つてしまつたので、今度は桐乃が私を避けたらと考へると……電話を無視されてしまうかもと思うと、

怖くて連絡を取れません……兄さんについつい甘えてしまします。

私はなんて桐乃に酷い事を言つてしまつたのでしょうか。桐乃へしてしまつた態度による後悔と罪悪感、それにこのあと仲直りできるかの不安感から、私はその場で力無く座り込みます。

「……ああ、分かつた。……もしかしたら、もうみんな帰つてしまつてゐるかも知れないし、この後は無理かもしだれねえな。その場合は、明日の朝でいいか?」

「そうですね……それで、お願ひします」

「分かつた。そうだな……やっぱ、こんな時は沙織がいいかな?」

事情を察してくれたのか兄さんは、二つ返事で引き受けてくれます。そして今後の展開を予想して、私のフォローに回つてくれます。こういう兄の優しさが、私は大好きです。……もちろん家族としてですよ。

兄さんが、ズボンのポケットから携帯を取り出して、横島さんに連絡を始めました。



「…………あつ、沙織。そのいま、大丈夫か?」

「おお、京介氏! もちのろん、大丈夫ですぞ! して…………どうなつたでござる?」

数秒の呼び出し音の後、沙織の声が聞こえる。

沙織が明るく返事を返してくれる。しかしその声が、すぐに落ち着いたこちらを心配する物に変わった。

ああ、沙織と黒猫には、ほんとに心配かけちまつた。まさかあんな修羅場を見せられるなんて、普通は思わないよな。

俺は問題が無事解決したと伝わるように、努めて明るく声を出した。

「ああ、こつちはなんとかなつたよ！」

俺の言葉から沙織も察してくれたのか、明るい返答をしてくれる。

「おおつ！ 流石は京介氏、あんな状態からよくぞ、すばらですぞ!! よつ、この天然ジゴロ！ ラノベ主人公！」

「はつ、そんなに誉めんなよ……つてお前それぜつてえ褒めてねーだろ!?」

「おう、ナイスツツコミ！ 相変わらずの切れ味でござる。拙者、もう京介氏のツツコミが無いと生きていけない身体にされてしまつたでござるよ」

明るいは明るいが……沙織に掛けたのは間違っていたか？ 沙織とのあんまりにもな会話に、俺は脱力した。……まあでも、これだけふざけられるなら、桐乃も大丈夫なんだろうな。

「……まあいいや、で、桐乃なんだけど……」

「……きりりん氏でござるか……思いつき泣いたので、いまは落ち着いているでござるよ」

「ああ……落ち着いたか、良かった。……まだ、一緒にいるのか？」

「一緒でござる。きりりん氏も一応落ち着きましたが、もうしばらくは誰かと一緒にの方が、この場合良いと思われたので……いまは近くのファミレス、サイゼリヤにいるでござるよ！」

ふざけている様に見えて、こういう場面での気遣いは流石である。本当に頼りになる奴だな！ 先ほど下がった俺の中の沙織の株価が急上昇する。

沙織と黒猫が一緒なら、桐乃は大丈夫だろう。俺は安堵しながら、脳内の地図でサイゼリヤの場所を検索する。

「ああ、あそこのサイゼね。……いまから、あやせと行つて大丈夫か？ この後、もしかんか有るなら、明日にするけど……桐乃と黒猫にも聞いてみてくれないか」

「いまから…………あやせさんですか…………いえ、京介さんを信用します。その席にはわたし達も同席して大丈夫ですか？」

沙織の言葉遣いが、急に変わった。

……やはりまだいつも通りではないんだな。さつきのおふざけも、きっと空元氣の様なものだつたのだろう。

そうだよな、あつちはおれ達の心配しながら、ずっと待っていたんだもんな。

俺はすっかり問題が解決した気になっていた自分を恥じる。

「ああ……出来ればお前らもいて欲しい」

「……分かりました。いまからきりりん氏と黒猫氏に確認致す。もしかしたら時間が掛かるかもなので、折り返し電話するでござるよ」

「分かった。折り返し待ってる。すまない助かる」

「なんのなんの、お任せあれ、にんにん」

「あやせ、電話が折り返しくるから、それまでに移動しておかなか?」  
「わかりました。兄さん

「あやせの表情が固い、俺の電話中も座り込んで沈んでいたし……桐乃の事があるから、仕方ないか。……兄として出来るだけ、手を貸してやらねえとな!

俺があやせに片手を差し伸べた。

「ほら、行くぞ!」

「……ありがとう、兄さん」

あやせが強張っていた表情を微笑ませ、俺の手を握る。俺が右手に力を込め、妹を

引つ張ろうとした時、膝から力が抜けた。

「あれっ？」

「きやつ！」

あやせを探し回る時に酷使した足が悲鳴を訴えた為、バランスを崩してしまう。

痛たた、つてあれ？ 痛くないな。倒れ込んだ時に思わず目を瞑つてしまつたが、コケたにもかかわらず痛みを感じない。むしろ顔に当たる感触が……妙に柔らかい……ふにふにして気持ち良い。

ちよつと待て……………コケた時は……………あやせの方に倒れ込まなかつたか、俺？

俺は、恐る恐る、目を開き、倒れていた体を起こす。まず目に映つたのは、今まで俺が顔を埋めていた……………まずまずの大きさの……………とても柔らかい丘がある……………その漢の夢が詰まつた丘から、さらに視線を上に傾けていくと、涙目で顔を真つ赤にしている妹が大きく手を振り上げている。

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああああああ

!?

「ひでぶう!?

あやせを押し倒していく俺が吹き飛ばされた。今回はいつものハイキックでなく平

手である、しかもあやせの体勢が悪かつたので、俺の意識が飛ぶ事はなかつた。ただし頬つぺたがジンジンと、とても痛い。いま鏡があれば、頬にきつと立派なもみじを見る事が出来ただろう。

悲鳴をあげ、俺にビンタをかました妹が立ち上がりつて、俺を見下ろす。

「兄さんの、エッチ、変態、ケダモノ、いきなり何をやつてるんですか!? 妹押し倒して、どうする気なんですか!? そ、それに、わ、わたしの胸に顔をくくくくくくくくくくくくくくもおくほんとに信じられない!! 兄さんのエッチ、エッチ、エッチ、エッチ、エッチ、エツチ!!」

あやせの怒濤の罵声が俺を責める。条件反射で俺は即座に土下座へ移行した。

流石にこれは、言い訳の余地が無い。女の子を押し倒し、オッパイに顔を埋める。警察のご厄介になる事件である。妹といえど、いや、ある意味妹だから、大問題である。親父にバレたら、裁判無しの死刑確定である。

俺にできる事は、ひたすら地面に頭を擦り付ける事だけであつた。

「なんで兄さんは、いつも、いつも……」

後頭部であやせの説教を聞いていると、俺のポケットから、着信音が聞こえてきた。

しかしあやせの説教が……沙織、すまない。また折り返すよ。ちよつと時間か  
かつちまうかも知れないけど……  
俺は心の中で沙織に謝った。

## 第23話

「兄さん、大丈夫ですか？」

「ああ、悪いな。2ケツ出来れば良かつたんだけどな……」

私は今、サイゼリヤに兄さんと一緒に歩いて向かっています。兄さんが自転車を押しながら歩いているので、その歩みはゆっくりです。

最初はちょっといけない事ですが、二人乗りで行くつもりだったのですが、兄さんの足がふらふらだつたので断念しました。

あの事故も足の疲れが限界近くまできていたので、起こつてしましました。そんなになるまで一生懸命になつて探してくれた兄を思うと、怒る事は出来ません。

まあすでに怒つてしまつたんですけど……だつて仕方ないじや無いですか!? 私の胸にか、かおを埋めたんですよ!? そんな事されたら、誰だつて怒りますよね！ そうですよね！

……ダメです。今はそれよりも、桐乃の事を考えませんと。許してくれるでしようか

……

「安心しろよ！ あいつならきっと許してくれるって！」

「兄さん？」

まるで私の心を覗いたようなタイミングで、兄が話しかけてきました。

「んっ？ どうした不思議そうな顔して？」

「いえ……その、どうして私が桐乃の事を考えたのが、分かつたんですか？」

「兄貴だからかな！ それに、ここにシワが寄つていてるぞ」

兄さんはそう言うと、私の眉と眉の間を指でつつきました。

「ははっ、眉間にシワ寄せてたら、せつかくの可愛い顔が台無しだぞ！」

笑いながら、兄が私の眉間にぐにぐにと、ほぐす様に押します。

「うううううもうっ、やめて下さい」

私は恥ずかしくなり、兄の手をパシッ、と払いのけます。

まったく私に気を使ってくれてるんでしょうが、乙女の顔で遊ばないで欲しいです。

それにまた可愛いって、流石に今回は取り乱しませんよ。……ちょこつとは嬉しいです……

こんなこと誰にでも言つていよいようね。私はじろっと兄を睨みます。

「そ、そんなに怒るなよ!? 眉間の皺をほぐしてやろうと思つただけだつて」

私が睨んだ事に、慌てて兄が弁明します。

むう、私が睨んだ理由は、そちらでは無いのですが……まあ兄さんですから、仕方

ないですね。あまり察しが良過ぎるもの、兄さんらしくありませんし。

私ははあー、とため息を吐き、兄に忠告します。

「別に怒つていませんよ。……ただ、女の子に気軽に触れるのは良くないですよ、兄さん。……私は、妹だから、いいですけど……」

「んつ、そうか？ そうだよな……俺、大丈夫かな？ あいつらに気軽に過ぎてなかつたか？ うん……」

兄が悩み始めます。兄さんは、最近無意識に軟派になつていますから、ちゃんと釘刺さないとダメですね！

兄と雑談をしながら歩いていると、ついにサイゼリヤが見えてきました。  
あそこに桐乃が……私はゴクリと唾を飲み込みます。手足が震え、思わず立ち止まつてしましました。

「大丈夫だ、あやせ。桐乃是親友なんだろ。親友を信じろ」

兄が私の背中をポンと叩きます。

「…………ええ、そうですね」

兄の後押しを受けて、私は歩みを再開させます。

兄さんのこういうところが、ズルいです。

私はぼそつと『ありがとうございます……兄さん』と呟きました。

ファミレスの店内の明かりが、ここに来る途中で太陽が沈んでしまった道を歩いて来た私達には眩しく感じられます。

「いらっしゃいませ。2名様ですか？」

「いえ、友人が先に来正在して……」

「あ、はい。それでしたら、どうぞ」

店員さんに兄が断りを入れ、店内に進みます。夕食時の店内は、ほどほどの混み合いを見せていました。人が多いので、感情的にならない様に注意しないといけませんね。

兄を先頭に桐乃達を探します。一番奥のテーブル席で、手を挙げている楳島さんがいました。

「すまん、待たせた」

「いえいえ、ぜんぜんござるよ。……それで、どういたす？　一旦店を出るござるか？」

楳島さんが、私をチラツと見た後に周囲を見渡して聞いてきました。

席の奥では、ジツと私を見詰める五更さん、それに俯いてこちらを見ない桐乃

「どうする、あやせ？」

兄さんが心配そうな声で問い合わせました。

「いえ……ここで、大丈夫です」

私は声が震えない様に抑えます。先程も思つた通り、もう感情的にならないと誓います。

「ふむ、では、どうぞでござる」

楓島さんに促されて、桐乃達の向かいの席に座ります。向かいは桐乃を挟んだ形で、楓島さんと五更さんが両脇に座っています。たぶん桐乃を慰めてくれていたんだと思います。桐乃を助けてくれてありがとうという思いと、そこは本来なら私のポディッシュなのにという悔しさを、同時に感じました。

桐乃がずっと俯いたまま顔を上げてくれません。こんなに弱々しい桐乃は初めて見ます。これが私のした事によるものなんだと考えると、心臓に鋭い痛みが走りました。

それと同時にやつぱり許してもらえないんじやないか？ という不安感が再度私を襲います。一度不安感に襲われると、この場から逃げてしまいたいと思つてしまします。

謝らなきや、喋らなきや、と思うのですが、唇から漏れるのは吐息だけです。『ごめんなさい』の一言がどうしても口から出てくれません。私は自分が情けなくて、涙が溢れそうでした。

右手に温かさを感じます。私が泣いてしまうというタイミングで、兄さんが私の手を握ってくれます。おもわず振り向くと、兄さんが『大丈夫だ』とでも言うように微笑みました。

私は落ち着く為に、大きく息を吐き出し、桐乃へ告げました。

「桐乃、ごめんなさい。酷い事言つて、ごめんなさい。もう話しかけないで、なんて言つて、ごめんなさい。…………もう友達じゃないなんて言つて、本当にごめんなさい」

私は頭を深々と下げました。氣をぬくと瞳から涙が溢れてしまいそうです。でも、泣いたらダメです。桐乃を傷付けた私の方が泣いては、ダメなんです。

「あ、あやせ…………？」

数秒でしようか？ それとも数分経つたのでしょうか？ 私にとつて永遠に感じられる時間が過ぎ、頭上から桐乃の声が聞こえました。桐乃の声が聞こえた瞬間、私は我慢できずに顔を上げて、桐乃と見つめ合います。

「あやせ…………あたしと、これからも……話してくれる？」

「もちろん……です。桐乃が望むなら……いつまでも……望まなくたつて、話します」  
桐乃と話ができるなくなるなんて、もう考えられません。

「あたしと、友達で……いてくれる」

「ずっと……何があつたって、永遠に……親友です」

桐乃がいない未来なんて考えられません。

「あ、あやせえ……つ……ふえつ、ふええええ——」

「き、桐乃、ほんと……に……ごめ……んなさあああ——」

泣かないって決めたはずなのに、桐乃と一緒に大泣きしてしました。やつぱり店を出て、公園とかで話した方が良かつたかも知れません。

私は泣き止んだ後、楓島さんと五更さんにも謝ります。

「楓島さん、五更さん、失礼な口を利いて、本当にごめんなさい」

「ふんつ、もういいわよ。あんな物見せられて、毒気が抜けたわ」

「気にしないでいいでござるよ。ううつ、青春でござるなあ」

五更さんがそっぽを向いて、楓島さんがわざとらしく、ハンカチで目を擦りながら応えました。

先程も思つたのですが、二人の口調がおかしいです。けれど兄さんも桐乃も、何の疑問も抱いていない様子です。

おそらくこちらが二人の素なのでしょう。……ダメです、オタクというだけで、その人を嫌いになつてはいけません。二人は桐乃を慰めてくれていた事からわかる通り、

きっと良い人なんですか。

「それで、あやせ殿。……オタクにはもう蟠りは、無いでござるか？」

「いえ、ごめんなさい。まだ私は……オタク趣味を認める事は出来ません」

「そんな、あやせ……」

桐乃が顔色を変えます。私は桐乃が誤解しないよう、続きを話し始めました。

「ごめんなさい、桐乃。桐乃がオタク趣味が大好きな様に、私はそれが、大嫌いなの。どうしても、穢らわしい、おぞましいと思つてしまふの……」

「あやせ……」

「わたし達を前に、よくも穢らわしいやおぞましいだなんて……言つてくれるわね。それで、オタク趣味が認められない貴女は、結局の所、桐乃と京介をどうするの？」

五更さんが、私を挑戦的に睨み付けてきます。私は目を逸らさず、しつかりと睨み返します。

「私は、オタク趣味が大嫌いです。それは変わりません。でも、兄さんに言われて気が付きました。オタクというだけで、その人を嫌いになつてはいけないと。たとえオタクだつたとしても、兄さんと桐乃は、私が大好きな、大切な人には、変わりありません！」

「あやせ!!」

桐乃がキラキラと感極まつた瞳で私を見つめています。私はそんな桐乃に対して、微

笑みました。

「ふんつ、なら良いのよ」

五更さんが、わたし達を見て優しく微笑みを浮かべます。私が見ている事に気がつくと、慌てて、そっぽを向いてしましたが。

兄さんと桐乃の為にわざと聞きにくいことを言つてくれたんだと感じました……やつぱり、この人も良い人ですね。

「なら、これで大団円ですな。めでたし、めでたしでござるよ！」

楳島さんが話をまとめようとしています。私はそれに待つたをかけました。まだ伝えたい事が有るんです。

「すみません、楳島さん。まだ言つて無い事が有るんです」

「ふむ。なんでござるか？ どうぞ言つて下され」

「ありがとうございます。私はたとえオタクでも嫌いにならないと決めましたが、あの……小さな子供を、その、エッチな目的にした物は、さすがに、兄さんにして欲しく無いんです」

「「…………」」

何故でしょうか？ 皆さんの視線が桐乃に向かっている様に思えます。普通なら兄さんじや無いんでしようか？ まあ気にしないで続きを喋ります。

「えっと、だから、兄さんにそういう物は貸さないで欲しいんです。……って、皆さんは女性なので、そういう物は持っていないですよね。ごめんなさい。失礼でしたね、私」「いや…………分かった。あやせ、誓うよ。俺は児童ポルノみたいな物はやらない。これでいいか?」

まず兄さんが誓つてくれました。私は兄を見つめて言葉を返します。

「できれば、兄さんには、他のエッチな物もやらないって誓つて欲しいんですけど……」

「うつ、えつ、あ?!い、いや、そ、それはな……」

兄さんがパニックを起こします。その姿に満足した私は笑顔を浮かべます。

「ふふつ、冗談ですよ。ただエッチなのはいけないと私は思いますけど」

「…………いや、マジで勘弁して下さい」

「…………尻に敷かれているでござるな」

「恐ろしいわね、この女。……なにが合うかしら、迫力ある眼光からメデューサかしら

？」

テーブルに突つ伏す兄、戦慄した様子の二人。ちょっとといじわるしただけじゃ無いですか。そんなに引かないで下さいよ。

楨島さんが空気を変えるように、コホンと小さく咳をいました。

「それで、話を戻しますぞ。拙者も誓うでござるよ。京介氏にそのような物は貸さない

と！」

「ええ、分かつたわ。私も誓うわ。別にアニメDVDとかゲームなら構わないんでしょ？」

「ええ。本当は嫌ですけど。兄さんが、オタク趣味は貴女方と一緒にいるのに必要な物つて言いますので……認めざるを得ません」

私の言葉を聞くと、楓島さんと五更さんがテーブルに突っ伏している兄の顔を覗き込みます。

「んつ、だよ～。なんかあるのか？」

「いえいえ、なんでも無いでござるよ～♪」

「ええ、アニメ一つ見るように、妹の許可を求めるシスコンを眺めているだけよ！」

「うつせ!!」

兄さんが顔の向きを変えて、二人の視線から逃れようとします。もう～こういう兄の姿を見ると心が騒めきます。

……あれ？ そういえば桐乃はどうしたんでしょうか？

「う～～～、妹恋やシスカリの18禁は、児ポなの？ いや、違うわ。だって法律で禁止されていないもの。合法よ、合法！ ……でも、世間的には同じ扱いなのよね。はあーーー」

なんでしょう？　ぶつぶつと呟いています。声が小さいので聞き取れませんが……  
とりあえず桐乃に声をかけます。

「桐乃？」

「ううううあう、えつと……んつ、あやせ!?」

「どうしたんですか桐乃？　そんなに悩んで。悩みなら聞きますよ？」

「あ、いや、な、なんでもない。ほんと、なんでもないから……あはは」

「そうですか？　ならないですけど。桐乃も兄さんに貸さないって誓つてくれますか？」

まあ桐乃が兄さんにそういうのを貸すとは思っていないんですけど……一応お願ひします」

「あはは……あ、あたりまえじやない、そ、そんな、エッチな物とか、か、貸す訳ないし

……」

「なんでしようか？　桐乃の態度が凄く不審なんですけど……」

「そ、そ、うだぞ、あやせ。そもそも女子中学生がそんなエッチな物を買うことはできないだろ？」

「言われてみれば……そうですね」

「そうでござろう。そうでござろう。安心するでござるよ」

「貴女も、早くこのメデューサに誓つときなさいよ。京介に、貸さなければいいんだか

ら、テンパつてんじゃないわよ!!」

兄さん達三人が慌ててます。もうそんなに慌てなくても、桐乃と喧嘩なんてしませんよ。五更さん……メデューサつて私の事ですか……

確かに中学生がそういう物を手に入れるのは難しいですよね。私の考え過ぎでしたか。

「あ、あやせ、わ、私も京介には……そういう物は貸さないって、ち、誓うわ!」

「ありがとうございます。桐乃。皆さんもありがとうございます。私の我儘に付き合つて貰つて

私は深々と頭を下げました。

「頭を上げてくだされ」

「そうよ、別にこの位ならたいしたことじゃないわ」

「うん、し、親友として……当たり前よ」

「気にすんなよ。だから頭を上げろよ」

みんなの言葉に笑顔を浮かべて、私は頭を下げました。そういうえば、もう一つ伝えた  
い事が……

「あ、あと、もう一つ……」

「「「まだ、あるの!?」」」

は、ハモらなくてもいいじゃないですか!?

「ほんとに、あと一つだけですよ！ 兄さん、桐乃オタク趣味を許しましたけど、あんまり変な行動はしないで下さいね。絶交したりはしませんけど、その時は怒りますよ！」

「お、おう、了解だ」

「わ、分かつたわ。あやせ」

「特に兄さんは変な物を見つけたら、没収しますからね！」

「わ、分かりました。き、気をつけます!!」

「桐乃？ いまのは兄さんに言つたんですけど……」

「ご、ご、ごめん。な、な、なんか勘違いした」

「ふふつおかしな桐乃」

兄さんと桐乃がカチンコチンに固まっている。……そんなに怖いでしょうか、私。笑

顔を引つ込め、ちょっと傷付いた私ははあー、とため息を吐きました。

「すみません、今まで本当に全てです」

「そうか。……なら帰るか。もう結構時間経つしまったし、お店にも居づらいしな」

……そういえばわたし達何も注文してませんね。それなのにあんなに騒いで……暫

くはこの店に来れませんね。

「そうね。もう八時を回つてるし。あまり遅いと妹達が心配するわ」

「な、なに、あんた妹いるの！ あ、会わせてくれない？」

「……貴女にだけは、絶対会わせないわ」

「そんな事言わずにさあ、大丈夫何もしないし」

「貴女の夫は、男子学生が女性に言う、何もしない位、信用できないわ」「はいはい、じゃれるのはそこ迄にするでござるよ。早く帰る準備をするでござる」

兄が伝票を手に取りました。

「おう、今日は迷惑掛けちまつたし、俺が払つておく！」

「それは悪いでござるよ」

「そもそも貴方達は何も食べて無いじゃない」

「マジでいいの!! ……いや、悪いわよね。うん」

「兄さん、迷惑掛けたというなら、私が払うべきですよね」

兄がぱらぱら伝票を振りながら断る。

「いやいや、ここの兄貴、年上として見栄をはらしてくれよ！……沙織は、俺より年下だよな？」

「拙者、ピツチピツチの中学三年生でござるよ！」

「嘘つけええええ！お前のような中三がいるかあ！」

「ひ、酷いでござるよ。京介氏……」

「にひひつ、あたしと一つ違いは無理でしょ！」

「きりりん氏まで……」

「はいはい、何時迄もここで漫才しないの。お店の迷惑でしょう。ここは京介の顔を立てるから、早く支払って来なさいよ」

「……おう、了解だ」

兄さんがカウンターに向かっていきます。やつぱり兄さんと彼女達の関係は羨ましいですね。私は三人をもう一度よく観察します。

槇島さんは、肩を落として凹んでいますね。……本当に中学三年生だったのでしょうか？ 槇島さんには悪いのですが、私は兄の肩を持ちます。高校生もしくは、大学生に見えます。身長はもちろんですが……なんでしょうか？ あの胸は、うちの社長が見たら絶対スカウトする様なスタイルの良さです。まあグルグル眼鏡に今の格好ではあり得ないでしようが……もし、ちゃんと着飾つたら、兄さんの好みにぴったりになるんじゃないでしょうか？

次に五更さんは、やれやれ仕方ないわねという様に肩をすくめて、兄を見送ります。この人は、ほんとに美少女ですね。コスプレに負けてない、というよりコスプレ姿が本当にしつくりきます。なんのコスプレなのかは、私には分かりませんが、読モをやつている私の目から見ても、この人のコスプレは似合っていると思います。そんな美少女の兄さんを見つめる目は、とても優しげです。

最後に桐乃は、兄さんと槇島さんのやり取りを見て笑つてます。桐乃は兄さんを、兄さんは桐乃を、それぞれとても信頼している様に思えます。桐乃はもしかしたら、オタク趣味を隠す以外に……私に兄さんと会つていた事を隠したかったのかも知れません……もし、そしたら……

「皆さん……」

「なんでござる?」

「さつきのが、ラストじやなかつたの?」

「んつ、なに、あやせ?」

私は声を潜めて、彼女達に伝えます。

「兄さんをとつちや、ダメですよ♪」

「なあつ!?

「はあつ!?

「ええー!?

私は彼女達の驚く声を尻目に、レジにいる兄に向かつて歩き出します。

きつと彼女達が兄さんに感じているのは、友愛だと思います。でも、これからもどうだとは限りません。みんな何処と無く兄さんに惹かれている様にも見えます。……特に桐乃が怪しいです。

これ位の牽制は許されるんじゃ無いでしようか。

だつて将来はともかく、今はまだ、私が兄さんの一番でいたいのですから！

兄さんは、普段はだらしなくて、ちょっとエッチで、いつも手の掛かるダメダメなんですが……私が困った時や泣いている時は、本当に一生懸命、それこそ自分の事を顧みずに、私の為に動いてくれます。

境内に息を切らして現れる兄さん、私と桐乃の為に精一杯説得をする兄さん、私の事を誰よりも大事だと叫ぶ兄さん。

そんな兄さんだから……

いまレジで店員さんに謝っている後ろ姿を見ながら、私は思います。

私の兄さんがこんなに格好いいわけがないですよね！！

# 第7話

## ☆新垣兄妹バトル編

ある時、Mに目覚めた京介は気づいてしまった。あやせにセクハラをして蹴られるのは気持ちいい、しかし気絶してしまえば罵倒というご褒美を逃してしまっているんじやないだろうか？　ということに……

「攻撃を受けきつて気絶しないように耐えるか、気絶から回復までの時間を短縮しなくては！」

最近、兄のセクハラが増えたあやせは考えた。兄さん相手に照れる姿は見せられない。

「兄さんをより確実に気絶させないと、心を落ち着ける時間が足りない！」

1

「兄さんセクハラです!!」

あやせの右ハイキックが、信じられない速度で迫ってくる。

「くつ、間に合うか!?」

俺は衝撃（ご褒美）に備えるべく、左側へ防御の意思を固める。

グhaar、だが耐えたぞ。

相変わらず気持ち良いキックだ（二つの意味で）  
良し、これで罵倒もして頂ける……

その瞬間、俺の右側頭部に衝撃が走った！？

薄れていく意識の中、目に映つたのは、左足でハイキックを決めた妹の姿が……まさか時間をおかずには、ほぼ同時に左右蹴りが来るとは、昔そんな技を使う漫画を読んだ事が……

## 2

「兄さん、それもセクハラです!!」

あやせの右ハイキックは更に速度を上げたようだ。

「だが……ここでくたばるわけには！」

俺は初手でのゲームオーバーを避けようと、まずは左に意識を高め——耐える！

今日のキックも抜群の気持ちよさだ（二つの意味で）。

よし、次は……右！

その瞬間、俺の右腕に衝撃が走る。

右ハイキックに続いて左ハイキックにも何とか対応できた。

衝撃の余波で気絶は時間の問題だが、罵倒を聞き終えるまでは耐えられるはず！

……だが、俺の目に映つたのは。

左右のハイキックを両手で防がれ、常人ならバランスを崩して当然の姿勢から、妹が。腹筋を総動員して、目を瞑つたままありえない勢いで顔を近付けてくる、その姿！もちろん俺に防ぐ術などなく、妹渾身の頭突きで意識を刈り取られた。

3

「兄さんまたまたセクハラです」

あやせのハイキック、もはや音速に手が届くのではないかと疑うレベルだ。  
しかし甘い、来るのが分かつていれば！

俺は背後へバツクジャンプをして回避する。

打撃のご褒美が無いのは悲しいが、たまには罵倒もされたいんだ！！  
「どうだ、あやせ。なに!?」

俺の目に映つていたあやせの姿が消えていく。

「兄さん、それは残像ですよ」

背後から聴こえるあやせの言葉を最後に俺の意識は途絶えた。

4

どうしても気絶してしまう。ならば……

「あやせの足より先に罵倒が飛んでくる行動を取ろう！」

過去の経験を京介は必死に思い出し、そして――。

その1. 「俺には、お前以上に、大事な奴なんていない！ 誰よりも、お前が大事だ!!」  
↓足は飛んでこないが罵倒もない。あと、とても恥ずかしい（お互に）。

その2. いきなり倒れ込んで顔を胸に埋める。

↓威力を増したビンタに今度こそ意識を失つてしまふ。ある意味本望。だけど残像の可能性もあり。

「どちらもダメか……」

結局いつも通りセクハラに励む京介であつた。

### ☆あやせ暴走編

あやせ、桐乃、加奈子のとある日常会話

「あーあやせ、その、最近京介とは……どうなの？」

「き、桐乃!? と、突然どうしたんですか？ 兄さんとはいつも通りですよ」

「いや、その……二人の関係が……大丈夫かなって……」

「あーそういうや、ララポでデートしてたつけか?」

加奈子の爆弾発言に、桐乃が勢いよく食いついた。

「なにそれ!? 詳しく!!」

「な、なにを言つてるんですか、加奈子!?」

「えつと? 加奈子様がララポで暇つぶししてたら、あやせが服屋で京介にファツショ  
ンショーやつてたみたいな」

「それでそれで」

「京介が褒めるにやけて、意見が違うと拗ねた……」

「ち、違いますよ!? あれはデートでなくて……ただの買い物です! それに、にやけて  
いたり、拗ねたりなんて……してませんよ!」

焦つて誤解を訂正するあやせ。しかし二人の反応は……

「ふーん」

「へー」

「絶対信じてませんね、その顔!?

あやせの反応をスルーした桐乃が加奈子に続きを促す。

「ちなみに加奈子、他には?」

「うーんと、喫茶店でアーンしてた」

「アーンって、嘘!? マジで!?

「か、か、か、加奈子!? な、な、な、なんで、なんで、それを知つてるんです  
かああああ——!?

あやせの大絶叫！？

しかし加奈子はけろつとした顔で応えた。

「えつ、大宇宙の意思っしょ!!」

「うわっ、その慌てつぶり……本当なんだ……」

「ち、ち、ち、違うんですよ？ 桐乃！ あれ、あれあれは、そうです介護！ 介護の練習なんですね！ 兄さんが病気になつたり、おじいさんになつたりした時の為なんです、

いや、あやせ……それ無理でしょ……」

か  
介護  
ふつ  
あつはつはははは  
!!

—

無理矢理な言い訳して、顔を真っ赤に染めあげ、涙目のあやせがぶるぶる震えている。

才タクな面々の会話；

「あー京介、その、最近あやせとは……どうなの?」

「き、桐乃!? と、特にいつも通りだが」

「京介氏、なんだか怪しいですぞ」

「あのメデューサに怯えているだけ……ではなさそうね」

「ラテボの他にも、二人で、その……テートとか行ってるんじゃないの？」

「な、なんでそれを？　あー、でもあれをデートって言つたらあやせに怒られるだろ」

京介がぎよつとした目で桐乃を見た後、頬を搔きながら訂正する。

そんな京介を三人が呆れた目で見つめ、ひそひそ話始めた。

「この男……自覚がないとは厄介ね」

「京介氏はラノベの主人公みたいでござるな」

「ちよつと、あやせに同情する」

首を振つて桐乃が気分を入れ替え、京介に再度尋ねた。

「じゃ、じゃあ、二人でお出掛けとかは？」

「それも最近あやせが嫌がつてなあ。どこで誰に会うか分からんつて言われて、反抗期つてこんな感じなのかな？」

「妙ね。メデューサの魂は嫌がつていないと私の邪氣眼には映るのだけど

「誰にも会わない場所なら良いという意味でござるかな？」

「あ、ちよつと冷やかしすぎちゃつたかも……い、家ではどうなの？」

「べ、別に前までと……一緒だぞ」

京介が三人から目を逸らした。

「怪しいわね」

「怪しいでござる」

「京介、しょくじきに答えてね。あやせと家で過ごしてて、前と変わったことつてある？」

「いや、その……前よりも、照れることが増えた、かもな」

「具体的に説明なさい」

「具体的に言うでござるよ」

「なになに、もしかしてご飯の時とかに介護されてるとか？」

桐乃の言葉に飲み物を吹き出す京介。

「ぶつ！ なんで分かるんだよ?!」

「ご飯の介護……アーン、ね」

「アーン、でござるか」

「あやせ……介護で貫くつもりなのね……」

三人の目は非常に生暖かいものだつた。

オタク達の会話の少し前

「に、兄さん……」

「どした、あやせ？ 顔赤くして。今日のメシって辛かつたか？」

あやせは京介の質問に答えず、大きく息を吐き出し覚悟を決め、おかげを京介の口元

に持つていった。

「ア、アーン……」

「ふあつ!? い、いきなり、マジに、どうした、あやせ!?!」

「……に、兄さん……アーン……」

京介の問いに答えず、にじり寄つてくるあやせ。あやせのそんな姿に京介も覚悟を決めて、口を大きく開いた。

「…………おう、ア、アーン……」

「…………」

「…………」

永遠に続くのだろうかという気まずい沈黙の後、顔を赤く染めたあやせが早口で喋りだした。

「か、勘違いし、しないで下さいよ、兄さん。こ、これは…………あくまで、兄さんが病気になつたり…………おじいさんになつたりしたときの、その…………予行演習ですから」

「お、おう…………わかつた。あれ? 病気はいいんだが…………爺さんになつた時つて…………なんか夫婦みたいだよな?」

「ひやいつ!? ふあ、ふあうふ!! ～～～～に、兄さんのばかあ―――!!」

京介の最期に見た光景は額に迫つてくるあやせの右拳だった。

ドタンツ、と椅子ごと人が倒れこむ音、それに遅れてカラコロと箸が床に落ちる音がリビングに響きわたった。

椅子ごと倒れ込んだ京介を、あやせは最初は遠目から、そしてすぐそばにしゃがみ込んで肩口をつんづんして確認する。

「に、兄さん……？ 気絶、してますよね？」

額に拳のあとが残っているものの、目を瞑っている兄は無邪気な顔立ちで、そして――

「上手く言えないですけど、今の兄さんは昔と変わらず頼もしく見えますよ」

だから普段からセクハラを控えて、もつと眞面目にしてくれたらしいのに。

あ、でも、セクハラが急になくなるのはなんだか寂し……ちがいますよなにを考えてるんですか私は！

その、私にセクハラをしないぶん他の女の人が犠牲になつてたら困るなつて意味ですかね！

勘違いしないで下さいね！

「……つて、まだ起きてないですよね？」

空中に向かつてわちやくちやと手を動かしていたあやせは我に返つて、再び兄を眺め

る。

その安らかな寝顔にあやせは再び顔を綻ばせた（京介が眠るに至った経緯を追及してはならない）。

「介護……これも介護ですよね！」

桐乃との会話を思い出して理由（断じて言い訳ではない）を見出したあやせは、ゆつくりと兄に向かつて手を伸ばす。

そして兄の額を、更には髪や頬などを優しく撫でながら、しばしの時を過ごすのだった。

### ☆京介シスコン編……やつぱりあやせ暴走編

麻奈美の家に遊びに行つた帰り、ロツクが追いかけてきた。なんだ？ 珍しい。

「あんちやん待つてくれ。……今度、あんちやん家に遊びに行つていいか？」

「なんだロツク？ お前今までそんな事言つた事なかつたろ？」

「いや、いつもうちにばかりだから、偶にはあんちやん家にも行つてみたいなど……」

「俺はお前に会いに来てるんじやなくて、麻奈実に会いに来てるんだけどな」

「まあまあ、あんちやんそんな事言わずにさあ～」

ロツクが食い下がつてくる……怪しいな。

「どうかロック……お前うちに何しに来るつもりなんだ？」

「えつ!? エツと……それは……そうだ、尊敬するあんちゃんの生活を見てみたいんだよ！」

なるほど尊敬するときたか。ロック……それならいま思いつきましたみたいな、平手に拳を叩くような態度は取らない方がいいぞ。

「…………ほう、そうなのか？ 僕はてつきりあやせに会いたいからだと思つたんだがな……」

「ま、まさか……そんな事は、か、考えてないぞ、あんちゃん」

汗を浮かべて、目を泳がせてどうしたんだ、ロック？

「そうか……それは良かつた。もしあやせ目当てだつたなら……」

「ち、ちなみにあやせさん目当てだつたなら、どうなるんだ、あんちゃん？」

「僕は一人の友人を失くすところだつた」

「抹殺するのかよ!?」

「いや、良かつた良かつた。あつ、あやせ？」

僕は挨拶するように右手を上げた。それにつられたロックが振り返る。

「えつ!? 嘘、あやせさん♪ ……なんだいない……じや、ん」

「そうだな、ただマヌケはいたようだな……」

俺は優しく背後を向いてるロツクの肩を掴んだ。

「あ、あんちやん……」

「ロツク……言い残す言葉があれば、聞いてやるぞ」

商店街を歩いていると、麻奈美お姉さんを見かけました。

「あやせちゃん、こないだぶりく」

「お姉さん、こんにちは。こんなところでどうしたんですか？」

「お買い物の途中なんだく。あ、そういえばね、最近の京ちゃんなんだけど……」

お姉さんが、ちょっと頬を赤く染め、言いよどみました。

「な、なにか変なこと言つてました?」

「ううん、言つてたつていうか。その、一緒にお弁当を食べてたときにな」

「(……嫌な予感がしますね)」

「とつぜん思い付いたみたいに、おかげをお箸で取つて『ほい』つて……」

「(……なにをしてるんですけど、に・い・さ・ん?)」

「ちょっと恥ずかしかったけど、京ちゃんが普通だつたからぱくつて食べたら、『介護か

……』つて呟いてて」

「(……お姉さん相手にアーンとか、これって私のせいですか……違いますよね兄さんが

悪いんですよね」

「その、ご家族のことで困つてたら、何でも言つてね！」

「あ、いえ……。家族は大丈夫です。お姉さんに気を遣わせてごめんなさい」

「何もないならそれでいいよ！」

「すみません、急用ができたのでこれで失礼しますね」

「あ、うん、分かつた！。じゃあね！。……急用？」

私は家のドアを思いつきり開けると同時に、叫びました。

「兄さん！」

「おっ、あやせ、おかえり」

兄さんのいつも通りの態度に腹が立ちます。

「おかえり、じゃないです!!」

「ど、どした？ なんかしたか、俺？」

「なに、お姉さんにアーンなんて、してるんですか！ しかも学校ですよね！ うらやま

……いえ、なんでもないです」

危ないです。あやうく本音を……いえ、そんなことよりいまは兄さんの追及が先決です。

「あ、ああ、麻奈実の事か……ついついな……たしかに学校はまづかつたな……あの後、赤城や周りの連中がうるさかつたし……」

「人前だつたんですか!? 本当になにをやつてているんですか、兄さん!」

「いや、介護する側つて……どんなかなつて……麻奈実とも付き合い長くなりそうになつて思つたら、なんとなく?」

「ダメです! 介護する方も、されるのも妹の私の特権です!!」

「い、いや、あやせ…特権つて?」

困惑する兄さんにたたみ掛けます。こういうのは冷静にさせてはいけないんです。

「とにかく他の人にアーンなんてしたらダメですからね。特に桐乃やあの人達なんかに……そうです、そんなにアーンをしてみたいなら、今日の夕飯は全て兄さんが、私に食べさせて下さいね♪」

「えっ!? いくらなんでも全部は……」

「なんですか、兄さん? ゴ返事は?」

「は、はい!?

とうとう夕食の時間が来てしまつた……どうなるんだろうか?

「兄さん、ご飯ができましたよ♪」

「（どうして今日に限つて両親そろつて遅くなるのか……とはいえ）あやせが作るシチューはいつも美味しそうだな！」

「もう、兄さんたら。調子のいいことを言つても、約束は約束ですよ♪」

「（俺の妹がこんなに上機嫌なわけを知りたい）その、一つ訊いていいか？」

「えつ。やっぱり全部は大変かと思つてシチューだけにしたんですけど、ご飯とかもアーンしたかつたですか？」

「（逆だ、逆！ 酷い目に遭いそうだから、まだ口には出さないけどな）いや、シチューだけなのは助かるんだが……」

「じゃあ今日はお試しで、次は全部アーンにしましようね♪」

「じゃなくて。俺があやせにアーンするつて話だつた気がするんだが……なんで皿とスプーンが一つしかないんだ？」

そう問題なのは大皿に盛られたシチューとスプーン一つしかテーブルにないのである。

「えつ？ 介護する側もされる側も体験したいって、兄さんが言い出したんですよね？」

「だ、だからつてスプーン一つだけとか、その、まずくないか？」

「な、何もまずいことなんて無いです！ これはその……練習！ 練習ですから！」

「で、でもこれだと間接……」

「に、兄さんの希望を叶えるためですかから！」  
すよ♪

だから、私以外とアーンとかしちやダメで

「（機嫌の良さは変わらないはずなのに、今回だけはなぜか悪寒が！？）わ、わかつた！」

「じゃあ兄さん。はい、アーン」

「アーン。……い、嫌がつてゐるわけじやないぞ！ ほら、アーン」

「あ、あやせも畠が上ずつてゐるぞ」

「そんな生意気を言う兄さんには、熱々のシチューを山盛り……って嘘ですよ。フー、

フー。はい、アーン」

「ア、  
アーテン」

ご飯後、自室にてあやせ

[...]

私はベッドに飛び込み、枕に顔を押し付けました。

次に顔に当っていた枕を胸にぎゅーっと抱き締めて、ベッドをぐろぐろ転げ回ります。

す。

なんでしょう。行動しているときはいいのに、終わつた後のこの……気恥ずかしさは!!

「スプーンを一つにしたのは、兄さんに変に思われなかつたでしようか? か、間接キスに……なつちゃうわけですし。で、でも、前にやつた事あるから、だ、大丈夫ですよね!!」

「そ、それにしても、一つの食器で食べる食事は…………すづく…………」

私は先ほどの事を思い出します。急速に顔に血が上つてくるのがわかります。  
「き、きけんです。こ、この食事方法は封印しないと……」

「で、でも……もつたひないかな……月に1、2回くらいでしたら……」

「なんでしょう。余りできないと思うと……」

「……………いえ、週一回…………」

その頃、隣の部屋で京介は；

「な、なんであやせは平氣なんだ? いや、ちょっと恥ずかしそうではあつたけど、俺なんて心臓の音が凄かつたのに」

何とか自室まで辿り着いてベッドに正面から倒れ込むと、うつ伏せのまま身動き一つ

せず俺は頭だけを働かせた。

「どう考へてもあやせの行動は、普通の兄妹の関係を逸脱してゐる、と思う。思うんだが……それを嬉しいって思つちまう俺は……」

——変態なのか？

そう頭の中で自問すると、何が普通なのか自信が持てなくなつてくる（なお、妹にセクハラをして喜んだり、世界レベルのハイキックを受けて歓喜の表情を浮かべるのが京介にとつての普通である）。

えつとこういうときは……あれを試してみるか。

「えくと、わふく知恵袋で、名前は……『シチュー美味しい』でいいか。今日は味とか全く覚えてないけどな！」

\*\*\*

ほぼ同時刻。マンションで一人暮らしをしている少女はたまたま、新着の知恵袋を目にした。

「良いお名前でござるな。明日は久しぶりにシチューでも……んんん？」

流し読みで済ませるつもりが、なぜか友人の顔がありありと思い浮かんでしまつた彼女——沙織・バジーナは、「妄想乙」「妹さんを僕に下さい」「今夜が山田。妹さんは君の行動を待つてゐる」などと役に立たない回答が並ぶその質問文を、繰り返し熟読するの

だつた。

また京介の部屋にて

「みんないろいろと書いてくれてるんだな。凄えなわふく知恵袋！ でつ、ベストアンサーは：なになに『妹は天使です。そんな妹に甲斐甲斐しくアーンして、されるあなたは、死ねばいいのに！ おつと本音が漏れた……もとい、そんなに慕ってくれる妹がいるあなたは凄く運がいいのです。妹は可愛いものなんです。妹こそ地上に墮ちた唯一の癒しなのです。だからあなたが感じる嬉しいという感情は正当なものだから安心して下さい。これからも一緒に妹を愛でていきましよう。眼鏡つ娘の巨乳妹は最高さんより』『

「なるほど、俺の感性は間違つていなかつたのか……そうだよな、眼鏡つ娘で巨乳は最高なのは間違つていないしな。惜しむべきは、そこに黒髪ロングの清純系がなかつたことか……」

「なら俺とあやせの関係はこのままでも、大丈夫なんだな」

俺はほつと安堵の吐息をもらした。

同時刻赤城邸

「ふつ、今日も悩める同志を救つてしまつたぜ…………瀬菜ちゃんに褒めてもらわない」と

妹の部屋に駆け込む赤城。

「瀬菜ちゃん、瀬菜ちゃん、聞いてくれ！　俺はいま悩める子羊を一人救つてきたんだ！」

「ギャー、お兄ちゃん!?　なに人の部屋に勝手に入つて来てるんですか!?　しかも言つている事、意味わかんない!?」

同じ頃、高坂邸；

「な、なによこの知恵袋？　もう少し早く気付いてたら……うへへ」

とても他人には見せられない顔になりながら、桐乃は回答案を――

「これぐらい普通だつて教えるには……『妹と恋しよつ♪』か、それとも『シスカリ』か……」

――妹ものアダルトゲームをどんな順にプレイさせるべきかを考える。

「それにしても、締め切り早すぎ！　あたしがせつかく考えてあげてるのにいい度胸ね！」

少し冷静さを取り戻して、桐乃は回答文を、更には本文ももう一度読み返してみた。

「妹に甲斐甲斐しくアーンつて……あれ？　でもこの妹つて……まさか?!」

その頃、黒猫邸

タオルで髪を拭きながら携帯を確認する黒猫。

「電話：誰かしら、桐乃ね……なんの用事かしら、あの女？」

「なんの用かしら？…………えつ、電話にでるのが遅い…………なんども掛けさせるな  
ですつて」

「そつちが勝手に掛けてきたんじやない…………妹をお風呂に入れていたのよ…………  
貴女、凄い気持ち悪いわよ」

「だから貴女には絶対に会わせないと言つてゐるでしよう…………少しも、ちよつとも  
ダメよ…………先っぽだけつて、ちよつと貴女一体何を言つてゐるの!?…………取り乱  
した？もう手遅れよ。貴女への危険ゲージはメーターを振り切つたわよ」

「えつ、パソコンを見ろ？…………一体なんなのよ？…………わふうの知恵袋のそれを  
検索すればわかる？…………わかつたわよ、ちよつと待ちなさい」

黒猫はパソコンを起動して、桐乃に言われたワードを検索にかけた。  
文章を読んでいく内に啞然とした表情を浮かべる黒猫。

「…………いいたい事はわかつたわ」

「ええ、おそらくあの男じやないかしら…………いやよ、貴女が確認しなさいよ。私はそ  
んな煉獄の炎に突つ込むようなマネはしたくないわ…………仕方ないわね。ベストア  
ンサーが煽つているし……それにしても余計な事したこの解答主、眼鏡巨乳つて、呪つて  
やろうかしら!!」

## 第24話

俺がシンコンという事を認めた一夏が終わり、新学期が始まつた。

9月も、もう終わりというのに、残暑がまだまだ鬱陶しい。こうしてみると地球温暖化は進んでいるんだなとガラでもない事を考えてしまう。こんな真面目ぱい事を考へるなんて俺のキャラじゃないだろうって、うるせーよ。……まあその通りで俺が言いたい事は、要はこんなに暑いなら新学期10月からで、いーんじやねーか？ という事である。

太陽が照りつけるアスファルトを歩きながら、益体も無いことを考えた。次に思つた事は、あー早くクーラーのある部屋に飛び込みたい！ である。

10月学校スタートは無理だろうが、クーラーの方は叶えられそうである。なぜなら幸いな事に、もう家は見えるところまで来ているからである。

「ただいまー！」

玄関に鍵がかかっていたので、たぶん誰も居ないだろうなと思いつつ、声を掛けてみた。案の定、誰の返事も返つてこず、俺を迎えたのはむあつとした暑苦しい空氣だけであつた。

「ううー、死んでしまう。早くクーラーを……」

泣き言を漏らしながら、リビングへ駆け込んだ。

リモコンのスイッチをオン！ しかし部屋が冷えるまでまだまだなので、冷蔵庫より麦茶を取り出し、コップに氷を入れて入れてイッキする。

ふはー、生き返る！ 冷たい飲み物のイッキは身体に悪いと聞いた事があるが、そんなのしつたこつちやない。この美味さに比べれば、多少の身体へのダメージなど目を瞑つてしまふ。

もう一杯麦茶を飲んでから、まだ部屋が冷えるまで時間がかかるので、扇風機の前を陣取る。ついついする事が無いので、扇風機に向かって『あーーー』と声を出してしまつた。小学生でもないのだから、当然面白くないのだが、なぜだか一年に一回はやつてしまうのだ。

こんなくだらない事でも時間が潰せたのか？ 少しづつ部屋が快適な温度へ変わっていく。……そろそろいいか！ 扇風機をポンと叩き、首振りマシーンへ変えてからソファーに寝転がる。見たい番組があるわけでもないが、テレビを付けてダラ～とする。

こんな事に無償の幸せを感じてしまう。俺つて安上がりな人間だなニュースとワイドショーの中間くらいの夕方の番組を見ながら思つた。

「兄さん、兄さん」

俺を呼ぶ声がする。

「兄さん、起きて下さい。兄さん！」

体を揺すられる振動と声に目を開けると、可愛い妹の顔があつた。どうやらそのままソファーで寝てしまつていたようだ。それをあやせが肩を揺すつて起こしたのだろう。

「ふあーあ、おかえり。あやせ」

あやせの顔が結構近くにあるが、昔の様に焦つたりはしない。欠伸をしながらあやせに挨拶をする。シスコンと認めた事により、少しあやせへの距離間が近づいたのだ。まあそれでも相変わらず焦る事も多いけどな。

「ただいま、兄さん！……じやなくて、冷房の温度こんなに低くして寝ていたら風邪引いちやいますよ」

「あー、悪い。寝るつもりはなかつたんだけどなー。いつの間にかな……」

「いつの間にかじやありません。この間も同じ事してたじやないですか！」

腰に手を当て、叱つてくるあやせ。

あやせの方はあの事件の後、大きな変化は無い。まあしくて言うなら、会話する事が増えたのと、スキンシップが増えた事くらいである。別にスキンシップといつても、そう大したものでも無い。

例えば、耳かきをして貰つたり、テレビを見る時にすぐ隣で見たり、一緒に家で映画を見た時あやせが寝てしまい俺の肩を枕代わりに使つていた。そのくらいである。映画の件はちょっとドキッとしたが、別に普通の兄妹でもやつていてる事だと思う。……別に異常じやないよな？

「おう、悪かつた悪かつた。起こしてくれて、ありがとな」

俺は立ち上がり、あやせの頭をポンポンと撫でながらお礼を言つた。

「もおー、兄さん。全然反省してませんね」

あやせが頬を膨らませて怒る。

膨らんでいる頬っぺたを突きたくなるが、流石にそれをしてしまうと本気で怒らせてしまうだろうから、我慢した。

あやせの怒りには、話題転換でまかす事にする。

「反省してるつて！ そういえば、あやせなんで俺を起こしたんだ？ いつもならタオルケット掛けて起こさないのに」

「あつ、そうです。兄さんに相談がありまして……」

「相談？」

あやせの言葉を聞きながら、再び冷蔵庫に向かい麦茶を取り出した。寝起きの口を潤し、もう一杯麦茶をコップへ注ぐ、あやせの分もコップへ一緒に入れた後、テーブルへ

向かつた。

「それで、相談つてなんなんだ？」

椅子に腰掛けて、二つのコップをテーブルへ置き、あやせから詳しい話を聞いた。

「ありがとう、兄さん。……実は桐乃の事なんですが……」

あやせが向かい側に座つて、麦茶を一口飲んでから、深刻な様子で話し始める。

……桐乃、あいつまたなんかやらかしたのか？　ついに18禁がバレちまつたとか？  
……あれからまだ一ヶ月ちよいだぞ！？　バレるには早すぎんだろう？

……いやでも、最近あいつが俺に貸すのは、メルルと純愛系ギャルゲーの大人しめな物だしな……そう考えると18禁がバレた訳じやないのか？

俺が頭をひねつていると、あやせがゆっくり続きを話し出した。

「夏に私、桐乃に酷い事言つちやつたじやないですか……その後は今まで通りに楽しく桐乃と付き合っているんですけど……」

どうやら例の事件のわだかまりは、いまのところは問題なく、あやせと桐乃は無事に親友としてやつていけてるようだ。ただあやせは桐乃に対してもだ負い目を感じているようである。

「……兄さん、桐乃がこの前陸上の大会でいい成績取つたの知つてます？」  
あやせの話題が突然変わった。

「いや、この間会った時も、なんも言つてなかつたぞ。へーほんとに凄いんだな、あいつ！」

あいつらと会う時の会話や行動はほぼ全てがオタク関係になつてしまふので、そういう情報は入つてこないのだ。だから桐乃、黒猫、沙織の好きな作品は知つても、何処に住んでるかや年齢、誕生日、家族構成などの情報の方が入りにくいという、よくよく考えると不思議な関係なのである。

「やつぱり、そういう話はしないんですね♪」

あやせは弾んだ声で話を続けた。

あやせからするとおれ達が知らない桐乃の姿を知つているというのは、嬉しい事なのだろう。

あやせのそんな姿を微笑ましく思いながら、話の続きを促した。

「あやせが桐乃を大好きなのはわかつたんだが、相談の方はなんなんだ？」

「もう、兄さん茶化さないで下さいよ。……ええと、陸上で良い成績だつた桐乃にプレゼントを贈りたいと思いまして……どんな物がいいか教えて欲しいんです」

あやせが照れ臭そうに怒るという器用な事をして、相談内容を打ち明けた。  
しかし正直なところ、これは困る。女子中学生が贈られて嬉しい物なんて、俺の辞書には載つていないので。

「あー、プレゼントは凄く良いアイデイアと思うぞ！ きっと桐乃も嬉しい喜ぶと思う。

……でも、女の子に何を贈つたらいいのかは……すまん、俺じゃあ役に立てそうもない。買い物に付き合うくらいなら、もちろん協力するけどな。それに桐乃だつたら、あやせが選んだ物なら、なんだつて嬉々として受け取るんじやないか？」

「ええとですね。たぶん兄さんの言うように、桐乃は喜んでくれると思うんですが……」

「…………？」

なにやらあやせが言いよどんでいる。

「……思うんですが、一番欲しい物なら、もつと喜んでくれると思うんですよ」

「まあ、そりやそうだな」

そんな俺の在り来たりの返答に、何かを決心したような顔であやせが声を大きくして俺に問い合わせた。

「桐乃がいま一番欲しいオタクグッズを教えて欲しいんです、兄さん」

ああ、なんであやせがそんなに言いよどんでいたのか分かった。まさかあやせの口からオタクグッズを買いたいといった事を聞く事になるとは思わなかつた。親友の為とはいえ、感慨深いものである。

「……いいのか、あやせ？」

「桐乃が喜んでくれるのが一番ですから。それに夏のお詫びになればなつて……」

俺の確認に、淀みなくあやせが答えた。

桐乃の奴も良い親友を持つたもんだ！ それになんといつても可愛い妹のお願いだ。これに応えなきや兄貴として失格だぜ！！

桐乃の欲しいものか……やっぱギャルゲーかメルルか？ でもギャルゲー関係はマズイよな。俺が借りた奴は大丈夫だつたけど、それも元は18禁の奴だつたみたいだし……ほんとにあいつはなんて物を貸してくるんだよ！ とりあえずあやせに18禁がバレる可能性が有る物は却下だな。

となるとメルルか……でもあいつ読モで稼いでるからな。欲しい物は大体自分で買つちまつてるんじやないか？ ダブらない物か……  
そういうや、この間……

「何これ……第二回、星くず☆ういつちメルル公式コスプレ大会？ 優勝者並びに優秀者には豪華景品プレゼントって、マジ!? メルル限定フイギアとかだつたら、超欲しいんですけど！」

桐乃のやつが、店頭に貼られているポスターを見て、目を輝かせた。

「ええと、ふむふむ。これは宣伝を兼ねたメルルのコスプレ大会でござるな。賞品は現地での発表らしいですが、公式ですし良い賞品がでそうでござるな」

ふーん、コスプレの大会ね。コスプレといえば黒猫だよな。

「コスプレ大会？　ヘーコスプレに大会なんてあるのか。黒猫はそうゆうの出でるのか？」

「そういう人達と一緒にしないで欲しいわね。私のこれは黒き堕天の衣なのよ！　コスプレのような仮装とは違うのよ！…………マスケラの公式大会は何故無いのかしら…………」

黒猫らしい返答だと思つたが、ボソッと呟いたのが聞こえちまつた。やつぱりこいつでも自分の好きな作品のイベントなら参加したいんだな。

「ちくしょーーー！！　なんでメルルであたしに似たキャラいないのよ！　いたら絶対に参加してたのにいーーー！」

「あいつはまつたく……」

「お店の迷惑にもほどがあるわね……」

桐乃が地団駄を踏んで悔しがつていた。店頭前なんだからあまり騒ぐなよ、黒猫と二人で呆れた目をした。

「どうか！　あれなら桐乃参加しないって言つてたし、店で売つてない非売品だからダ  
ブる事も無いよな。

メルルでたしかあやせに似ていたキャラがいたような……

「あやせ、一つ思いついた！　俺の部屋に行くぞ！」

「兄さんの部屋って、ここじやダメなんですか？」

「ああ、パソコン見ながら説明したいからな。暑いだろうけど、我慢してくれ……って別に涼しくなつてから来ればいいよな。あとで呼ぶから、その時来てくれよ」

「もう、私が兄さんにお願いしたんですから、私だけ涼んでいるなんて、出来ないですよ。さつ行きましょう、兄さん！」

あやせが立ち上がりつて、リビングのドアに向かい歩いて行く。むしろ俺の言葉は気をつかわせちまつたようだ。俺もあやせの後に続いて、二階に向かう。ドアを出た途端、むあつと暑さが襲いかかってきた。うへえー、俺の部屋もヤバいんだろうなと思いながら、階段を上がつて行く。

案の定、俺の部屋はヤバかつた。いや、予想以上だつた。カーテンを閉め忘れたせいで太陽の光がモロに入つてしまいサウナ状態になつてしまつたのだ。

慌ててクーラーのスイッチを入れたが、直ぐに涼しくなるわけでもなく、あやせもゲンナリした顔をしていた。

「どうする？　クーラー入れたから、一回リビング戻つてから、また来るか？」

「いえ、五分か十分くらいですから、我慢します」

うーむ、俺は戻りたかったのだが、そう言われちゃあな。……また来ようぜって言えば良かつた。ちょっと後悔をしつつ、パソコンを立ち上げる。この暑さでパソコンは大丈夫だろうか？

俺の心配など気にもとめないで、パソコンはいつも通り立ち上がった。ネットでアニメメルルのホームページからキャラ紹介画面を開きながら。

「あやせ、とりあえずこれが桐乃が一番好きなアニメだ」

「これですか？ 星くず☆ういつちメルル、これってたしか兄さんが借りていたものですよよね？」

あやせがパソコンを覗き込んできた。女の子独特のちょっと甘いような香りが俺の鼻を刺激する。あやせだつて、汗ばんでいるはずなのに……男なら汗臭えだけなのに、まつたくなんで女子はこんなに……

いかん、いかん、妹の匂いで興奮するほど俺は変態じやないはずだ！ それに万一句い嗅いでたのバレてみろ……恐ろしい。

「あ、ああ、桐乃が一番好きな作品だから俺に貸してくれたんだ」

「なるほど……つまりこれのグッズを買えばいいんですね！」

あやせは俺の動搖に気が付かなかつたようだ。ほつとしてあやせに答えていく。

「なんだけど、買えるものだと……たぶん桐乃は自分で買っているんじやないかと

思うんだ。幾ら貰つてるか知らないけど、読モつて結構貰えるんだろう？」

「そうですね、私と同じかそれ以上は貰つていると思います。桐乃是人気ですから！」嬉しそうにあやせが答える。お前ほんとに桐乃大好きだよな。

「まあだから、桐乃が買えない物を選ぼうと思つてな！」

俺は新しくウインドウを開き、メルルのコスプレ大会のページを選んだ。

「第二回、星くず☆ういつちメルル公式コスプレ大会ですか？」

「おう、こここの所に優勝者並びに優秀者には豪華景品プレゼントって書いてあるだろ？」

「こういう所の景品は店で売つていなくて、価値があるらしいんだと」

「なるほど、店に売つて無い物なら桐乃も持つていないですものね。……でも、桐乃なら……その、これに参加するんじゃないですか？」

あやせが顔を顰めた。親友がコスプレ大会に参加している姿は考えたくないのだろう。安心しろ桐乃是参加しないよ。まあ桐乃是参加したがつてたんだけどな……

俺はパソコンをメルルの紹介画面に戻して。

「いや、あいつは出ないつてさ。メルルに似ているキャラがいないらしくてな」

「そうなんですか良かつた……つてちょっとまつて下さい兄さん！……桐乃が参加しないコスプレ大会の景品を手に入れるつて……わ、私がそれに参加するつて事ですか！」

!?

あやせがほつとした顔の後、愕然とした表情を浮かべた。

俺はあやせから目線を外しながら応えた。

「えっと……その、うん。その通りだ」

「無理です無理です無理です——!! コスプレなんて、絶対無理です——!! しかも大会なんて、絶対に嫌です!!」

あやせの完璧な拒絶反応。まあそうなるよな。ただ桐乃へのプレゼントにこれ以上の物は浮かばなかつたのだから仕方ない。

「そうだよな……すまん、あやせ。これ以外だと、さつき言つたように桐乃是自分で買つちまつての可能性が高いから、俺には力になれないよ。そうなるとオタクグッズ以外の方がいいと思うぞ」

「……いえ、ごめんなさい兄さん。取り乱しました。兄さんが謝る必要ないです。私が聞いた事にちゃんと考えてくれたんですから…………コスプレ…………」

こんなあからさまなオタクな提案だから、あやせはてつきり怒ると思つていたのだが、むしろ逆に申し訳なさそうに謝つてきた。しかも難しい顔をして検討している。

……それだけ桐乃に良い物を贈りたいんだな。ちょっとあいつが羨ましい。

しばらく悩んだ後、あやせがぼつりと聞いてきた。

おおっ!? あやせが出る気になつてきてる。桐乃への思い凄えな!

「そうだけど、お前くらい美人なら優勝も狙えると思うぞ!」

「美人だなんてそんな／＼＼＼＼

あやせが照れているが、シスコンを自覚した俺はこのくらいの褒め言葉では照れないぜ! 実際にあやせは美人だしな!

「で、でも、私に似たキャラクターなんているんですか?」

「たしか……アニメ見てる時に、ちょっとお前に似てるなつて思つた事があつてな……少し待つてくれ」

俺はキャラクターをポチポチとカーソルを移動させて行く。えつとタナトスつてキャラのたしか……あつたこれだ!

デイスプレイの中では、おへそ丸出しの胸が強調されたボンテージ衣装で、身体に大蛇を巻き付けた少女が高笑いを浮かべている。さらに言えばお尻丸出しだった。

……思い出した。アニメ見てる時に、これあやせに似てるよな。エロいな／＼バイン／＼と思つたんだつた。なんでその事を忘れていたんだよ、俺は!?

「どれですか、兄さん……えつ」

突然、恐ろしく背筋が寒くなつた。あれだなようやく冷房が効いてきたんだよな?  
それにしても効きすぎじやないかな……

そんな俺の現実逃避は直ぐに破られた。

「兄さん……私に似ているキャラクターがいるんですよね……」  
さつきまで顔を赤らめていたあやせが、ゴミを見るような目で俺を見詰めていた。あ  
やせの冷たい声に、ぶわあつと汗が吹き出る。

「お、おう」

「まさか……まさかですよ。その画面に出ているハレンチな格好をしたキャラの事じや  
あないですよね、兄さん……」

あやせの追求に俺は覚悟を決めた。いや違う、諦めた。

「に、似ていなかな？ あはは……」

「ええ、顔とか髪型とか似てるかも知れないですよね。うふふ……」

「そ、そつかー、良かつた似てるか」

含み笑いをしていたあやせが、キツと表情を変えて叫んだ。

「なにが良いんですかああああ!! たしかに髪型とか似てますけど、なんですかなんで  
すか、この衣装はああああ!! 黒いボンテージにおへそ丸出し!? 何処の女王様なんで  
すかああああ!! それに蛇に巻き付かれて胸を強調するつて変態じやないですか!!?  
そして何より、なんで、なんで、なんで、お尻丸出しなんですけど  
かあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

うがあーーー!? 鼓膜が、鼓膜が!? 直ぐ脇にいたあやせの叫びが耳に直撃した。

しばらく耳を抑えて悶える俺に、少し落ち着いたあやせが……いや、まだフーフー言つてるから落ち着いてないか。まあとにかくあやせが涙目で睨んできた。

「…………」んな衣装を着た私を、兄さんは大会に出すつもりなんですか?」

いや、待つてくれ。こんなエロい姿だと思わなかつたんだよ。まつたくこんなエロい衣装を着たあやせか…………素晴らし…………いや、待て待て。

この姿で大会にだと…………エツチな姿の妹がオタク野郎どもの視線に晒される…………ふざけんなっ!? お兄ちゃんは絶対に、そんな事は許しませんよ!!!

「ふざけるなあ!! 可愛い妹を野獣の巣に放り込んでたまるかよ!! 却下だ、却下!! そんな姿を見ていいのは、俺だけだ!!」

「兄さんにも、見せませんよ!? 兄さんのエツチイイイイイイイイー!!」

あやせの拳が俺の顎にヒットした。縦に吹き飛ぶ俺は、やつぱり世界狙えるんじやないかなと思いながら、意識を失つた。

## 第25話

またやつてしましました。私は氣絶した兄さんをベッドに運びます。

でも兄さんがいけないんですよ！ あんな破廉恥な格好を薦めてくるなんて、セクハラです!!

まつたく兄さんときたら……まあ、他の男の人には見せたくないっていうのは……独占されているというか……大事にしてくれているというか……ちょっと嬉しいかもですけど……

私の脳裏に夏の神社での言葉が蘇ってきました。顔がだんだん熱くなつてくるのが自覚できます。ダメです、ダメです！？ あの事を思い出してしまふと、しばらくは浸つて、動けなくなつてしましますから！

……兄さんときたら、ほんとどんでもないものを記憶に焼き付けてくれたものです。

私は頬を叩き、兄から桐乃へのプレゼントについて思考を切り替えました。……でも、本当にどうしましょか？ あのコスプレは論外ですが、プレゼントのアイデア 자체は凄く良いと思いました。これなら間違いなく桐乃は凄く喜んでくれると思います。ただ問題はこの大会で良い成績を取らないといけないところですよね……

私は兄さんのパソコンを操作してメルルのキャラクター紹介ページと大会のページを行き来します。大会は二回目という事もあり、前回の大会の様子も載っていたので見てみました。

「可愛い娘ですね。それに凄く似合つてます」

私の口から思わず感嘆の声が漏れてしましました。

いま私が見ているのは前回優勝者、おそらく小学生の外国の女の子。先ほどメルルのキャラクターページで見たアルファ・オメガというキャラに本当にそつくりでした。

「これはレベル高いですね……」

私も読者モデルをやっているので、コスプレという畠違いでも衣装の出来やその人に似合つているかの判断は自信があります。その私から見ても優勝者の衣装はとても良く出来ていて、彼女に似合つていました。

兄さんは私が出れば優勝出来るつて言つてくれましたが、これを見てしまうと優勝は厳しいんじやないかと思います。それくらいレベルの高い大会だと思いました。

しばらくパソコンのページを移動していく気がきました。いえ、むしろ気がつくのが遅かつたかも知れません。

「これは……いけるかもしませんね！」

このメルルというアニメの主人公、それが私の友人の加奈子にとても良く似ている事

に……



「兄さん、起きて下さい」

あやせに揺すられて俺は目を覚ました。

えつとたしか……そだ妹にエツチなコスプレ薦めて、アツパーで気絶したんだった  
な。

なんだろう色々と短縮したら凄え変態兄貴が誕生しちまつたぞ!?

いやいや、違うぞ、違うからな!? 俺は妹に卑猥な物を着せてハアハア喜ぶような変  
態じやねーから!! 俺は必死に誰に対しても言い訳をしながら頭と両腕を振った。

「に、兄さん、だ、大丈夫ですか? ……あ、頭を変な所にぶつけました?」

俺の奇行にあやせが心配そうな声を掛けてくる。

妹の言葉が俺の胸を抉つてくるんだが、しかも頭を打つたとしたら犯人はお前だから  
な! 俺は内心であやせにツッコミをいれながらも、表面上は無難な返事をした。

「すまん、ちょっと混乱してた。……それで桐乃へのプレゼントどうするんだ? コス

プレは無理だつたんだろ?」

「それなんですか兄さん、良い方法が見つかりました!!」

あやせが満面の笑みを浮かべている。よっぽど良い方法が見付かつたんだな！

「へえ、どんな方法なんだ？」

「兄さん、これを見て下さい！」

あやせが携帯の写真を俺に見せてくる。そこに写っていたのはクソガキ、もといララポで会った来栖加奈子の姿だった。

「ん？　こいつの写真がどうしたんだ？」

「兄さん気がつきませんか？　加奈子なんですけど、メルルそつくりなんですよ！」

「おつ、えつ!?　あーーーマジか!?　確かにそつくりだ！　なんで気がつかなかつたんだ？　桐乃も気付いてないよな?」

「たぶん……普段の加奈子のイメージが、このキヤラクターと合わないからじゃないですか？　私は単純に姿だけ似てるなーって思い気がつきましたけど」

「あーーーなるほどな！」

アニメを見ていると逆に気が付かないのかも知れない。正義の魔法少女とクソガキ

加奈子はイメージが違すぎるからな。

でもこれでララポで加奈子に会った時に感じた違和感が何なのか分かつてスッキリした。あのとき俺は加奈子にメルルの影を見ていたんだな。

「あ～でも……あいつがコスプレ大会なんか出てくれるか？」

俺は思い付いた問題を指摘する。

『はあ～つ!?　あたしがなんでそんなキメエー大会出なきやなんね～んだよ!!』……なんだろう幻聴が聞こえるくらいリアルに想像出来てしまつた。

「うふふふ、大丈夫ですよ兄さん。加奈子は私がしきつかりと説得しますから」  
「おっ、おう、そうか!?　な、なら大丈夫だな」

あやせがにつこりと微笑んでいる。しかし俺はその微笑みを見てると背中から流れる汗が止まらない……加奈子の冥福を祈つてやろう。

「兄さん、実は……もう一つお願ひがあるんですが?」

「なんだ?　もうなにが来ても驚かねーぞ!」

そう言いながらも身構えてしまう俺。

「もう～、なんで警戒してるんですか!　五更さんに連絡を取つて貰いたいだけですよ！」

心外だとでも言うように拗ねた口調の妹からの頼みことは意外なものだつた。

「黒猫に、なんでだ?」

「前に会つた時に、あの人の衣装が凄く良くてできましたから」

「ああ、なるほど黒猫にコスプレ衣装を用意して貰うんだな!　たしかにあいつなら優

勝出来るようなの作れそうだしな！」

あやせの言葉になるほどとポンと手を叩いた。しかしそれは妹の覚悟を甘く見ていたのだつた。

「いえ、違いますよ。コスプレで五更さんを頼るのは確かにんですけど……大会の衣装は私が作ろうと思ひます！」

「えつ、お前が作るの!? なんでもまた?」

「大会に出るのが加奈子で、衣装を五更さんに用意して貰つてだと……桐乃にプレゼントをするのに私は何もしてない事になつちやいますから……それにこれは完全に私が儘なんですけど、今回のプレゼントは学校の大会のものなので、五更さんや楓島さん、それに兄さんの力はなるべくなら借りたくないんです。……兄さんに相談して、五更さんにコスプレ衣装の作り方を教わろうなんて、もう十分過ぎる程力を借りるからおかしな話ですけど……」

「いや、おかしくないさ」

俺は微笑して、あやせの頭を軽く撫でた。

桐乃の一番の親友でいたいという可愛い嫉妬なのだろう。

……なら俺からあいつに贈るのも止めておこう。あと黒猫と沙織にも自重してもらうように頼むか。あいつらには悪いけど、今回は可愛い妹を優先させてもらおう。まあ

あいつらなら事情を話せば納得してくれるんじやね？かな？ またシスコンシスコン  
言われそ？だけどな。

「じゃあ、連絡するぞ。場所はこの間のサイズでいいか？」

「ええ、大丈夫です。それと兄さん、もし五更さんが大丈夫なら彼女と二人で会いたいん  
ですけど、いいですか？」

「へっ？ 僕抜きで、お前と黒猫二人でつてことか？」

「ええ、もし衣装作りを教えてもらえるなら、今後兄さんぬきですし、それなら最初から  
二人で話してみたいなど……」

まあたしかに僕の力になるべく借りたく無いつて言つてたし、コスプレ衣装作りをす  
る時に俺は邪魔になるかもしれないからな。

「ううん、まあ黒猫に聞いてみるよ」

「ありがとう、兄さん！」

黒猫しだいだな。しかし黒猫が二人で会うのOKしたら……黒猫あいつ人見知りだ  
し、大丈夫だろうか？

俺は不安を胸に黒猫のアドレスを呼び出した。



ふうー、私は一口飲んだコーヒーを皿に戻した。力チカチと耳障りな音を立て皿に置かれたコーヒーカップ。

駄目ね。千葉（せんよう）の堕天聖たる私がこのような事で無様に緊張するなんて、待ち合わせの三十分も前に来てしまつたし。

やはり京介に付き添つてもらうべきだつたかしら。

……いえ、あんな心配そうな声で『大丈夫か黒猫？ 無理なら断わつてくれて構わないんだぞ』なんて言われたら、私のプライドにかけて断れないわよ！ まつたくあの男は私を王宮に閉じ込められた世間知らずの姫とでも思つているのかしら。

それにしてまさかメデューサと二人で秘密の会合を開く事になるとは……やはり未来というものは読めないものね。

……どうやら、今回の待ち人があらわれたようね。

「すみません、お待たせしました」

「気にしなくていいわ、私もさつき來たばかりだから。それにまだ指定の時刻より10分早いし」

本当は20分前に來ていたのだけれど、ここは年上として余裕の態度を見せておきましょう。

「でも、私が五更さんにお願いをしに来たのに、遅れてしまつた訳ですかから……」

「相手がいいと言つてはいるのに謝る方が失礼よ。いいからさつさと座りなさい。……貴女もドリンクバーで良いかしら？ それとも何か食べる？」

「……ふふつ、ありがとうございます。食べ物は大丈夫なので、ドリンクバーでお願いします」

メデューサが嬉しそうに微笑んできた。何が可笑しいのだろうか？ 私はボタンを押して店員を呼びながら、ムツとした声で問い合わせた。

「何か可笑しい事があつたかしら？」

「いえ、ごめんなさい。ぶつきらぼうな態度なんですけど、五更さんはやつぱり良い人なんだと思いまして」

「なつ！？」

メデューサは私の問いに微笑ましげに答えてきた。

彼女はやつぱり京介の妹なのね。なんというか無防備に人の懷に飛び込んでくる感じが同じなのだ。

最初に彼女と京介を見た時はなんて似ていない兄妹なんだと思つたのに。まああの時はそれどころじやない修羅場だつたのだけど……あの時は彼女の迫力に本当に石化してしまうんじやないかと思つたわ。

それに地味顔の京介と正統派美少女ヒロインの様な美形の妹。そして彼女の別れ際の『兄さんを、とっちゃだめですよ♪』発言から、このまつたく似ていない兄妹は、もしや血の繋がっていない……みたいなアニメの様な展開を考えてしまい。しばらく悶々としてしまったわね。

私が思考に耽っていると店員がやつてきた。

「お待たせ致しました」

「すみません、ドリンクバー追加お願ひします」

「かしこまりました。ドリンクバーお一つ追加ですね。他に何かござりますか?」

「それだけで大丈夫です」

「ありがとうございます。それではあちらでお取り下さい」

彼女がそつなく注文を終わらせた。店員の声のトーンが私の時と違いすぎてムカつくわね。美少女が微笑んでいるのだからわからないでもないけど……プロなら差別しないでほしいわね……呪うわよ。

「五更さん、ドリンクとつて来ますね」

「ええ、いつてらつしやい」

ドリンクを取りに行く彼女の背中を見つめながら私は京介からの電話の内容を思い出した。

メルルのコスプレ大会に出たいからコスプレ衣装の作り方を妹に教えて欲しいねえ。コスプレに興味を持つてくれる人が増えるなら嬉しいのだけど……大会の賞品目当てだけだと複雑だわ。

「お待たせしました」

考え込んでいるとメデューサがオレンジジュースを手に戻ってきた。  
さて、なるようになれね。気合いを入れますか。

「あらためて、久しぶりね。まだ正式に名乗つてなかつたわね。千葉の堕天聖、黒猫よ！」

「せ、せんようのだてんせいですか……」

あらあら、ドン引きしてるわね。まつ、それが庶民の反応よね。特に彼女はオタク嫌いのようだし、このまま話はお流れかしら？

「あーーー、失礼しました。せんようさん、だてんせいさん、黒猫さん、五更さん、どう呼んだらよろしいですか？」

あら？ 驚いたわ。本当にオタクへの抵抗が減ってきたのね。

「黒猫でいいわよ」

「そうですか。それじゃあ黒猫さん、改めまして新垣あやせです。いつも兄がお世話をなつてます」

「呼び捨てでいいわよ。桐乃や京介もそうだしね」

「年上の人を……いえ、なら黒猫、よろしくお願ひします。それなら私の事もあやせでいいですよ」

ふむ、ちょっと考えたようね。まあ何を考えたかはわからないけれど。こつちもいつまでもメデューサ呼びは失礼かしらね？

「わかつたわ、あやせ。私にコスプレ衣装の作り方を教わりたいって聞いているけど間違ひ無いかしら？」

「はい。メルルのコスプレ大会用の衣装を作りたいので、是非教えて欲しいんです！」

ふうん、熱意は十分みたいね。

「貴女オタク趣味は嫌いなんでしょ。大会の賞品目当てのそんな人には教えたく無いのだけれど」

「…………それは」

表情を暗くするあやせ。そんな彼女に私は微笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、冗談よ。京介から聞いているわ。桐乃へのプレゼントなんでしょ？」

「そうです……」

私の言葉にあやせがムツとした表情を浮かべた。これくらいの意趣返しはさせてもらいましょう。まつたく京介も面倒な事を投げてきたものだわ。

「それは私が作つてはマズイのかしら？　桐乃の為なら、面倒臭いけど本当に特別に作つてあげてもいいわよ？」

「私が、桐乃の為に、作りたいんです!!」

即答ね！　やつぱり京介の言うように桐乃とわたし達の関係への嫉妬がからんでるのね。面倒臭い、あの馬鹿への友情なんて私は持つていないと。……まあお祝いというなら、特別にプレゼントを用意してあげてもいいのだけれど……でも、それも今回は止めてくれって言われたんだけどね。まつたくあのシスコンは！

「はあ、わかつたわ。それでどんな衣装を作りたいの？　それと貴女、ミシンとか縫い物は問題無い？」

「えっと縫い物は基本的な事は出来ます。ミシンも家にあります。あと衣装は主人公のメルルの衣装をお願いします」

縫い物が出来て、ミシンがあるならなんとかなるかしらね。型とかは私が協力すればいいし、それにしてもメルルねえ、あれはあやせが着ても似合わないんじやないかしら？

「衣装はメルルでいいの？　その……とても賞品を狙えるとは思えないのだけれど」

「あっ、すみません。衣装を着るの私じゃないんです。この娘に着せようと思つてます」

そう言うとあやせは私に携帯の写真を見せた。

「なるほど、これなら優勝も狙えるかも知れないわね」

写真にはリアルメールといつてもいい少女が写っていた。

「ええ、優勝ねらいますよ！」

「でも、貴女じやないなら寸法とかはわかるのかしら？」

「それも問題ありません！」

力強い返事が帰ってきた。どうやら本当に優勝狙つて いるようね。

「すみません、それともう一つ……」

あやせがまた写真を見せて、小さな声で私に頼みごとをしてきた。

「貴女、正気!?」

「ええ、万が一の時に……」

「わかつたわ。我が闇の力を持つて、全力で協力してあげるわ！」

まさかそこまでの覚悟を決めて いるなんて……恐ろしい女ね？！

「それじゃあ、話は決まつた事だし。我が居城に移つて話を詰めるわよ」

「居城：黒猫の家ですね。わかりました」

サイゼを出ようと思った私にふと疑問がよぎった。

「そういえば、一つ聞いていいかしら？」

「もちろんいいですよ、なんですか？」

「今回の話し合い程度なら、別に京介が居ても良かつたんじやないかしら？」

「え、ええとですね……」

「なにかしら？ 隠すような事があつたかしら？」

「ううう、はあ、兄さんには言わないで下さいよ。……もしかしたら、今みたいに黒猫の家に行く事になるかもと思いまして……」

「それがどうしたの？」

「……兄さんが黒猫の家を知つてですね。もしふとした事で兄さんと黒猫が家で二人きりになつてしまふのが嫌だなと思つてしましました」

「はあ!? それだけなの?」

「えつと……はい」

目の前で顔を赤らめている馬鹿を見つめる。

……このブラコンはもう手遅れね。

私は京介が本当にアニメやマンガの様に道を間違えないか心配になつてしまつた。

## 第26話

あたしは啞然とした顔でテーブルの先にいる女を見詰めた。あたしの視線にも動じることなく、につこりと微笑んでいる美少女。

まあ美少女といつても、この加奈子様の美貌には敵わねーけどな。ただあたしには及ばないものの、清楚で真面目そうな姿はきっと男ウケはいいんじやねーかな？ 知らないけど？

まあ結局なにが言いたいかつづーと、あたしの友人である清楚系美少女あやせが目前で座つてることだ。

そのあやせがにつこりと微笑む姿は、男どもならきっと見惚れるんだろうな。ただあたしは騙されねえぞ！ おそらく口クでもない事を考えてるに違えねえ！

こいつ、見かけに反して中身は真っ黒だつてこと、この加奈子様は見破つてるからな

!!

なにせ今あたしの目の前に置かれている物からして既に碌な予感しねーし！

「あやせ～わり～んだけど、もつかい言つてくんね？」

「はい、いいですよ。加奈子、この大会に出てみませんか？」

やっぱりさつき聞いた言葉は間違いじやねーみたいだ。

あたしは目線を下に降ろした。そこにあるのは『第二回、星くず☆ういつちメルル公式コスプレ大会』と書かれた少女アニメキャラがポーズを決めている応募用紙で、それはテーブルの上で存在感を際立させていた。

駅前の喫茶店、いやケーキショッピングか？ うめ～ケーキあるし。とにかくあたしが頼んだショートケーキとオレンジジュース、あやせが頼んだチーズケーキに紅茶が置かれたテーブルの真ん中にアニメキャラがババーンと描かれた応募用紙がある訳だ。違和感しかねえし！

とりあえずあやせの言葉が聞き間違えじやなかつたつついなら、あたしが言える言葉は一つだけだ。

「そんなキメエ～大会に加奈子様が出るはずねー！ つうか、こんなん薦めてくるつて、あやせ大丈夫か？ もしかして夏の暑さにやられた？」

まつたく、あやせが奢ってくれるつーから付き合つてやつたけどよ。まさかこんな薦められるなんて普通おもわねーし。

なんか厄介な頼み事くらいはされるかもと思つたけど完全予想外だ。友人の頼み事だし、聞いてやらねえこともね～なと思ってたけど、さすがにこれは1000円じや、割にあわねーだろ！

おつと、別に加奈子様は駅前の評判のケーキセットに釣られて、のこのことについて来た訳じやねーからな！

勘違いすんなよ！　あくまで友人として応えてやろうと思つて付き合つたら、ふざけた内容だつたから断るんだからな。

けつして、こんな奢り程度じや割にあわね～つて思つて断る訳じやねーからな!!

うむうむ、あたしは心の中で自分を正当化して、生クリームたつぶりのショートを切り分けて口に運んだ。

うん、うめ～な！　特別に加奈子様が一つ星をつけてやんよ。でもメシの評価つて、なんで星なんだろな？　……まつどうでもいつか、うめ～もんはうめ～し！

加奈子様がご満悦していると、固まつてたあやせがなんか小さい声でブツブツ呟いてる。

『……そうですよね。加奈子に考慮した私が馬鹿だつたんですよね……』

聞こえねーけど、なんか非常にやべ～予感がするし。

「うふふふ、加奈子ごめんなさい。私言い間違えをしてました」

「な、なんだよ……」

うげえ、この女本性見せやがつた。

微笑んでるんだけど、目が笑つてねーんだよ！　こえ～から！

恐ろしいプレッシャーを感じんし、いつも思うんだけど、こいつほんと何もんなんだよ。

「加奈子、この大会に出て優勝してきなさい！」

「命令かよ!? しかも優勝かよ！ まあ加奈子様が出れば優勝なんてマジちよれゝけどよ。だからって、出ねーし！ だいたいこんな大会つてあれだろ？ マジキメエゝオタク共が大勢集まつて、やらしい目で見つめてくんだろ。ぜつてーいやだ！」

「加奈子!!」

「で、出ない…からな」

いくらあやせが脅してきたつてへつちやらだからな。  
こ、声を震わせてなんていねーぞ。

じつとりと背中に感じる汗は、あれだ店の冷房の効きがわりーんだ。

だから外を眺めるのは、あやせから視線を逸らすためとかじやねーから、あくまで外の様子が気になつただけだから！

……窓から見える景色は幸せオーラ全開のカツプルが手を繋いでいた。あーゆうのマジほんと死滅しろよ。

あたしが気分を害して視線を戻すと、まだあやせが睨みつけてやがった。

「…………」

「に、睨んでも、で、出ねーからな、これあたしにメリットがねーだろー！」

「メリット…………メリットなら有りますよ?」

「はあ? テキトーな事言うなよ。嘘でごまかされねーからな」

「いえ、本当ですよ」

あやせからのプレッシャーがやんだ。どうやら脅しから説得に方向を変えるみたいだ。

ほつと胸を撫で下ろす。べ、別にビビってた訳じやねーからな、ほんとだぞ!  
……あんなんにメリットなんか有るとは思えねーけど、嘘は吐いてねーみたいだし、  
聞くだけ聞いてやるか。

「加奈子は将来アイドルになりたいんですね?」

「おう、もち超~く凄えスーパーアイドルになつてやんよ! あやせにはいまのうち特  
別にサインayanよ!」

「いりません」

即答かよ、このやろ。あとになつて欲しいとか言つてもぜつてえやらねーかんな。も  
う決めた。絶対後悔させてやる!

「膨れないで下さいよ。デビューしたらちゃんと貰いにいきますから」「  
けつ、ぜつてーに書いてyanね」

あたしがそっぽを向くと、あやせが苦笑したあとコホンと咳を一つ入れてメリットの

説明に戻った。

「とにかく話を戻しますよ。最近知ったんですけど、近頃はアイドルもアニメやゲームが好きだつたり、アニメの声優のお仕事をされてる人もいるみたいらしいんですよ。ですからこういうイベントもアイドルデビューのきっかけになると思うんですよ。仮にデビューとかに関係なかつたとしても、公式の大会に優勝という実績はたぶんその後有利に働くと私は思いますよ」

「へへ、マジ？ でもたしかに、ジブリとかタレント使つてるみたいな話聞いた事があつたような～？ つてかあやせ詳しくね？ もしかしてあやせもアイドル目指してんの？」

「目指してません!! たまたま兄さんから聞いたの覚えていたんですよ！」

「ふうん、しょぼ京介からね～」

あいつアイドルとか好きなのか？ なら～んど、加奈子様が特別にサイン書いてやつかな。きっと泣いて喜ぶにちがえーねえだろ！

「ちゃんとメリットあるでしよう。どうですか？」

「……う～ん、たしかにさ、マジでメリットあるっぽいけどさ。それって別にコスプレ大会じや無くてもよくね？」

「……えっとですね」

「あたしはさ、超スーパー凄えアイドル目指すんだぜ。だから大会とかも凄えの出るから、やっぱしバス！」

「ま、待つて下さい。ほ、他にもメリットあるんです！」

「……一応聞いてやんよ」

「え、えっと……そうです。アイドルオタクなんて、やっぱり他のオタクと一緒に気持ち悪いんですけどから、アイドルになるならそういう人達にも慣れる必要があるはずです。練習を兼ねて大会に出てみましよう、ね！」

「この女……やっぱ真っ黒だ!?」

「……お前……今いろんな方向の人間を敵に回した気がすんぞ!? つゝか、やっぱしキメエ連中相手にすんじゃねーか！ ゼットー出ねえぞ！」

あたしの叫びにあやせの表情が消えた。

無表情で懐が寂しいあたしに非情な宣告を突きつけてきやがった。

「……奢るのやめますよ」

「あつ、てめえそれ卑怯だろ！」

「ふふふ、どうしますか？」

くう～マジで卑怯者だこいつ。

「ぬ、ぬぐぐぐ、でもやっぱ1000円じゃ割にあわねー！ 断る！」

今月厳しいけど仕方ね。秋物の金足りつかない?

「…………どうしてもダメですか?」

「へん、お断りだぜ!」

あやせが懇願するような目で見つめてきた。

今度は泣き落としか? 男ならころつと引つかかるかもしけねーけど、あたしには無駄だぜ。

つうか脅したあと泣き落としつて、男でも引つかからねえだろ? 引つかからねーよな?

「…………わかりました。：しかたないですよね。あと奢らないと言うのは嘘ですよ」

あやせがはあくまくと長いため息を吐いて哀しげな表情で伝票を握った。

普段ならやつぱ奢ってくれんの、ラツキーと思つちまうんだけど、そんな表情見ちまうとどうにもきまりが悪い。

どうやらさつきの泣き落としとはちげえみたいだし。

横顔を指で搔きながら、あやせに聞いてみる。

「なあ……お前なんでこんな大会にこだわんだ?」

「…………そうですね。ここまできたら隠しても仕方ないですよね。この大会の優勝商品が

欲しいんですよ

立ち上がりろうとしたあやせが席に戻った。

なにかを諦めた目をして応募用紙を見詰めている。

「優勝商品？ それってこのメルルって奴のフィギュアか？ あれ、あやせってオタク嫌つてなかつたけ？ 実はオタクだつたとか？」

「違いますよ。……欲しがつてる人がいるからプレゼントにしようと思つたんです」

「こんなもん欲しがる奴つて……つゝか、あやせなら自分で出れば優勝できんじやね？」

「出たくなかつたから加奈子に頼んだんですよ」

こ、こいつ、自分が出たくないもんに、あたしを出そうとか、腹黒惡魔め、同情して損した。

あたしが睨みつけるとあやせがしれつとした顔で答える。

「まあそれは冗談ですが、いえ半分本当ですけど。どちらかというと問題は私だと優勝は難しいと思いまして、それで加奈子に頼んだんですよ」

「おーわかつてんじやん！ 加奈子様の美貌には敵わないと聞いて事だろ！」

「違います。そのメルルつてキヤラが加奈子にそつくりつてだけです！」

あたしはチラツと応募用紙のピンク髪のイラストを確認した。

「はあ？ これがあたしに？ 別に似てなくね？」

「なに言つてるんですか！ どう見てもそつくりですよ。兄さんもその友達も加奈子の写真見たら凄く納得してましたし」

「うへえ～マジかよ～。て～か、京介はともかく、知らない奴にあたしの写真見せて批評するの酷くね？」

あたしの指摘にあやせが顔を引きつらせた。

「うつ、それは、でも、その人は女の子ですから心配はいらないですよ」

「…………」

あたしはジト目であやせを見詰めた。

「…………ごめんなさい。加奈子へ断らずに写真見せてあれこれ言るのは、たしかに酷いですよね。私もそんな事されたくありませんし」

「まつ、いいけどな。それに将来スーパースターになつたら、あたしの写真集なんて一億くらい出回るわけだしうひひひ

「もう、謝つて損しました。なにが一億部ですか……」

あやせがため息を吐いている。

そういうえばあやせをやりこめたのつて、これが初じやね？

あれだ、たしか、えつと人類にとつてはつまらない事でも、あたしにとつては大きな一步つてやつだ！

あれ、これで良かつたつけ？　：まついつか！

上機嫌なあたしに比べ、あやせの顔は暗い。なにか思いつめたような表情である。  
そんなに出たくねー大会に出てまで、プレゼントしたい相手なのかよ？

しかも優勝には加奈子様の力が必要なんだろ。

ううううう仕方ねううううう。

あやせ貸し1だかんな!!

あたしは頭をガリガリ掻きながらあやせに答えてやつた。

「わかった。出てやんよ」

「えつ」

ぽかーんとした表情のあやせ。あやせがこんな表情するなんてな。

まだ理解してないあやせに再度告げてやる。

「だから、出てやるよ大会！」

「えつ、嘘つ!? 本当にですか、加奈子!? 嘘だつたらタダじゃ起きませんよ!!」

あやせがガタツと椅子から立ち上がり身を乗り出して確認してくる。

あまりの迫力に思わず身を引いちまう。

嘘つつたらあたしになにする気だ、こいつ!?

：いや、こえくから考えねーようにしよう。

「お、おう。そんかわし、あと二回、いや、三回ケーキ奢れよな！」

あやせが食べてたチーズケーキ、そしてモンブラン、あとは季節のフルーツタルトも美味そうだよな。

あたしが奢らせるケーキを考えると、あやせが席を回り込み、あたしに抱きついてきた。

「ええ、ええ、もう何でも奢っちゃいますよ！ 加奈子ありがとうございます！ 大好き!!」

「?! ちよつ、人が見てつから!? あやせ、あやせつてば!?!」

慌てるあたしに対しても聞こえてねーのか、あやせはますますぎゅっと力を入れて抱きしめてくる。

マジで今日のあやせおかし過ぎねえか?!

おい、そこの餓鬼、人を指差すんじやねー！

女ども、あたし達はレズじやねーよ！

そこの男、興奮した顔で写メ取るんじやねー、変態、訴えるぞ!!

興奮が落ち着いたのか？ あやせがようやく離してくれた。

自分のとつた行動にやつと気が付いたのか、あやせの顔は真っ赤だつた。

……おそらく自分の顔も赤くなつてるとと思う。

ちくしょう、こんな迷惑かけられんなら、何でも奢るつて言つてたし、もつと吹つ掛

けときや良かつた！

まつたくあやせの奴……だけど……まあ、恥ずかつたけど……たまにならこういう暑苦しいのも悪くねーのかもな！

「ごめんなさい加奈子。自分を見失つてしまいました」

「…まつ、いいけどよ。なんかあやせキヤラと違うね？」

「そうですか？ …そろかも知れませんね。最近は兄さんの影響を受けてるかも知れな  
いですから」

「京介のね～。まあ京介がオタクになつちまつたんだから、プラコンのあやせは何かし  
ら影響あるか」

「プラコンじやありませんよ!! というか兄さんがオタクつてどういう事ですか?!? な  
んでそうなるんですか?!?」

「いまさら隠さなくともいいじやん！ だつて、あやせが出たくない大会に出てまでプ  
レゼントしたい大事な相手つて、そんないねえだろ？ そしてさつきあたしの写真で京  
介はメルルそつくりつて判断したつて言つてたし。そんなんオタクじやなきや無理  
じやん！ あやせがそこまでするほどの相手でオタクつて、もう京介しかいねーじやん  
！」

「うつ、えつと、それはですね。なんといいますか、どう説明したものか……」

あやせがあたふた慌てる。ほんと今日は今までにないあやせの姿を見るよな。

「う、ふ、ふ、あやせもそんなキメエー兄貴持つて大変だよな。でも安心しな加奈子様はそこまでオタクに偏見ねーからよ。家族がオタクなんてこと無理に隠さなくとも構わねーぜ！ なんせうちも……なんでもねー」

「……………」

「あはっ、それにしても京介がオタクかあー。今度会つたら、マジキメエーつてからかつてやろー！ にひひひひつ」

「……………兄さん…………めんなさい」

あやせが京介に謝つてる。やつぱオタクばれしたくなかったのか？

まあ加奈子様は気なんか使つてやらねーぜ！ からかいまくつてやろー！

今日は訳わからぬえ頼み事されちまつたけど、あやせに貸し作れだし、京介をからかうネタが出来たし、ケーキ美味かつたし、なんだかんだ良い日だつたよなー。

「あれ？ そういうや、なんで今日桐乃いねーの？」

「桐乃はいいんです！」

「そんな怒鳴んなくともいいーじやん。ああ、なるほど桐乃に兄貴がオタクつて事バレたくないつて訳ね」

「う、う、う、う、う、う、う、う」

## 第27話

「兄さん、早くして下さい！ 行きますよ！」

あやせの少し怒った声が玄関から俺の耳に届いた。その声に急かされて、俺は上着を羽織りながらドタドタと階段を慌てて駆け下りる。

「わ、悪い。待たせた」

焦りながら謝罪を入れる俺に、玄関で待機しているあやせが腰に手を当てて睨みつけてくる。

「もうつ、どうしてこんな日に限つて寝坊するんですか！」

「すまん」

よりによつてコスプレ大会の当日に寝過ごしちまうなんてな。

ほんと言ひ訳も出来ないミスであつた。

妹に詫びながら中腰で靴の踵を手で整えていると、あやせが俺の頭に手を伸ばしてき  
た。

「うおっ、お仕置きか!?」

思わず身構えてしまつた俺に対し、あやせは撫るように髪を梳いてくれる。

「ここ寝癖が跳ねてますよ。まつたく兄さんは仕方ないです。……よし、これで……大丈夫ですね！」

「…………」

「俺が固まっていると、あやせがきょとんとした顔で問い合わせる。  
「どうかしましたか？」

「…………いや、何でもない。サンキューな」

そう言いながらも俺の心の中は、とてもじやないが何でもないなんて言えない状態  
だつた。

不意打ちもいいところだ。なまじお仕置きされるんじやないかと身構えていたところに、優しい手つきで頭を撫でられるなんてギャップが激しすぎた。思わずドキッとしてしまつた。

撫でボは実在したのか!?

…………しかしやる側とやられる側の立場逆じやないだろうか?

俺つて攻略キャラだつたのか!?

しかも妹に?

ダメだ。思考が混乱している。

とりあえず……あやせに髪を梳かれるのは、なんというか、とても恥ずかしかった

のだ。

「……仲良いわね、あなた達。それより京介、朝ご飯食べないの？ 用意したんだけど」  
脳内でパニックを起こしていた俺に背中から呆れたような声が聞こえてきた。その声に俺はビクツとなり、ゆっくりと振り返った。

そこにはあやせをきつめにして20年位経つたらこうなるんだろうなという人が、リビングのドアを開けて溜息を吐いていた。

近所でも評判の美人奥様である俺の母親である。母親を美人っていうのは抵抗あるが、外見は確かに綺麗なのだ。

ただしどんなに美人だろうと、俺にとつては口うるさい何処にでもいる普通の母親と変わらないけどな。

「あくびめん母さん。もう出ないと行けないから、適当にコンビニでパンでも食べるよ」「…コンビニのご飯は身体に悪いのよ。用意した朝ご飯も無駄になっちゃうし、寝坊するなんてちゃんと目覚ましかけときなさいよ。あなたはまったく、少しはあやせを見習いなさい！」

いつもの説教が始まってしまった。

PTAの会長もやつていたので、うちの母親は生真面目な教育ママなのだ。そしてあやせが優秀な分、俺はしそつちゅう比較されて怒られるのだ。

正直なところ、俺のように普通で平凡こそが一番みたいな性格じやなきや、いちいち

優秀な妹と比較され続けてたらグレてるぞと思わないでもない。

ただし今回は俺でも自分に呆れる出来事なんで、ぐうの音も出ねえけどな。

「お母さん、もう行かないといけないから、その……」

母の説教が長くなりそうな事を察してか、あやせが助け舟を入れてくれた。

これから本格的になる前に横槍が入った為だろう、母がきよとんとした表情になる。それは先程の妹の様子とそつくりだつた。流石は親子である。

「あつ、ああ、そうよね。二人とも夕飯までには帰れるの？」

「はい、夕方には帰れると思います。じゃあ、お母さん、行ってきます」

「朝飯ごめん、行ってきます」

「はい、行つてらっしゃい。車に気をつけるのよ」

俺は母に朝飯の事に詫びを入れて、母親お決まりの挨拶を背に玄関を潜り抜けた。

秋にも関わらずまだ元気な太陽光線が目には染みる。額に手を当て空を仰ぎ見る。ああ、今日はいい天気だ。絶好のコスプレ大会日和である。

……絶好のコスプレ大会日和つてなんだろな？ 俺の頭に浮かんできたのは、太陽の下で寝そべる魔法少女や吸血鬼、それに緑のセミの様な人造人間…うんシユールだ。おっと、あまり馬鹿な事を考えてないでさつさと歩かないと、これ以上あやせに迷惑

をかけられねえしな。

俺は前を歩くあやせを急いで追いかけた。

「あやせ、さつきは助かつた」

「どういたしまして、でも兄さんお母さんは朝ご飯ちゃんと用意してくれたんですから、今日は仕方ないですけど、しつかりと反省して下さいね」

「うつ、反省はしてるけどよ。しつかし……あやせも起こしてくれればいいのに」

俺は思わずつい思つていた事を口にしてしまった。

「……うふふふふふ、兄さん、私はドアの前で一時間前に呼び掛けましたよ」

あやせがとつてもいい笑顔で振り返つた。その素晴らしい笑顔に俺は冷や汗を禁じ得ない。

「え、えっと本当でしようか。あやせさん」

あやせの迫力に思わず敬語になつてしまふ俺。

「ええ。『おーう』つて返事があつたので、自分の支度をしていたのですが……まさか兄さんが一度寝していたとは思つてもいませんでしたよ」

「あつああ、うん、そのだな」

やべえーー、藪蛇だつた。全然記憶にないんだけど。あやせが嘘つく筈ないし、無意識で返事しちまつたんだろうな。

「それとも桐乃に借りたゲームみたいに部屋に入つてから、寝ている兄さんの上に跨つて起こして欲しかつたんですか？」

「いや、それはだな…………はあ！」

ちよつと待て、いま聞き捨てならないセリフが混じつてたぞ!?

「なんですか兄さん！ 急に大きな声出してビックリするじゃないですか！」

「いや、あやせ…………そのな…………桐乃の……その……ゲームやつたのか？」

「はい？ ゲーム？ ～～～～～～～～～～～～」

あやせが目を丸くして固まつてしまつた。

ああ、なるほど、これは間違いなさそうだ。まさかの事態である。

……運がいいな桐乃、貸してきたのが18禁だつたら、終わつてたゞお前。まあその時はもれなく俺も死亡してただろうけどな。あとこんな事態なんで、運がいいつていつてもほんと不幸中の幸い程度のレベルだけどな……

しかし桐乃的にあやせに自分のゲームをやられるのは困るんじやないか？ それならこれを機にギャルゲーを貸してくるのを防げるんじやねえか？ もしかしてこれはチャンスか？

……いや待て桐乃の事だ、あやせがゲームやつたの知つたらこれ幸いとどんどん勧めてくるんじや…………『兄さん、どうですこのメルルフイギュア凄く可愛いですよね♪

手に入れるの凄く苦労したんですよ！ うふつうふふふふふつ』

そんなあやせは嫌だああーーー！

こ、この事は俺の胸にしまつておこう。桐乃のような妹が誕生するなんて悪夢以外の何物でもねえ。

俺が恐ろしい未来に戦慄していると、フリーズしていたあやせが復旧した。

「ち、違いますよ!? あ、あくまで桐乃が兄さんに貸すものがどんな物か確認しただけですからね！ 本当に少しやつてみただけなんですよ！」

「そ、そうだよな。桐乃がどんな物持っているか気になつただけだよな。……ハマつたりなんかしてねえよな？」

「そうです。そうです。気になつてしまつただけなんですよ！ ハマつたりなんかする訳ないじやないですか！」

「…………」

「…………」

凄く氣まずい。まさかあやせがギャルゲーをプレイしてるとは思わなかつたからな。あやせとしてもまさかバレるとは思つてなかつたんだろう。

確かに桐乃がどんなものをやつているのか親友なら気になつて当たり前といえば当たり前なんだが……なんだろう、何かが酷く間違つている気がしてしまるのは、何故だ

ろうか？

ただあやせがオタク化するという恐怖の未来は実現しないようなので、それだけが幸いである。

気まずさを「まかすようにあやせが質問をしてきた。

「ち、ちなみにですよ。あれは……兄さんが桐乃にリクエストしたんですか？」

顔を赤らめた妹がチラリチラリと俺の顔を覗き込んでくる。

リクエスト？ えつと……最近桐乃に借りたソフトはたしか「実妹恋人～禁断つて萌えるよね～」だつたけ……

アウト～！ いや、これもう完全アウト！！ ゲームセットだろ？

いやエロ無しの完全な純愛系だつたし、意外な事にまあまあ面白かつたけどよ。だけどどう考えてもやらかしちまつた。

桐乃いわく『タイトルで失敗しちやつただけの名作だからタイトルは気にせずとりあえずやってみて、内容はマジ神でチョー切ないんだつて、ヒロインのちとせちゃんがこれまで健気で可愛くて可愛くて、うひひつ』まあそこまで言うならと、最近いろいろ麻辣してたから借りちまつたけどよ。

もし借りた当時に戻れるんなら自分をぶん殴つてでも止めてるよ！ マジで時間戻して引き止めてえ～！

実の妹に実妹系の美少女ゲームされるつてどんな羞恥プレイだよ!?  
そりやあやせも実の兄貴がこんなもんやつてたら顔を赤くするよな。

と、とにかく誤解を解かねえと!!

「違うぞあやせ! 勘違いするなよ、これは桐乃の趣味なんだ! あいつは小さくて可愛い女の子、特にあどけない妹物が大好きなんだ。だから自分の好きな物を勧めてきたのであつて、俺があいつにリクエストした訳じやねえからな!!」

俺は誤解を解くために必死になつて言葉を重ねた。

俺の勢いに押された為か? あやせが身を引きながら答える。

「そ、そうなんですか桐乃の趣味……」

なにやら桐乃を売つてしまつた氣がするが、そもそもこんなもんを貸してきただあいつが悪いんだ。

脳内で桐乃が『京介の裏切り者〜〜〜!!』と騒いでいるが気にして負けだな。

「ああ、そなんだよ。だいたいあやせがいるのに妹物なんかリクエストするはず無いだろ」

「…そうですよね」

「それにもしリクエストするならメガネの似合う清楚なお嬢様系を頼むしよ」「……へえーー、そなですか……」

「いくらヒロインが可愛いかったとしても妹物の恋愛はねえよな」

「…………」

「どした、あやせ？」

「気がつくとあやせがジトツとした目でこちらを睨んでくる。

「ふーんだ。なんでもないですよ。どうせ兄さんはメガネの似合う女性がいいんですよ。麻奈美お姉さんや楓島さんみたいな

「はあ？ なんで麻奈美が出てくるんだ？」 それに沙織がメガネが似合う女性なんて

言つたら、それは全世界のメガネつ娘に対する冒涜だからな！」

あいつは凄えいい奴だけど、あのぐるぐるメガネを認める事は俺には出来ねえよ。

「……なんでしよう。拗ねた自分がバカみたいに思えますね。麻奈美お姉さんが可哀想になつてきました。楓島さんのも酷い評価ですし……はあ、兄さんのばか」

うん？ あやせが小さい声で何か呟いて溜息を吐いてるんだが、俺またなんか間違えちまつたか？

そういうえば、あやせが持つているのって今回のコスプレの衣装か？

あやせが普段は持ち歩かないような大きめのバッグを肩から下げている。

……俺も気が利かないよな。家から駅に行くまで結構歩いたけど今頃気がつくなんてよ。いつまでも可愛い妹に重い物持たせる訳にいかねえよな。

俺は左手で首筋を擦りながら、反対の手をあやせに伸ばした。

「あやせ、ほら貸せよ」

「? なんですか兄さん?」

あやせが不思議そうな顔をしている。言葉が足りねえか。

「荷物だよ。荷物。だいぶたつちまつたけど重いだろ」

「えつ、あつ、大丈夫ですよ。服ですからそんなに重くないです」

やれやれうちの妹様は慎ましいよな。

桐乃や加奈子だつたら『なに京介、珍しく気が利くじやん、今日雨降んじやない? まあせつかくだからよろしく!』『なになに遂に加奈子様の下僕としての自覚が出来てきただのか? まかせるけど落とすんじやねーぞ京介!』きっとこんな感じなんだろな。

まあ余り図々しいのも困りものだけど、遠慮が過ぎるのもちよつとな。  
俺はあやせの肩にかかつているバッグをヒヨイと持ち上げた。

「あつ、もう、兄さん強引ですよ」

「こうでもしないと渡さないだろお前。好意は素直に受け取つておけよ」

「はあ、まつたく:ありがとうございます兄さん」

あやせは困つたように息を一つ吐いた後、嬉しそうに微笑んだ。

その笑顔が見れれば報酬としては十分過ぎるほどだよ。

「そういえば時間まだ大丈夫なのか?」

「一応余裕を持つてますから、まだ大丈夫ですよ」

「それなら朝飯食べてから出ても大丈夫だつたか?」

「……そうですね。ごめんなさい兄さん。いま考えると急かし過ぎちゃいましたね」

「いや、寝坊した俺が悪いから謝る必要はねえよ」

あやせとそんな他愛ない話をしながら駅にたどり着いた。

休みという事もあり、私服姿の人がそれぞれに楽しそうに闊歩している。ほんとに楽しいかはわからんねえけど、少なくとも平日に比べれば表情が明るい人間は明らかに多い。

そんな中、人混みで見慣れた坊主頭の姿があつた。あれは間違いない田村さん家の長男である。

「おーい、ロツク!」

俺が呼び掛けると坊主頭ことロツクはビクツとした後にこちらを振り向き、ほつとした表情を浮かべた。

「なんだあんちやんかよ。脅かさないでくれよな」

「別に脅かしてないだろ。普通に呼んだだけじゃねーか。それともなんだお前誰かに追われてんのかよ?」

俺が話しかけている間もこいつは何かを警戒するようにビクビクとしている。お調子者のロツクのこんな姿は珍しい。

「なんでわかつたんだ、あんちやん!? 濃えな、おれ実はいま逃亡中なんだぜ!」

適当に言つたら当たつちまつたよ。しかしこいつ駅前の広場なんて目立つところにて……逃亡者としてそれはどうなんだ?

まあロツクらしいつちやあらしいけどな。

「ここにちは、田村くん。誰から逃亡中なんですか?」

俺の後ろからあやせがひょこつと顔を出し、ロツクに挨拶をする。

「わわわ、あ、新垣さん、こ、こ、ここにちはです」

相変わらずあやせの前だときよどるよな、こいつ。

「んで、なんで逃亡者なんてやってんだよ?」

「えつと……それは……」

あやせの顔をチラ見しながら言いづらそうなロツク。

どうせバカな事して逃げてるんだろうけど、それをあやせには知られたくないのか?

……ロツク、同じ男としてその気持ちは十分わかるぜ。まあ理解出来るだけで容赦はしてやらねえけどよ!

「どうせアホな理由なんだろ? ロツクがバカな事するのはあやせも十分理解してるか

ら、今更取り繕つたって手遅れだぞ！」

「あんちやん、酷え!?」

ロツクが救いを求めるようにあやせに目線を移した。

「えっと……あはは

あやせが困ったように笑う。その姿にロツクがガーンとショツクを受けているようだ。

あやせとロツクはそれ程付き合いは無いようだけど、俺があやせと話すときに時々だがロツクの話題も出ることがあり、だいたいそういう時の内容はあいつのおバカな行動なのだ。

俺は別に悪意があつてしてる訳じやないぞ。ただロツクの普段が普段なだけなんだから。

「というわけで諦めて吐いちまいなロツク！」

「おお、あんちやんなんかそれ刑事みたいでカッコイイな」

「おつ、そうか？」

「兄さん、恥ずかしいですから」

「おう……そうか」

「うーん、あやせには評判が悪いみたいだ。やつぱりこいつのは男にしかわかんねー

かな？

いや？　：黒猫か沙織ならわかつてくれそそうだよな。

「まあいいや。で、結局なにしたんだロック？」

「はあ、実はさ、あんちゃん。聞くも涙語るも涙の話でさ、学校の先生から：母ちゃんに連絡がいつちやつたんだよ」

「ふうん？」

「リアクション薄くねえか、あんちゃん！？」

「いや、あやせならともかくお前だとそこまで意外じやねーし、なに悪さしたんだ？」

「ううつ、あんちゃん俺への対応が厳しすぎないか？」

俺の言葉に涙目になるロック。しまった言い過ぎたか。しかしロック、男の涙目なんて気持ち悪いだけだぞ。

「もうつ、兄さん。あんまり田村君をイジメないで下さい。二人が仲良いのは分かりましたから」

「新垣さん～～～

ロックがキラキラした目であやせを見つめる。

だがよロック、その庇われ方はどう考へてもお前男として見られてねーぞ。まあ俺にとつてはそつちの方が都合いいけどな。

「悪かったよロック。それでどんな連絡が来たんだよ?」

「あつ、うん。えっと夏休みの宿題を出してくれって……」

あれ、俺の聞き間違いか?  
夏休みの宿題つて……

「はあつ? お前もう9月終わりだぞ!」

あやせもロックの予想の斜め上の答えに啞然とした表情を浮かべている。

「前にあんちやん言つてたじやんか。夏休みの宿題の本当の締め切りは新学期始まつてから一週間後だつて!」

「兄さん?」

ロックを呆れて見ていたあやせの目が冷たくなつて俺に向いてくる。

たしかに言つたな、小学校の頃31日ひいひい言つてこいつ見て、一週間後くらいが締め切りでなんとかなるとか……

ちなみに俺はきちんと休み中に終わらせてたぞ。嘘じやねえから、母親が厳しくてそんな裏テクニック使えなかつたんだよ。

まあとにかく勢いで誤魔化そう。

「アホか!? 確かに言つたかもしんねーけど、それすらとつくな過ぎてんじやねーか!」

「……一週間過ぎてなんとかなつたから……このまま逃げ切れるかなつてさ」

明後日の方向を見ながらロックが告白する。

またロツクのおバカ日記に新たなページが加わった瞬間である。

ロツクの告白によりあやせが再び呆れた目を俺からあいつに移す。どうやら俺への追求は回避出来たようだ。

「さて、無駄な時間を過ごしちまつたな。行くぞあやせ！」

「えっと…いいんですか、兄さん？」

あやせの手を取り、駅構内へ向かう。さすがのあやせもあんまりな内容を聞かされた為か、強く引き止めようとはしてこない。

「待ってくれよ、あんちゃん！　ここまで聞いておいて見捨てないでくれよ！」

立ち去ろうとする俺に対して、駆け寄つて袖を掴むロツク。

「ええい、服を引っ張るんじやねー、伸びんだろ！」

「あんちゃんにまで見捨てられたら、俺どうすればいいんだよ!?」

「知るかっ！　どう考えても自業自得じやねーか!!」

「そ、そう言わず、知恵を貸してくれよー」

泣き付くロツク。こいつ何が何でも掴んで離さないつもりかよ。

あやせも困った顔でこちらを見ている。それに周りの人たちが遠巻きにこちらを見て笑つてやがるし。

やれやれなんで俺はロツクに呼び掛けちまつたんだろうな。少し前の自分の行動に後

悔する。

……しかたねえ時間もあんま無いし、さつさと片付けるか。

俺は、はあゝとため息を一つ吐いてロツクに答えてやる。

「ロツク、結論から言うと既に手遅れだ。真っ直ぐに帰つて、母ちゃんに土下座するしかねえよ」

「うげえ、ほんとそれしかないのか、あんちゃん…」

俺の返答に顔を歪めるロツク。

「ああ、どう考えても詰んでる。そうだな…後は爺さんか麻奈美を味方につけて被害を減らす位しか思いつかねーよ」

「爺ちゃんはともかく、姉ちゃんは難しいよ。むしろ母ちゃんと一緒に叱つてくると思う」

まあ確かにひょうきんな爺さんに比べて麻奈美は真面目だからな。

「うん、そう言われりやそーか。でも麻奈美が怒つたつて別に大した事ないだろ?」

「なに言つてんだよあんちゃん。姉ちゃんが怒ると怖いんだぞ!」

「そうかあ? あいつが怒つても『京ちゃん、ぶんぶんだよ』って言いながら顔を膨ら

ませてる位のイメージしかわかねーんだけどな?」

「とにかく早く帰つて謝るしか道はないんだから、諦めろロツク」

「ううつ、そんな～」

ロツクががつくりと膝をついた。

「こいつは逃げられる道がほんとに有ると思つてたのか？」

「田村君、えっと：頑張つて下さい」

あやせも困惑した様子で励ましている。眞面目なあやせだから心情的にはロツクの母ちゃん側の味方なんだろうけど、さすがに目の前で凹んでるロツクを見て追い討ちは掛けられないのだろうな。

「そうだ！　あんちゃん、一緒に来てくれ！　あんちゃんが居れば母ちゃんも姉ちゃんもそんなに怒らない筈だ！」

あやせの励ましにすら反応できず突つ伏していたロツクが、名案を思いついたとばかりに急に顔を上げてきた。

しかしよりによつてなんて事を思い付きやがる。

「俺を巻き込むんじゃねえよ！！　それにだ、今日はこの後用事があるから無理だ！」

「用事？　そういうえばここ駅だし、どつか行くのか、あんちゃん？」

ロツクが今更ながらに俺たちの事に気がついた。

「あやせと一緒に東京にな。だからロツク、諦めて家に帰れ。お前の無事を祈つてやるくらいするからよ」

「…………」

俺の言葉を聞いたロツクはあやせと俺の顔を交互に見た後、腕を組んで宙を見上げた。そしてとんでもない一言を告げた。

「なあ、俺も一緒に行くよ！」

「はい？」

「このまま帰るより時間を置いて怒りが収まつた頃に帰つた方がいいかもしないし」

ロツクの言うことには僅かにだがそういう可能性も確かにある。だけど余計に怒りが増す可能性の方が遥かに大きいと思うけどな。

しかしこいつ相当切迫詰まってんな。俺だけならともかくあやせがいるのについて来ようとするなんて。

とにかく問題は俺たちがこれから行くのがコスプレ大会という事だ。ロツクについて来られるのは非常に困る。しかしどう断るべきか、こいついま必死だし、普通の断り方だとついて来そうだしな。

なんとか上手く……これでいつてみるか？

「あのなロツク……俺たちのデートを邪魔しないでくれ」「あっ、に、兄さん!?」

俺があやせの腰を抱き寄せてロツクに宣言した。

他人の逢い引きについて来る奴はいねえ!! しかもインパクト十分だし、これでロツクもお袋さんどころじやなくなるだろ。

「えつ、デート、あんちゃん、えつ!?

やはりインパクト十分だ。ロツクが混乱しているうちに畳み掛けよう。

「可愛い妹とお出かけなんだ。一人つきりにしてくれロツク」

「か、可愛いって、に、兄さん、そんな」

あやせがなにか言っているようだが、今はロツクを説得するのが先決だ。

呆気に取られていたロツクがぶるぶる震え出し、そして叫びを上げながら逃げ出した。

「そんな嘘だああああああああああああああああああああーーー!!」

凄えなあいつ、ドップラー効果を残して去つていったよ。

そしてすまないロツク、お前の言うように嘘なんだ。

「ふふふ、なんとかなつたな。あやせ悪いな。んつ、あやせ?」

「デート、可愛いって、そんな、えつ、えつ、これつてデートだつたんですか? えつ、えつ」

顔を赤くした妹がブツブツなにやら呟いている。

咄嗟の事であやせに説明出来なかつたし、あやせも混乱させちまつたか?

俺はあやせの顔を覗き込んだ。凄い真っ赤だ。これ熱とか出てないよな?

「おーい、あやせ、大丈夫か?」

俺が呼びかけると、ようやくあやせの焦点が戻る。

そこですぐ離れれば良かったんだ。俺はあやせを覗き込む為に顔を寄せていた訳だ。その距離は目と鼻の先、少し前に出ればキスが出来そうな距離だつたんだ。

惚けていたあやせが気が付いた時にキスが出来そうな距離に男の顔がありました。さてどうなるでしようか?

答えはこちら。

「えつ、あつ、はいいいいいいいいやああああああああああああああああああ

あやせが叫び声を上げながら、右手を天高く突き上げた。

ああ、いつもの伝説級のアツパーかつだよ。

俺は地に落ちるまでに二つの事を思つた。

こんな地元の駅でこんな騒ぎ起こしちまつて、これからどうしたものか?

そして気絶するだろう俺はコスプレ大会に間に合うのだろうか?と。

## 第28話

「はああーー、なんとか間に合つたな」

俺はメルルのコスプレ大会が開かれる会場前で呟いた。  
開演まではまだ一時間はあるのだが、大会への参加者側としては結構ギリギリらしい。

「もう、本当だつたらもつと余裕があつたのに、兄さんのせいですよ」

俺の呟きに反応したあやせが俺に文句を言つてくる。

おいおい、そいつはねえだろう。

あの後、気絶してしまつた俺だが30分も経たずに目を覚まして、今までの記録を大幅に塗り替える快挙を達成したのだ。しかしその為に支払つた代償は大きく、あやせに叩かれた両頬がまだジンジン痛んでいる。

気絶に往復ビンタ、ここまでされたのだから文句を言われるのは心外である。

「いやいや待てよ、俺のせいじやないだろ。どう考えても悪いのは気絶させたお前の方だろ」

思わず言い返した俺の返答に、あやせがキヨトンとした顔した後ぷるぷる震えだし

た。

「な、何を言つてゐるんですか！　あんな事されたら反撃して当たり前じゃないですか！　デ、デートなんて口走つて、わ、私を抱き寄せて、あ、あ、あまつさえ……キス、キスしようとするなんて〜〜〜〜通報しますよ!!」

あやせの絶叫が会場に響き渡る。メルルコスプレ大会の会場は予想以上にデカく、1000人位は集まる屋外ステージで、いまはスタッフが準備に勤しんでいた。そんな中にこの叫びである、仕事しているスタッフの人達が手を止めてこちらに注目してしまう。

こ、こいつ、なんて事を口走りやがる!?

「ちよつと待てええええええええええええーーーー!?　キスしようとなんてしてねえからなつ！！　そ、それにだ。たとえキスしたとしても、兄妹なんだから通報はねえだろう！」

あやせはキスされると思ったのかよ!?　うわあー、だから来る途中の電車では、赤い顔してこつちを無視してたのかよ。

先程の電車内での事を思い返していると、またもあやせがとんでもない発言を繰り出した。

「に、兄さんは、兄妹なら無理矢理キスしても犯罪じやないと思つてるんですか!?」  
目を丸くして驚愕の表情を浮かべる妹。

「はああ？ なんでそうなるんだ？ 無理矢理キスなんて一言も言つてねえだろ！」

余計な一言を付け加えてしまったとはいえ、なんでそうなる。

「だつてあの時は……無理矢理……じゃありますか」

あの時？ 駅での事か？ たしかにあの時は凄く顔を近づけちまつたけど……駅での出来事を思い出して、俺の視線が思わずあやせの唇に吸い込まれる。

「や、やつぱり兄さん……」

俺の行動が悪かつたのか？ それとも普段は優秀なあやせの頭脳がショートしてしまつたのか？ 完全に勘違いした妹が俺から後ずさり……防犯ブザーを取り出す。

あやせのその行動に慌てて俺は叫ぶ。

「だから違う違ううううう——!! キスしようとしてない。キスなんかしない。キスなんかしようとも思わない！」

いやいや防犯ブザーは本気でシャレにならないからな！？

俺はあやせの誤解を解くために必死で言葉を重ねる。

まさか妹相手にこんな弁解をする事になるなんて、人生は驚きの連続だよ。もちろんこんなサプライズは望んでねえけどよ、チクショウ！

「…………ですか、しようとも思わないですか」

俺の懸命な言葉に納得してくれたのか、あやせがポツリと言葉を漏らし俯いた。

落ち着いてくれたのはいいんだが、俺としては早くその右手の物を仕舞つて欲しい。  
いや、ほんと切実に。

「あのー大丈夫ですか? えーーとその、呼んだほうがいいですか?」

そんな俺たちに話し掛ける人物が現れた。もつと正確に表現するなら、あやせに女性スタッフがおずおずと語り掛けで来たのだ。

スタッフのお姉さんの手には携帯が握られており、背後に警備員らしき二人組があり、俺を睨みつけている。なんだか物々しい様子だ。それにお姉さんの言葉……呼ぶ……それは……もしかして警察か?

俺たちの今までの行動は……

美少女が男に通報しますよと叫ぶ

キスをするだのしないだの叫ぶ男

俯いている美少女、右手には握られている防犯ブザー……

おいおい…………これは……本当にヤバイのではないか?

俺は背中に冷たい汗を搔き、蒼白になつて固まってしまう。

そんな俺の態度にますます表情を硬ばらせるスタッフのお姉さん。そして少しづつ近寄ってくる警備員。緊迫した静寂がその場を支配したそんな中、俯いていたあやせが

お姉さんに頭を下げた。

「すみません、紛らわしいことしてしまいました。この人は兄なんです。ちょっとふざけてしまい、その…本当に申し訳ありません」

「…………本当にそうなの？」

あやせの言葉に女性スタッフが疑惑の目線を俺に向けてくる。まああやせの手に握られているものを考えれば疑われて当然である。

綺麗なお姉さんから、冷たい目線を向けられる。ある種の人達からしたらご褒美なんだろうけど、そんな趣味は無い俺にはまったく嬉しくない。

とにかく誤解を解くために、俺はあやせに続いて慌てて謝罪した。

「す、すいません、ほ、本当に俺はこいつの兄貴なんです。ほんとすいませんでした」

焦っていた為どもつてしまつたが、真剣さは伝わったのだろう。頭を下げる俺たちにお姉さんが呆れた声で注意する。

「……分かりました。あまり騒ぐようだと退場してもらう事になります。注意して下さい」

ふはああー、どうやら俺の社会的地位はなんとか守られたようだ。

妹に無理矢理キスを迫り、警察に逮捕されるなんて事になつたら、あいつらに何を言われるか……

『うわあ、あんた、遂にやつちやつたのね：マジキモイ』  
 『ふうー、獸性を抑えることが出来ないなんて本当に最低ね。獸ですら貴方よりはきつ  
 と知的よ』

『京介氏……綺麗な体になつて帰つてくるでござるよ』

くそ、想像の中なのに誰も俺を信じてくれねえ。いやまた麻奈美なら  
 『京ちゃん……兄妹でそういう事はしちゃいけないんだよ……』

麻奈美、お前もか。……これ以上考えるのは止めておこう。実際は何もなかつたんだ  
 しな、うん。

俺への誤解が解けたので、二人の警備員は持ち場に帰つていく。俺たちに注目してい  
 た準備スタッフは自分達の仕事に戻つていき、スタッフのお姉さんも踵を返そうとした  
 が、それをあやせが引きとどめた。

「あの、すみません。…………実は友人が大会に参加するので、衣装を持って來たのです  
 が……」

『まだ何かあるの？』とでも言うようにお姉さんが振り向き顔をしかめだが、あやせの言  
 葉を聞き表情を変える。

「あら、あなたは参加者側だつたの？ それなら受け付けをするからついて来て」  
 「はい、分かりました」

どうやらお姉さんが受け付けをやつてくれるようだ。それにしてもあの後で、この行動、我が妹は肝が座りすぎだろ。

「友達が参加と言つたけど、あなたは参加しないのかしら？」

「はい、私は衣装の作成と応援なので」

「そうなの？ 勿体ない、あなたなら優勝も狙えるんじやないかしら」

「いえいえ、私なんかじや無理ですよ。むしろお姉さんはこういう仕事につかれているようですけど、参加はされないんですか？」

「昔は参加してたんだけど……やつぱりね……」

「そうなんですか？ お姉さん綺麗ですし、何も問題なさそうですけど？」

「あははっ、ありがとうね。でもね年を取ると……つて、着いちゃつたわね。じやあそこで待つて下さいね」

「えっ、あっ、はい」

あやせとお姉さんが会話をしながら進んで行くのを、俺は黙つて後ろからついて行く。

あんな事があつたのに、にこやかに会話するつて……女つて奴は凄えよな。

「はい、確認が取れました。これが参加者の証明書です。首から下げて置いて下さいね。くれぐれも無くさないように、こちらを真つ直ぐに行つて右手が控え室になります」

俺が女性のコミュニケーション能力の高さにビビっていると、お姉さんが受け付けで確認をして、大会の参加証を手渡してくれた。

「ありがとうございます」

笑顔でお礼を言うあやせ。

「あ、ありがとうございます」

それに比べてお礼を言う俺の顔は強張ってしまう。情けねえ。

そんな俺に何を思つたのだろうか、お姉さんがクスッと笑いながら言葉をかける。

「あんまり妹さんを困らせたらダメですよ。お兄さん」

「~~~~~はい」

彼女の言葉に顔が急速に熱くなる。一言返事をするので精一杯だった。

逃げるようになに案内を受けた控え室に向かう。隣を歩くあやせとはあの後からまだ一言も口を聞いていない。

さて、どうするべきなんだ？ 謝ればいいのか？ いや、しかし何に対してだ？ 顔を近づけ過ぎて悪いと言えばいいのか？ しかしそれじゃあ、せっかく解けた誤解を蒸し返さねえか？ うーーん、どうする？

俺がどうするか悩んでいる間に控え室に到着してしまった。気まずい空気のままで、控え室に入るとそれを吹き飛ばす空氣破壊者が降臨しやがった。

先に来ていたガキンチョもとい今回の主役である来栖加奈子である。

「あやせおっせえし、加奈子様より遅れてくるなんて何様だよ。もう帰つちまおうかと思つてたぜ」

加奈子が開口一番で文句を飛ばしてくる。

相変わらずの偉そうな態度だが、今回は遅刻して来たおれ達が完全に悪い。

あやせが加奈子の前で両手を合わせた。

「ごめんなさい加奈子。色々あつて遅くなつちやいました」

「チツ、まあいいけどよ。貸しに追加1だかんな」

「ふう一分かりました。頼み事したのに遅れて來たわたし達が悪いですからね」

「にひひつ、なら構わねーよ。これでケーキ4個食えんのかー、何食おうかなー♪」

あやせが約束をしたとたんに顰めつ面から相好を崩す加奈子。

現金というべきか単純というか、ケーキ一つでチヨロい娘である。ここまでチヨロいと逆に心配になつてくる。まあこいつの心配はともかく、とりあえず俺も挨拶しねえとな。

「よう、久しぶりだな加奈子。遅れて悪かつたな」

俺は右手を上げて妄想の世界に飛んで行つていた少女を呼び戻す。

「あんつ…………誰だオメエ？ 加奈子様の名前呼ぶなんて気安くねえか」

こちらを一瞥して加奈子が宣う。

「おいつ、前にお前が名前で呼べつつただろーが！　というか人の事を忘れてんじやねーよ!!」

前にララボで飯奢つてやつただろーが、この野郎！

「冗談だつづーの。久しぶりだな京介。相変わらず冴えねー顔してんな」

加奈子がケラケラ笑いながら答える。

忘れてなかつたのはいいけど、一言余計だよなこいつ。

「うつせーよ！　お前も相変わらず成長してねーよな」

「はあっ？　目腐つてんだろオメエ！　ちょー成長してんし！」

「は？　何処が？　身長？　それとも胸か？　全然わからんねーよ」

俺の言葉に胸に手を当て激昂する加奈子。

「なあーーー、て、てめえ、セクハラしてんじやねーーよ!?　変態地味シヨボ兄貴!!」

「誰が変態地味シヨボ兄貴だ!!　それにセクハラなんかして……」

「ねーぞ！」と叫ぼうとした時、もの凄いプレッシャーを感じた。

「…………兄さん」

決して大きな声でない。むしろ落ち着いた可愛らしい声である。なのに恐怖しか感じられない。思わず俺は居住まいを正した。

「あ、ああ、な、なんだあやせ？」

「な、な、なんであやせは怒つてゐるんだ？　さつきの件やつぱり謝つとかなきやダメだつたか？」

「なんで兄さんは、久しぶりに会つた加奈子の胸の大きさが分かるんですか？　そんなに加奈子の胸に興味があるんですか？」

な、なるほど俺が加奈子の胸に興味を持つていると勘違いしたのか。なら話は簡単だ

！

「いや、待て、落ち着けあやせ!!　どう考へてもこいつの胸が成長してねえ事を指摘しただけだ。ゼロにゼロを足してもゼロ、つまりはそういう事だ！」

俺は加奈子の胸に指を指して抗弁する。

「だ、誰がゼロだつづうんだよ!!　ふざけんな！　前に測つた時70はあつたつうの!!

ふーん、こいつ70なのか？　しかし意外だな、こいつでも恥ずかしがるんだな？」

俺は赤い顔して胸を押さえている加奈子を見つめる。

「……言葉巧みに加奈子のバストサイズを聞き出すなんて、兄さんはやつぱり……」

加奈子の胸を見つめたのが悪かったのか？　あやせが暗い瞳をして呟く。  
マ、マズイ状況が悪化した。早く誤解を解かねえと。

「ち、違うからな、どう考えても加奈子の自爆だから、そ、それに胸は大きい方がいいからな、べつたんな加奈子の胸には興味ねえよ」

「……ちなみに私はどうですか？」

「えっ、あ？ もう少しあつたほうが……」

焦つていたせいか、俺は……いまどんでもない事を口走らなかつたか？

「…………へえ、そうなんですね」

「…………。べつたん」

女子中学生達に凄え冷たい目で見下される。ゾクゾクしちまうぜ。……この後の事を考えてな。

「ああっ、なんつうか言葉の間違いというか、その、なんだ。許してもらえねえかな？」

「うふふ、兄さん、許してもらえると思ひますか？」

「死ねよ、変態」

「だよな……」

躊躇り寄る二人の少女を尻目に、俺は天井を仰ぎ見る。控え室の蛍光灯がこれから起ころる惨劇から目を逸らすかの如く、またたいたような気がした。

## 第29話

「うへへ、酷え目にあつた」

引っ搔かれた上に引っ叩かれた俺の顔は大丈夫だろうか？ その前も往復ビンタされたり：アンパンマンみたいになつてねえよな？

「自業自得です」

「けつ、それくらいで許してやつたんだから感謝しやがれ」

流石に死を覚悟したのだが、加奈子には飯を奢る。あやせには一回なんでもいう事を聞くという約束をしたおかげで、なんとか五体満足で切り抜ける事が出来た。十分な成果だろう。まあ顔は痛いけどな。

とりあえずせつかく許して貰つたんだから、話が蒸し返されないように話題を変えておこう。

「しつかし加奈子、まさかお前がコスプレ大会に出てくれるなんて思わなかつたぜ。いつたいあやせにどんな脅しをされ……いやすまん、なんでもねえ」

ジロツとあやせに睨まれ、俺は慌てて言葉を途中で遮つた。そんな俺の態度に加奈子が小馬鹿にした様に笑う。

「相変わらずあやせには頭あがんねーのな。ひひつダセエ」「うつせえよ」

あの眼光に睨まれたなら、誰だつてビビるつつうの。

「あれ？ そういうや、なんで京介がここにいんだ？」

笑っていた加奈子が何かに気がついたかのように不思議そうな顔をして、首を傾げ疑問を投げかけてくる。

「なんでつて、お前の応援に来ただけど？ そんなに意外か？」

まあ妹の友人の応援に駆けつけるつていうのは珍しいかもしんねえけど、知らない仲じやねえし、あやせと一緒ならそこまでおかしく無いと思うけどな？

「いやよ、それは感謝すっけどよ……プレゼント受け取る筈のてめえがなんでつて言いてえつづうか…………あーーあやせつて、サプライズとかしない派？」

プレゼントを俺が受け取る？ サプライズ？ 何の事だ？

俺の顔を見ながら眉間に皺を寄せていた加奈子が、微妙に納得いかないといった表情であやせに問いかけた。

「い、いえ、そ、それはですね、加奈子」

加奈子の言葉に拳動不審気になるあやせ。  
あん？ なんかあるのか？

あやせと加奈子の話が分からず俺がきよとんとしているところ、難しい顔していた加奈子がはつとした表情で俺とあやせの顔を交互に見比べる。

「うげえっ!? もしかして京介があやせに大会出てくれって頼んだとか？ それだとマジでドン引きなんだけど！ ちょーきめえしつ!!」

そう言いながら俺に対して虫ケラを見るような目付きをして、後ずさる加奈子。俺があやせに頼んだ？ いつたいなんの事だ？ や、マジで引かれる理由が分からねえ。

「ああーっ？ いきなり訳わからぬこと言つてドン引きつてなんだよ！」

「違います、違いますよ、加奈子!? 私、サプライズしない派なんですよ!! 兄さん、後で説明しますから」

話も分からぬまま貶されるのは納得がいかねえから加奈子を問い合わせようとしたところ、あやせが大慌てで俺たちに割つて入つてきた。

「えーーマジかよ。こうゆうのつてサプライズ重要じゃね？」

「う、家ではサプライズとかしないんですよ」

「げえー、それつてマジつまんなくね」

「いいんです。家には家のルールがあるんですよ」

やはりあやせと加奈子の会話が分からぬ。

「なあなあ、あやせ、さつきからサプライズって何の事なんだ？」

「兄さんは黙つていて下さい!!」

「はいっ!?」

「あやせの剣幕に思わず背筋をピンと伸ばしてしまう。その姿にまたせせら笑うクソガキ。

「くけけつ、ダセエ。しつかし京介も察し悪いよな。だからあやせがこの大会の商品を……」

「加奈子も黙つて下さい!!」

「ヒイツ」

やつぱりあの声には逆らえねえよなあ。ほら、お前も一緒にやねーか。

「おい、京介、今日のあやせなんか理不尽じやね？ 不当な暴力には加奈子様は決して負けねえからな」

「ああ、お前にしては凄え良い覚悟だ。：後はその台詞を俺の背中に隠れず言つてれば完璧だつたな」

あやせの態度にびびった加奈子が俺の背後に逃げ込んできた。

「いいから加奈子様の盾になつてろよ。あやせを化物みたいに恐ろしく育てた責任これよ」

「おいつ、俺の妹を化物なんて言うんじゃねえよ。…まあおつかねえのは認めるけどよ」  
俺たちがボソボソと言い合っていると……

「兄さん、加奈子、な・に・か・い・い・ま・し・た・か？」  
あやせ様がにつこりと微笑んでいらっしゃりました。

「イイエ、ナニモイツテマセン」

ピンと背すじを伸ばしてあやせに向き直つたおれ達は完璧なシンクロをみせた。

「はああー、まつたく……。時間も無い事ですし、加奈子はこれに着替えて下さい」

そんなおれ達の姿にあやせがため息を吐いた後、鞄から本日のメインであるメルルのコスプレ衣装を取り出し、加奈子に突きつけた。

「へいへい、了解、了解つと…………おえつ、つうーか、マジでこれ着んの!?!」

仕方ないといった態度で衣装を受け取った加奈子が驚きの声を上げる。

あやせがいま手に持っている衣装はピンクと白を基調とした可愛らしい衣装である。幼稚園や小学校の低学年の子が着ていたら、さぞかし微笑ましいのだろう……いや、なんだ、よく見るとスカートも超ミニだし、アウターも凄く短いからアレだと少なくともヘソは丸出しだある。なんだ、その、さつき考えた小さい娘が着ていたらっていうのは撤回しよう。なんだか犯罪っぽい気がしちまう。う〜〜ん、今更ながらだけどメルルって本当に女兒向けアニメなのか？

「あはははははは、あやせー、いまから無しつつうのは……」

俺がメルルについて改めて思考している中、加奈子が思っていた予想を上回る物が飛び出してきた為だろう、引きつった笑いを浮かべながらあやせから後ずさつて行く。

もちろん我が家家の妹様が逃亡など許すはずもなく。ガシツと衣装を持つ反対の手で加奈子の肩を掴み上げる。

「うふふふつ、ダメですよ、加奈子」

「ちよつ、待て、その服はヤベエだろ!?」

「さあ、加奈子、脱ぎ脱ぎしましようね♪♪」

「話きけよつ！ うひやつ、ど、どこ触つてんだよ!?」

「ごめんなさい。手が滑っちゃいました♪♪。あつ、また」

「うみやつー、キヤンセル、キヤンセルすっから」

「ダメですよ加奈子。約束したでしょ」

「や、約束、そうだ。奢らなくていい、奢んなくていいからっ！」

「いえいえ、大丈夫ですよ。しつかりと奢りますから、ええ、なんだつたら、10回ケーキ奢りますよ。だからね……」

「10回！ マジでっ!? つて待つた。それでも割に合わなくね？ やっぱ止め……ウギヤー、服に手を突っ込むんじゃねー!? つうか京介、助ける！ お前の妹がおかし

いぞ!!

あやせが妙に楽しげだ。最初は加奈子を逃がさない為に、いつもの迫力のある笑顔だつたのに、加奈子に迫つてゐるうちに浮かれた表情に変わつていく。あやせがこんなに浮かれた表情を浮かべるのは滅多にねえぞ。

妹のあまりの変化に啞然と加奈子が剥かれていくのを眺めていたが、加奈子の叫びに我に返つたのかあやせがピタツと手を止め俺を睨みつける。

「に・い・さ・ん・いつまでここにいるんですか?」

「おっ、おお。わ、わりい…」

妹の軽蔑の眼差しから逃れるべく、俺は慌てて更衣室を飛び出した。

本当は軽蔑というよりも殺氣を感じて逃げたが正解だが。

「待て、京介逃げんなっ! マジで待つて。助けろおおおおおおおおおおーーー!!」

「アハツ、加奈子、さあ、着替えましょね♪」

ドアを挟んだ向こうから加奈子の魂の叫びと妙に嬉しそうなあやせの声が聞こえた  
気がする。

…きつと気のせいだよな。家の妹がそんないかがわしい真似するはずないしな…

ははつ。

部屋の中から聞こえる喧騒に俺はそつと耳を塞いだ。

……加奈子に今度奢つてやる飯は豪勢にしてやろう。

「兄さん、もう入つても大丈夫ですよ。なんで耳を塞いでいるんですか？」

何分経つたのだろうか？俺の感覺だと凄え長く感じたんだが……  
ドアを開いたあやせが俺の姿を見て不思議そうな表情を浮かべている。なんか肌  
ツヤ良くなつてねえか、こいつ？

「んっ、いや、なんでもねえ。気にしないでくれ」

まあ深く突つ込むのは止そう。俺はあやせに軽く手を振りながら、許可が出た控え室  
に足を踏み入れた。

やつべえな!? マジでやべえ!!

俺はゴクリと生唾を飲み込んだ。そこにメルルがいた為だ。似てるとは思つていた  
けどよ、これはもうコスプレの域を超えてんじやねえか？ そう思つてしまふくらい加  
奈子にメルルコスは似合つていた。

加奈子自体の素材はもちろんだが、コスプレ衣装のクオリティも高い。あやせが手に  
持つている時は少し如何わしさを感じてしまつたのだが、こいつが着るとピッタリと調  
和するのだ。まさに加奈子の為だけに眺めた完璧な代物。黒猫の弟子としての実力を  
見せつけられた気分だ。

黒猫……そうだよな、あいつの弟子つて事になるんだよな。あやせ……厨二病になら

ねえよな？ ま、まあ、今回だけだろうし、大丈夫だよな、うん。コスプレ衣装の出来栄えの良さに不安感を覚えてしまつたが、よくよく考えてみればオタクを嫌つてゐるあやせが黒猫みたいになる事はねえだろう。

あやせの黒猫化の事はとりあえず棚上げして、加奈子に戻るが、さつきは絶賛したけど完璧なメルルというには今の加奈子には残念ながら一点の曇りがあつた。それは彼女がぐつたりとしており、虚ろな目で椅子にもたれ掛かっている事である。表情に力は無く、その姿はどう見ても愛と希望に満ちた魔法少女としては失格であつた。

あやせ……いや、ほんとに、何をやつていたんだよ。

「ううう、京介……」

俺の存在にようやく気がついた加奈子が力無く右手を伸ばした。その悲壮な姿に俺は思わず駆け寄り、その手を掴む。

「ど、どうした、加奈子？」

弱弱しい声で加奈子が呟く。

「……」

「……すまん」

裏切つたつもりは全然ないが、俺は素直に謝つた。だつてよ、あの加奈子が怒鳴りもせず涙目で睨んでくるんだぜ！ 罪悪感も湧いてくるつてもんだ。というかあやせナ

二をしたんだ？ マジで恐ろしい。俺はこの事態の元凶である妹へ振り返った。

「どうですか、兄さん？ 凄い似合つてますよね？ カわいいですよね？」

目をキラキラさせて問い合わせてくるあやせ。

あー、この目はあれだ。桐乃、黒猫、沙織：あいつはぐるぐるメガネでわからねえか、とにかくあいつらが好きな物を語る時と同じ状態だ。つまり止めようが無いって事である。

「…ああ、似合つてる」  
「ですよね、ですよね♪」

嬉しそうに微笑んでいるあやせと目のハイライトが消えている加奈子。凄えギャップである。

：あやせのブレークが壊れてしまつた以上、加奈子が気持ち良く大会に臨めるようにフォローしてやらねーとな。

「あーー、加奈子、その、大丈夫か？」

「これが大丈夫に見えんのかよっ！？ てめえの目は節穴か！ くそつ、なんで加奈子様がこんな目に：そもそもこんな衣装似合うわけねーだろ！」

なんとか精神的に復帰を果たしたのであろう加奈子が悪態をつく。

「あー、すまん。大丈夫には見えねえ。だけど衣装に関しては凄え似合つてるぞ、加奈

子」

「テキトー言つてんじゃねーよ。こんなコスプレ似合うわけねーだろ！」

「いやいや、マジでチョー似合つてるつて。なあ、あやせ」

「そうですよ加奈子。凄い似合つてます。本当に可愛いですよ」

「はあーー、マジかよ!? まあ二人がそこまで言うなら信頼してやつてもいいけどよ。

…でもよ、これどう考えても短くね?」

「俺たちの褒め言葉に気力を取り戻したのか? 加奈子が服の裾を掴みながら疑問を投げかける。

「だからそういう衣装なんですよ。さつきからとても似合つているつて言つたじやないですか?」

「だつてよ、さつきのあやせ息荒げて『かわいいーー』つって抱きついてきたり、信用できね一つつうか、恐かったしよ」

「ええー恐いって、加奈子酷くないですか?」

「酷えのは、さつきまでのテメエだつ!!」

「どうやら無事いつもの加奈子に戻つたようだ。これで一安心である。とりあえずあやせの援護に回るか。俺は携帯を取り出しメルルの画像を検索して加奈子に見せた。

「マジでそんな衣装なんだよ。ほれ見てみ」

「うげつ、マジだし。ガキの見るようなのがなんでこんなに露出度たけーんだ?」

「知らねーよ。アニメ作った奴に言えよ。まあとにかく似合つてるのは嘘じやねーよ」

「そうですよ。加奈子とても似合つてます♪」

「ウゲエー、そうかあ? あんま似てなくね?」

どうやら加奈子には不満らしく顔をしかめている。まあアニメキャラに似ているつてのは正直嬉しいかつつうと微妙だからなー。だがここで臍を曲げられるのは困る。俺はあやせと目を合わせた。

「いやいや、ほんとに似合つてるって」

「そうです。そうです。とつてもかわいいですよ加奈子」

「そつ、そつかあ?」

「ああ、加奈子なら間違ひなく優勝できるぜ!」

「そうですよ。私だと絶対に優勝出来ないですけど、加奈子なら出来ます! だつて、スッゴクかわいいですから」

「うへへへつ、そんなにかわいい? いや、知つてたけどよ」

「ほらつ、加奈子、この杖持つて下さい! ほらつ、ものすごくかわいい! あとはこの動画の通りにしたらもう完璧ですよ。優勝間違ひなしです!」

「えくくく、仕方ねえな。これやっぱいいんだろ? こんな加奈子様にかかれば楽

しょーだぜ!」

やつべえー、あらためてこいつチヨロ過ぎる。このアホ娘、危ない勧誘とか引っかかるねえか?『君かわいいね。芸能界興味無い?』とか簡単に引っかかりそうなんだが……。うわあー不安になってきた。

俺がこいつの将来を不安視して眺めていると、動画を見終えたのか、加奈子が話しかけてきた。

「そういうやさ、京介」

「あん、なんだ?」

「おめえは加奈子様に言うことねーのか?」

「言うこと?」

なんかあるか? 感想はさつき言つたしな?

俺が首をかしげると加奈子が眉をひそめる。

「察しの悪いヤローだな。加奈子様がスペシャルな姿見せてやつてんだから、もっと褒めたたえろつてことだよ!」

おいおい、凄えこと言われたぞ!? 普通自分の事を褒めろなんて言うか? それに

さつきからかなり褒めてたぞ俺。

加奈子のあんまりな発言に俺が固まっていると、困った表情をするあやせと目があつ

た。：仕方ねえな。任せておけよ、あやせ。こいつのリクエストに見事に応えてやるからよ！

しかし俺の決意が遅かつた為、答えようとする前に加奈子が不機嫌さをあらわに吐き捨てた。

「ちつ、使えねー。褒め言葉すら出ねえのかよ。ふん、まあけど京介の意見なんか関係なく、加奈子様は超かわいいしな」

固まつてしまつた俺が悪いかもしけれねえけど、少しは待てよ、お前は。

「おいおい、ちょい遅れた位で拗ねんなよ。お前のお望み通り感想言うから」

「別に拗ねてなんかねーし、感想なんかいらねーよ。……まあ京介がどうしても言いてえなら聞いてやつてもいいけどよ」

頬を搔きながらチラツとこちらを見る加奈子。本当に素直じやねー奴だよ。

「へえへえ、聞いて下さい加奈子様。はあー、よし…まずはさつき言つたけど凄え似合つてゐる。素直に言つてかわいいな、間違ひなく美少女だ！　お前ならマジに優勝できんじやねーかと思うぜ」

なんだ？　あやせも加奈子も目を丸くして驚いた顔している。俺の答えがそんなに意外か？　加奈子は顔立ちも整つてるし、間違ひなくかわいいと思うぞ。こいつの外見は道で会つたら振り返る位には美少女だ。ああ間違ひねえ、美少女…小学生だな。これ

は言えねえけどな。

「だ、だよなあー、知つてっし！ 加奈子様がかわいいのは当たり前だしな！ につひ  
ひ、オメエー意外といい奴だな♪」

ポカンとした顔から上機嫌に笑う加奈子。そして何故か未だに固まつたままの我が妹。

「おう、おう、京介、もつと褒め称えていーんだぞ」

調子に乗つてくる加奈子。まだ褒めたりねーのかよこいつは、仕方ねえな。

「そうだな、アニメの中から飛び出してきたとしか思えねーくらいにかわいい。コスプレエー、つう、ゴホツン、あ、あれだ女優なんかよりよっぽどかわいいぜ！」  
「だべ、だべ、うつへへ、京介わかつてんじやん！」

「…………」

あ、あぶねーコスプレAV女優なんて言つたら、あやせに家探しされた後に殺されてたぜ。大丈夫か？ 恐る恐るあやせを見るとまだ呆然としている。どうやら気がつかなかつたようだ。助かつたく。

胸を撫で下ろしていると、いつのまにか近寄ってきた加奈子が相好を崩し、俺の背中をパシパシ叩く。

「いやー、京介マジわかつてんな、流石の加奈子様も芸能人よりも綺麗だなんて、初めて

言われたぜ。うへへへ♪」

言つてねーーー!! まずはかわいいと言つたが綺麗とは言つてねえ。そして芸能人じやなくて比較対象はコスプレAV女優だ。口に出せないツツコミを心の中に押しとどめる。

…まあなにはともあれ、加奈子がここまで上機嫌になつたんだ。完璧な仕事振りだつたろ、あやせ。俺は妹にアイコンタクトを送る。

「…………」

凄いジト目で睨まれた。

ええつ、これでも褒めたりねーのかよ!! どうするよ、流石にこれ以上褒められねーぞ。…そうだ、桐乃だ! あいつならこの姿の加奈子見たら暴走間違い無しだ。桐乃をイメージして褒めりやあいいんだ。

「もうあれだ、お前のかわいさは次元の壁を突破したぜ。まさに奇跡と呼べる。(きつと桐乃がみたら)かわいさのあまりおかしくなつちまうレベルだ。間違いねー保証するぜ

!」

「…………」

「マジかつ!? そんなにか!? たとえば加奈子様の為になんでもしたくなるとか?」

「ああ、(桐乃なら)きつとなんでもやるぜ」

「!?!」

「うへー、美しいってのも罪なんだな」

「そうだな、まさにそのかわいさは毒と言つても、痛ツ!？」

足の指先に急激な痛みが走った。

俺が滑らかに褒め言葉を口にしていると、いつのまにかそばに来ていたあやせが足を踏みつけたのだ。

「何すんだよ、あやせ！」

「……………知りません」

俺の問いかけに頬を膨らませて明後日の方向を向くあやせ。

どういう事だ？ 桐乃をイメージしたから凄く上手く褒められたと思うんだが？

実際に加奈子は超上機嫌だし。あやせの要望に応えたつもりなんだが……そもそもなんでこいつ機嫌悪いんだ？ さつきまで加奈子いじつて凄え上機嫌だつたのに。なんでだ？

俺が妹の機嫌が急降下した理由を考える暇も無く、あやせは時計を見て加奈子に告げる。

「……加奈子、そろそろ時間ですよ」

「おっ、もうそんな時間かよ。おう、京介、しつかりと加奈子様の勇姿を見届けろよ！」

あやせと対比するように上機嫌になつた加奈子がニカッと笑いながら俺に指を突きつける。

「あ、ああ、頑張れよ」

あやせの事が気になつて空返事氣味の応援になつてしまつたが、今の加奈子は気にすることもなく、俺に突き出していた腕を胸に叩きつけ、自信満々に宣言する。

「あつたりめえだろ。こんな大会優勝に優勝してやんよ！」

「ああ、こいつこんな良い笑顔するんだな。」

自信に満ち溢れた加奈子の優勝宣言に俺は見惚れて動きが止まつてしまう。

そんな俺とは対照的に焦った様子で加奈子の背中に回るあやせ。

「さつさつ、早く行きますよ、加奈子」

「わ、わかつたつて、そんなに急かすなよ、あやせ」

平らな胸を堂々と張る加奈子の背中をせつつく様にあやせが押していく。その時も決して俺に視線を合わせようとしない我が妹。流石に不安に駆られた俺はあやせに呼びかける。

「な、なあ、あやせ？」

「……………兄さんのバカ」

俺の呼びかけに部屋を出ようとしていたあやせはちらつと視線を向けた後、何かをボ

ソツと呟いて、そのまま加奈子を押しながら去つてしまう。

あやせが何を言つたのかは声が小さくて聞き取れなかつたが、機嫌が悪いままなのはあきらかだつた。

今回はなんであやせが怒つてんのか、マジでわからねえ。誰か俺に教えてくれよ……

俺は肩を落として二人の少女が出て行つたドアに向かい重い足取りで歩き出した。

## 第30話

加奈子を送り出した後、私たちは関係者スペースへ移動して、ステージ上で盛り上げている司会者とそれに乗つかつて騒いでいるお客様を眺めます。ステージの様子もお客様の様子も良く見える、なかなか良い席です。

公式の大会ということもありますし、可愛い子や綺麗な娘も多く参加しております、お客様の盛り上がりが物凄いです。：このような熱狂した雰囲気は正直なところ苦手です。でも加奈子に無理を言つて参加してもらつたのに、私がそんな我儘な事を思つたらダメですよね。しつかりと見届けないといけません。加奈子なら優勝できると本人へ言いましたが、これだけ多くの人が参加すると少しだけ不安になりますね：

「あやせ、なあ、あやせ」

「なあ、おい、あやせってば…」  
 そうですね。やっぱり加奈子に対抗してくるとなると前回の優勝者の娘ですかね？  
 いえ、油断したらいけません。もしかしたらどんでもない伏兵がいるかもしません  
 し…

「もうっ、なんですか、兄さん」

しつこく呼びかける兄に仕方なく私が振り向くと、情けない顔をした兄さんがほつとした様子を浮かべました。

「やつと反応してくれた。なんでそんなに怒ってるんだよ?」

「……別に怒つてないですよ」

ええ、私は別に怒つてなんていません。

「嘘つけよ。さつきまで完璧に無視してたじやねーか!」

「……怒つてませんよ。ステージの音楽が大きくて、声がたまたま聞こえなかつただけです」

ええ、ええ、怒つてなんていません。まさか兄さんがあんなに加奈子をベタ誉めするなんて、驚いただけですとも。加奈子を褒めるように視線で促したのは私なんですから、期待通り、いえ、期待以上に加奈子の機嫌を良くしてくれた兄さんに怒るなんて、そんな事はありません。ええ、ありませんとも。本当にまったく期待以上、そんなのじやすみませんね、予想外の誉めつぶりですよ。むしろあれは加奈子を口説いていたと言つてもいいかもしれません……ふふふふ。

「あつ、あやせ!」

何故だか兄さんが後ずさつてますね。何があつたのでしょうか?

さつきの光景を思い出したら、イライラが……いえ、つい手に力が入つてしまい、思わず手に持つていたペットボトルを握り潰してしまいました。私としたことが床に零してしまったなんて、いけませんね。ちゃんと拭かないと、お水で良かつたです。それでも最近のペットボトルは柔らかいですね。

兄さんが何故だか怯えた表情を浮かべているので、安心させる為に私はにつこりと兄さんに微笑みます。

「わ、悪かった。よくわからねえけど、俺が悪かった、あやせ」

私の表情にますます怯えて、必死に謝つてくる兄さん：どういう事ですか？ この態度に私は怒つてもいいんじゃないでしょうか？ …まあそんな理不尽な事では怒りませんよ私は、ええ、怒りませんとも。

それにしてもよくわからないですか……はあ、まあ兄さんですからね。加奈子への言葉も本当に他意はないんでしょうね。本当に仕方ない人です。自分の言動がどんな影響あるか考えないですから、まつたく。

私は呆れた口調で兄さんに告げます。

「別に怒つてないんですから、謝まらなくていいですよ、兄さん」

私の様子が変わった事が分かったのか？ 兄さんが恐る恐る問いかけてきます。

「ほ、ほんとに怒つてねえか？」

「ええ、怒つてません」

「ほんとに?」

「ええ」

「ほんとに、ほんとか? いきなりハイキックなんかしねえよな?」

…この人は私をどういう目で見ているんでしようか?

「いま、凄く怒りたくなったんですが、兄さんは私を怒らせたいんですね。 そうなんですね」

「いや、いや、いや、そんな訳ねーぞ。 うん、怒つてないなら、それでいいんだ」

慌てた様子で兄さんが前に突き出した両手を振りながら否定しました。 そんな兄の姿に私がジトツとした目で見つめていると、誤魔化すように兄さんが話題を変えてきます。

「そ、そ、う言え、加奈子はまだなのか?」

「…はあ、エントリーナンバーが遅かつたから、まだ先ですよ。 たぶん最後の方だと思いまます」

「そ、うな、の、か? それ、に、して、も、人、数、が、多、い、な。 それ、に、み、ん、な、氣、合、い、入、つ、て、る、し。 凄、い、よ、な」

兄さんがステージに集まっているお客さんを見ながら感嘆の声を上げます。 私も兄

さんにつられて集合しているお客さん達を見てしました。兄さんの言う通りギヤラリーの盛り上がりが物凄いです。怒号のような声を、皆さん張り上げています。

ごめんなさい、先程は我慢しないとと思いましたが、やつぱり私にはこの異様な空間はキツイです。

客席はあまり見ないようにステージのパフォーマンスに集中していたんですが：見てしまうとダメです。

だって、なんで子供向けアニメなのに大人の男の人ばかりなんですか？　しかも先頭集団の人達なんてメルルの写ったピンクの半纏を皆で着込んで：『くららつ！　くららつ！　はいつ、はいつ、はいつはいつはいつ!!』叫びながら踊っているんですよ！？　凄い一致団結してキレの良い動きなんんですけど…どうしてか、凄く気持ち悪いです。

「おいつ、あやせ、大丈夫か!?」

私がギヤラリーの熱気に当たられ、立ち竦んでいると兄さんが心配そうに声をかけてきました。

「顔色悪いぞ：少し離れて休むか？」

心配してくれる兄さんには申し訳ないですが、そんな訳にはいきません。何せ、加奈子はこの異様な空間の中心に立つのですから。私が頼み込んだのに、その私がこの程度

のことでは逃げる訳にはいきません。

「大丈夫です。見届けないと加奈子に失礼ですか」  
「…そうか、そうだよな。ただ、無理はすんなよ」

ポンッと私の頭の上に兄の手が乗せられました。子供の頃から変わらない後頭部に感じじる兄の手の感触が私を落ち着かせてくれます。

「ふふつ、兄さん、心配してくれてありがとうございます。でも、本当に大丈夫ですよ。ちよつと彼方の人達の熱気に当てられただけですから」

「ああっ、あの集団か。確かに凄えよな…………ぶはつ!?」

突然、兄さんが吹き出しました。何があつたんでしょうか？ 吹き出したまま、唚然とした表情で固まっている兄。その兄さんの視線の先には……

「メルルウウウウ——!! ラブツリー、ラブツリー、メ・ル・ル！ はいっはいっ、メ・ル・ルウ——！ 来て良かつたあ——最高うう——ヒヤツホオオ——!!」

先程の人達と同じようなピンクの半纏を着て、左手にメルルの团扇を高らかに掲げて、右手に持ったペンライト振り回しながら叫んでいる私の親友が……

「ああ、そうだよな。当たり前だよな。自分は参加出来なくても、あいつがこの大会に来ねえ訳ねえよな」

兄さんが何かを言つてますが、私の頭に入つてしまません。私の脳裏に刻まれるのは信

じられない姿を見せて いる桐乃の痴態だけです。

えつ、あれが桐乃ですか!? 嘘ですよね?  
チガイマスヨネ、ワタシノタイセツナシ  
ンユウガアンナ、フフツフフフフフフ……

「……兄さん……」

一  
お  
あ  
う

「…………ちょっと行つてきますね」

会場の空調が効きすぎているんでしょう、小刻みに震える兄を置いて、私は桐乃の下へ向かいます。

待つていて下さいね桐乃。



あたしはいま最高の瞬間を迎えている。

ちょーーー可愛いいい、格好いいい、萌ええーー！ あたしの妹になつ

てええええええええええつ  
!!!

あたしは両手を振り回し、ぴょんぴょん飛び跳ねながらステージに声の限り叫び続け  
る。

ステージ上ではブリジットちゃん、イギリスから来た10才の白人の少女で、メルルに登場する『アルフア・オメガ』愛称『あるちゃん』にそつくりな女の子が、そのあるちゃんのコスプレをして黄金色に輝く長剣を振っていたのだ。

「みよ、わがけんぎつ！ やあああああつ！ とおおおおおおつ！」

エンジエルボイスで声を張り上げながら縦、横に剣を振るうたび、黒いマントや綺麗なストレートのブロンドヘアが翻る。踊るような足さばきで華麗に架空の敵と切り結ぶその姿は三次元に本物のあるちゃんが登場したようにしか見えなかつた。

パフォーマンスを終え、息を弾ませ顔を火照らしながら笑顔を浮かべるステージ上のブリジットちゃんの姿を観てあたしは神に感謝を捧げる。

生きててよかつたああああああつ！ 神さまありがとーー、ブリジットちゃんをこの世に誕生させてくれてつ！

わね。うひひひひつ。やばい鼻血でそう。

あたしが脳内ブリジットちゃんであたしの妹に賛辞を送つていると突然に肩を掴まれた。掴まる前に話しかけられた気もするが、女神降臨中に余計な情報はカツトに決まつて。第一こんな場所に知り合いなんか居るはず無いし、きっとイベントに乗じて痴漢行為を働いてくる最悪な変態に違いないわ。

最高の気分を害されたあたしは変態に向けて、振り向きざまに肘鉄をおみまいする。

「死ねつ、痴漢つ、変態つ!!」

しかしながらあたしの肘鉄が防がれた。

「へーーー、桐乃にとつて私は変態で痴漢なんですね」

そしてこんな場所では決して聞こえる事のないソプラノボイスがあたしがこの声を聞き間違える筈がない。恐る恐る確認すると、あたしの親友が底冷えのする微笑を浮かべて佇んでいた。

「な、な、な、なんであやせがいるのつ!?」

「そんなことはどうでもいいじゃないですか。まさか桐乃に痴漢、変態つなんて言われるなんて…」

あやせの台詞にあたしは慌てて彼女の言葉を途中で遮る。

「違う!? 違うからつ！ あやせをそんな風に言う筈ないじゃんつ！」

「そうですね。桐乃が私にそんなこと言う筈ないですものね」

「もちろんよ、当たり前じゃない！」

あたしの必死の答弁で、あやせから感じていたプレッシャーが弱まつた。  
た、助かつた。でもなんであやせがここに…。あたしが考えこんでいると。

「じゃあ、行きますよ、桐乃」

そう言いながら、あたしの腕を掴み引っ張つて行こうとするあやせ。あたしはそれに必死の抵抗を見せる。

「ちよ、待つて、行くつて何処に!? あたしここにまだ重要な用事が残つてゐるんだけど!?

せつかくステージが良く見えるいい場所をキープ出来たのに離れるなんてとんでもない。しかもこの後の出演者見逃しちゃうし…

「……桐乃」

あたしの言葉に足を止めたあやせが、無表情の眼差しであたしを見据えてくる。

怖つ、怖いよ、あやせ!? うーーー、メインのブリジットあるちゃん見れたから、少  
しなら、ちょっとなら、離れても…嫌だけど、仕方ないわよね…はあ…

「…わかった。行こう、あやせ」

「はいっ、桐乃！」

あたしの言葉にあやせが表情を取り戻す。

二人で人混みの中をかき分けて、後ろの方の人が少ないスペースへ向かつた。しかしコミケの時も思つたけど、むさい男達をかき分けるのは、ほんとマジ勘弁つ。あいつらほんと風呂とかちゃんと入つてゐるのつ？ つてレベル。

「それでなんであやせが、ここにいるの？」

親友が相手とはいえ、せつかくの楽しみを中断された上、キモい行軍に付き合わされたあたしの言葉に不機嫌さが滲んでしまうのは仕方ないと思う。

「そ、それは……兄さんと一緒に桐乃の……ええっと……」

「京介とあたし？」

あたしの機嫌の悪さを察したのか？ あやせが困った顔で言葉を紡ぐ。

しかし京介もここにいるの？ ならなんであやせと一緒に来ないかな。

あたしは群衆の中から京介を見つけようとキヨロキヨロする。

「はつ、そうです。私はそんな事を言いにきたんじやありませんっ！」

「ふえつ」

あたしが京介を探していると、あやせが何かに気がついた様に頭を左右に振つた後、

怒声を上げた。突然のあやせの剣幕にあたしは驚いてしまう。

「ふえつ、じゃありません。ふえつ、じゃ！ 桐乃がメルルを大好きなのは兄から聞きま

したから、この大会にいるのは…嫌ですけど、あまり認めたくありませんが、納得します」

「えつ、あ、うん、ありがとうございます」

あやせのあまりの剣幕に思わずお礼を言ってしまう。

「……だけど、だけどですよ!! 前に桐乃に言いましたよね。あまりに変な行動をしたら私も怒りますよってっ!!」

あたしのお礼に反応しないで、顔をうつむかせてぶるぶる震えていたあやせがガアーッと怒鳴りたてた。

「べ、別に変な行動してないし…」

あやせの言葉に、あたしは目を泳がせながら抗弁を試みる。

「へえーー、じゃあ、桐乃。その格好はなんなんですか?」

あやせが再び無表情になつてあたしに問い合わせてくる。

「こ、これは正装なのっ! こういう場所では、これこそがT P Oに合わせた正装なのよ!!」

あたしは間違つていない。この場所にあつては、この格好こそ間違いなく正しい服装なのよつ!…あやせに目線は合わせられないけど。

「…なんですか。なら桐乃あの人達を見てどう思いますか?」

あやせが感情を悟らせない淡々と口調で追撃をしてくる。

「あの人達？ あやせが指差す先には：ああつ、さつきあたしの側にいたあたしと同じような格好をした集団のこと？ いまも「クララたん、萌ええええつ！」「メ・ル・ルつ！メ・ル・ルつ！」など叫びながら会場を盛り上げている。その献身的な姿を眺めると。「うえつ、キモつ！」」

「そうですよね。気持ち悪いですよね」

思わず声を漏らしてしまつたけど…なんだろうこの流れはマズイ気がするわ。

「いや、あの、彼らも会場を凄く盛り上げてくれてるし…いいんじやない…あははあたしは慌ててフォローをいれる。

「ごまかされませんよ、桐乃。だつて、さつきあの人達と一緒にいた桐乃も……その……気持ち悪かつたんですから…」

「親友から衝撃の告白を受けた!?」

「き、気持ち悪いってつ!? 酷いよ、あやせっ!!」

「うう…ごめんなさい、桐乃。でも、ごめんなさい、本当に気持ち悪かつたんです…」

「あああつ、うううつ…」

あやせが申し訳なさそうに謝りながら、あたしの胸に刃を突き刺していく。親友に気持ち悪いとさらりと強調されたあたしは蒼白になる。あの夏のあやせに否定されたこと

が、脳裏によぎつてくる。

嫌だつ、嫌だつ、嫌だつ！ あんな思いをするのはもう嫌つ！

身体が意思と関係なく震えてくる。そんな私を温もりが包み込む。

「酷いこと言つてごめんなさい。大丈夫、大丈夫ですから、落ち着いて、桐乃」

「……うん」

「聞いて桐乃、気持ち悪いって思つても、オタクでも、桐乃をもう否定したりしないよ、私は。だつて私は桐乃が大好きなんですから…」

「あやせ…」

ショックで呆然としているあたしにあやせが抱きしめながら告白してくれる。

あやせの温もりに包まれたあたしは、あやせに認めてもらつた嬉しさで心が一杯になつた。先程流れそうになつた涙が、今度は正反対の意味で流れてきそうになる。

冷静さを取り戻したあたしを見て、もう大丈夫と思ったのだろう。あやせが再度言葉を紡いでいく。

「でもですね、桐乃…」

抱きしめていたあやせの身体が離れ、両腕があたしの肩に置かれた。

「…本当に願いですか、少し自重して下さい！」

懇願の形をとつてゐるが、これはもう命令だよね。あやせの目が本気だもん。つかま

れてる肩に凄い力加わってるし。

落として、上げて、また落とすつて、あたしの親友は本当にズルい。感情の起伏がついてこれない。

「あっ、うん。ごめん」

思わず反射で軽い感じで謝つてしまつたあたしは悪くないとと思うの。

「もーーなんですか、人が真剣に話しているのに、その返事は…………やつぱり桐乃にはしつかりとオハナシしないとダメですね」

だけどそのあたしの空返事があやせの怒りの導火線にまた火を灯してしまつたみたい。

オハナシはメルルネタなんてツツコめる雰囲気じゃないわね。

「だいたいですね。親友である桐乃を気持ち悪いなんて思いたくないんですよ、私は……」

こうなつたあやせをもう止めることは出来なかつた。頭をうな垂れてあやせの説教が終わるのを待つしかない。

これはもうメルルコスプレ大会中に終わらないかもしねれない。あーん、まだ大会観たいのにいいいいいいいつ!!

心の中で絶叫しながらも、あたしを大好きと言つてくれた親友の事を考えると、流石

のあたしでも「お説教は後にして、ね、あやせ♡」とは言い出せなかつた。うわーーん。  
お説教を聞いている時に、会場が凄い盛り上がりを見せ、メルルのOPがどこかで聞いた事のある声で聴こえた気がする。

……何かとんでもなく惜しいものを見逃してしまつた気がするわ。でもそれより今は長々と続く親友のお説教の方が問題なの。

ごめん、あやせ、ちゃんと自重するから、もうお願ひ許してえええええっ!!

# 第31話

「行つちまつたな…」

俺はあやせに連れていかれる桐乃の姿を茫然と見送った。歓声に包まれている会場内だと会話なんかは聞こえる筈はもちろんないが、遠目にも凄くパニクつていた桐乃の姿を見ればあやせとやりとりの内容は想像が出来てしまつた。先程まで：たしか前回の優勝者ブリジットちやんだつけか？ 彼女の演技を見て幸せの絶頂にいた桐乃とのギャップが大きすぎて、あやせにドナドナされて行く彼女のうしろ姿に哀愁を感じてしまつた。

人混みに消えていく彼女達の姿を見つめ、俺は桐乃に合掌をした。

「すまん 桐乃。俺には止められなかつた」

桐乃がいる方向に謝りながら、だけど心の中では言い訳をしてしまう。

だつて仕方ねえだろ、あれ？ あんな風になつたあやせを止めるなんて不可能だよなつ！ 笑つてるんだけど目が笑つてない：つていうか、瞳から光彩が消えて虚ろな眼差しで……笑顔つてあんな怖いものなのかな？ どうしてうちの妹はあんなにおつかないんだよ!? アヤセの恐ろしさと桐乃がどうなるかが気になつて、ステージ上の内容な

んて頭に入つてこなかつたからな…

「…さて、どうするか？」

俺は大きく深呼吸をして頭を落ち着かせる。会場の熱気にあふれている空気は微妙に汗臭い気がして、深呼吸には不向きだつたが…まあとりあえず落ち着いた。

俺はこの後どうするべきだろうか？ やっぱりあやせ達に合流する方がいいんだろうか？

？合流する

合流しない

あれだよな。きつと桐乃は俺に助けを求めてくるよな…

「京介…あたしが悪かつたから…お願ひ助けて」

「な、なあ、あやせ。桐乃も、そのなんだ。反省してる事だしよ、許してやれねえか？」

「助けてつてなんですか！ 助けてつてつ!! 私はただ桐乃に…それに兄さんはやつぱり桐乃の味方なんですかっ!!」

余計揉め事を増やしちまいそうな気が：俺の脳裏に夏の日の悪夢が蘇る。

万…そうなつちまつたら、桐乃へのプレゼントどころじやねーよな。それに加奈子に無理言つて参加してもらつたのにあいつを放置する訳にもいかねえしな。それにもしかしたら演技終えた加奈子が俺達探しに来たりするかもしけねーし、その場合桐乃のあ

の格好じやあ：加奈子に100%オタクバレしちまうよな。

なら選択肢は…

合流する

？合流しない

こつちが正しいルートに間違いないな。バッドエンドやデッドエンドは回避しねえとな。

「京介氏…立派に成長されてるでござるな」

「はあー、見事なまでにスイーツに洗脳されてるわね。そうね…どうせ堕ちるなら、こちらの世界に墮天して来なさい。歓迎するわよ。漆黒京介の墮天使！」

脳裏に腕を組んでウンウンと首を上下させている沙織、そして溜め息をついたあと斜に構えた笑顔を浮かべ、俺に右手を差し伸べてくる黒猫の姿が脳裏に浮かんできた。

「……兄さん」

ち、違うから、俺はオタクじやないからなっ！？ ただ桐乃が寄越すギャルゲー：いや、アドベンチャーゲームの影響を少しだけ受けちゃつただけだから、だからそういうのじやないから：俺はジト目をする脳内の我が妹に弁明をする。

：いや、俺は何をやっているのだろう。我に返った俺は頭を左右に軽く振る。想像で百面相をしていた俺はさぞかし奇異な存在だったのだと思う。頭抱えたり、ブ

ツブツと呟いていたり：いや、たぶん声には出してない筈だ。うん、たぶん。

心なしか俺の周りのスペースに余裕が出来た気が…きっと気のせいに違いない。横目でチラッと確認すると、サッと目を逸らされた気がするが、それも気のせいだろ。だってこんな騒がしい場所で俺のような凡人に注目するやつなんていないだろ、なあ？

：みんなもつとステージに注目しようぜ。いや、して下さい、お願ひだから。

視線の圧力を無視して、背中に汗をかきながらも俺は極力何もなかつた顔をしてステージ上に視点を移す。ステージ上ではコスプレ姿をしたお姉さんが、両手を振りながら宣伝をしていた。

「メイド喫茶プリティーガーデンです！ 今月の金曜日はコスプレデーでご主人様、お嬢様のお帰りをお待ちしております♪ 帰つてきてくれないと、めてお☆いんぱくとのんちゃん」

あれ？ 何処かで見たことのあるお姉さんが：って、あれ、俺たち行きつけのメイド喫茶の店員じゃねーかっ！？

プリティーガーデンは沙織のおすすめで前に行つてから、その後も皆で何度も利用しているのだ。最近では俺も『メイドさんのらぶらぶオムライス』や『いもうとの手作りカレー』など恥ずかしい名前のメニューにも慣れ、堂々と注文できるようになつたのである。：まあ、それがいいことかどうかはわからんねえけどな。

余談だが恥ずかしさのなくなった俺はプリティーガーデンのメニューで気になつていたあれを注文してみた。その結果は当然のことだが、あれ、つまり『いもうとの手作りカレー』はあやせの作るカレーには全然及ばなかつた事を報告しておく。

ちなみにそれを頼んだ時のあいつらの反応は「京介氏、流石でござるよ」「やつぱりあんたつて：マジきもい」「ふつ、貴方の業の深さを見くびつていたようね。煉獄ゲヘナの炎に焼かれるといいわ」と散々な言われようだつた。妹の部分に惹かれての注文とはいえ、俺はカレー頼んだだけだぜ。酷くねえか？

：しかもだ。カレーを持つてくる時に「お待たせ、おにいちゃん♪」頑張つて作ったんだから、全部食べてくくれないと怒っちゃうからね、おにいちゃん♪なんて、今ステージ上のあの店員がダメ押しでとどめを刺してきやがるし：サービスがよすぎるだろ、あの店！？ あの後の騒動は正直思い出したくねえ。

：嫌な記憶はともかくとして、それにしてもお店でのサービスだけじゃなく、こんなとここまで出張してくるなんて働くのって大変なんだな。俺はお店の宣伝の為にメルルコスをする店員さんを眺めながら思つた。

店員のお姉さんのパフォーマンスが終わり、その後は小学生コスプレイヤーの微笑ましい姿やいかにもコスプレ慣れした可愛い娘の演技など、何組かの出場者がステージを後にしていたが、トップは未だにブリジットちゃんのままだつた。

というか点数99点で、ほとんど決まりじゃねーか？　たしかに加奈子のメルルは本物そつくりだけど、これはキツいよな？　あやせは大丈夫って言つてたけど…俺が不安をつのらせていると、そんなものは杞憂だとでも言うように、そいつが颯爽とステージに登場した。

司会のくららさんの呼びかけに、メルルそつくりの甘つたるい声で返事をしながら姿を現したそいつはステージの中央に立つと

「星くず☆ういっしゅメルルっ！はつじまるよおーーっ♪」

いきなり会場の度肝を抜いた。  
アニメのOPと同じ動作、同じ声、同じ姿で現れたそいつの登場に会場に静寂に包まれる。

もちろん二次元の存在と全く同じ訳がない。しかしこの会場の多くのお客様が思つた筈だ。『リアルメルルが降臨した』と。なにせその正体を知つてゐる俺でも思つてしまつた位だから。それほど加奈子のパフォーマンスは凄かつた。

その凄さを説明するのは難しいんだが、要約するとまずこいつ普通に歌が超上手え！しかも声もメルルそつくりつて、普段の声を知つてるだけに信じられねえ。あいつ、どんな魔法を使いやがつたんだつ？！

さらに振り付けが曲に完璧にマッチしてやがる。アニメのOPなんてバトルシーン

が流れたりするから振り付けはアイドルソングみたいに決まってない筈だよな？ 振  
え室からこのステージまでの短時間で作つたつてのかつ!? あやせや桐乃もハイス  
ペックだと思ってたけど、こいつも規格外すぎだろっ!!

パフォーマンスだけでも一流なのに姿がメルルうり一つ、正直反則級の凄さである。

加奈子が静寂の中、ステージでサビを歌い終え、決めポーズを決めた時、今まで『これは現実だろうか?』と惚けていた観客が正気に戻り、爆発した。

「やべえ—————っ!?」  
「マジでやべえ—————っ!?」

そこからは加奈子の独壇場であつた。手拍子、掛け声、オタ芸、会場はこの日一番の盛り上がりを見せた。いつのまにか俺も拳を天に突き上げてたからな。

『メルル公式コスプレ大会』の王者に輝いたのだ。

優勝商品である『EXメルル・スペシャルファイギュア』を受け取り、二位になつたブリジットちゃんと握手を交わす加奈子の姿はとてもいい表情を浮かべている。歌い終

わったときも気持ち良さげな顔してたし、あいつアイドルとか向いてるのかもな。終了した大会のステージをぼんやりと眺めながら思つた。

あれ？ そういえばあやせと桐乃是…まだ熱気の冷めやらぬ会場を見渡すも二人の姿は見つけられない。

…まだ説教中なのか？ …たぶん桐乃是加奈子の見逃したよな。うわあー絶対に後で文句言つてくんんだろうな、あいつ。

たぶんあやせから『EXメール・スペシャルファイギュア』を受け取つて凄え喜ぶだろうけど…それとは別に俺には「なんであやせを止めてくんなかつたのよつ！！ おかげで…かなかなちゃんのライブ見損なつちやたじやないの！ あーーーーーリアルにメールが降臨したのにそれを、それを見逃すなんてええええええええええー！！ あんた責任取んなさいよつ！！」こんな苦情を言つてくる未来しか浮かばねえー。どうすつかな？

うーん、いつそのこと桐乃の趣味が加奈子にバレりやあ、加奈子のことだ、食べ物で釣ればソロライブとか、やつてくれそうな気もするんだけどなあ。

…まあ、それはできねえし、無理だよな。さて、マジで、どうすつかな？ あーーー…まあなるようにならねえか。

俺は考えるのを諦めた。

嘆息を一つ吐いて俺はいまだに戻つてこないあやせの代わりに加奈子をねぎらう為、あいつがいるであろう優勝控え室に足を向けた。

扉を開けるとそこには、だらしなく足を机の上に投げ出し、椅子の背もたれに体重を傾けながら顔を天井に向け、口を半開きにしながらだらけている優勝者の姿が…

「あ〜〜〜、くそだりー。マジであのくそオタクどもなんなの？」マジきめえー

「か、かなかなちゃん。そんなこと言つたら、だ、だめだよ〜」

そしてその隣で涙目になりながら加奈子を諫める準優勝者の姿が…

そこにはさつきまでステージ上にあつた優勝者・準優勝者の爽やかな姿などは欠片も見当たらない酷い光景があつた。

さつきの舞台は本当に感動もんだつたのに、その後に見せられる姿がこれかよつ!?  
俺の感動を返せ！

## 第32話

「お前…いくらなんでも、だらけすぎだろ」

「あん？」

俺の言葉に天井を向いていた頭をさらに傾け、顔を逆さまにしながらこちらを見る加奈子。

そして警戒の視線を俺に向けて、加奈子にすがりつくブリジットちゃん。「お、お兄さん、誰ですか？」

「えっとね。俺は…」

「関係者以外立ち入り禁止だぞー、ここは。きもオター」

ブリジットちゃんに説明しようとした俺の言葉をぶつた切る加奈子。

だれがきもオタだつ！

「き、きもオタつ！」

加奈子の言葉で警戒から怯えに視線を変化させたブリジットちゃんが加奈子の後ろに姿を隠してしまう。

この野郎、なんて呼びかけをしやがんだ。いたいけな少女を怯えさせるんじやねえよ

！しかもブリジットちゃんがきもオタなんて言葉を覚えちまつたじやねえか。こいつは…なんて情操教育に悪い奴なんだ。

俺は加奈子を睨みつけながら怯える少女に必死で説明を開始する。

「ち、違うからね。俺はそこのお姉さんの知り合いだからね。きもオタなんかじやないよ」

「ほ、ほんどうですか？　かななかちゃんのお知り合いの人なんですか？」

俺の言葉に恐る恐る顔を出して、加奈子に確認を求めるブリジットちゃん。そんな彼女を尻目にお腹を押さえてケラケラと笑い始める加奈子。

「くはっ、京介、ちょー焦つてやがる。くそダセえー。あつはつはつは」

俺が少女相手に必死になつて誤解を解こうとする様子が面白かつたのか、そのまま笑い続ける加奈子。椅子にもたれかかるバランスの悪い体勢でよくもまあ転ばないものである。

こ、このクソガキッ、そのままバランス崩してずつこけやがれ！！

しかし俺の願いも虚しく、絶妙なバランス感覚を維持して笑い続ける加奈子。せめてもの救いは、加奈子の笑つての姿を見たブリジットちゃんが俺への警戒を解いてくれたことである。…まあその警戒の原因を作つたのはクソ<sup>加奈子</sup>ガキなんだけどな。

とりあえずブリジットちゃんの警戒も解けたようだし、加奈子へ祝福の言葉を送る

か。

「はあーー、まあとりあえず優勝おめでと」

俺は溜息を吐きながら加奈子にお祝いの言葉を告げる。本當ならもつと感嘆の思いをもつて言葉を伝えたかつたんだが、なんで呆れ交じりの言葉になつちまつてゐるんだろう?

「んつだよつ! 京介、優勝者への敬意がたんなくねーか?」

俺の態度にやはりといふか加奈子が不満を洩らしてきた。椅子の背もたれに負担をかけていた体勢を直し、机の上に乗せていた足を振り上げた反動で器用にくるつと椅子を180度回転させ俺に向き合つた加奈子が頬を膨らませてゐる。

「仕方ねえだろ。俺だつてもつと素直に祝福したかつたよ。だけど、だらけきつた姿で小さい娘泣かせてるの見たら素直に称賛なんて出来ねーよ」

これもギヤップというものだろう。こちらの方が普段の加奈子らしいのだが、ついついステージの凄さを見せつけられた後だと、素行の悪さが際立つて見えてしまつたのだ。それにこいつ、人をきもオタ扱いしやがつたしな。

しかしそんな俺の態度が気に入らないのか、加奈子は不満をぶつけてくる。

「けつ、そんなの、しるかよつ! こつちはあんなりーステージ出て、疲れてんだぜ。だらけようがどうしようが、あたしの勝手だろーがよつ!! …つうーかよ、あやせがい

ねーのはどうしてだよ?」

「つあ」

加奈子の言葉に俺は言葉を詰まらせた。しまった! あやせが来れねー理由考えてなかつた。と、とりあえずなんとか場を繋げねーと。

「あーーー、あやせはいまちよつと…手が離せなくて、来れねーというか……」「はあ? なんだそれ。ふざけてんの!? どういうことだよつ!」

加奈子がより不機嫌そうに怒鳴つてくる。

あやせが来れないのには事情があるが、加奈子からしたらそんな事は関係ない。友人に頼まれて見事に優勝してきたにも関わらず、頼んだ友人は来ず、知り合いに文句を言われる、こんな状況では考えてみたら気分を害しても仕方ねえよな。

それに考えてみたら神経の太そうな奴ではあるが、あやせと同じまだ中学二年生の女の子だ。それが突然のステージデビューである。ストレスが溜まっていて当然なのだ。そのことに思い至つた俺は自然と頭を下げた。

「いや、その、すまない、加奈子」

「ちつ」

俺の謝罪に舌打ちをする加奈子。やつぱりあやせがいないのが気にいらないのだろう。このままだとこいつとあやせの仲に亀裂ができちまう。でもほんとの事を言うわ

けにもいかねーし。

……こはあやせの為にも兄貴の俺が頑張るところだよな。

しつかしどうするか？ そう言えば……こいつ俺の事をオタクと思つてゐるんだよな。

……なら。

俺はその場で床に正座して深々と加奈子に向かい頭と両手を下げていく。要は土下座である。

「ほんとすまない、加奈子。あやせはいま俺の代わりにここでしか売つてない限定品を買いに行つてもらつてんだ。それがすぐえー行列でこつちにこれなかつたんだ」

「おい、京介何してん？：はあ？ なに？ マジ言つててんの？ そんなのの為に来れねーつてマジかよつ！」

俺の土下座に一瞬ひるんだものの、俺の説明を聞き、よりいつそう怒る加奈子。

だがこの反応は予想通りだ。だから俺は続けて言葉を重ねる。

「怒るなら俺に怒つてくれ。どうしても手に入れたくて、あやせに無理矢理頼み込んで、代わりに並んでもらつてるんだ」

「だから、ふざけんなっ！！ つまりそれはあやせが、あたしよりてえめーの下らねー要件を優先したつてことだろつ！ マジ、ざつけんなっ！ つうーか、そんなに欲しいもんならてえめーが並べばいいじやねーかつ!!」

椅子から立ち上がり、顔を赤くしてより一層憤りをみせる加奈子。

ここだ！　ここで起死回生の一発を見せるんだ！！　感情を高ぶらせた加奈子に対し  
て、俺は下げていた顔を上げ、気持ちが声に乗るように大きく叫ぶ。

「俺が並ぶんじやあ、ダメなんだつ！！ あやせに頼みこんだ理由は俺が加奈子にどうしても会いたかったからなんだよおおつ！！」

うえ！？ はあ？ どゆこと？」

俺の剣幕に怒っていた加奈子も毒氣を抜かれたのか？ きよとんとした表情になる。ちなみにその傍にいるブリジットちゃんは先ほどから俺たちのやり取りで泣きそうな顔をしていたのだが、いまはびっくりした顔で固まっている。目前で年上の人達が喧嘩の様な雰囲気になつたら小学生からしたら恐怖だよな。しかし彼女には悪いけど、もう少し我慢してもらおう。くそつ、俺もたいがい情操教育に悪いよな。

「よーーーく聞けよっ！ 加奈子のメルル姿が凄すぎたつ！！ 出番前に控室で見た時も  
すげえと思つたけど、ステージ上でのお前のパフォーマンスはもう別次元だつた。  
ちよおおおおおおおーーーーー萌えたつ!! 俺の大好きなメルルがまさにここに降臨  
したと思つたね。その姿を見たら居ても立つても居られなくなつて、お前が着替えちま  
う前にどうしても会わねえと気がすまなくなつちまつたんだ！ だけどだ、ここでしか  
手に入らない限定品も逃す訳にはいかなくて、泣いてあやせにすがりついたんだよっ!!!

三

俺の魂の叫びに室内に沈黙が訪れる。目の前の加奈子は：ああ、ドン引きしてゐるな。  
ブリジットちゃんはポカーンとした顔をしてゐるな。

一  
きもつ

長い沈黙を破つたのは、そんな加奈子の一言。

ううう、すでに俺の心が折れそうだ。  
しかしそんな俺の事情をこいつが汲んでくれる  
わけがない。

「うげえー、マジでキモい。信じらんねーマジできもオタだし、こいつ。普通そんなことぶつっちゃけねえだろ？ うわあー兄貴がこんなのがって、あやせ可哀想すぎだろ。つうーか、加奈子様の3メーター以内に近寄んなよ。きもオタがうつるだろ」

しつしと手を振りながら俺を罵倒する加奈子。こいつマジで容赦がねーー。だけどあやせへの怒りはなくなつたみたいだな。むしろ俺のような兄貴をもつなんてと同情的だ。

…これでいいんだ…心に傷を負いながらも俺は自分自身を納得させる。しかし悲劇はまだまだ終わらない。

俺に止めを刺してきたのは加奈子でなくきよとんとした表情の純真な少女であった。やめてくれ、ブリジットちゃん、俺のライフはすでに零なんだよ。

「くはっ、そうだぞ。近づくなよ、こんな変態に近づくと何をさつれつかわかんねーぞ。ぶつぶつぶつ」

少女の一言にがっくりと項垂れた俺の姿を見て、笑いをこらえながらブリジットちゃんに注意を促す加奈子。

「？ 何かされちゃうんですか？」

「そうだなー、エロい事じやね？ だつて、ふはつ、そいつ変態だしな、ひひつ

「え、えっちな事ですか!?」

勝手なことを言つてんじやね——!! 俺が落ち込んでいる横で何を吹き込んでやがんだ、こいつは!? ブリジットちゃんが赤い顔で目を丸くしてんじやねーかつ！

「しねえよっ!! お前は俺をどんな目で見てやがんだつ！」

「どんな目つて、そりや？ 加奈子様のコスプレ姿を見たいために、妹にパシリをさせる……あ——変態のろくでなし？」

「ぐはあつつ」

あらためて言葉にされると、何も反論が出来ねーダメ人間だった。加奈子にきもオタ呼ばわりされても仕方ない所業を俺は告白していた。

「ほれほれ、どした。反論してみーろよ。ふふふ」

再び膝をついた俺の姿に、ここぞとばかりに追撃をしてくる加奈子。俺の前でしゃがみ込み、指先でつむじを突ついてくる。おそらくその表情はにやにやとほくそ笑んでるに違いねえ。

頭をつつくんじやねーよ、このクソガキつ！ パンツ覗いてやろうか、こいつ!! がつくりと項垂れている俺には加奈子のつま先しか見えないが、メルルのあんな短いスカート姿で座り込んでいれば、俺が顔を上げた瞬間にパンチラどころかパンモロな状況になるのは簡単に想像が出来てしまう。

…まあ紳士な俺はそんな事しねえけどな。それに加奈子のようなちんちくりんのパンツみてもだしな。

「んん？ どしたよ京介。なんも言えねえのか？ けけつ」

「……そんな恰好でしゃがんだとパンツ見えるぞ」

俺は項垂れた体勢を維持したまま加奈子に忠告をしてやる。

「うなつつつつ!?」

慌てた様子で立ち上がる加奈子。やれやれようやく頭を上げられ……：

「つごばあつ!?」

顔を上げようとした俺は後頭部からの衝撃により、床にキスをする羽目になつた。加

奈子が俺の頭を踏みつけたのだ。

俺は床の上をゴロゴロとのたうち回る。

「てつ、てめえーーーっ!! なにしやがんだあああ！」

「うつせえーーっ！死ねっ、この盗撮魔、変態、死ねっ！！」

「誰が盗撮魔だつ！！

ふざけんなつ、見えようにしてやつたじやねーか！」

「加奈子様のコスプレ姿を見たいために暴走するような奴の言葉を信じれるか！」死ね、死ね！」

「痛つ、マジで覗いてねーつうの。いいからやめろ!」

俺は左手で鼻を押さえながら、口一キックをかましてくる加奈子の肩を右手で押しやつた。幸いな事に鼻血はでていないようだ。

「うーーーーーー、マジだろうな？」嘘だつたらあやせに言いつけつからな」

顔を赤くして俺を威嚇してくる加奈子。こいつでも乙女の恥じらいってあつたんだな。そしてあやせに言いつけるのはやめてくれ、殺されちまう。

「本当に見てねー。あやせに誓つてもいい」

「…まあ信じてやんよ。しつかしそこで神じやなくて妹に誓うつて、てめえほんとにシスコンだよな」

一九四

加奈子の台詞に思わず言葉に詰まってしまう。

「につひひつ、オタクの上にシスコンこじらせるつて、京介マジヤバだよなー」

「ぐううう

せせら笑う加奈子に俺は悔し気に唸る。実際に口を滑らせちまた以上、反論ができるねー。

俺が顔を覗めていると。

「かなかなちゃんとお兄さんつて、ほんとに仲良しなんですね」

俺たちの行動を見ていたブリジットちゃんがにつこりと微笑みながらそんなことを言つてくる。

「はい?」

「はあああああああー? なに言つてやがんだよ。こんなきもオタと加奈子様が仲良い訳ねーだろつ!」

そんなに目一杯否定されるとムカつくが、そうだぜブリジットちゃん、人をきもオタ扱いするクソガキなんかと仲良い筈が無いだろう。

俺が内心で加奈子の言葉に同意を示していると、彼女がそれを否定する言葉を投げかける。

「そうですか? お兄さんと話してゐ時のかなかなちゃん、とつても楽しそうですよお

?

「うなつ!?

「はじめはかなかなちゃんが怒鳴つたり、お兄さんが叫んだりで怖かつたんですけど、二人の話しててる姿がお父さんとお母さんみたいだなつて……」

「……」

えへへへ、と屈託の無い笑顔で告げてくるブリジットちゃん。

やべえ、天使だ。こんなところに天使がいるよ。こんな可愛い妹が欲しい。いや、あやせも可愛いマイエンジエルだよつ？ だけど別種の可愛いさというか、あやせが美しさをそなえた凛とした可愛いさとしたら、ブリジットちゃんは癒し100%の可愛いさというか……

いや、ごめんなさい、俺の妹はあやせ一人だよ。だからあやせ、脳内で膨れつ面で睨まないでくれ。それとなんで桐乃と黒猫お前らまで参加してるんだ？ お前らは俺の妹じやないだろつ！？

俺が脳内で葛藤していると、ブリジットちゃんの台詞で硬直していた加奈子が復活を果たして、無邪気に微笑んでいる小学生につかつかと近づき柔らかそうな頬つぺたをつねりあげた。

「つな、な、なんでこんな奴と夫婦扱いされなきやなんねーんだ。てめえ、年下の癖に生

意氣だぞ。このつ、このつ」

「いふあ、いふあいよ。ふあなふあなひやん」

「うるせー、悪い子にはお仕置きが必要なんだよ」

「わひやし、にやにもわりゆいこちよひてにやいよ」

いかん、加奈子の魔の手から天ブリジットちゃん使を救い出さねば。俺は加奈子に近づき、その後頭部へ手刀を落とす。

「やめい、可哀想だろ」

「ふぎやつ、痛つてーーな、何しやがる!!」

悲鳴? を上げ頭を両手で押された加奈子が振り返つて文句を言つてくる。そんな加奈子へ俺は呆れたように告げる。

「こんな小さい娘をいじめてんじやねーよ」

「へん、ばつか、おめえ、いじめじやねーよ。これは社会の厳しさを教えてんだよ。」  
「はあ? なにが社会の厳しさだよ。ただの憂さ晴らしだろ?」

「違えーし、これは躊躇だつつうの! だいたいこれは、あたしがなんかしたらあやせがしてくるのを真似ただけだぞ!」

あーー、たしかに前にあやせに抓られたな、こいつ。

「…いや、あやせにやられてるのはお前の行動が悪いだけだろ?」

「んっだとお!？」

俺たちが言い合いをしている隙に加奈子の魔手から逃れたブリジットちゃんが俺の背中に逃げ込んでくる。抓られた両頬を押さえ目尻に少し涙を溜めて「うーーー」と唸つている姿はとても庇護欲をそそられる。まさかお兄さんが君の事は必ず守つてやる!!

しかしそんな俺の決意に半眼になつた加奈子が水を差してくる。

「……てめえ、きもオタ、シスコンだけじゃなくて、ロリコンもなんて…マジ救えねえな」「人聞きの悪いこと言つてんじやねえええええつ!?」だいたいなんでそんなのが出てくんんだよつ!!

このご時世それはシャレにならねーーからなつ!!

「ブリジットを見つめるてめえの目が気色わりいーー」

「マジでドン引きしてんじやねーーよつ!?」それは完璧に誤解だ！ 冤罪だからなつ！」

後ずさりをする加奈子へ俺は必死に呼びかける。

だいたい氣色悪いって、俺はただ兄的視点でブリジットちゃんを見ただけ……つて、さつきから彼女を妹扱いしようとすると謎の悪寒が走るんだがつ?!?

まあそれはともかく、誤解を晴らす為に加奈子の目を真剣に見つめる。

「……」

「……」

「…マジで違えのか？」

「ああ、あやせに誓う」

「そこで妹に誓うつてマジシスコン…あれ？ さつきもこのやり取りしてね？」

「おう、したな。だからもうそこはスルーしてくれ」

誤解は解けたようなので、俺は深々と嘆息を吐いた。なんとかひと段落ついたので、俺は先ほど伝えそこなった素直な称賛を加奈子に送る。

「あらためてだけど、優勝おめでとう、加奈子。正直、マジで凄かつた。鳥肌もんだつたよ」

「ふえ？ …ベ、別に、加奈子様からしたら、当たり前の結果だし。につひひつ」

俺の言葉に対してちょっと驚いた顔をした後、嬉しそうに笑う加奈子。やれやれ最初からこのやり取りをすれば良かつたのに、ずいぶん遠回りをしちまつたな。

「ほんとスゲーよお前。振り付けとかどうやつて考えついたんだよ。あれやばかつたぞ」

「振り付け？ 別に特に考えてねーよ。あんなんテキトーに曲のリズムに合わせりやできんだろう？」

「マジかよっ!?」

普通は出来ねーよそんなこと!? サツキも思つたけど俺の周りは才能がある奴が多いねーか?

「お前つてアイドルとか向いてるのかもな? ステージ上でいい顔してたぜ。観客の声援とか気持ち良かつたんじやねーか?」

「ああ、あれは確かに……いや、ねーしつ! きもオタ共の声援なんかで気持ちよくなるわけねーだろ! ま、まあ、加奈子様がアイドルっていうのはわかっけどよ」

口では否定しながらも先ほどの事を思い出してているのだろう。加奈子が口元を緩めて顔を上気させている。：素直じやない奴だ。こういうのをツンデレというのだろうか?

「アイドル? かなかなちゃん、アイドルになるんですか?」

俺たちがたわいのないやり取りをしていると、俺の背後に避難していたブリジットちゃんが目をキラキラさせて加奈子に近寄っていく。

「なんだ? お前まで、なんねーよ。オタク共に媚びるなんて真つ平ごめんだね。ただ加奈子様がアイドルの様に可愛いって話だけだし、きししつ」

いや、嬉しそうに笑つてるところ申し訳ないが、アイドルとか向いてんじやねーのか? つて話を振つただけで、お前がアイドル並みに可愛いなんて話はしてねーぞ。

俺が呆れた目で見つめていると、加奈子の返答を聞いたブリジットちゃんが不満の声を上げる。

「えーーー、ならないんですか。ステージのかなかなちゃんとつてもすぐくて、とつてもカッコ良かつたのにーーー」

「につひつひ、なんだおめえーわかってんじやん。でも加奈子様はお安くねーんだよ」ブリジットちゃんの言葉を聞き、テンションが上がったのか？ 加奈子が笑いながら彼女の頭を撫で繰り回している。褒められて嬉しいのはわかるがやめてやれ。彼女、頭をぐらぐらさせて「あう、あう」言つてんじやねーか。

「そこらへんでやめとけよ。目を回してんじやねーか」

「んっだよ。せつかく加奈子様がサービスしてやつてんのに情けねえ」

言葉は相変わらず粗野な物言いだが、ふらふらしててブリジットちゃんを見てばつの悪い顔をするあたり加奈子もなんだかんだでこの娘を気に入ってるのかもしれない。

「ううーー、世界がぐるぐるしますうーー」

加奈子から解放されたブリジットちゃんが頭を左右にゆらゆら振りながら弱音を呴く。その様子は彼女には悪いのだが、とても可愛らしい。やっぱ俺の妹に……妹？ そういえば、あれから結構時間たつてているが、うちの妹様はどうしたのだろうか？ いまだにこちらに現れないあやせの事を思い出して俺は顔を顰めた。

あいつ…完全にこつちの事を忘れてやがるな。桐乃を連れて行つたあやせの姿を思い出して俺は考える。あやせが説教モードになると長いからな。…前に二時間正座させられた事もあるし。そうなるとこの控室にもずつといるわけにもいかねーし……

「加奈子…」

「おう、どしたよ?」

俺の呼びかけに上機嫌で応える加奈子。これからこいつの顔をまた曇らせると思う心苦しいが、あやせが来れるかどうか分からぬ現状を放つておく訳にもいかない。

「すまない。俺の我儘のせいで、あやせが間に合わないかもしね。いつまでもここにいたらマズいんだろ?」

「あーー、ちつ、そうだよな。もう着替えねえとヤベーよな。やい、こら、どーしてくれる責任とれよ」

「……ほんとに申し訳ない」

加奈子の言葉に頭を下げ続けるしかできない。そんな俺の態度に業を煮やしたのか加奈子が叫ぶ。

「あーーーーーーーーーーーーーー、もう、くそつ!! いいから頭上げろよつ! 仕方ねえ、特別に許してやんよ。加奈子様はファンに優しいかんな。くそキモいシスコンだけど、ファン1号だしな。マジ特別だかんな。感謝しろよ!」

まさかあの加奈子がこんな簡単に許してくれるなんて。俺は目を丸くして彼女を見つめる。

「あんだよ。なんか文句あんのか？」

じろっと俺を睨む加奈子に、俺は慌てて頭を振る。

「ないない。文句なんてねえーよ。サンキューな加奈子」

「ふんつ、ならさつさと出てけよな。覗こうなんて考えんなよ、変態兄貴」  
俺の感謝の言葉に憎まれ口で返してくる加奈子。上げた好感度をすぐに落としてくる…まあこいつらしいっちゃらしいか。

「へいへい、了解。了解。覗いたりなんかしねーよ」

そう言いながら俺は彼女たちに背を向けて控室のドアへと足を進めた。  
「あっ!? そうだ。ちよつと待った、京介」

ドアノブに手を掛けたところで加奈子からストップを掛けられた。いつたいなんだ

? 視かれねえか心配だから出てく前に目隠しに手錠をしろなんて言わねえよな?  
「手錠は嫌だからな。目隠しまでなら、まあいいけどよ」

俺の譲歩に呆れた声を出す加奈子。

「はあ? なに言つてんだ、お前?」

「いや、すまん。何でもない忘れてくれ。んで、どうしたんだ?」

どうやら先走つちまつたみてえだ。というかなんで俺も手錠目隠しなんて出てきだんだ？　…まあいいか。深く考えたらいけねえ気がする。

「こ、これはあやせへの仕返しだかんな。クソ兄貴の頼み事優先させて、あたしを蔑ろにしたあやせへの復讐だかんな。勘違いすんなよ」

何かよく分からぬ事を言いながらつかつかと俺に近寄つてくる加奈子。

「あやせへの復讐？　どういう事だ？」

なんか俺にしてくるのか？　それがあやせへの仕返しになる？　俺が混乱しているといつの間にか目の前に加奈子が来て、俺の胸に何かを押し当てた。

「来ないあいつが悪いんだからな。まあ、それにサプライズしねえつて言つてたしよ。ほれ、てえめえが欲しがつていたもんだよ。こんなもん欲しがるなんて、マジできめえーよな」

「あーーーーー、それってEXメルル・スペシャルファイギュアだあー！　かなかなちゃん、お兄さんにあげちやうんですか！」

ブリジットちゃんの驚いた声を聞きながら、俺は軽い衝撃を感じた胸元を見ると、そこには大会の優勝商品であるEXメルル・スペシャルファイギュアが押し付けられていた。

あっけに取られている俺に加奈子が早口でまくしたてる。

「加奈子様からじやねーからな。あくまであやせに頼まれたもんを渡しただかだかんな。そこんとこを勘違いすんなよ。まあもちろんあたしの力がなければ到底手に入らないもんだからよ。そこんとこはすげえー感謝してもいいんだぜ。具体的に言うとなんかおごれ！あと、ほんとはあやせが手渡すのが筋つてもんだけどよ。それを加奈子様が渡しちまうつてのが、けけつ、仕返しつて奴だ！んん、ま、まあてえめーにも、世話になつてねえこともねえしな……やっぱ、無しだ。無し。とつとと受け取れよつ！！」

「…おう、ありがと」

俺は力なく感謝の言葉をのべ、ファイギアを受け取つた。

今更ながらだが、罪悪感が湧いてくる。これはあやせに頼まれたとはいえ加奈子が俺にくれたものだ。しかしそれを俺が受け取るわけではないのだ……正直なところ、このプレゼントが俺への物というのは加奈子の勘違いから始まつたものではあるが、俺たちはその勘違いを利用して彼女を騙してしまつたのだ。遅まきながらそのことに気が付いた俺はひねくれながら恥ずかしそうにする彼女の顔を見つめることができない。

そんな俺の態度に加奈子が表情を曇らせる。

「んっだよ。やつぱし、あやせからじやねーと嫌だつたのかよ…」

馬鹿野郎か、俺はつ！！ てえめーの都合で俺たちの為に頑張つてくれたこいつを悲しませてるんじやねーよ！ 騙すなら最後まで騙しきれ。嘘を吐くなら、最後まで嘘がば

「がない様にしろ。しつかりしろよ、俺！」

「なに言つてんだよ。超ーー嬉しいに決まつてんじやねーか！　ただ、まさかお前が俺の為にここまでしてくれるなんて予想外過ぎただけだつーの。くううーー、EXメール・スペシャルファイギュアをまさかこの手に取めることができるなんてほんと最高だよ。マジサンキューな加奈子」

俺は笑顔を浮かべ加奈子の頭をガシガシと撫でながら感謝する。笑顔がちゃんと出来ているか不安におもいながら。

「だから、おめえの為じやねーつたろ！　勘違いしてんじやねーー！　あやせの為：じやなくてケーキを奢ってくれるつーから仕方なくだつてーの」

こいつはほんとに素直じやない奴だ。俺の為は違つても、あやせの為にはほんとなんだから認めればいいのに。

「素直に感謝を受け取れよ。……いやほんとに感謝してんだぜ」

加奈子の様子に俺は先程とは違う心からの笑みが溢れる。

「あーーー、もう、いい加減つ、手を離しやがれ！」

「あーーー、せつかくいい雰囲気だつたのにー」

加奈子が頭に乗せられていた俺の手を払いのけ、顔を赤くして怒っている。やべえ、また調子に乗つちまつたか？

なにやら後ろで残念そうに呟いているブリジットちゃんも気になるが、これ以上加奈子の機嫌を損ねる訳にはいかない。

「もう用事は終わつたんだから、さっさと出て行け」

「あ、ああ、じゃあ、また後でな」

下手な言葉だと余計に不機嫌にしちまうかもなんで、俺は無難な返事をする。

「ふんつ、もう戻つて来なくていいぜ。あたしもこのまま帰んしな」

「えつ、はあー？ 帰るつて、あやせ待たねえのか！」

やばい、本気で怒らしちまつたか。俺は顔を青くする。

「あやせによろしくなーー、つて、おいおい、なんて顔してんだよ。情けねーツラすんなよ」

「いや、だつてよ。やっぱ、あやせじゃなくて、俺が来た事に怒つてるんだろ？」

「しつけーよ！ それはさつき許したじゃねーか！ 別にキレて先帰るつて訳じやねーよ。このままあやせ待つのもだりーし……おつ？ までよ、怒つて帰つた事にすれば、ケーキ奢る回数増やせんじやね？ 京介、やっぱキレイ帰つたつて、あやせに言つといで、にひひつ」

名案を思いついたと言うように悪い顔で笑う加奈子。

ああ、うん、これもう氣を使う必要はねえな。彼女の様子に肩透かしをくらい脱力す

8

「はあーー、わかつたよ。待つのが面倒になつたから帰るつて伝えておくよ」

「うちの妹にたかるのを俺が見過ごす筈ねえだろ?」

「うーーー、このシスコン！ 変態つ！」

「なんとでも言え。あーーーー、ただなんだ……あやせにたかるのは許せんが、ケーキか？ それなら俺が奢つてやるよ。これ貰つたしな」

この辺りが落とし所だろう。実際に加奈子にはもの凄い感謝してゐるしな。それにこいつとはこの位の軽口を叩きあえる関係が一番いいしな。俺はEXメール・スペシャルフィギュアを掲げながら彼女に告げる。

俺の言葉に顔を顰めていた加奈子が一瞬驚いた顔を見せた後、破顔する。

「オッケー、交渉成立だぜ。にひつ、ちゃんと奢れよ。嘘は許さねーからな！」  
「なに食うかなあー」

了解、了解。  
あんま高えのは勘弁だからな。それじゃあ、今度こそ行くからよ。加奈

子、今日はマジでサンキューな。ブリジットちゃんもそれじゃあね』

俺は楽しそうにケーキを夢想している加奈子へもう一度感謝の言葉を述べ、ブリジットちゃんへ挨拶をして控え室を後にする。

「おうよ。じやあ、またな、京介」  
「あつ、お兄さん、さようならです」

彼女たちのそんな言葉を背に俺はパタンとドアを閉じた。

# 第33話

こういうイベント会場の紙袋はどうしてこう…恥ずかしい物しかないのだろうか？

加奈子から貰つたEXメルル・スペシャルファイギュアだが、受け取つたときに剥き出しひままで受け取つてしまつたのだ。大会の優勝商品を優勝した加奈子が持ち歩くのならともかく俺がこれを持つているのはマズい訳で…盗んだとは思われねえと思うが、余計な面倒は避けられるならそれに越したことはない。なのでファイギアをしまう為の紙袋を手に入れたのだが、この紙袋…メルルとアルちゃんが仲良く中央で決めポーズをしているのだ。アキバでならまだいいが、これを持つて地元を歩く勇気は俺にはない。

仕方ない、面倒だけど別のところで他の紙袋をゲットしねえと。まあそれもまずはこの会場を出てからだな。ああ、それとここから出る前にあやせに連絡を取らねえといけねーな。電話だとまだ説教中かもしんねーからメールいれとくか。

携帯に文章を打ち込んでいると、ふと気が付いた。

あーーー、よく考えると俺が桐乃に見つかるとマズいのか？ あいつだと俺が持つてこのメルル紙袋はもちろんのこと、他の紙袋にしても何もつてるかつて詮索してきそ

うだよな。：とりあえずそれもあやせに相談してみるか？ 書きかけていた文章を削除して新たに俺は新たにメールを書き直す。

『加奈子から例の物を受け取つた。桐乃といらるなら、これを持ったまま合流しない方がいいよな？ どうする？ 先に家に戻つてた方がいいか？』

これで良し。送信と。

さて、あとは見つからないように：ヨドバシにでも行くか？ あそこなら桐乃の興味を引くもん少ねーし。それにあやせと一緒になら桐乃もそのまま帰宅すんだろ：たぶん。その場合電気街口から帰宅だろうから、ヨドバシから中央改札口や昭和通り口から駅に入ればあいつらと鉢合わせることもないだろ。ふつ、完璧な計画だな。

俺が今後の事を考え自画自賛しながら歩いていると、胸の内で何か引っかかるものをおぼえる。

しつかし、なんか忘れてる気がすんだよな。何だつけか？ うーーん。

…………あーーーーーーーーーーーー！？ 加奈子からコスプレ衣装回収してねえじゃねーか！？

俺は厄介な事を思い出したと額に手を当てた。

また戻るか？ :あんな去り方して戻るつて：はあー、すげえーカツコ悪いな。だけど、衣装を回収しねえわけにもいかねーよな。俺は肩を落として再び控室へ向かうため

踵を返す。

まだ加奈子の奴、帰つてねえよな？ まあ、あいつも今頃コスプレ衣装をどうしようか悩んでいるかもしんねーな。俺がそんな事を考えながら歩いていると、ズボンのポケットから携帯の着信音が響いた。着信表示はあやせからであった。電話をかけてくるくらいなら桐乃への説教はきっと終わつたのだろう。

「あやせか？ どう…」

「に、兄さん、どうしましよう!?」

通話に出たとたん、こちらが喋るのに被せる様にあやせの焦つた声が携帯から聞こえてきた。

「ど、どーした、あやせ！? 何があつた？」

あやせの緊迫した声に俺も慌ててしまう。

「桐乃が、桐乃が…」

「桐乃がどうかしたのか!?」

ま、まさか、またあやせと桐乃が……夏に起こつた悪夢が脳裏によぎる。

「桐乃が凄い落ち込んじゃつたんです。どうしましよう、兄さん」

「ああ、そうか…」

思わず淡白な返事が俺の口から洩れる。とりあえず最悪な状況では無い様だ。

「そうか、じゃないですよ、兄さんっ！ ちゃんと聞いて下さい!!」

「うわっ、わ、悪いっ!?」

あやせの剣幕に反射的に背筋が伸びてしまう。もはやこれは俺の中で条件反射になってしまったようである。

「うーーー、桐乃を喜ばせようとしてたのに、落ち込ませちゃうなんて：私の馬鹿。でも、でも、どうしても我慢できなかつたんですよ。親友があんな姿をしてるなんて…とても我慢できなかつたんです！」

「…ああ、うん、あれは仕方ねえ。お前はきっと悪くないぞ」

あやせの台詞にヒヤツハーしていた桐乃を思い出し、思わず言葉が漏れた。その言葉にあやせが同意を見せる。

「そうですよねっ、仕方ないですよねっ！ 不可抗力ですよねっ!!」

「お、おお。…ちなみにいま桐乃はどんな状態なんだ？」

「そ、それはですね…ええと…肩を落としてですね…」

「ふんふん、それで？」

「虚ろな眼差しで…」

「……………おう」

「そして、その…………私が話しかけると、桐乃は…その…ごめんなさいとしか言わなく

なつちやつたんです…」

「つ重症じやねえ———か!?」

「だから兄さんに相談しててんじやないですかあ———!!」

「俺の叫びに對してあやせも叫び返してくる。

しつかし、あの桐乃が壊れるほどつて：どんな説教をしたんだ、うちの妹は？  
俺が戦慄で身を震わせていると、あやせの落ち込んだ声が携帯から流れてくる。  
「どうしましよう……兄さん。私は桐乃に喜んで貰いたかったのに…」

あやせの声色にしょんぼりしているイメージが浮かび上がる。妹の悲しむ顔を見て見たくねえ。しかも今回あやせは桐乃の為に頑張つてたのに、これじゃあ報われねえよ。これは俺がなんとかしねえと。

「あやせ、俺に任せとけ！」

「兄さん、いい方法があるんですか!?」

俺の言葉に携帯から聞こえてくるあやせの声のトーンが明るくなる。その様子に俺は：い、いまから考えるとはとても言えなくなつてしまつた。

考えろ考えるんだ俺。最近何か落ち込んでいる女の子を慰めているのを見た記憶が：そうだ!! たしか桐乃から借りたゲームで落ち込んだ妹を慰めるシーンがあつた。ギャルゲーだがこの際使えるものは何でも使わねえとな!

「いいかよく聞け、あやせ

「はい、兄さん」

「まずは桐乃を優しく抱きしめるんだ。温もりを感じると人は落ち着く」

ゲームのシーンを思い出しながら、テレビ番組でたしか言つていたであろう説得力の  
ありそうな言葉を付け加えて補足する。

「なるほど、たしかにさつき抱きしめていたとき桐乃は落ち着いてましたね。さすがです、兄さん」

えつ、既にやつてたのか？  
あやせと桐乃に何があつたんだ！？  
ま、まあ、とにかく

「その後はだな。えつと、そうだ、頭を優しく撫でながら相手を肯定し続ける」「肯定することで自信を持たせるんですね」

なるほど、そういう効果があるのか…いかん感心してゐる場合じやない。その先を思い

出さないと

「おう、きっとそれだ。その後は落ち着いた相手の瞳を覗き込む」「しつかりと目と目を合わせるんですね」

「ああ、それで…」

その後は……主人公と妹のキスシーンが…………あ、危ね―――っ!?

頭に浮かんだ

シーンをあやせにそのまま伝えちまうところだつたぜ。

『それで、ゆっくりと唇を重ねるんだ』もしもこんなことを言つてたら『こんな時にふざけるなんて兄さんは何を考えているんですかあーー!!』つて大激怒されちまうところだつた。いや、激怒ならまだいいんだが、もしかしたら二度と口を利いてくれなくなつてたかもしんねえな。ふうー、危ねーー。

「兄さん、兄さん、どうしたんですか? その後はどうするんですか?」

耳元からあやせの焦つた様子の声が聞こえる。突然俺が黙りこんでしまつたから不安を感じてしまつたのだろう。危機を回避したからつてほつとしてる場合じやねえ。

「あ、ああ、すまん。ちょっと考えてた。それで、その後はだな…」

「はい。その後は?」

「そ、その後はその後は……すまんあやせ、ここが俺の限界だ」

「ええー、兄さん期待をさせておいてなんですか、それは」

あやせの呆れた声が携帯から流れてくる。任せとけと言つたのに自分が情けない。だけどよ…思わず言い訳が口から滑り落ちる。

「すまないあやせ。だけど良く考えると落ち込んだ女の子を慰めた経験が俺の場合、お前と麻奈美しかないからな…」

前に桐乃が親父さんの件で落ち込んだ時も話を聞いてやるくらいしか出来なかつた

からな。親父さんの説得のフォローもしたが、あれは慰めた訳じゃないしな。

麻奈美の件も小学校でクラスが別になつて落ち込んでたから休み時間や昼休みに遊びに行つてやつただけだから、今回は役に立たないし。あやせの場合は

「お前が落ち込んだ時の事だと、一緒の布団で寝てやつたぐらいだから、参考にならねーし」

「つなあーーーつ!? な、なにを言つてるんですかあああああああつあああーーー!!」

「うおつつ!?!」

耳元からもの凄い叫び声が聞こえてきた。慌てて携帯から顔を遠ざけたが耳の奥がキーンとする。鼓膜は大丈夫だろうか？

右耳が休暇の申請をだしてしまつたので携帯を左手に持ち替え、あやせに苦情をいれる。

「お前なあ、いきなり叫ぶなよ。鼓膜が破れたらどうすんだよ」

「ごめんなさい。でも、兄さんがいきなり変な事を言うのが悪いんですよ。そ、その、い、一緒のお布団なんて…そんな事してないですから!!」

あやせの焦つたような早口が携帯から聞こえてくる。別に兄妹なんだし子供の時一緒に布団で寝るなんて否定するほど大した事じやないと思うんだがな。

「いやいや、お前が泣き止むまで抱きしめて、頭を撫でてやつたろ?」

「…………!? そんな記憶ありません。兄さんの妄想です!」

おいおい、本当に忘れてんのか？ ならショックなんだが……いやでも幼稚園や小学校低学年の時の記憶なんて結構忘れちまうもんか？

これが現実か、悲しいな。『おにいちゃん』って言いながら俺の後ろをトコトコ歩いてきたあの頃の天使は俺の記憶にしつかりと焼き付いているのに。

「妄想はひでえーよ。あやせは忘れてるかもだけど、小さい頃はお前よく俺の布団に潜り込んでたんだぜ」

「えっ？ あつ!? こ、子供の時の事だつたんですね」

「幼稚園の頃なんか嫌な事があるとすぐに俺の布団にくるから、お前のおねしょに巻き込まれ……」

「思い出しましたからああああつあーーーー!! 兄さんは余計なことは思い出さないで下さい」

あやせの再びの絶叫が俺の言葉を遮った。

……うん、これは俺にデリカシーが足りなかつたな。俺の脳裏に電話越しで顔を真つ赤にさせたあやせの姿が浮かんでくる。これ以上はまたあやせを怒らせちまいそうだから話を戻さないとな。

「ああと、そのなんだ。話を戻すぞ。そんな訳でこれ以上は桐乃を慰める手段は浮かば

ないんだ。すまない」

「あ、はい。わかりました」

「あれ？ さつきと違つて素直に納得したな？」

「はああーー、兄さんの話の衝撃で逆に落ち着いてしまいましたよ。……ごめんなさい、兄さんは一生懸命考えてくれたのに責めてしまいました。もともとは私が悪いのに、兄さんに甘えてしまつてました。ここからは私の力で頑張つてみます」

はつきりとした力のこもった声が耳元に届く、どうやら完全に立ち直つたようだ。ほつとすると同時にあやせの力になれなかつた自分への悔しさと寂しさを感じてしまう。そんな自分の心境が思わず言葉を漏してしまう。

「おう、そうか……悪いな、あまり役に立てなくて。それと妹に甘えられるのは兄貴としては嬉しいもんだから……まあ、その……なんだ、いつでも頼つてくれ」  
うぐぐつ、なんだ、言葉にするともの凄く恥ずかしくなつてきた。

俺は慌ててあやせが返事をする前に言葉を重ねた。

「いや、すまん、さつきのは無しだ。忘れてくれ！」

しかしそんな俺への返答はくすくすと笑い声、そして…

「ダメです。もう聞いたやいましたから。私に頼られるのは嬉しいんですね、兄さん。

ふふつ」

弾んだ調子のあやせの否定の言葉だった。

「…………」

「こほん、すみません。桐乃をいつまでも待たせておけませんから、そろそろ失礼しますね」

「えつ……ああ……」

「ええと……でもその前に……おかげで元気が出ました。ありがと、兄さん♪」

予想外のあやせの言葉に俺が思わず固まってしまい生返事しかできない状態で電話が切れる。

あやせが調子を取り戻してくれたのは嬉しい。俺の言葉が元気づけるのに役に立ったのも嬉しい。桐乃を放つておくのもマズいのも、もちろん分かる。だからこれで良かった筈なんだ。筈なんだけど……ますます妹に頭が上がらなくなつてしまつた気がする。

これからはもつとやつかいな頼みごとがくるかもなーと思い、やれやれと嘆息する。心の中では面倒になつたぜと考えているのだが、なぜだか口元が緩んでくる。

電話を切る前のあやせの言葉を浮かべながら思つちまう。

まったく、妹の感謝の言葉一つで満足しちまうなんて、兄貴つて奴は安上がりな生き物だよな！